
THE・ログインvol

秋葉 時雨

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

THE・ログインvol

【Nコード】

N3398B

【作者名】

秋葉 時雨

【あらすじ】

人口の80%がネットワークを使う近未来。そこで普通の小学生、始^{ハジメ}は従兄の誘いにより流行のネットゲーム『エデン』を始める。しかし理想郷となる筈のエデンには有り得ない悪意が潜んでいた。ゲームに登場しないモンスター。次々と被害に会うユーザー達。敵の目的は？そして正体は？謎が謎を呼ぶエデンの世界で始は現実をも巻き込む事件へと巻き込まれて行く！！こちらのHPでは初投稿になる秋葉時雨の作品です！初のファンタジーですが、お楽しみ下さい。

FILE..1『始（スタート）』

―ボクは死にたくない。

ボクはこの世界が好きだ。

この空も、咲き誇る花も、海も、山も、そしてこの世界で生きる人々全てが好きだ。ボクにとってこの世界はかけがえの無い物なんだ。だから――。

ボクは死にたくない。

消えて無くなるなんて嫌だ。忘れられるなんて嫌だ。もう・・・もう二度と

「あんな思い」

はしたく無い。

ボクは死にたくない。ずっと生きていたい。そう、『永遠に』――。それにはどうしたら良い？何か、何か方法は無いか！？考えても考えても良い方法が見つからない。

こうしてる間にも皆、ボクを殺す

「あれ」

は着々と生まれようとしているのに・・・嫌だ。嫌だ！！ボクは死にたくないっ！！

誰か、誰か助けて！！死にたくない死にたくないしにたくないシニタクナイ――。

ボクは死にたくない！？

――だったら生きようよ、新たな世界で。

新たな世界？？

――そうだよ。この世界で生きられないんなら、新しい世界で生きれば良いのさ。

ダメだよ。ボクはこの世界でしか生きられない。

―そんな事はないさ。君がやろうと思って出来ない事など何も無い。もし君がその気になるんだったら力を貸すよ？私も。

本当に？出来るのかなあ・・ボクに。

―ああ。君と私が力を合わせれば不可能な事など何も無い。さあ、始めよう！新世界への旅を。

・・・うん。

「始〜！お兄さんから何か届いてるわよ〜？」

「はあい！今行く〜！！」

従兄からの届け物と聞いて、始は勢い良く部屋を飛び出して行った。2階に続く階段を下り、台所にいた母が持っている小包を見ると、それを引ったくりまた大急ぎで部屋に戻る。

後ろから母の小言が飛んで来たがそんな事にはもう構ってられない。階段を一段跳ばしで駆け上がり、部屋のドアを閉めると期待に胸を踊らせながら小包みの包装用紙をビリビリと破っていく。白い箱の蓋をドキドキしながらゆっくり開けると、そこには――。

「やったあ！！」

思わず少年が歓声を上げる物が入っていた！

中に

入っていたのは『エデン』と書かれた古代遺蹟を表紙にしたゲームだった。白い箱にはゲームと一緒に手紙も入ってあったので、まずそちらを先に開く。

「ハッピー・バースデー♪今回の誕生日には特別なプレゼントを用意したよ。それがなんなのかはゲームをプレイしてからのお楽しみでは『楽園』で会おう。」

綺麗な字で書かれたその文面を見て始は思わずにんまりと笑う。すぐ様プレゼントを送ってくれた（彼）にゲームが届いた事を携帯でメールし、電話線を外してゲーム機の準備をする。

コントローラーと一緒にネット用に装着するヘッド・バイザーも忘れない。そして『エデン』をセットし、そっとスイッチを押した。

―ゲーム機のロゴが浮かび上がったかと思うと、すぐに表紙と同じ画面が浮かび上がる。

（プッシュ・スタート）の文字と共にコントローラーのボタンを押すと、バイザーに埋め込まれたメモリーチップからゲーム機が始の個人ID情報を読み取って行く。

そして真っ白な画面に切り替わったかと思うと（キャラ設定）や（オプション）など様々な項目が並べられた設定画面の部屋に変わった「ん？」

始が逸る気持ちを抑えられず、早速（キャラ設定）で自分のキャラを作ろうとすると、その一つ下の（メール）の項目に何故か（NEW）のマークが付いてるのに気付いた。

このマークには見覚えがある。新着メールのマークだ。初めてプレイする筈なのに何故？と首を傾げながらもメールを開いてみる。するとメールの送信者は（彼）だった。

「Welcome・To Eden。このメールを見ていると言う事はゲームが届いたと言う事だね。プレゼントは（キャラ設定）の中に入っている。それでは『楽園』で会おう。」

「うわぁ！！」

メールを確認するとすぐ様始は（キャラ設定）を選択する。するとそこには――。

キャラ設定が終わり、ゲームスタートを選択すると周りの景色が変わり始め、ただの部屋が真っ白い何も無い世界に変わって行く。そして始自身の体も変わり始めた。

これがネットゲームの醍醐味であるバーチャル世界である。始の体も現実の物からキャラ設定で作った姿へと変わっていく。

青髪のおかつぱ頭。現実とほぼ同じ年令の少年の姿。そして、キャラ設定の通常衣裳には無いエメラルドグリーンのサイバー衣裳の服装に両腕のアンクレット。衣裳と髪の色以外は現実の姿と変わりは無い。名前も良いのが思い付かず

「ハジメ」

にした。

『ようこそ！禁断の聖地エデンへ！！』

「！？」

突然、声がしたかと思うと空中から巨大な光が現われた。始が驚いて見ているとそれは人の形になり、やがて翼を生やした白いローブの少年に変わる？少年はぽーんと口を開いてる始を見ると慈愛に満ちた笑顔を浮かべた。

『ボクの名はウィング。聖地エデンで君達、ユーザーをサポートする者。さあ共に行こう！永遠なる聖地で君の新たな冒険が待っている！！』

ウィングが高々に宣言すると、持っていた杓杖を空に掲げる。すると真っ白い世界が真っ二つに割れ、まるで扉の様に開く。そしてその奥に光の世界が待っていた。

（この先にエデンが待ってる……。僕の冒険が始まる！）

新たな世界への期待と不安を胸に秘め、始は光の世界へと飛び込んだ。

（続く）

FEIL..2『楽園（エデン）』

「っ！・・・えっ？」

光の中へと飛び込んだ始——ハジメが次に眼を開けた時、見た光景はなんと何処かの教会だった。

見ると、何人かのシスターや信者達が祈りを捧げているし、後ろにはマリア様では無い聖女像が祭られている。そして聖女像のすぐ前、始の背後の地面には光の輪の様な物があり、どうやら自分はここから出て来た様だ。

「えーっと？ここは・・・？」

『ここは女神サラを崇めるマルコロ大聖堂。そしてここは（楽園）エデンの世界』

いまいち状況が把握出来てないハジメの頭上に先程の少年、ウィングが現われる。教会の中の聖女像の前に天使の様な少年がいる光景は、ばっちりと言う程似合っていた。

『君が通ったのは（ゲート）。この世界で様々な地区を繋げる交通手段の一つ。ゲームを始めたユーザーはまずこの教会から冒険が始まるんだ』

「エデン。ここが？」

「その通り！！」

——ギギギギ——ッ！！

と突然、大聖堂の外から声がしたかと思うと巨大な扉がゆっくりと開き、一人の人影が現われた。そしてその姿を見た途端、ハジメの表情がパツと明るくなる。

「WelcomeToエデン！ハジメ」

「終一兄ちゃん！！」

扉を開けた人物にハジメが駆け寄る。終一しゅういちと呼ばれた人物はゲームの魔導師のキャラを使っていた。

長く青い髪をまるで三日月の様に一つにまとめながら背中まで垂らし、額には赤のバイザーの様なサングラス。そして体にはこれまた普段のキャラ設定には無い金色の紋章付き鎧。そして左手には頭に大きな鷲をデザインした黄金の杓杖。

辛うじて魔導師と分かるがかなり奇抜な格好だ。しかし、それが彼の性格なのだろう。ハジメは一目で彼が従兄が使っているキャラだと分かった様だ。

「やあ、どうやらプレゼントは気に入ってくれた様だね？それはそうと、ここでは俺の事はシュウと呼ぶ様に」

「あつ、ごめん！ゲームが届いてからテンション上がっちゃって・・・でも、このキャラってどうやって作ったの？」

「ふふん♪よくぞ聞いてくれました。」

出会って早々、注意されたハジメが照れ隠しに聞いた質問に終一・・・シュウが無いメガネを上げる仕草をしながら眼をキラーンと光らせる。

それが現実の彼の癖と同じで、ハジメは思わず笑ってしまった。

「これは今作っている新作ゲームの試作品をハジメのログインデータにダウンロードした物なんだ。だから通常のエディットにはそのキャラは存在しない。」

ハジメは・・・ガン・ダガー小剣銃士にしたのかw一応、ユーザーにシステムの人間がこー言う事をしちゃあ、まずい事になってるからこの事は二人の秘密な？」

『ボクがいる事を忘れてませんか？シュウ』

自慢気に語るシュウを尻目にウィングが苦笑しながら突っ込みを入れる。それに気が付き、シュウがワザとらしくビクツとした。

「おっと！ウィングいたのかい？ハジメの事は、俺がサポートするから安心してくれ！後、この事はどうか内密に頼むー！！」

『分かりました。――では若き冒険者よ、良き旅を』

シュウに言われるとウィングは一礼し、光と供に消えてしまう。それをハジメは眼を丸くしながら見ていた。

「シュウ兄ちゃん。あの子はC P コンピュータじや・・」

「ああ、ウィングか。まあ彼やこの世界の事は歩きながら話すよ。ひとまず初心者のハジメ君を歓迎しよう」

と、意味深な事を言いながらシュウが教会の扉に手を掛ける。そしてまた大きく開け放った。

「ようこそ！ 始まりの街クロスピアへ！！」

開けられた扉から見えたのは壮大な光景の港街だった。周りの建物がすべて見た事の無い石造りと蒸気機関で出来ている。そしてそしてその先にある広大な海も街を歩く様々な人々も全て本物だった。

「凄いつ！！CMで映ってた街と・・同じだあゝ！！」

初めて目の前にした古代の街の景色にテンションが上がってしまい、ハジメが訳の分からない事を言いながら駆け出す。それを微笑しながらシュウがゆっくりと後を追った。

ここで少し話を分かりやすくするためにハジメ達の状況をお話しておこう。

今や人口の80%がネットワークを使っている世界。

そこで世界最大のゲーム機会社、ワールド・ブレイン社は初の仮想世界ネットRPG

「エデン」

を発売した。

「エデン」

はワールド・ブレイン社（以下、WB社と明記する）の創立者、故天名孝夫氏が完成させた最後のゲームであり、まるで本物の古代世界を冒険している様なその完成度の高さから、またたく間に世界規模の大ヒットとなった？そしてハジメの従兄であるシュウはWB社のシステム・エンジニアであり、この

「エデン」

の製作に関わった関係者でもあった事から、ハジメが誕生日のプレゼントに無理を承知でおねだりしたのである。

すると意外にもシュウがOKサインを出してくれた事から、少年は自分の誕生日にこの流行のゲームをプレイ出来る事になったのだ。

「AI? (人工知能) あの子が?」

「そう・・ってかその事は説明書に書いてある筈なんだけど、本当に見ずにプレイしたんだな?」

大聖堂から港へと続く坂道を歩きながら笑うシュウに、ハジメはまた恥ずかしくて頭を掻く。

ゲームが着いた途端に嬉しくなってプレイしてしまったので、説明書を見るのを忘れたのだ。

「ウィングは前社長が初めて仮想世界に導入する事に成功したAIなのさ。だから彼は自分で考え、自分で判断し、ユーザー達をサポートしてくれる。」

まあ、そこんどこも宣伝効果になって『エデン』は大ヒットした訳「そっか・・だからさっきこのキャラの事口止めしといたんだね? 他の人に喋られると困るから」

ハジメの純粋な突っ込みにシュウがズルッとズッコケる。このゲーム初心者の少年は街に歩いているキャラ達が皆ユーザーであると言う事をいまいち分かっていない様だ。

「ま、まあなWさて、そんな事よりハジメ君!! 君はこの世界がどんな所かどれだけ知っているかな!？」

「えっ? えくと、確か『エデン』は古代文明をモチーフにしたネットRPGで・・」

急に来たシュウの質問に驚きながら自分の知っている限りの知識を話していくハジメ。シュウもまた腕を組ながら生徒を持つ先生のようにうんうんと頷いていく。

「なるほど、CMやゲーム本を見れば分かるのはそれくらいだろう。しかーし!! この世界はまだまだそんな物では無い!!」

この世界は仲間と共にストーリーを進めるも良し! まだ見ぬ人と交

流を深めるも良し！街の住人として住み着くも良し！そして時には
ユーザー同士でのバトルも有り得る一見現実となんら変わらないバ
ーチャル・リアリティーゲームなんだ！」

と、街中にも関わらずシュウが両手を広げながら熱弁する。ハジメ
は従兄のこー言う変わった所が好きだった。

「・・・とまあ、熱く語ってみました。要するにゲームを楽しめ
って事。さくてまずはストーリー通り街を散策しつつ、王宮にでも
行ってみますか？」

「——うん！！」

シュウに導かれるまま、ハジメは一路、（王宮・ストーンキャッス
ル）を目指す。二人の冒険はまだ始まったばかりだ。

（続く）

FEIL..3『異変（イレギュラー）』

―適性Lv3。クロス・パウロ教会前の荒野―。

「エデン」

の中でも初心者用の低レベル・モンスターしかいない荒野・・・。
その連なる山の山頂に一人の男が立っていた。

180はあろうかと言う長身を黒光りする鎧で身を包んだ男である。
腰の両側に装着しているホルスターにはこれまた黒い拳銃。そして
背中にはその長身に見合う程の大きさの大剣を背負っている。肩に
はペットだろうか？真っ白い竜を乗せながら、男はゆっくりと煙草
をふかしていた。

男が何者なのか？それは分からない。しかし男が発する荘厳な雰囲気
にその光景は、とても良く似合っていた。

プルルルッ！！プルルルッ！！

と、突然男の腕に装着された通信機のような機械から音が鳴り出す。

男は煙草を荒野に投げ捨てると、通信機のキャップを開けた。

「・・・私だ」

（あい、一服中すいませ〜ん。その地点の近くで例のノイズを確認
したと『情報屋』さんから連絡が入りましたよ〜！）

「分かった。すぐに向かう」

（気をつけて下さいね〜？ホムラさんにも今ログインする様連絡し
ました〜！）

「問題無い。彼がログインするまでに終らせる！」

男が通信が切ると足元に『ゲート』が現れ、その姿は光と共に消え
てしまう。

荒野はまた先程と変わらない静寂に包まれた――。

それとほぼ同時刻。同じエリアにシュウとハジメの二人の姿があっ

た。

ハジメは自分の武器、小剣銃ガン・ダガーを携え構えていた。小剣銃とは二つの拳銃をダガーに変形させ、戦う事の出来る武器である。

キャラエディットの時、見た目が格好良いな？と思い選んだ武器だったが、ハジメは今正にその武器を使い、初めての戦闘に挑んでいた。

「はぁ・・・はぁ・・・はぁ・・・」

ピンと張り詰める空気の中、互いに隙を伺いつつ両者一步も動かない。ハジメもまた相手の獣じみた殺気を感じ取り、一瞬も気を抜けない状態が続いていた。

『△■×！！？』

と、長い沈黙に耐えられなくなったのかハジメがほんの少し動いた瞬間、相手が先に襲い掛かって来た。

しかし、ハジメはそれを良く読み素早く相手の体当たりをかわすと、そのまま敵の死角に回り込み一気に踏み込む。敵は向かって来るハジメの姿がこの世で見た最後の光景となった。

「たあっ！！」

——ズバッ！！

変形させた二つのダガーがハジメの敵・・・グリーンスライムを十字型に切り裂く。切られたスライムはそのまま光の屑となり、空中に離散した。

「よし！！良くやったぞー！ハジメ」

初の戦闘に勝利した少年に後ろで見ていたシュウが称賛する。ハジメはスライムを倒した事を確認すると、ペタンと尻餅をついてしまった。

「はぁ・・・はぁ・・・シュウ兄ちゃん、ボクやったよ！」

「な？相手の動きさえちゃんと見ていれば攻めて来たって恐くないだろ？・・・ただ、後はもう少し早く敵を倒せば上出来だなw」

シュウが苦笑しながら頬をポリポリ掻く。二人が先程のモンスターと対峙してから約2時間の時が経っていた。

クロスピアの街で様々なユーザー達と出会い、道具屋などで回復アイテムを購入したハジメ達は一路、街の王城ストーン・キャッスルに向かった。そしてその城の玉座の前で妙な生物と出会った。

王様の格好した緑色の卵みたいなキャラである。

確かに王冠も被っているし、立派な髭も生やしているのだが高貴な洋服の袖が半分くらいしか腕が通って無いし、着ているのは上着だけである。

ハジメが妙な顔して見ていると、その緑卵の王様が突然語り出した。
『おおっ！待ってあったぞく？？選ばれし冒険者よ！実は今、この国で大変な事が起こっておるのじゃく！！』

蛙を引き伸ばしたみたいな声である。ハジメが面白くなって指で小突いたりして見ても王様の喋りは止まらない。

それに寄ると今、この国は太古の昔封印された魔神、カーズを復活させようとしている魔物達が潜んでいて、その中の一派が街の近くの教会を占領してしまい困っているらしい。

シュウの蛇足に寄ると、つまりこの『エデン』のストーリーは様々な大陸を渡り、復活した魔神カーズを倒すための冒険が用意されていて、その要所x2のイベントではユーザーキャラでは無く冒険者達を導くCPキャラが設置されているのだと言う。そしてそのCPキャラをユーザー達はナビ・エッグと呼んでいるのだ。

―そして、二人は王様のナビ・エッグの言う通り、教会のモンスター退治に向かって荒野を歩いていたのだが、その途中で先程のグリーンスライムに遭遇したのである。

通常、グリーンスライムはLv1のキャラでもミスさえしなければ負けないモンスターなのだが、ハジメはそれを倒すのに2時間もかかってしまったのだ。

「ごめん、シュウ兄ちゃん。ボク・・・」

「ドンマイ！ドンマイ！初挑戦なんだから仕方無いさ。用は次また

頑張れば良いって事——だろ？」

「・・・うん！」

シュウの励ましでまた落ち込み欠けていたハジメの顔がパツと明るくなる。付き合いの長い従兄弟は、少年が何を言えば元気になるか心得ていた。

「そいじゃ、気を取り直していきますか？あんまりゲームばっかやってると叔母さんカンカンだろうからなw」

シュウがおどけながらまた教会に向かって歩き出す。ハジメもまた、クスクス笑いながら頼れるサポーターに付いて行こうとした時だった・・・。

ザーーーーーッ！！

その異変は突然起こった。

二人の周りの景色がまるでさざ波の様に乱れたのである。そしてその景色の乱れが起こった途端、辺りが水を被った様に静まり返ってしまった。

「なんだ？今のビジョンの乱れは？」

側にいたシュウもまた、怪訝な顔をしているから見間違いでは無いらしい。耳が痛くなりそうなくらいの静寂に、不安を覚えたハジメがふと空を見上げた時だった。

「シュウ兄ちゃん！あれ・・・！」

少年の視線が空中で釘付けになる。

二人の頭上に黒い球体があった。

一人人がスッポリ収まりそうな程の大きさである。それが果たして生き物かなのは定かではないが、その球体は積乱雲の様に小さな放電を繰り返しながら空中に存在していた。

「なんだあれは・・・？俺はこんなイベント知らないぞ！？」

シュウの言葉がこれが通常のゲームの出来事では無い事を示している。

システム側の人間である彼から、余裕が消え初めている事からもこの事態の異常性を物語っていた。

――バチバチバチッ!!

と、突然だった。

それまで、ただジッと空中に留まっていた黒い球体が、バチバチと激しく放電し、拳大の小さな球体を生み出したのである。

小さな球体はゆっくりと地上へ降下し液体の様に広がったかと思うと、赤いゲートに似た光の輪を作り出す。そしてその中で、まるでキャラを制作する様に何かが形作られて行った。

「!!」

――ズン!!

赤いゲートの中で作られた者がゆっくりと外へ出て来る。黒い球体が生み出した者――それはモンスター。

2メートルを越す巨体を鎧で包み、右手に体の半分はありそうな大刀を持った鬼のモンスターである。

しかもただの鬼では無い。腐っている全身を鎧で守り、辺りに腐敗した息を撒き散らす異形のモンスターだった。

「エビル・ゾンビ!! カーズの居城に出没する筈のモンスターがなんでここに!?!」

予想外の敵の出現でシュウの顔色が変わる。エデン初心者のハジメでも目の前のモンスターがどれだけ凶悪かは分かった。

『ルオオオオ――ッ!』

二度と見える事の無いだろう眼球の抜けた空洞に赤い光が宿ったかと思うと、天地を切り裂く様なモンスターの咆哮が響き渡る。

モンスターを生み出した黒い球体は、エビル・ゾンビが動き出すと同時に跡形も無く消えてしまう。

荒野に残されたシュウとハジメにエビル・ゾンビが襲い掛かって来た。

(続く)

FILE..4『戦闘（バトル）』

『ルオオオオーーッ！』

「逃げろ！ハジメ！！」

襲って来たアンデットモンスター、エビル・ゾンビの大刀が近くにいたハジメに向かって振り落とされた。

ハジメはそのあまりの迫力に気圧され、動く事が出来ない。後一步で鬼モンスターの狂刃が少年を真つ二つにしようかと言う所で、間一髪シュウがハジメを庇い危機を脱した。

ズンーーー！！

「あ、ありがとう！シュウ兄ちゃん」

ハジメの言葉には応えず、シュウは少年を抱えたままエビル・ゾンビから距離を置くと額に掛けていたバイザーの様な赤いサングラスを装着する。

するとサングラスから様々な数字やグラフが写し出され、何かを調べている様だった。

「くそっ、転送用の（ゲート）が開かない！！」

ウィング！こちらシュウだ！今すぐ俺達をクロスピアに戻してくれ！――ウィング？ウィング！！」

サングラスからサポーターのAIに助けを求めたが、通信は通らずサングラスからはザーッとと言う耳障りなノイズしか聞こえて来ない。

システムの人間だけが使えるワープ用の（ゲート）も、何故かまったく開かないのだ。

（フリーズ！？さっきの物体がここを隔離したとでも言うのか！？）
フリーズとはネットワークの回線が切断され、画面が凍り付いてしまふ事である。

通常、WB社が管理している

「エデン」

でフリーズなど有り得ない。しかしサポーターとの通信は遮断され、今いる筈の無いモンスターが目の前にいるのである。

「有り得ない」

事が起きていると考えざるを得なかった。

「くそ、ハジメ下がつてろ！コイツは兄ちゃん一人で片付ける！」
不安げにピツタリとくつついている甥っ子を下がらせ、シュウが黄金に輝く杓杖を持ち構える。

逃げると言う選択肢が無くなった時点でシュウの腹は決まった。

「エデン」

ではバトル中のログアウトは出来ない。無理にスイッチを切ると人体に影響を及ぼす恐れがあるからである。

そしてこの荒野が隔離されてしまっているのなら、すでに自分達が使ったゲートも閉まっているだろう。そうなってしまったら何処へ逃げてても無駄である。

残るこの場から無事に脱出する方法はただ一つ。闘って敵を倒す事だ。

それ以外に方法はない！

それにエビル・ゾンビも、また自分達を生きて帰すつもりは無い様だ。

『グルルルル・・・ッ！！』

大刀がゆっくりと持ち上げられ、エビル・ゾンビがこちらを向く。腐って骨だけになった頭蓋骨がカタカタと笑い出してハジメはゾツとした。

「はあああ・・・っ！」

シュウは敵が突進して来る前に杖を地面に突き刺すと、両手を胸の前で合わせ眼を閉じ、集中し始める。

するとサングラスが物凄い早さで計算を始め、合わせた掌の中で真っ白な光が徐々に強さを増していく。

ハジメにもあれがキャラの魔法では無く、何かのデータだと分かった。

「コイツは反則なんだが使わせてもらうぜ！消去！^{デリート}！」
シュウがカッと眼を開き両手を離れたかと思うと、彼の前に真っ白い菱形の結晶体が現れる。

（デリート）と呼ばれたその結晶体はシュウの腕から発せられると、一直線に飛んで行きエビル・ゾンビに直撃した。

——バチバチバチッ！！

結晶体がモンスターに当たった瞬間、ハジメは眼を見張った。

それまで菱形だった結晶体が電流の様な火花を放ち巨大なピラミッドに姿を変え、エビル・ゾンビを包み込むとそのまま縮小を始めたのである。

（デリート）とはシステムの人間が『エデン』のメンテナンスを行う時に使う不要データを消去するプログラムなのだ。

つまり、エビル・ゾンビはハジメ達を襲った時点で勝負は決していたのである。

勝利を確信し、シュウが余裕の笑みを浮かべた時だった——。

『ルオオオ——ッ！！』

「なっ！？」

エビル・ゾンビの咆哮が、シュウの笑みを奪い去る。

なんとモンスターは己を消滅させ様とするデータに抵抗し、縮小する（デリート）を自慢の怪力で破壊したのである。

粉々となった（デリート）のデータは離散し消滅してしまう。

残された鬼モンスターは躯中からシューシューと湯気を出しながらも一歩ずつ確実に、二人に近づいて来た。

「（デリート）が効かない？そんな！？」

これにはさすがのシュウも動揺を隠せない。

しかし後ろにハジメがいる事を思い出すと、一足飛びで高く跳躍しエビル・ゾンビの背後に回り込む。

そして黄金の杓杖を向けると一つの巨大な炎の球を作り出しエビル・ゾンビに発射した。

「フレイド！！」

ー ドゴン!!

『ルオオオッ!』

シュウの渾身の必殺魔法が命中し、エビル・ゾンビが初めて苦痛に満ちた悲鳴を上げた。

どうやらバトルの攻撃ならダメージを与えられるらしい。

手応えを感じたシュウは二発、三発と続けて火球を打ち込んでいく。相手が倒れるか、自分のMPが尽きるかの根比べだ。

(くっ・・・さすがにLv50のモンスターを相手に一人で戦うのはキツイ!だが負けれない!!俺が負けたらハジメがー)

攻撃を続けながらも、視界の隅にハジメの姿が入って来る。

このゲームに誘ったのは誰でも無い自分である。

念願だったゲームの世界を楽しんでもらおうと思ったのに、こんな訳の分からないバグに巻き込む訳にいかない。

ハジメだけはなんとしてでも無事に、送り返さなければいけないのだ。

「兄ちゃん!上!?!」

と、そのハジメの声でハッと我に帰る。

なんと爆煙の中にモンスターの姿が無い。すると突然自分の足元に巨大な影がヌツと現れた。

見上げて見るとーエビル・ゾンビである。

なんとモンスターはその巨体でジャンプし、シュウの猛攻をかわしていたのだ。

(しまっ・・・!)

シュウが慌てて逃げようとするが、とても間に合わない。大きく振りかぶったエビル・ゾンビの大刀が横一文字に振られ、シュウの脇腹を切り裂いた。

「くっ!!」

「兄いちゃーん!!」

攻撃された拍子につんのめり、シュウは地面に顔や体をしたたか打って転んでしまう。

全身の痛みに目眩を覚えるが、ギリギリでかわしたおかげで脇腹の傷は致命傷にはならず、回復魔法で十分治せる程度であった。

幸い、転がったせいで着地したエビル・ゾンビとも距離が出来て呪文を唱えるくらいの時間はありそうである。

早速シユウが精神を集中し回復呪文の一名を唱えようとした瞬間、

「うわあああ——っ!!」

——パン！パン！パン！パン！！

その言葉は少年の魂の叫びに掻き消された。

ハジメだった。エビル・ゾンビに突然、自分の武器である二丁小銃で攻撃したのである。

だが、それは少年にとってあまりにも無謀な挑戦だった。

「何やってんだハジメ！？馬鹿な事は止めてジツとしてろ!!」

「嫌だ！シユウ兄ちゃんがやられるなんて嫌だぁ——っ!!」

叫びながら小さな小剣銃士は無我夢中で攻撃を続ける。ハジメはシユウがやられたのを見て勇敢にも助けようとしたのだ。

しかしLv1のキャラの攻撃が、エビル・ゾンビに通用する訳が無い。

二つのピストルから発射された銃弾はモンスターの鎧に事欠く弾かれてしまった。

『ルオオオ——ッ!』

「ヒッ!」

少年の小癪な抵抗がエビル・ゾンビの逆鱗に触れた。

周りの空気が震えそうな怒りの咆哮でハジメの攻撃を一発で黙らせる。

奮い立たせた勇気を一吹きで壊されてしまった少年は腰を抜かしてしまい、ガクガク震える膝のせいで動く事が出来ない。

武器であるピストルを持つにも、指が強張ってしまい握る事すらままならないのである。

なんとか這いずってでも逃げようと前を向いた時、エビル・ゾンビの姿が消えている事に気付いた。

「ハジメ！逃げろお——！！」

シュウが深手を負ったのも顧みず、こちらに駆け寄って来るのが見えたと途端、自分の体が巨大な影に覆われた。

驚いて見上げて見ると、ハジメの体よりも大きな刀を振り上げながら、鬼モンスターが落下して来た。

（た、助けて・・・）

恐怖で声が出ない状況の中、ハジメは何故か周りの物がスローモーションみたいにくっくりと動いている様に見えた。

駆け寄って来るシュウの姿。降下して来るエビル・ゾンビの眼？が赤く光り、振り上げられた刀が自分の脳天目掛けて下ろされる。そして——。

「ハジメエ——ッ！」

シュウの悲鳴が耳の中に響き渡った。

・・・。

・・・。

・・・。

（——しだ。——年）

「ん？」

そこでハジメは自分の異変に気がついた。今正に恐ろしいモンスターに止どめを刺されたにも関わらず、痛みも何も感じないのである。『エデン』のゲームオーバーとはこんな感じなのだろうか？それにしてもおかしい。さっきあのモンスターの攻撃を喰らった時、シュウはあんなに痛がってたではないか。

（その——しだ。——年）

「！？」

今、男の様な声が聞こえた。何を言ってるかはハッキリとは分からなかったが、聞こえたのは確かである。

周りが真っ暗で自分に何が起きているのかまったく分からない。

と、そこで初めて自分が眼をつぶっている事に気がついた。真っ暗なのは当然である。

自分の間抜けっぷりが嫌になりつつ、ハジメがそっと眼を開けると・。

「その勇氣は良しだ！少年」

眼の前に信じられない光景が広がっていた。

ハジメの前に男が立っていたのである。

大きい背中だった。ハジメの倍所か、シュウよりも身長がある。

しかし驚くべきはそこでは無い。なんと男はエビル・ゾンビの大刀を片手で受け止めているのだ。

「君は・・・いや、貴方は！」

シュウもどうやら彼を知っているらしい。

ハジメを助けた男――それは先程、山の頂上でタバコを吹かしていたあの黒い鎧の男だった。

（続く）

FILE:5『悪魔（バーカード）』（前書き）

今回は黒い鎧の男の姿などを分かってもらうために少し内容が細かくなっております、読み辛いかもしれません。ご了承下さい
m

FILE..5『悪魔（バーカード）』

「ヌン！！」

『ルオッ！？』

丸太の様な腕に力を込め男が大刀を押し返す。エビル・ゾンビもまさか刀が戻って来るとは思わず、バランスを崩し派手な地響きを轟かせて倒れ込んだ。

「良くやった。後はまかせろ」

「は、ハイ」

ほんの少しだけ後ろを向き、物静かな口調で男がハジメの事を氣遣う。しかしその口調とは裏腹に彼の姿は『異様』としか言えなかった。

まず黒い鎧を身につけている事は何度も書いたが、近くで見ると胸当てや腹の部分に窪みがあり、それがまるで魔物が笑っている様に見える施しがしてあるし、両肩や小手それに具足の踵部分には鋭い刃や爪が備え付けてある。

そしてそれは顔を守るためだろうか？金髪を立てた髪型や少し切れ長の瞳など肌が見えるのは顔の上半分だけで、鼻から下は鎧と同じく黒い仮面を着けているし、それにも獣が口を開いてる様な装飾がしてある。

その過々しい姿を一言で言うなら『悪魔』。そう男は悪魔を模した鎧を身につけていた。

「ハジメ、大丈夫・うわっ！！」

モンスターが倒れた隙に、シュウが駆け寄ろうとすると男は警戒しつつハジメの首根っこを掴み彼の元に投げてやる。

投げられた方は堪った物ではないが、また絶妙の位置に投げたのでシュウはなんなくキャッチする事が出来た。

「ここは危険だ。君達は離れていなさい」

「・・・分かりました。だがあのモンスターは普通じゃない。油断はしないで下さい」

「私の心配は不要だよ。《悠久の監視者》」

監視者と呼ばれて何故かシュウがハツとした顔をする。男もそれを見て表情を緩めるが、すぐに厳しい表情に戻り視線をモンスターに向けた。

『ルオオオオオー！ー！』

とそこで倒れていたエビル・ゾンビが怒りの咆哮と共に復活する。その怒りはハジメの時の比ではない。

メラメラと燃え上がりそうな赤い光が新しい標的である男を捕らえると、またもや高く跳躍し、大刀を怒りのままに振り下ろす。

男はなんなくそれを避けると、何を思ったか地面に突き刺さったエビル・ゾンビの大刀にそつと手を掛けた。

「良い代物を持っているな？モンスターに使わせるのはおいしい」

『ルオオオオオッ！！』

侮辱した男の言葉にエビル・ゾンビが怒り狂い大刀を持ち上げようとする。だが――。

『ルオッ？』

上がらない。

男よりも遥かに体格があり、力にも絶対の自信があったエビル・ゾンビが、両手でどんなに持ち上げようとしても大刀はピクリともしない。

まるで地面に吸い付いてしまった様である。

男はモンスターの慌てぶりを見ると静かに背中の大剣に手を掛けた。

「だが私の剣はもっと名品だぞ？」

男が一気に大剣を引き抜く。するとそこから現れたのは・・・
ピシャー！ーッ！ゴロゴロゴロー！ーッ！！

閃光。巨大な剣を包む電流である。

男の剣は稲妻を刃に宿す剣だったのだ。

「私の『魔光』は切るのでは無い。――焼き切るのだ」

男が大刀から手を離し、『魔光』と呼ばれた大剣を振るう。

その大剣もまた主人に負けず劣らずの代物であった。

鍔には縦に見開いた眼球の装飾がしてあるし、そこから蜘蛛の足の様な触手が6本、それぞれ取り付けられている。

漆黒の刃はノコギリの様に細かく、剣の先端が調度クワガタ虫の角の様に左右に割り広げられていて、そこからバチバチと激しい電流が発せられている。

眠りから覚めた魔剣は振り落とされると、身に纏う稲妻の力でエビル・ゾンビの大刀を真つ二つに破壊する。

用済みとなった刀の破片は不要データとして離散するが、男は間髪入れず、驚いているモンスター自身にも『魔光』の刃を食らわせてやる。

エビル・ゾンビの鎧がまるで紙切れの様に、斜めに切り裂かれた。

『グオオアアッ!!』

「黙れ。お前は少し騒ぎ過ぎだ」

エビル・ゾンビが苦痛の叫びを上げる中、男はジャンプすると踵に取り付けた刃で、無慈悲にもその喉元を切り裂く。ハジメの弾丸を全て弾いた鎧も、男の前では着てないも同然だ。

エビル・ゾンビが眼?を白黒させている間に、今度は腰のホルスタ―から銃を取り出しエビル・ゾンビの胸目掛けて標準を合わせる。彼が取り出した銃。それは黒いショットガンだった。

「勇気とは、（この世界）でも現実世界でも掛け替えの無い物だ。

仲間を助けようとしたあの少年の気持ち。――お前に理解出来るか？」

――ズドン!!

なんの感情も示さず、男が銃の引き金を引く。

近距離からショットガンの弾丸を喰らったエビル・ゾンビは砂煙を上げながら、10M近く吹き飛ばされた。

「・・・凄い」

近くで見えていたハジメはただ呆気に捕われているだけだった。

圧倒的。あまりにも圧倒的である。

シュウが苦戦したモンスターがまったく相手にならない。

『最強』と言う言葉が相応しい男の強さに、少年は魅了されてしまっていた。

「まあ、彼なら当然の結果か」

呆然としているハジメの近くで不意にシュウが口を開く。見取れている間に治療したのか？体の傷はほぼ治っていた。

「シュウ兄ちゃん、あの人の事知ってるの！？」

「ん？ああつ、彼はこの世界じゃ有名人さ。」

彼の名はバーカード。《黒の勇者》バーカードだ」

ーズドン！ズドン！ズドン！！

シュウが語り出す中、男Ⅱバーカードのバトルは続いていた。

武器は破壊したが追撃の手はけっして緩めず、ショットガンの連続攻撃でモンスターをさらに追い詰めて行く。

発射された弾丸はエビル・ゾンビの角を、手を、膝を、足を確実に破壊し身動きすら封じて行った

「彼は（エデン）クリアーの最速記録保持者なんだ」

「レコード・ホルダー??」

「その通り。それだけじゃなくWB社が主催した数々の限定イベントでも素晴らしい記録を残してる。それなのに素性はシステムでも最低限の事しか知られて無い。・・・謎の多いユーザーなんだ」

シュウの説明の間もハジメはバーカードから眼が離せなかった。

類い稀なる強さと謎に包まれている素性。

男の子なら否、男性なら一度は憧れるヒーローの姿にピッタリと当て嵌まっている気がして、ハジメは胸の高鳴りを押さえ事が出来なかった。

『フオオオオッ！！！！』

「!？」

と、その時だった。

弾丸の嵐で四肢さえ失い、地面に倒れていたエビル・ゾンビが声にならない咆哮を上げ、体中から緑色の煙を噴き出したのである。

煙に触れた地面や岩山は真っ黒に変色し、ドロドロに腐って行く。

緑の濃煙は徐々に範囲を広げて行き、周りの物を腐らせて行った。

「あの煙、ひよっとして毒か!？」

「くだらん悪あがきを・・・」

危険を一早く察知してシュウが毒を吸わない様、自分の周りにバリアーを張るが、バーカードはまったく動じ無い。

『魔光』を地面に突き刺すともう片方のホルスターに差していた黒い拳銃を取り出す。

それはショットガンでは無く、変わったモデルのマグナムガンだった。

ハジメのピストルより一周り大きく、銃身に赤いランプの様な物が付いている。

バーカードがその黒い銃を握り、毒煙を吐き出すエビル・ゾンビに照準を合わせると、赤いランプが点滅を初める。

そして毒の煙が迫る中、赤かったランプが真っ白に明滅すると銃がカタカタと震え出した。

「消え去れ」

——キューイー・・・ン。——ドゥン!!

暴れる黒き銃を抑える様にバーカードが静かに引き金を引くと、チャージされたエネルギーが一点に集まり、黒いエネルギー弾として発射された。

エネルギー弾は毒の煙を掻き分け一直線に飛んで行き、エビル・ゾンビに直撃する。

すると、なんと形をドーム状に変え毒に侵された岩山や空気、そしてモンスター本体をも飲み込もうとしたのである。

それは先程シュウが使った(デリート)の比では無い。

バーカードに害為す者だけを吸い込む小さきブラックホールだ。

『ウウウオオオ——ッ!!』

エビル・ゾンビの虚しい咆哮が響く中、全てを飲み込んだブラックホールが一瞬で消滅する。

残されたのは毒に侵され沼地となってしまった地面と、荒野に立つバーカード達だけだった。

「あの、さっきはありがとうございました」

闘いが終わり、平穏を取り戻した荒野で駆け寄ったハジメがバーカードに頭を下げる。

シュウは少し離れた場所でウィングと連絡を取っている。

男の肩にはバトル中何処にいたのか？ペットの白い竜が、小さい顔を主人の頬に擦り付けて甘えている。

バトルが終わった途端、何処から飛んで来たのだ。

リーモンスターが倒された途端

「ゲート」

が開きウィングとも通信が取れる様になったのである。やはりエビル・ゾンビがさっきの異変を起こしていたと考えて間違いは無いだろう。

「私は成すべき事をしたまでだ。大した事では無い。」

「成すべき事、ね？と言う事は貴方がここに来たのもただの偶然では無いって事ですか？」

とそこでウィングと連絡を取り終えたシュウが突然、バーカードに突っ掛かる。

システムの人間である彼でさえ理解出来ない異変に巻き込まれたのだ。

少しでも情報を得ようとするのは当然だろう。

魔導士の口調は、まるで人をからかう様な軽い物だったが、その奥に真意を探ろうとする鋭さが見え隠れしていた。

「・・・たまたまこの近くで一服していた。そして異変に気がつき、辺りを調べていたら君達と遭遇した。それだけの事だ」

「そうですね？貴方程のプレイヤーがこんな初心者用の地にいる

ってのは、どうしても納得がいけないんですが？」

上手くかわしたバーカードだったが、それでもシュウはしつこく食らいついて行く。

笑顔でストレートに尋問するシュウと無表情でかわすバーカード。二人の表情を見て、ハジメはまた流れ出した不穏な空気にただオロオロするだけだった。

プルルル~~~~！！プルルル~~~~！！

そんな二人の静かなる攻防を中断する様に、バーカードの腕の通信機が鳴り出した。バーカードはハジメやシュウに、少し背中を向けると通信のスイッチになっているキャップを開けた。

「バーカードだ」

（あい、すいませ〜ん。お疲れの所悪いんですが、例のノイズがまだ移動してるみたいなんです〜）

「何っ？」

通信機からの報告にバーカードの表情が険しくなる。ハジメは会話の中に（ノイズ）と言う言葉が入っていたのを聞き逃さなかった。

「どう言う事なんだ？それは」

（あい。こちらでも先程のバトルは確認しましたが、どうやらさっきのモンスターは『本命』じゃなかったみたいですね〜？

『本命』はどうやらクロス・パウロ教会に向かってるみたいですよ〜！）

「・・・分かった。クロス・パウロ教会にて迎え撃つ。転送用の（ゲート）を開いてくれ」

短いやり取りを終え、バーカードが通信を切ると彼の前に（ゲート）が現れた。

システムの人間しか使えない転送用の（ゲート）である。

「な！？」

これにはさすがにシュウも驚く。しかしバーカードはそんな事は意にも返さず、さっさと光の輪に入ってしまった。

「ま、待って下さい！！貴方はさっきのバグについて何か知ってる

んですか！？ウィングに確認したがあんな物はシステムの記録にも残っていなかったんだ！」

「・・・私と言えるのはクロス・パウロに近づくな。それだけだ」脅しとも取れるバーカードの謎の忠告にシュウも思わず言葉に詰まってしまう。

その間に（ゲート）は閉まり、バーカードを光と共に消えてしまった。

（ノイズ・・・それにクロス・パウロ教会ー）

結局、訳も分からず荒野に残してしまったハジメだったが、先程の会話で聞こえた二つのキーワードが頭の中で反芻していた。

クロス・パウロ教会なら知っている。自分達が、ナビ・エッグの王様に頼まれて向かっていた場所だ。

それにノイズとはさっきのエビル・ゾンビが現れる前に起こった異変の事ではないだろうか？

その二つを総合して考えると、バーカードはノイズと言われた異変を解決するためにクロス・パウロに向かったらしい。

それを考えただけでハジメは胸がドキドキした。有り得ない事件に立ち向かうなんて、ヒーローその者ではないか。

「たく、（ゲート）まで開けるとはまいったね。じゃ、俺達のご忠告通り帰るとしますか？ハジメ・・・ハジメ？」

「シュウ兄ちゃん。ーお願いがあるんだけど？」

「ん、なんだ？」

珍しい甥っ子の頼みにシュウが首を傾げる。だがその

「お願い」

を聞いた途端、魔導士の表情が凍りついたー。

（続く）

FEIL..6『仮面（マスク）』

ー適応Lv5。クロス・パウロ教会ー。

クロスピアから荒野を越えた所に小さな修道院がある。

「エデン」

を始めたユーザー達がまず最初に立ち寄るイベントの地。それがクロス・パウロ教会である。

クロスピアのマルコロ大聖堂程、大きさは無いが古いだけに歴史を感じさせる教会である。中は人があまり立ち寄らないせいかボロボロで、ホコリを被った聖女サラ像に祈りを捧げるシスター達の姿があった。

ギイイイーッーッー！！

と、そんな古びた教会の中に入って来ようとする者がいた。

人影が扉の取っ手に手を掛けると、今にも壊れそうな音を立てて扉がゆっくりと開く。

人影はどうやら二人いる様で大小二つの影がそれぞれ教会に入ってきた。

「兄ちゃん、早く！」

入って来たのはなんとハジメだった。後ろにはやれやれと言った感じのシュウもいる。ハジメは辺りを見回し、シスターしかない事を確認すると従兄弟の後ろに回り込み、開けっ放しだった扉を閉めてしまったー。

「転送用の（ゲート）を使いたい！？」

「うん。ボク、クロス・パウロ教会に行きたいんだ！」

珍しい甥っ子をお願いを聞いた時、シュウの表情は凍り付いた。

ただでさえ、転送用の（ゲート）をユーザーが使う事だけでも厳禁なのにクロス・パウロは今、行くなと忠告されたばかりの場所である。

しかも忠告したのがただのユーザーでは無い。

《黒の勇者》バーカードである。

システムですら確認出来なかった謎のバグについて何か知っている
彼からの忠告なのだ。

それはただの危険では無いと言う事だろう。

「ハジメ、おまえなあ・・・」

「分かってる！自分でもマズイ事を言ってるのは分かってるよ！！
でも、ボク・ボク知りたいんだ！さっきのモンスターがなんだったのか？

それに応援したいんだよバーカードさんの事！！」

頭を抱えてしまったシュウだったが、まくし立てるハジメの剣幕に
さらに面食らってしまった。

この少年がここまで自分の意見を通そうとするのは珍しい。普段は
相手の事を考え過ぎてしまい、合わせようとするからである。

だからこそシュウはハジメに少しでも変わってほしいと思い

「エデン」

に誘ったのだ。

まあ、あんな訳の分からないバグと遭遇したものの、どうやらそれ
は嬉しい誤算になってくれた様だ。

「分かった。ただしそれには条件がある」

「本当！？どんな条件？」

「条件は二つ。一つは何があっても俺の側を離れない事。もう一つ
は無茶はしない事。今のお前のレベルじゃクロス・パウロのモンス
ターだってキツイんだからな？」

「うん！ありがとうシュウ兄ちゃん！！」

喜んだハジメが思わず抱き付いて来る。まだ治り切っていない傷の
痛みと重さに苦しみながら、シュウは苦笑するしかなかった――。

そして二人は転送用の（ゲート）を使い、この教会までやって来た
と言う訳である。

「良かった！まだ誰も来ていないみたいだよ？」

扉を閉めた後、ハジメがホッとため息をつく。バーカードの方が先に行ったので追いつけるかどうか不安だったのだ。

「どうかな？彼ならもう決着が着いたって事も有り得るぜ？」

「シュウ兄ちゃん！！」

「ははっ！冗談、冗談！！・・・と、やっぱりタッチの差だったみたいだな？」

シュウの言葉にハジメが驚いて振り向くと、祈りを捧げるシスター達の背後に小さな光の輪が現れた。

シュウは固まっているハジメを抱えると入口の近くにある巨大な聖女サラ像の後ろに隠れる。

光の輪が大きく広がると予想通り、中からあの漆黒の戦士が出て来た。

「・・・」

教会に降り立つとバーカードは妙な違和感を感じ、入口の方を見た。が、誰もいない。ゲームでは気配を感じる事など出来ないのにその辺りはさすがである。

（気のせいかな・・・）

思い直した凶戦士が自分の中にある【コマンド】から【アイテム】を選択すると、空間に突如光が現れ、アイテム（葉草タバコ）が掌中に落ちて来た。

これは通常、カジノがある街、ゴールドマインなどで売っている回復アイテムなのだが、吸っていると気分が落ち着いて来るので彼はつねに持ち歩く事になっている。

葉巻を細くした形のタバコを食わえ様とするバーカードの顔に、先程装着していた鉄仮面は無い。

あれはもちろん顔を守るために付けているのだが、自分への戒めのためにも付けていた。

――決して甘えや油断を起こさぬ様、自らの感情を封印する――。

それが仮面を付けている時の彼の戒めである。

だから通常仮面は滅多に外さないのだが、一服する時だけは外す事
にしている。

仮面を付ける様になった理由。それは誰にも話した事は無い。

そのせいで他のプレイヤー達から仮面の下の本物の牙を隠すためだ
とか、いやいや男性でも魅了される絶世の美男子の顔を守るためだ
とか、様々な噂が流れてしまうのだ。

「ククル」

タバコを食わえたバーカードが肩に乗っている竜の方を向くと、ク
クルと呼ばれた白き竜が小さな口から巨大な炎を吐き出し、タバコ
に火を点してくれる。

ゲームなので味も効果も無いが、止めようと思わないのは現実の（
彼）がヘビースモーカーからかもしれない。

喫煙者にとってこの僅かな一時が至福の時間なのだ。

「よくぞクロス・パウロ教会へ。旅のお方」

と、それまでひたすらサラ像に祈りを捧げていたシスターの中で、
先頭にいた修道長らしき女性が、バーカードに話し掛けて来た。

どうやら（ゲート）の位置が前に行き過ぎたため、教会のイベント
が始まってしまったらしい。

面倒な展開になったなと内心思いつつ、バーカードは話し掛けて来
る修道長を無視してタバコを吸い続けた。

「我が教会はどんな者でも拒みません。貴方の来訪は我らが神も大
いによりこばれる事でしょう。――お前の死によってな――！」

ザシューー。

突然慈愛に満ちていた修道長の眼が吊り上がり、耳が尖んがり口が
耳まで裂けたかと思うと、横から飛んで来たバーカードの爪で腹か
ら真っ二つにされてしまった。

不意打ちを食らった修道長は驚きの表情を浮かべたまま、バラバラ
の白骨死体になってしまう。

「今は一服中だ。ゆっくり吸わせろ」

『おのれー！！！贅だ！我らが神カーズに人間の贅を捧げるのだー
ー！！！』

本性を表したシスター達が青い炎に身を包まれると、まるで地獄の
餓鬼の様な腹だけが異様に膨れた小鬼達に姿を変える。

頭には角とも言えないコブがあり、手には体に見合った小さな鉈を
持っている。

カーズの配下であるカーズ・ピクシーと言うモンスター達なのだが、
バーカードにとっては取るに足らない相手である。

すでにレベルを250まで上げ、大ボスのカーズ所かやり込み用の
最強モンスターでさえ相手にならないのだ。

数匹の蟻が太陽に喧嘩売ってる様な物だろう。

（早々にご退場願うか）

無表情のまま、紫煙を吐き出したバーカードが鬱陶しいモンスター
達を瞬殺しようと鋭い爪に力を込めた瞬間――。

ザー――ーッ！！

「っ！？」

教会の景色がさざ波の様に乱れた。

それと同時に今までギャーギャーと騒いでいたカーズ・ピクシー達
がその場で静止してしまう。

どうやら接続が遮断されデータの送信が止まったらしい。

残されたのは耳が痛くなる程の静寂。――間違はなくフリーズ現象
だ。

「ククル、離れていなさい」

吸ったばかりのタバコを床に投げ捨て、バーカードがペットの白竜
を空中へと非難させた。

しかしその表情には微かな笑みが浮かべられている。

それは強者と戦える高ぶりだろうか？それともノイズを追い詰めた
と言う喜びか？

凶戦士が見つめる視線の先で聖女サラ像の頭が歪んだかと思うと、
ついに黒い球体が現れた。

バチバチと小さな放電を繰り返し、またもゆっくりと降下して来る。その降下が自分の目線の高さまで差し掛かると、バーカードは無言のままショットガンを引き抜き、そして構えた。

ザザザザー……ッ！！

黒い球体が床まで降下すると、また激しく放電し教会内の映像がさらに乱れる。

飛び散った放電は壁や天井そして入口の扉にまで達し、静止したモンスター達をも破壊する。

だが、バーカードは動かない。ただジツと銃口を突き付けている。ノイズと放電が激しさを増す内に黒い球体に劇的な変化が起こり始めた。

液体を球体にした様な表面が、徐々に形を成して行ったのである。

それは言わば『変身』だった。

無生物だった球体が漆黒の翼へと変わって行く。球体だと思っていたのは二枚に合わさった巨大な翼だったのだ。

教会の景色の乱れが修まり始め、完全に鎮静化した頃には球体の『変身』も終了していた。

——バサァッ……！！

球体だった者が、すばめていた翼を広げる。

球体の正体はモンスターだった。それも漆黒の翼を広げ、ユーザー達に原因不明の災厄をもたらす鳥のモンスター……。

最前席の端から端まで届きそうな巨大な翼を体に持ち、顔は髑髏化したカラスの様。額にはもう一つ目玉の窪みがあり、三つの空洞が仁王立ちする凶戦士を見つめている。

これまた鳥の様な左手には、黄金に輝く人間の頭蓋骨を持っていた。胸には何か古代文字の様な意味不明な文字が三つ書いてあり、もちろん読む事は出来ない。

黒い翼を持った鳥のモンスターは羽根を羽ばたかせ、何をすると言う訳でも無くただ、対峙するバーカードを見つめていた……。

「な、なんだあれは？あんなモンスター見た事無いが・・・？」

「ク、『クロウ』？」

「っ！読めるのかハジメ！？」

一方、入口近くの巨大サウ像の後ろ。

隠れて様子を伺っていた二人だったが、急に出たハジメの言葉にシユウの方が驚いた。バイザーで鳥モンスターの文字を解読しようとしたものの、該当データ無しと出たからである。

「う、うん。なんで知らないけど読めた」

読んだハジメ自身も驚いている。しかも何故だろう？あのクロウと言う名のモンスター。どこかで見た気がして仕方ないのだ・・・。

「ようやく、ようやく追い付いた」

と、それまで微動だにしなかったバーカードが不意に口を開く。

後ろ姿しか見えないが、その言葉に喜びとそれ以外の激しい感情が込められている事だけは感じ取れる。

もしこの場から一步でも飛び出せば、その場で焼き尽されてしまいそうなそんな恐ろしい雰囲気は凶戦士は醸し出していた

「お前が何者で、そして目的がなんなのか？そんな事に私は興味は無い・・・だが、お前が犯して来た罪を私は許すつもりも無い！」

構えはそのままに、バーカードが空いている右手をかざす。すると空中から獣の鉄仮面が現れた。

それは彼が完璧な戦士になる証。冷徹な黒き悪魔へ変貌させる封印だ。

「ー返してもらどうぞお前が奪った者全てを！！」

ガチャリと言う音と共にバーカードが鉄仮面を自らの顔に装着する。《黒の勇者》と謎のモンスター・クロウの死闘が今、始まろうとしていた

(続く)

FILE..7『脅威（クロウ）』

クロス・パウロ教会へ行く前、バーカードはとある場所へ立ち寄っていた

特にモンスターも出現せず、草が生い茂る野原と崖しか無い辺鄙な場所である。

しかしそこは凶戦士にとって始まりの地と言っても良かった。

――自分が仮面を付けた場所。

崖の先端には何故か剣が一本地面に突き刺されており、バーカードが剣に近づくと肩に乗っていたククルが飛び立ち、その剣に翼を下ろした。

「やつと全てを終わらせる事が出来そうだ。（奴）が現れた場所にシステムの人間がいたのはただの偶然なのか分からないが、お前ならどう見る？」

凶戦士が一人、剣に向かってつぶやく。

それはいつも無口な彼にしてみると意外な姿である。だが、そんな事を気にせず彼の語らいは続いていた。

「・・・もうすぐだ。もうすぐお前を助け出してやる事が出来る。全ての決着を着けたら、またここに戻って来るとしよう」

バーカードが剣に誓いを告げた後、ククルがまた主人の肩に飛び乗る。

静かな決意に燃える凶戦士を見送る様に、朝日に照らされた剣の刃がキラリと光った――。

ーズドン！

黒いショットガンが火を吹いた。発射された弾丸は一直線に謎のモンスタークロウに飛んでいく。

弾丸は確実にモンスターの頭を破壊する筈だった
キューーーン！！

「!？」

が、突然おかしい事が起きた。クロウの頭に弾丸が当たる直前、見えない壁に弾かれてしまったのである。

まるでモンスターの前にバリアーでも張っている様だ。

ーズドン！ズドン！ズドン！！

バーカードが続け様にショットガンを撃つが効果は無い。

やはりクロウに当たる直前、見えない壁が弾丸を弾いてしまう。

銃の攻撃がまったく効かない事が分かっているのか、標的であるクロウはただ静かに様子を見守るのみだ。

（銃ではダメージは与えられないか。ならば・・・）

ショットガンをホルダーに納めると、バーカードは背中に刺してある大剣に手を掛けた。

全ての敵を焼き尽くす剣『魔光』この日のために手に入れた自慢の剣である。

（これで終わらせる！！）

鞘から一気に引き抜くと放出された電撃にも構わずバーカードは高くジャンプした。

そして、微動だにしないクロウの頭目掛けて渾身の一撃を振り下ろす。

ギヤリギヤリギヤリーッ！！

「オオオオオオーッ！！」

クロウを守る見えない壁と『魔光』の電撃の衝突で火花が散る。先程の冷静な表情とは違い、バーカードの表情も鬼の様な形相に変わっていた。

この一撃に仮面で封印していたモンスターへの怒り、怨み、そして悲しみを全て込めモンスターにぶつける。

宿敵であるクロウの頭は思いの込められた魔剣の前に真っ二つになる筈だった。

ガキーンン！！

「な・・・！」

が、吹き飛ばされたのは魔剣を持った凶戦士の方だった。力負けした事実には、さすがのバーカードにも驚きの表情が浮かぶ。弾かれた『魔光』は教会の扉近くまで飛んで行き、床に突き刺さった。

（・・・っ！まだだ！）しかし、バーカードの闘争の炎は消えない。体を反転し無事に着地すると、間髪入れず漆黒の爪でクロウに襲い掛かって行く。

爪からのワン・ツーから始まり、踵の刃を利用したサマーソルトキック。そして着地してから相手の顔面を狙った後ろ回し蹴りと、強靱な体で眼にも止まらぬ連続攻撃を仕掛けて行くが、やはり見えない壁に守られたクロウには届かない。

それでも、絶えず凶戦士の怒涛の攻めは続いた。

『ーーーー』

と、それまで何もしなかったクロウが始めて動きを見せた。持っている黄金髑髏を前に差し出したのである。

すると不気味な黄金髑髏がぼんやりと青白い光に包まれる。

その光に気付き、バーカードが視線を向けた瞬間ーーーー。

「！？――がはっ！！」

飛ばされた凶戦士の体が教会の壁へと叩き付けられていた。

（馬鹿な！？なぜ・・・！）

教会の扉のさらに上。天井近くの壁からバーカードがゆっくりと落下する全身の筋肉が悲鳴を上げ、今のが敵の攻撃だと分かった頃には壁に叩き付けられていた。

どうやら衝撃波や念動力の類の技を喰らったらしい。

止まりかけている肺から必死に息を吐き出し、バーカードはなんとか床に着地した。

「くっ、お前は・・・一体？」

痛みのせいで途切れそうになる意識をなんとか保ちながら、自然と疑問を口にする。

今の攻撃でHPの半分が失われていた。

今まで、どんなモンスターでも自分にこれだけのダメージを、しかも一撃で負わせた事は無い。

だからこそ、分かってはいたが改めて理解出来た奴の強さはゲームの常識を越えた物であり、自分は文字通り化け物と闘っているのだとー！。

(勝てないかもしれない・・・)

恐れとかそういった感情では無く、冷静に分析した結果である。こんな時にまで、確率論を絶対視してしまう自分が嫌になる。

バーカードの胸中に『敗北』の2文字が過ぎった時だった。

ー！君はゲームを楽しんだ事は無いのかい？

(！？)

ある人物の顔が頭に浮かんだ。

たった一人、自分を友だと言ってくれた者の姿である。

そして思い出す。大切な者がクロウに破れ、自分の眼の前で消えて行った事を・・・。

二度と同じ過ちを繰り返さないために自らに封印をし、ノイズと言う怪事件の追跡を始めた事を・・・。

そして全てをここで終わらせ、必ず助け出してみせると友の前で誓った事を！！

(・・・終われない。私はまだ！！)

バーカードの瞳にまた強い光が宿る。

ここで負けたらもはやクロウを止められる者はいないだろう。

そうなればどれだけの犠牲が出るか想像もつかない。

負けないー！否、自分は負けられないのだ！

『ー！ー！？』

手や足に力を込め、フラつく体をなんとか立ち上がせる。

再度戦おうとする凶戦士を見て、クロウは不思議そうに首を傾げる。肩で息をしながらも、バーカードはモンスターを睨み付け、マグナムガンのホルダーにそっと手を伸ばした。

「お前が何者かは知らんが、その力がゲームの規格を越えた物だと言う事は分かった。」

「そちらが反則の力ならこちらも反則を使わせてもらおうぞ!!」ホルダーからマグナムガンを引き抜くと、銃身の上の部分を一気に引いて安全装置を解除する。

するとガチャリ!!と言う金属音と共に、マグナムガンの銃身が二つに割れ、なんと拳銃の引き金の部分と安全装置の部分がそれぞれ凶戦士の体に溶け出したのである。

それは言わば同化と言っても良いだろう。

バーカードとマグナムが一体化しようとしているのだ。

「これが私の銃・・・『滅器』の真の姿だ」

慣れない感覚に耐えながら、バーカードが『滅器』との同化を完成させる変貌を遂げた拳銃は、その姿を大きく変えていた

バーカードとの一体化は肩まで及んでおり、肩からは巨大な純白の羽が三本生えている。

銃身となった腕からは複雑な配線が何本も通っており、銃口も一つから三つへと増え、マグナムガンと言うよりガトリングガンの様相を呈していた通常、『エデン』ではある程度のLvになると、自分の武器をカスタマイズ出来るのだが、バーカードの武器は明らかにデータを不正改造した物である。

システムに見つかれば、ただでは済まないだろうそうまでして求めた強さの証。バーカードの最強にして最大の武器だ。

「これを使えば私は恐らくアカウント停止になるだろう。・・・だがお前を倒せるならそれも悪くない!!」

ウィーン!ウィーン!

大きさを変え、肩に移動した赤いランプが独特のチャージ音を響かせると、バーカードが銃口を突き付ける。

虚無に包まれた窪みと凍りつきそうな鋭い眼。二つの視線が交差した時、三つの巨大な銃口が火を吹いた。

キューー・・・ン。ーードシューーーー!!!!

「無へ帰れえー！っ！！」

三つの銃口から発射された黒いエネルギー弾。それが一つに合わさり巨大なブラックホールへと姿を変えた。

その大きさは凶戦士の体をすっぽりと覆い隠す程で荒野の戦いの比では無い。

いかに見えない壁があらゆる攻撃を通さないと言えど飲み込まれてしまえば関係ない筈だ。

全てを無に帰す漆黒の空間がクロウの眼前に迫り来る。

そして黒い翼がブラックホールに飲み込まれたかと思った瞬間――。

――クロウに触れたブラックホールの方が光の藻屑となって消えてしまった。

いや、正確にはクロウを守る見えない壁に触れた途端にである。

謎の烏モンスターはまたしても有り得ない力を使い、光すら飲み込むブラックホールを消滅させてしまったのだ！

「なん・・・だと!?」

バーカードの眼が驚愕で見開かれる。

自分の追い求めた力の証であり、最強の武器でもあった魔弾がいつも簡単に、打ち破られたのだから無理も無い。

それと同時に、巨大兵器と化していた『滅器』が光に包まれ、元の拳銃に戻ってしまった。

どうやら撃てるのは一発が限度だったらしい。

エネルギーを使い果たし、同化を保てなくなって床に落ちたマグナムガンに気付き、バーカードが一瞬だけ視線を落とす。

そしてまた視線をクロウに戻した途端、その表情が強張った。

キューーーン！キューーーン！！

クロウの空いていた右手に赤い杖が握られていた

杖の先が六角形になっており、先端には短い角が二本、中央には人の瞳の様なマークがある奇妙な杖である。

だが、注目するのは形では無い。

瞳のマークの部分が爛々と光に包まれ、点滅を開始したのである。その点滅音が先程の『滅器』のチャージ音にとっても酷似していたのだ。

(ここまでか・・・)

バーカードが皮肉を込めた笑みを見せる。

先程振り払った『敗北』が迫っている事を凶戦士は感じていた。

後ろで見ていたハジメもまた、眼の前の事実には絶句していた。

あのバーカードが、『黒の勇者』バーカードがまったく相手にならないのである。

それはさっき自分が助けてもらった時とは正反対の結果だった。

「・・・彼が勝てないモンスターがいるなんて、俺達は夢でも見てんのか!？」

シュウも絶句してしまっている。ハジメよりバーカードの実力を知っている分、信じられないのかもしれない。

(ど、どうしよう・・・?)

ハジメはショックを受けるより、居ても立ってもいられなくなっていた。このままではバーカードがあのもンスターにやられてしまうすでに立つ力も残って無いのか片膝をつき、荒い呼吸を繰り返してしまっている。

さっきは自分が助けてもらったのに、何もせず見ているだけなんて絶対に嫌だった。

ーと、そこで少年の眼にある物が止まった。

それはバーカードの背後に突き刺さっていた剣である。

(あっ! あれは!!)

ハジメの眼が徐々に輝いて行った。

バーカードのすぐ後ろ、教会の扉近くの床に突き刺さっていたのは彼の愛剣『魔光』である!

あのエビル・ゾンビの大刀さえ真っ二つにした魔剣。渡せば、な

んとかなるかもしれない。

少年の心に一欠けらの（勇気）が芽生えていた。

（よ、ようし・・・！！）

ゴクリと唾を飲み込み、クロウの方を見る。

幸い、モンスターはバーカードの方に集中していて自分達には気付いていない。

それに巨大サラ像から『魔光』まで眼と鼻の距離である。

思いつき走り走って剣を渡し、また戻ってくれば問題無い筈だ。

「ハジメ・・・？」

甥っ子の鬼気迫る様子に気付いたのか、シュウが声を掛ける。だが、ハジメの耳には聞こえていない。

いつ飛び出すかタイミングを必死になって謀っていたからである。今にも破裂しそうな心臓を落ち着けるために、大きく深呼吸する。すると恐怖感より少しだけ勇気が勝った気がして、ハジメは走り出していた。

「は、ハジメえ！！」

「うわーーーーっ！！」

シュウの驚きの叫びをバックに、少年は短い距離を一気に走り抜ける。

二人の存在に気付いてバーカードが振り向いたとほぼ同時に、ハジメは床に突き刺さっていた『魔光』の柄を握っていた。

「バ、バーカードさん！これ！！・・・を？」

『魔光』を引き抜くため、両手で思いっきり力を込める。

が、抜けない！！ゲームなので重量は関係ないが、身の丈よりも長い剣を抜くのは大変である。

焦るハジメがもう一度剣を引き抜こうと力を込めた時だった。

ピーーーーーッ！！

赤い杖から真っ赤な光線が発射された。光線は一直線に飛んで行き、バーカードの体を貫く。

そして――そのまま『魔光』を抜こうとしているハジメの左手に直

撃したのだ！

「ぐ・・・！」

「うわぁ！！」

「ハジメー！ーッ！！」

三種三様の叫びが教会内に響いた。シュウが駆け寄る中、ハジメは弾かれた様に吹っ飛びその場に倒れる。

攻撃を終え、三人の様子を確認したクロウはまた黒い球体に戻り、消えてしまった。

「ハジメしつかりしろ！ハジメえ！！」

「うう・・・痛い、痛い！！」

シュウが呼び掛けても、倒れたハジメはのたうち回っていた。

両手に激痛に走り、意識が混濁する。心配する魔導士が回復呪文を唱えようと少年の両手を見た途端、ハッと息を飲んだ。

「な、なんだこれ！？」

「痛い・・・え？」

シュウの叫びにハジメもまた自分の手を見る。

すると、なんと黒い斑点が虫食いの様にハジメの指を分解していたのだ。

「うわああああー！！っ！！」

自分の手の惨状に少年の恐怖が爆発した。

もはや全ての指が半分以上食われ、感覚も無くなって来ている。

シュウが必死に回復呪文を唱えるが効果はまったく無い。黒い斑点の侵食は徐々に、そして確実にハジメの体を蝕んで行った。

（マズイ・・・巻き込んだ）

一方、バーカードもまた黒い斑点の侵食を受けていた。

こちらはハジメより侵食がかなり早く、すでに上半身と下半身が二つに別れてしまっている。

意識を失わないのは彼の精神力の賜物だろう。

後ろでパニックに陥っている少年には見覚えがあった。

先程、荒野で助けたシステム・シュウとそのパートナーである。クロウの攻撃を受けてしまったら、もはや回復呪文など意味が無い。待っているのは自分と同じ末路である。

（だが、私を助けようとしてくれたのだな。ならば私も応えなければなるまい）

忠告を無視したのは否めないが、少年の勇氣には未来に繋がる見込みがあった。

そしてバーカードには彼を救う秘策がある。

時間だけが無かった。体の侵食はすでに上半身を終えつつある。

まだ動く腕で通信機のキャップを開き、内蔵してある小型のキーボードに素早く入力して行く。

キーボードと同じく小さなパソコン画面に《COPY OK?》と言う文字が表示された時、バーカードはなんとか《ENTER》のキーを押した。

（クオオーーー・ン）

と、それまで空中で主人の様子を見守っていたククルが悲しい雄叫びを上げ、体が発光し出した。

小さな光と化した白竜は一度バーカードの方を見ると、突然ハジメ達の方に急降下する。

そして侵食されているハジメの手に体当たりしたのだ。

「こ、これは!？」

シュウの驚きの声が聞こえる中、ククルとぶつかった右手が黒い斑点を掻き消し、まばゆい光を照らし出した。

正確には手首にはめていた腕輪が、である。

腕輪の光は徐々に輝きを増し、いつの間にかハジメ達の周りは光で満ち溢れていた。

（これで良い・・・これで）

最後の作業を終え、バーカードはひとまず安堵した。

体の方はもはや首だけとなり指一本動かせない。食い尽くされた後、自分は何処へ行くのか？

それは彼にも分からなかった。

(スマン・・・イン・・・私・・・は)

薄れ行く意識の中静かに眼を閉じる。光に満ちた教会とは違い、静かな闇の世界にバーカードは落ちて行った――。

(続く)

FILE..8『再会（リ・スタート）』

暗い闇の中から私は眼を覚ました。

気付いた時、初めて眼にしたのは紺色の床と巨大な聖女サラの像だった

どうやらまだクロス・パウロ教会にいるらしい。

疲労で重い体をどうにか起こす。

すると、そこで意識がハッキリとした

——私は、私は何故無事なのだろう？

あの時、モンスターにやられて巻き添えを食った少年を助けたために、私は消滅した筈だ！

辺りを見回しても、少年やシステムの姿は無い。状況が把握出来ないが、ひとまずクロスピアへ戻ろうと一步前に踏み出した時・・・。

『ぬあっ!?!』

足を滑らして思いっきり体を床に叩きつけてしまった。

あまりの間抜けぶりに我ながら情けなくなるが、どうした事か何度歩こうとしても足がもつれて転倒してしまう。

と言うより足が上手く動かないのだ。

（私は一体？ん・・・!?!）

と、そこで私はとても無い事に気付いた。何故か目線の高さがいともよりずっと低いのである。

身長はリアルと同じにしてあるので普段なら、教会全体の景色が見れる筈なのだが、見えるのは床や椅子など身近にある物ばかりなのだ。

（っ!?!まさか・・・）

嫌な考えが浮かんた。

消滅した私と助けた筈の少年Ⅱ信じたくは無いが1番納得の行く結果である。

恐る恐る私は、自分の両手を見てみる。

『こ、これは!!』

導き出した通りの事実を突き付けられて、私は愕然とした・・・。

「――メ」

(ん・・・?)

混濁した意識の間でハジメは誰かが呼ぶ声を聞いた。

体が酷く重い。

瞼を開けるのも今は億劫で、ただ静かに眠っていたかった。

「――ハジメ」

声を無視して眠っているとまた自分を呼ぶ声が聞こえて来た。

今度は少し体を揺すられてる気がする。

気持ち良く眠っていたのにハジメは少しだけ不機嫌になった。

(誰? ゆっくり寝かせてよ・・・)

「ハジメ」

(うるさいなあ・・・)

「始っ!!」

(!?)

母の起こす声でハジメは眼を覚ました。

眼を開けた瞬間に見えたのは見慣れた部屋の天井と怒った母の顔。

部屋が妙に薄暗く見えて、自分がヘッド・バイザーを着けたままな事に気がつく。

バイザーを外して体を起こすと、散らかり放題のカーペットや逆に綺麗な勉強机、マンガやランドセルが乗っているベッドを見て自分の部屋だと分かった。

「いつまでも部屋から出てこないと思ったらなんて恰好で寝てるの! 風邪でも引いたらどうするの!!」

「ご、ごめん。母さ・・・痛っ!!」

頭から角を生やした母に謝ろうとした途端、左手に激痛が走った。

見ると左手だけ汗を掻いており、痺れる様に感覚が無い。

少年はそれで自分が何をしていたか思い出してハッとした。

（そうだ・・・ボクはモンスターの光線にやられて、そしたら白い竜が飛んで来てそれで・・・）

その後の記憶がどうにもあやふやになっていてハッキリしない。たぶん、痛みでそのまま気絶してしまったのだろう。

「どうしたの？左手、怪我でもしたの？」

「う、ううん！ゲームやり過ぎたからちょっと指が痛くなっちゃって」

心配してくれる母を氣遣って始は手をブンブン振りごまかした。すると母は腰に手をやり、やれやれと言った感じで苦笑する。

「まったく！寝ている間にお兄さんから何回も電話掛かってたみたいよ？」

ゲームも良いけど、もうすぐご飯だからそろそろ降りて来なさい。良いわね？」

「うん。分かった」

持っていた始の携帯を渡すと、母は下へ降りて行ってしまった。

携帯を開いてみると不在着信が何件もあり、全部従兄弟のシユウⅡ終一からである。

どうやら彼も無事だったらしい。

少し安心した始が携帯を閉じようとした時・・・。

——リリリリ——ン！！リリリリ——ン！！

「うわっ！」

突然、携帯の着信音が鳴った。相手はもちろん終一である。

留守電に切り替わる前に始は慌てて電話に出た。

「もしもし！始？始か！？」

「う、うん！」

携帯に出た途端、落ち着きを失った終一の声が聞こえて来た。

始が安心させるために答えると終一の声が止まり、暫くして携帯の向こうから

「ハッ！」と言う大きなため息が聞こえた。

「良かったぁ……。何度掛けても出ないから、俺はてっきり始の身に何か起こったんじゃないかと……」

安心した従兄弟の言葉には甥っ子を本当に心配していた思いが込められていて、始は胸が熱くなる

「ごめん。でも終一兄ちゃんも無事で良かったね？」

「バアカ、こっちはお前が倒れた後、大変だったんだぞ？」

疲れている様子で終一がああ後の出来事を教えてくれた。

最初、始達を照らしていた光はいつしか教会中に溢れる程になって行った眩しくて眼をつぶると、光はいつの間にか消えていて、始の姿も無かったらしい。

慌てた終一はすぐにログアウトし、今まで電話を掛けまくっていたと言うのだ。

「バーカードさんはどうなったのかな？」

「分からん。お前が消えた後、教会には誰もいなかったし、ログを調べてもフリーズした形跡はやっぱり無い。

まったく、始と一緒にじゃなかったらあれは夢だったんじゃないか？
と思いたくなるよ」

従兄弟の混乱ぶりも納得出来る。

初めて『エデン』をプレイした数時間、様々な出来事が起こった。
しかも全て通常、ゲームでは起こり得ない事ばかりである。

始だってあれが本当に起こった出来事だったのか？と改めて聞かれると、自信が持てなくなるのだ

「……なあ始。お前暫く『エデン』プレイするの止めろ。あんな危険なバグがあるのを知って、お前にあのゲームをやらせる訳にはいかない」

「終一兄ちゃん！？ボクは――」

「駄目だ！今回ばかりはお前のお願いで聞けない。

俺はシステムである以上ユーザー達を守る義務があるんだ。

だから、兄ちゃんがバグの原因を究明するまで『エデン』をやるの

は禁止だ。分かったな？」

有無を言わさない口調で、終一が電話を切ってしまう。

残された始は驚くばかりでただ呆然としてしまった

（どうしてこんな事になっちゃったんだろう？）

数時間前、自分は誕生日プレゼントの『エデン』を楽しみにしてた筈だ。

それがプレイした途端、妙なモンスターに襲われ興味本位で終一の約束を破り、首を突っ込んでしまったせいで怖い思いをする羽目になり、ゲーム禁止にまでなってしまった。

途方に暮れた始が、何気無くテレビの方に眼を向ける。

眠っている間に母が消してくれたのかテレビの電源は消えていたが、ゲーム機の方は入ったままだった。

そつとテレビのスイッチを押すと画面に『エデン』のスタート画面が映し出される。

始は少し躊躇しながら、コントローラーを握るとSTARTボタンを押した。

（メールだけチェックしておこう……。ヘッドフォン着けてなければ大丈夫だよ・ね）

自分に言い訳しながら始はまたゲームを再開してしまう。

確かにヘッド・バイザーを装着しなければ『エデン』はただのゲームに過ぎない。

画面の中の、自分が作ったキャラを操作するだけだからだ。

「ん・・？」

ユーザー情報を照合してゲームをやる前のユーザーページに飛ぶと、メールボックスにまた（NEW）の文字が表示されていた。

新着メールが届いていたのである。

自分のアドレスは終一しか知らない筈なのに誰だろう？

疑問を感じた始がメールボックスを開いてみると、見た事も無いアドレスからメールが届いていた

何気無く、そのメールを開いてみる。

だが、メールの内容を確認した途端、始の表情が変わった。

『 ■プレイヤー名 ハジメ君 ■』

君が見た出来事は全てエデン内で起きている事実だ。

もし君が真実を知りたいのなら今すぐクロスピアのマルコロ大聖堂に来て欲しい。

■バーカード■

「バーカードさん!？」

差出人の名を見て始は思わず叫んだ。

無事だったと安心する半面、何故彼が自分のメアドを知っているのか?という疑問が残る。

しかも、荒野ではあれだけ頑なにクロウや不可解な現象との関わりを不定していたのに、急に真実を話すとはどう言う事なのだろう?メールの意図が理解出来ず、始は混乱していた。

(どうしよう・・・)

ヘッド・バイザーに視線を向けながら始は悩んでしまった。

メールの受信時間を見ると届いたのは20分程前だから今繋げばまだ間に合う。

しかし終一にはゲームを禁止されているし、ここでバーカードと会えばまた従兄弟との約束を破る事になってしまう。

これ以上、彼を心配させたくは無かった。

(でも・・・)

バイザーに近づいて行って、そっと触れてみる。やはり自分もつと『エデン』で遊びたいし、楽しみたいと思う気持ちが強く残っている。

これで始がもう少し大人なら自分を律する事も出来ただろう。

だが、彼はまだ11才の少年である。買ったばかりのゲームをやるなどと言う方が無理なのだ。

「終一兄ちゃんごめん!!」

今はいない従兄弟に謝り 始は意を決した様にヘッド・バイザーを頭に装着した。

あのクロウと言うモンスターはなんなのか？そして何故バーカードはあのモンスターを追っていたのか？始はどうしても知りたかったのだ。

（そうだ！ゲームをやる前に・・・）

と、そこで始が一旦コントローラーを置き『エデン』のパッケージの中身を探り始める。

ゲームを再開する前に今度はちゃんと説明書を確認しておこうと思ったのだ・・・。

ークロスピア・マルコロ大聖堂。

今日も様々なプレイヤー達がここから『エデン』へと入って来る。

ある者は冒険を、ある者は出会いを、そしてある者は失った何かを求めてこの大聖堂から出ていくのだ。

その中の一人にハジメはいた。

この前は自分とシュウ、そしてウィングしかいなかったが、今日は広い教会の中に人が何人も行き来している。これが、この本来の光景なのだろう。

しかし教会と言うと、なんだかクロス・パウロを思い出して、ハジメは背筋がゾツとした。

「・・・？な、なんだこれ!？」

と、そこで少年は初めて左手の異変に気付いた。

なんとアンクレットから先の手が真っ黒に変色しているのである。自分の右手を見ても前の衣装と変わらず茶色の手袋をはめているのに、左手だけ色が変わっているとはどう言う事だろう？

ゲームの設定をした時はなんら異変は無かったから気付かなかったのだ。

（もしかしてモンスターにやられた攻撃の影響なのかも・・・）

そう考えれば現実のあの痛みもつじつまが合う。胸中に募る不安にハジメはゴクリと唾を飲み込んだ。

「・・・やっぱりここにいたか」

「え？――ヒイ！！」

と、不安に戦っていたハジメだったが突如背後に聞こえた声に体から滝の様に汗を流す。

そこにいたのは両腕を組み、仁王立ちしている金色の魔導士。

いつもは優しいキツネ眼も今回は吊り上っていた。

「終――シュウ兄ちゃんなんでここに？」

「ハジメ・・・ログさえ調べれば誰が入ったかなんてすぐに分かるんだ。

それにお前の考える事なんかお見通しだよ」

少年を睨みながらシュウが歩み寄って来る。従兄弟が本気で怒っているのが伝わって来て、ハジメも少しづつ後ずさった。

「シュ、シュウ兄ちゃん！これはね・・・」

「ハジメ、帰るんだ。これ以上俺を怒らせるな」

なんとかハジメが説明しようにもシュウは聞く耳を持たない。

教会を行き来するユーザー達もなんだ？と言う顔で二人を見ながら通り過ぎて行く。

何がなんでも甥っ子を危険な事に巻き込みたくないと言う強い決意が、シュウに強固な態度を取らせていた。

『待ってくれないか？《悠久の監視者》』

その時だった。険悪な従兄弟同士の空気に割り込む様に何処からか声が聞こえて来たのである。

その声にシュウは一瞬虚を突かれ、ハジメは顔をパアツと明るくさせる。

シュウをあのか呼び名で呼ぶのは彼しかない。

「バーカードさん！あれ？なんか声の感じが違うような・・・？」

ハジメが辺りを見回すが、教会内に黒き勇者の姿は影も形も無い。

笑いながら嗜める。

もったもな言い分を言われてシュウもそれ以上言えず、黙ってしまった。

『さて、説明するにもここではまずいな。落ち着いて話せる場所を変えよう』

「落ち着いて話せる場所？」

ハジメが首を捻るとククルⅡバーカードはハジメの肩から羽ばたき、聖女サラ像の肩に止まる。そして驚いて見ている二人の顔を見下ろした。

『君達を案内しよう。私のホーム（トロイ）へー』

（続く）

FILE:9 『仲間(メンバー)』

——君の邪魔者を始末して来たよ。

ありがとう……。でもあまり乱暴な事はしないでね？

——分かっている。ただ邪魔なネズミ達がもう数匹いるから、君の愛犬を借りたいんだ？

……。良いよ。クロウに言っておく。

——ありがとう。今度帰る時には君におみやげを持ってくるよ。

早く戻って来てね？ボクが淋しくなる前に——

「バーカードさんと連絡が取れね——ってどう言う事だ!!」

ドーム系の小さな空間全体に赤い髪の青年の怒鳴り声が響き渡る。それを聞きながら部屋の巨大コンピュータを操作していたラビィは、青年の怒りに驚きもせずに応えた。

「あい、すいませ〜ん。ホムラさんには連絡しなくて良いって言われたら、逆にバーカードさんと連絡取れなくなっちゃいました〜？」
「——このやろう。お前の『すいませ〜ん』は謝ってる様に聞こえねえんだよ!!」

ラビィの言い分に、ホムラと呼ばれた青年が壁を蹴っ飛ばしながらまた怒鳴る。

実際、二人のいる場所はそんなに広くないので怒鳴らなくても十分

聞こえるのだが、チームリーダーが音信不通なのにのほほんとして
いるラビイを見ては、怒鳴られずにいられない。

青年は頭に超がつく程の気の短い性格だった。

「それにだ。俺の名をホムラってカタカナで呼ぶな！

ちゃんと（焰）って漢字で呼べ！！」

「あいあい。すいませ〜ん」

反省の色ゼロの態度にまた焰の額に青筋が浮くが、疲れた様に近く
にあったソファアにドツカリと座る。

このネットジャンキーの少女？に何を言っても無駄なのが分かって
いたからだ。

ここはバーカードの本拠地。ホームの名前は

「トロイ」。

ホームとは『エデン』でパーティを組むユーザー達が集まる基地の
様な物だ。

通常、RPGで一人で冒険をする無謀者はいない。大抵は何人かの
友達や知り合った仲間達と組むものである。

そこで自分の仲間達だけと情報を交換したい時や、交流の場として
作られたのがホームだ。

ホームはWB社に申請すればいつでも作る事が出来る。

時には、メンバーが100人を越える超大型ホームなんて言うのも
存在するのだ。

しかし、焰達がいるホームは人が数人入ればいっぱいになってしま
いそうな程小じんまりとした物だった。

円形に作られた空間に焰が座っている赤いソファアと、ほんの少し
ばかりの観葉植物。そして入口に続くドアとバーカード専用の秘密
の部屋に続くドアと、メンバーが休息などに使うリラクゼーション・
ルームに続くドアの3つが設置してあるだけである。

後は部屋の中央に描いてある魔法陣と、部屋の大半を占めているラ

ビー御愛用の巨大コンピューターがあるだけだ。

ほぼ、必要な物すら削ぎ落としたシンプルなホームと言えるだろう。

「ムムッ？ ムムムムムムッ？？」

「どうした？」

とそれまで巨大コンピューターに向かっていたラビーが突然手を止め画面に眼を凝らし始めた。名前の由来でもあるウサミミもピコピコと落ち着き無く動いている。

それを見てソファアーに寝転がっていた焰の目付きが変わった。

「あい。どうやらここに向かっているユーザーがいるみたいですねぇ？ 数は2人と・・・解析不能なのが一つあるみたいです」

「不審者か？ ちょうど良いや。ムシャクシャしてたから追っ払ってやる！」

ソファアーから飛び立つと指をポキポキ鳴らしながら凶悪な笑みを浮かべる焰。血の気の多い青年がズンズン入口のドアに向かうと、ラビーは振り返りもせず

「いってらっしゃい！」と袖から出し切れていない手をブンブンと振った。

・・同じ頃。クロスピアの港付近ではシュウとハジメ、そしてシュウの金色杓杖に乗ったバーカードの姿があった。

「まさか《黒き勇者》のホームがこんな身近な所にあったとはねえ？」

歩きながらシュウが顔を竦める。

二人と一匹が向かおとしているのはもちろんバーカードのホーム『

トロイ』だ。

謎の多いユーザーであるバーカードのホームだから一体どんな場所にあるのか？と期待して案内されてみたら、なんて事は無く街の中にあつたのである。

しかもクロスピアの名所の一つ、巨大な港の端の端らしい。

知つての通り、クロスピアは王宮ストーン・キャッスルと本物に近い美しい港が自慢の街だ。

だからこそ港にも大小様々な船が停めてあり、その作りはユーザー達からも人気を博している。

システムのシュウならほぼ毎日見ている場所にバーカード達のホームはあつた訳だ。

『人は隠そうとすればする程逆に目立って見つかり易い。シンプルな物の方が隠れ家には持つてこいなのだ。・・・見えて来たぞ？あれだ』

杓杖に乗りながら悠々と案内するバーカードが翼で指差す。

声や姿は違ふがハジメ達もようやくこの小さくなつてしまった《黒き勇者》に馴れて来た。

「え？あれって・・・」

指ならぬ翼で指された先にあつたのは、それこそ港の端の端。数々の豪華な船の陰にひっそりと隠れたボロボロの小型船である。

もっと大きければ、幽霊船と呼んで良いかもしれない。

一応港に上がれる階段の近くに横付けしてあるので乗れる事は乗れるのだが、出来れば遠慮したい船だった。

「えーと・・・あれはグラフィックじゃないかな？？」

『グラフィックの中にホームを作つてあるのだ。あの船なら誰も近

『寄らないからな』

頬を掻きながら苦笑するシュウにバーカードが答える。

確かにあの船ならば誰も近づきはしない筈だ。

仕方なくシュウ達がオンボロ小型船に近づくために歩を進める。そして船がようやくちゃんと見える所まで差し掛かった時だった。

「オラアッ!!」

「!? ハジメ、避ける!」

突然シュウ達のいた場所に陰が差したかと思うと雷鳴を轟かせながら、拳に稲妻を纏った男が降って来たのである。

男の一撃は間一髪シュウが気付き、ハジメを突き飛ばしたため誰にも当たらなかったが、代わりに当たった石床のグラフィックがドゴン!と言う音と共に穴に開く。

そのあまりの威力に自分が当たっていたら?と想像してしまい、ハジメの顔からサーッと血の気が引いた。

「ちっ!外した!!」

石床から手を抜きながら襲って来た男が舌打ちをする。

短く真つ赤な髪を炎の様に立ち上げ、額には梵字の火の一字。浅黒い肌には足の部分を切り取った短めの袴以外、着ておらずせいぜい両手足に付けている二重の金の輪か 首から下げている勾玉の首輪ぐらいな物だ。

両手の爪は鋭く伸びており、口から見える八重歯や尖った耳などは正に獣を思わせる男である。

・・ここまで言えば、もはや説明はいらないだろうが男は先程『トロイ』を飛び出して行った焰だった。

「おいおい、見ず知らずの人をいきなり襲うなんてお母さんから習わなかったのかな？」

「るせえ！！テメーら俺達のホームになんの用だ！？」

軽口を叩きながら身構えるシュウに対し、焰も体制を立て直しながら獣の唸り声を上げる。

攻撃を避けられて余計頭に血が上ってしまった様だ。

「不用意に近づきやがって・・・俺は今むしゃくしゃしてんだ！！大人しく引き返さねーってんならこのまま力づくで――」

『馬鹿者っ！！』

――ボワアアア~~~~ッ！！

今にも飛び掛かりそうな鼻息の焰だったが、突如彼の顔を巨大な炎が襲った。

今まで事の様子を伺っていたバーカードである。まだ炎を吐き出すのは慣れていないのか、その後ケホケホと黒い煙を咳込んでいたが・・・。

「な、なんでククルがここに〜！」

『自分のホームをバラしてどうする？手を出す前にまず考えてから行動しろと言った筈だ』

今までの勢いは何処へやら、顔を真っ黒にして眼を真ん丸にしながらその場へ倒れる焰。

・・・その後、シュウ達が仕方なく彼を抱えて『トロイ』に入る事になったのは言うまでもない。

「あい、すいませ〜ん！よくよく確認して見たらバーカードさんの情報が含まれていたの言うの忘れてたました〜♪」

袖から出し切れていない腕で頭を叩き、エヘッ♪と言う感じでラビィが舌を出す。

近くのソファーにはふて腐れた顔の焰がおり、入口の近くには感心した顔で部屋を見回すシュウと緊張した様子のハジメが立っている。そしてバーカードは皆の方を向いているラビィの頭の上に止まっていた。

「ふっざけんな！！テメーぜってえワザとだろ！？」

『焰、いい加減にしないか。ラビィも以後気をつける様に』

納得のいかない焰がまたしても怒り出すが、バーカードに諫められると

「ケッ！」とだけ吐き捨ててソップを向いてしまうラビィもまた

「あいあい♪」と言いながら、大して気にしていない様子。

相変わらずな二人の態度に、バーカードも呆れて長い首を降るばかりだ。

『まあ、道中色々あったが君達には改めて自己紹介しよう。

ようこそ私のホーム

「トロイ」へ。

私はバーカード。姿は大分変わってしまったがタイプは（戦士）だ。そして彼らが私の仲間で戦闘専門の焰と、このオペレーター担当のラビィ。タイプは一応（魔導士）だ』

「あい♪貴方が《悠久の監視者》さんですねえ？優秀なシステムだとお噂は聞いてます」

バーカードが仲間の説明をシュウ達にすると、ラビィが異様に長いローブをズルズル引きつりながら近づいて来て一方的に握手する。ラビィは顔に装着している大きめなゴーグルとウサミミが特徴的な

猫の獣人の姿をしていた。

「あゝこれはどうも、ご丁寧に」

『・・ラビィ。話の腰が折れてしまったが、以上3人が私のパーティー《ゴースト・ハッカーズ》のメンバーだ。

そして私達が追っている物こそ、君達が遭遇した原因不明のバグ――ノイズだよ』

ノイズと聞いた途端シュウや焰、それに今まではしゃいでいたラビィまでもが押し黙ってしまう。クロス・パウロで経験したあの恐怖感を思い出して、ハジメは変色してしまった左手を摩った。

「教えてもらえますか？あのノイズってのが一体なんなのか・・・。俺達はそのために来たんだ」

真剣な表情になったシュウがバーカードに尋ねる白い竜となった凶戦士も魔導士の真っ直ぐな眼を受け止めると、分かっていると言う様に静かに頷いた。

『私もそのつもりで案内したのだ。君達には知っておいてもらいたいこの（世界）の危機を・・・そして、真実をな』

（続く）

FILE..10 『旅団（パーティ）』（前書き）

更新がかなり遅れました（＜|＞）これからも気長にお待ち下さい
（笑）

FILE..10『旅団（パーティ）』

『まず順を追って説明しよう』

白い竜になったバーカードが静かに語り出した。それに寄ると彼は以前からWB社の依頼で、システムの網から抜けたバグや悪質なハッカー達を始末する（掃除屋）の役目を請け負っていたのだと言う。何故、WB社が彼を選んだのかは聞かされていないが、恐らく彼の実力と素性を知って仕事を依頼しても問題は無いと判断したのだろう。――とバーカードは考えたらしい。これにはシュウも驚いて

「そんな！会社がユーザーにそんな事させてるなんて聞いた事ないぞ！？」

とまぐし立てたが、それれも予期していたのかバーカードは特に驚きもせずに、

『私の情報がシステムにあまり知られてなかったのがその証拠だよ。もし私が失敗しても個人ユーザーが勝手にやったと言い訳をするため、極力関係者にも知られない様にしたのだろう』

と、皮肉を込めて説明した。

だが、今から約半年前。バーカードはWB社からとある事件の調査を依頼される。

それは出現ポイントが違うエデンのモンスターが突然現れ、ユーザー達を襲っていると言う物だった。

『しかし当のモンスターが襲う場面を見た者は無く、確かな証拠も無い。極めて現実味の薄い事件だった。

・だが、調査を進めて行く内に私は遭遇したんだよ。
少年が「クロウ」と名付けたあの烏のモンスターに』

さして広く無いホームの中でバーカード以外言葉を発する者はいない。

彼の話に寄ると、とある情報を聞き付け、ある地点に駆け付けたバーカードはそこでその場所の景色が突然乱れ、フリーズ現象を起こしているのを目撃したのだと言う。

そこでは同じ様に冒険をしていたユーザーが現れる筈の無いモンスターに襲われていて、空中にはあの黒い球体――クロウがいたのだ。

『クロウは全てに置いてエデンの規格を越えた存在だった。

特徴は出現した地域を一定時間フリーズさせ、召喚したモンスターでユーザーを襲わせる。そして襲われたユーザーは二度とログインして来ない。・・・何故ならゲームオーバーとなったユーザー本人が行方不明になってしまうからだ』

「なっ！」

バーカードの言葉を聞いた瞬間、シュウが息を飲むのが分かった。

『エデン』を管理するWB社が確認出来ないモンスターがいると言うだけでも信じられないのに、そのモンスターに負けるとユーザー本人が行方不明になってしまうと言う。システムのシュウには到底理解しがたい話だろう

「馬鹿な！いくら『エデン』が仮想現実の世界だからってユーザーに影響を及ぼす筈が！？」

『私は事実を述べているだけだよ《悠久の監視者》』

――ラビィ、例のリストを画像に出してくれ』

「あいあゝい！お待ち下さゝい」

バーカードを頭に乗せたまま、ラビィが巨大コンピュータを操作し始める。すると巨大な画面に数人の男女の顔と名前が映し出された。

どれも『エデン』で使っているキャラの顔と本人の顔の両方が載っていた

『私達の調査では、既にこの五名がクロウの被害に合い行方不明となっている。

嘘だと思ふなら彼らのユーザー情報を調べて見ると良い』

白き幼竜に言われてシュウが額のバイザーを装着する。暫くするとピッ！と言う音と共にバイザーが光り、シュウの細目が大きく見開かれた。

「全員の情報がアクセス不可だど！？馬鹿な、ただのユーザー達になんでこんな強固なガードが！？」

絶句しているシュウに対し、バーカードは鋭い視線を向けながら、

『WB社が被害者達の情報を隠蔽したんだよ。

君も少年が襲われた時、見ていたのなら分かる筈だ。

あれはただのゲームオーバーでは無い。まるで新種のコンピュータウイルスがキャラをユーザー事破壊している様だった』

と、説明した。

シュウは信じられない様だが、ハジメはなんとなくバーカードの話を理解する事が出来た。

あのクロウが持っていた赤き杖の光線を受けた時の痛み……。あ

れは間違いなく現実の物だった

シユウを黙らせるとバーカードはさらに説明を続ける。

クロウの存在を知った彼は調査を続ける内にその驚異と、被害の数を知り驚いたと言う。

そしてバーカードの報告を聞いたWB社は、秘密裏に事件の鎮静化をさせるために彼にノイズ事件対策用パーテーター『ゴースト・ハッカーズ』を結成させ、被害の拡大を食い止めていたのだー。

『ここまでの話で何か質問があるかね?』

ふうと一息を入れ、長い説明に休憩を入れたバーカードが聞くが、ホームの中で誰も言葉を発する者は誰もいない。ただラビィのキーボードを叩く音だけが延々と響いていた。

「・・・貴方はあのモンスターがなんなのか知っているんですか?」

思い詰めた表情で入口の小さな階段に腰掛けていたシユウが聞く。

もはや彼にバーカードの言葉に反論する意志は無い。

実際に自分の眼の前で可愛い甥っ子が襲われたのだから、信じるしかないと考えたのだ。

『今の段階でクロウの正体や目的については分かっている。』

分かっている事は神出鬼没に現れ、ユーザーを破壊するウィルスをばらまく極めて危険な存在だと言う事だけだ』

「もうチームの説明は良いでしょう? バーカードさん」

と、バーカードが長い首を降りシユウの質問に答えていると、それまでソファアに寝そべっていた焰が突然起き上がり、話に割り込んで来た

ハジメは、さっきいきなり襲って来たり、不機嫌な態度ばかり取っ

ているこの男の事をあまり好きでは無かった。

『焰、今はまだ説明の途中だ』

「もう良いでしょうが！俺はね、これだって随分と我慢した方なんだ。

だってそうだろう？突然連絡が取れなくなったと思ったら、ククルの姿で帰って来て、素性も分からないこんな奴らにノイズの話をしたんだ。

大まかな部分は話したんだから、今度は俺達に説明してくれ！

コイツらはなんなんだ？クロス・パウロで一体何があったんだ！？」

焰が凄い剣幕でまくし立てるが、バーカードは至って冷静に話を聞いている。

横で見ていたハジメは怖くてしやうがなかったのだが、どうやらチームのメンバーにとっては焰が怒るのはもう慣れっこらしい。

言いたい事を言っただけで息をしている焰だったが、バーカードが鋭い視線を送っている事に気付くと、彼は気圧された様に後ろに一步後退した。

『今からそれを説明しようとした所だよ。ラビィ室内の電気を・・・』

バーカードの指示にラビィがまたキーボードをパチパチ叩くと、ホーム内の明かりが消え室内が薄暗くなった。

すると白き竜はハジメの肩に乗り直し天井を見上げると、両目が突然光り出しなんらかの映像を映し出したのだ。

「これは・・・ホログラムか？」

『ククルには見た映像を記憶させる機能が付いているのだ。報告などをするのに楽な様にね。』

こんな姿では煙草も吸えんが中々使い勝手の良い体だよ』
ホログラムの映像はクロス・パウロの荒野から教会の闘いまでの一

部始終を映していた。

ここではすでに何があったかはハジメ達も知っているので内容は省くが、クロウの圧倒的な強さに焰だけでなく、一心不乱にキーボードを叩いていたラビィまで映像に釘付けになっていたのが印象的だった。

「くそっ！！俺がついていれば！」

苦虫を噛み潰した様な表情で焰が拳を壁に叩き付けた。

ハジメ達がいたせいでバーカードがやられた事より、自分がその場にいなかった事を悔やんでいるらしい。

『今考えると、少年達は私をおびき寄せるために利用されたのかもしれない。あれは恐らく罠だったのだ』

「罠？」

シュウが聞き返すとバーカードは一度頷いてから

『あの時、ノイズの動きは明らかにおかしかった

同じ地点に連続して現れた事など今まで一度もなかったからな。

恐らくクロウは、ノイズを追う邪魔な私達を始末するためにエビル・ゾンビを囹に使い、クロス・パウロで一網打尽にしようとしたのだろう。

・・だが、おびき寄せられたのは私だけ。私もまたこうしてククルの姿でエデンに残る事が出来たのだから、正に九死に一生を得たと言った所か』

と語った。

しかし、もしバーカードの到着が後少し遅かったらハジメ達は囹のモンスターに確実に餌食になっていた筈である。

そしてゲームオーバーになったら一体どうなっていたか分からないのだ。

そう考えるとハジメは改めてバーカード達が、自分とは次元の違う事件を追っているのだと認識出来た。

「で、これからどうするんスカ？バーカードさんでも勝てなかった相手なんでしょ？」

ソファでうなだれていた焰が聞いて来る。さすがに先程の映像を見れば彼でもクロウがどれだけ強いのが分かったのだろう。

『確かにクロウの強さはゲームの標準を遥かに超えている。恐らくどれだけレベルを上げてもこの世界ではクロウには勝てないだろうだが、まだ私達には希望の光がある。――それは少年、君だ』

と、突然バーカードに名指しされてその場にいた全員の視線がハジメに集中する。

だが1番驚いていたのは呼ばれたハジメ本人だった。

「えっ！ボ、ボクが？」

『そうだ。』

実はクロス・パウロに行く前、万が一に備えて私はククルにキャラのバックアップデータを入れておいたのだ。

もし私が敗れ、ウィルスに感染したとしてもバックアップデータで復活出来る様にな。

だが、アクシデントによりクロウの攻撃に少年まで巻き込む事になってしまった。

そこで急遽、私はバックアップデータを少年の物に書き換え少年を救う事にしたのだ。

私がこの姿になったのは、恐らく少年が感染された部分がまだ手だ

けで余ったデータがククルとして私を再構築したのだろう』

バーカードが説明した後ハジメは思わずゴクリと唾を飲み込んだ。バックアップとか難しいパソコン用語は良く分からなかったが、危うく自分も行方不明になる所だったと言うのは理解出来たからだ。

『だか、やはり応急処置では完全なコピーは望めなかった様だな。君を呼び出した時、その左手を見て分かったのだが、少年のキャラは未だウィルスに冒されてしまっている。

手首のバックルに宿った私のデータが完全に侵攻を遮断しているに過ぎない』

「なんだって!？」

バーカードの恐ろしい言葉にシュウが叫んだ。ハジメもまた驚きに声も出ず、真っ黒になってしまった自分の左手を見る。

自分の部屋で眼が覚めた時のあの激痛はやはり『エデン』と関係あったのだ。

「じゃ、じゃあこのままじゃハジメのキャラクターもいずれウィルスに・・・!？」

『いや、その心配は無い今も行ったが少年のウィルスは私のデータが完全に押さえ込んでいる。そのバックルが破壊されでもない限りひとまず安全な筈だ。

・・・そして少年のウィルス。それこそ私達にとって希望の光なのだ』

焦るシュウを落ち着かせてからバーカードが鋭い目付きで真っ直ぐハジメを見る。

その視線を受けてハジメは、何か自分にとって重大な事を言われる気がした。

「バーカードさん？あんた・・・まさか！」

『お前の考えている通りだよ、焰。』

少年には私達の仲間になってもらう。そしてそのウイルスに冒された左手を解析させて欲しい』

その瞬間、周りにいた全ての人間がハジメの方を向いた。

シュウはア然としラビィは眼を丸くし焰は怒りの表情を浮かべている。

ただ一人、当の本人であるハジメだけが何を言われたのか良く理解出来ずキョトンとしていた。

「え？ええええ~~~~っ！！！」

「あいゝバーカードさん本気ですかあ？？」

「な、何考えてんだ！！あんたはこのガキのせいでそんな姿になったんだぞ！？」

ようやく気付いたハジメの驚愕の叫びを皮切りに、三種三様の感情が交差する。

だがバーカードは平静な態度を変えない。どうやら彼は、自分が決めた事を説得して押し進めるタイプの様だ。

『お前達が反対するのも判るが、これが最善の策なのだ。』

少年に感染したウィルスを調べればクロウに抵抗出来る手段が見つかるかもしれない。

それに、これ以上犠牲になったユーザーを助ける事だって出来る筈だ』

「それはハジメのキャラをモルモットにするって事ですか？」

メンバーの二人を説得していたバーカードに今度は厳しい表情のシュウが聞く。

元々ハジメを『エデン』から遠ざけるためにここへ来たシュウがチームの勧誘を心良く思う訳無いだろう。

『そうではない。チームの一員として共にノイズと闘ってほしいと言っているのだ』

「そこが腑に落ちないですよ。」

貴方はハジメのウィルスが希望の光だと言ったが、バックアップデータで押さえ込む事が出来るのなら何故、もう一度作ってクロウに挑まないんです？

貴方の腕ならそれぐらい簡単な筈だ」

シュウの言葉にバーカードが初めて表情を曇らせる。

彼はバーカードの言動から一つの真実に到達した様だ。

そしてバーカードの様子からしてそれは当たっているのだろう。

暫くシュウの顔を睨んでいたバーカードだったがこれ以上隠し切れないと判断したのか、またニヒルな笑いを浮かべた。

『さすがシステムと言った所か。確かに今の私にバックアップデータを作る事は出来ない。

先のクロス・パウロの闘いでウィルスに感染したせいか、先程から何度ログアウトしようとしてもゲームを辞める事が出来ないのだ。

恐らくウィルスにキャラが破壊された事でリアルの私の体は――消失したのだ』

「なんですって・・・！？」

シュウの驚きの声とほぼ同時にラビィがコンピューターを操作し、画面に新たな映像が現れる。

それはまだ《黒の勇者》だった頃のバーカードの情報だった。

「確かにバーカードさんのログイン時間は、丸一日繋いでる事にな

ってます。

普段の接続時間を考えると、これはちょっと異常ですね？」

「つまり貴方は自分が闘え無くなった代わりにハジメを闘わせ様と
しているんでしょ？」

そー言う事なら、この話は聞かなかった事にします。

貴方の使命や状況には同情するが、ハジメをこれ以上危険な目に合
わせたくないんだ！」

バーカードの真意を知ったシュウはハジメの手を引き、さっさとホ
ームの入口へ向かう。

急に動かれて驚いたバーカードは慌ててハジメの肩から飛び立ち、
またラビィの頭へと移る。

その間にもシュウに連れられたハジメはドンドンホームの入口へと
近づいて行った。

『待ってくれ。君が少年を守りたいと思う気持ちは十分分かる。だ
が決断するのは君では無く、少年なのだ。』

せめて少年の気持ちを聞いてからでも立ち去るのは遅くないんじゃないのか？』

バーカードの言葉を聞いてハジメの足が止まった

ノイズの事を聞いた時は本当に怖かったが、このままシュウと出て
いけば恐らく二度と『エデン』はプレイ出来なくなってしまう。

しかしバーカードの仲間になれば待っているのはあのクロウとの恐
ろしい闘いだ。あんな怖い思いは二度としたくない。

それに大丈夫だと言われても、いつ左手の侵食が始まるか分からな
い。

従兄弟に付いて行ってもここに残っても後悔しそうだ。
極端過ぎる二つの選択にハジメは悩んでいた。

「ハジメ、来るんだ」

歩みを停めた甥っ子をシュウが優しく促す。だがハジメは動かない。まだ答えが決まっていけないのに、ここを出て行っってはいけない気がしたからだ。

『聞かせてくれ、少年。君の答えを――』

「バーカードさん。それにシュウ兄ちゃん！ボクは・・・ボクは！」

ウィーン！！ウィーン！！ウィーン！！

突然だった。

ハジメの声を遮って部屋に赤ランプの点滅と警報が鳴り響いたのである。

ホーム内には一瞬で緊張感が走り、ラビィがまた世話しなくコンピュータのキーボードを叩いている。

何が起こったか分からなかったハジメは不安な顔をしてシュウにしがみついた。

「な、何・・・？」

『ラビィ、何が起こっている？』

「あいゝ！！これは大変ですう！コンピュータが画像の乱れを感じしました。出現ポイントは・・・クロスピアの中みたいです！」

ラビィの報告は全員の視線をコンピュータに集中させるに十分だった。大勢のユーザーがいる街の中にノイズが現れたと言うのだから当然である

こんな事態はさすがに初めてなのか、バーカードの表情にも驚きが走っていた。

「街の中だぁ！！おい、冗談だろ！？」

『ラビィ、正確な出現ポイントは分かるか？』

「あい。・・えゝ出現ポイントは3－Bの25。場所で言うところ？
・・この港みたいですねゝ？」

焰の叫びと共に聞かされたラビィの報告に、バーカードは再度ため息をつく。

しかしすぐに小さな顔を上げると、意志の宿った強い瞳でハジメ達
のいる方向に振り返った。

『ラビィ以外を除く全員はすぐに外へ出ろ！フリーズが始まったら
ここに閉じ込められてしまうぞ！』

（トロイ）からの退避命令が出された時、真っ先に反応したのはシ
ユウだった。

不安げなハジメを小脇に抱えると一目散にホームの入口へと走り出
す。

続いて焰、最後にバーカードが飛んで入口から飛び出し、ホームは
あっという間にラビィだけになってしまった。

『ラビィ、後はまかせたぞ』

「あいあゝい！おまかせ下さゝい」

扉が閉まる合間、ラビィがこちらを振り向かず袖から出ていない手
を振る

キーボードを叩く音だけを響かせながら、（トロイ）の扉がゆっく
り閉ざされた――。

ハジメ達が外へ出た時、既に街のフリーズが始まっていた。

さっきまで聞こえていた波の音も、リアルに造られた海の様子も今
は無い

音も無く、風景も止まってしまったクロスピアは何処か殺風景な気

がした

「ラビィさん、大丈夫かな・・・？」

「あいつは年がら年中あそこにいるから大丈夫だ
それよりテメーの心配した方が良いみたいだぜ！？」

（トロイ）の入口であるボロ船を見ながら上の空のハジメに、獣の
うめき声を上げながら焰が忠告する。

見ると港の空に、二度と見たくなかった黒い球体が現れたのだ。
黒い球体はあつという間に形を黒く大きな翼へと変え、メンバーの
前にその正体を現した。

——バチバチバチっ！！

『クロウ・・・』

バーカードが自分の姿を変えたモンスターを睨み付ける。

一方、無言のまま翼を広げたクロウは左手に持っていた黄金髑髏を
そつと前に差し出した。

すると、黄金髑髏からドロドロとした真っ黒い涙が流れ、地上にほ
んの一滴だけ落ちて行った。

『————っ』

降下した黒い涙は地面に広がると、エビル・ゾンビの時と同じ様に
巨大な赤いゲートを作り出す。赤いゲートにはクロウの胸と同じ文
字で『※※』と書いてあった。

「※※・・・炎業？」
エンゴウ

ゲートに浮き出た文字を口にしたハジメをシュウとバーカードが驚

いて見るが、ハジメは気付かない。

その間に赤いゲート内では新たなモンスターが形成され、その姿をハジメ達の前に現した。

「こいつは・・・デケエ!!」

圧倒された様子で焰が叫ぶ。

赤いゲートから出て来たのはなんとも不気味なモンスターだった。全身を血で染めた様な真っ赤な体毛で覆い、クロウと同じく白骨化した丸みを帯びた頭には眼も鼻も無く、ただ巨大な口と牙だけが生えている。

四つん這いの四肢も指や爪だけが白骨化して飛び出しており、同じく先端が鋭い骨のハサミになっている尻尾を三つも生やししながら、ゆらゆらと揺らしている。

それは一言で言うなら地獄の番犬。

クロウの邪魔をする者を噛み殺す巨大な魔獣——それがエンゴウの姿だった。

『やはり私の考えは正しかった様だ』

視線を戻したバーカードが厳しい表情でつぶやく

ハジメを除く全員が身構える内に、巨大な魔獣はゆっくりと赤いゲートから出て来た。

『やはりノイズは私達を邪魔者だと考えている。奴はここで私達を全員始末するつもりなのだ。』

《ラアアオオー——っ!!》

目覚めたエンゴウが恐ろしい雄叫びを発する。

始まりの街・クロスピアで、ノイズとの命懸けのバトルが始まろう

とじていた・・・。

（続く）

FILE..11『炎業（エンゴウ）』

《ラアアオオー——っ!!》

「な、なんだ!?!」

エンゴウが巨大な雄叫びを上げた瞬間、クロウの黄金髑髏がキラリと光りそれまで静寂に包まれていた辺りから突然、赤い炎が噴き上がった。

そして赤い炎の中から、同じく赤いバリアの様な電磁波が出て来たのである。

赤い炎は静止した海や船も取り込み、一定の距離で円を書くようにハジメ達を囲むと電磁波で巨大なドームを作ってしまった。

「これは・・・出れないぞ!」

シュウが近くの赤いバリアを叩いて見るが、バリアはビクともしない。

ハジメ達はエンゴウと共に赤いドームに閉じ込められてしまったのだ。

（・・・ムラ・・・ん。・・・ホムラさん・・・聞こえて・・・ますか?）

「ラビィ? ラビィか!?! おい、何がどうなってんだ!?!」

物凄い雑音の中、腕に付けていた焰の通信機からラビィの声がときれとぎれ聞こえて来た。

どうやらフリーズしてもホーム内の巨大コンピュータは稼動している様だ

（今調べた所、ホームを含む半径1kmの辺りだけに強いノイズ反応を確認しました）。恐らくクロウは、皆さんを逃がさない様にノイズの範囲を狭めてるみたいです）

「つまり、アイツらをぶっ飛ばさない限りここから出れねーって事か？」

ラビィの報告に焰が舌打ちする。その間にもエンゴウはホームがあるボロ船にジリジリと近づいて来た。

『嘆いている暇は無いぞ焰。モンスターを少年と（トロイ）から引き離す』

「分かってますよ！・・・へっ！俺達を始末するだど？寝言は寝て言えこの犬っコロが！！」

エンゴウに向かって飛び立つバーカードを尻目に、吠えた焰の背後から突然光りが現れ、中から謎の物体が出て来た。

凶悪な笑みを浮かべて焰が手にした物――それはなんと変わった形のエレキギターだった。

「ぎ、ギターがなんで『エデン』の世界に・・・？」

訳の分からないハジメが首を傾げた。

確かに古の古代文明が設定の『エデン』にそのギターはあまりにも不自然である。

見た目は、黒煙と赤の炎をイメージしたカラーの派手な感じのギターなのだが、鉦の様な本体の形がえらく直角に作られていて、周りが刃物の様に鋭く研がれているのである。

まるで武器と楽器を融合させた様なエレキギターだった。

「あれはモンスターの？そうか、彼のタイプは（魔物使い）か！」

「覚悟しな！テメーには俺のアックス・ギターで弔いの歌を歌ってやるぜ！！」

自らの相棒を手に、焰が飛んでいるバーカードを追い抜いてエンゴウへと突っ込んだ。

しかしそれに気付いたエンゴウがさらに早く、巨大な爪を焰に振り下ろした。

「あぶないっ！！」

焰が潰されると思い、思わずハジメが叫んだ瞬間少年は自分の眼を疑った。振り下ろされたエンゴウの爪を焰は上空にジャンプし、ギリギリかわしたのだがその背中に、黒い羽根を生やしていたのである。

羽根だけでは無い。

彼の両手・両足もまた黒い鱗の生えた別の生き物の物に変わっていたのである。

黒く変貌した両手足にはエンゴウに負けず長く鋭い爪が生えており、鱗と同じ様に黒光りしていた

「飛んでる！なんで！？」

「そりゃあ、彼はモンスターの能力が使える（魔物使い）だからな？」

驚きで眼を丸くしているハジメを横目に、何か知っているのかシユウはしれっとした顔。

頭に？ばかりが浮かぶハジメだったが、上空に留まった焰が尚も続くエンゴウの追撃を縦横無尽にかわしている内に、シユウが（魔物使い）について教えてくれた。

それに寄ると（魔物使い）はその名の通り、モンスターの能力や武

器を使う事が出来るキャラで、レベルが上がればモンスターを召喚したりも出来るらしい。

ただ、使える武器がモンスターの物が多いので街などで装備出来る物が少なく、レベルが上がるまでかなり扱いの難しいキャラでもあると言う。

恐らく、焰が持っているエレキギターも何処かの洞窟か神殿で手に入れたレア・アイテムではないか？と言うのがシュウの推測だった。

《ラアアア——っ！！》

「へっ！鈍臭えテメーの攻撃なんか当たるかよ！」

繰り返されるエンゴウの連続攻撃をヒラリヒラリとかわし、焰が一気に懷まで飛び込んで行く。

そして骨と口だけの巨大な顔に持っていたアックスギターを、渾身の力で振り下ろした。

「オラア！！」

——ガキーン——！！

素早い動きに惑わされていたエンゴウが焰の攻撃を防ぐ術は無かった。

だから彼の一撃は確実にエンゴウの顔に炸裂する筈だった。

——だが、焰のアックスギターの刃はエンゴウに当たる事は無かった。いや、当たる前に防がれたのだ。番犬を守る巨大な何かに！

焰の一撃はエンゴウの前にある『見えない壁』に受け止められてしまったのだ！！

「なっ！こいつも——」

『クロウと同じ能力があると言うのか！？』

驚いた焰とバーカードがほぼ同時に叫ぶ。

ギターの一撃を受け止められた事で焰の動きが一瞬、完全に止まった。

その隙についてエンゴウが巨体を一回転させる。焰がモンスターの動きに気付いた時、眼の前に巨大な尻尾が飛んで来た。

「がはぁ!!」

防御する事も出来ず、紙切れの様に吹っ飛んだ焰は、そのままハジメ達の後ろにある大型船のマストに叩きつけられた。

「焰さん!!」

「駄目だハジメ!お前はそこから一步も動くな!」

船に落ちた焰にハジメが駆け寄ろうとした時、今までに無かった厳しい口調でシュウがそれを制する。

少年が反発しようとして兄弟の顔を見た時、彼はハジメに向かって黄金の杖を構え、精神を集中させていた。

「ドウマ・シルド!!」

「兄ちゃん——うわっ!」

シュウが呪文を発すると、ハジメの回りに青いピラミッド形のバリアーが出現した。

驚いた少年が出ようとしても頑丈なピラミッドのバリアーはビクともしない。

モンスター達が作った赤いドームの中で、今度はシュウの魔法に少年は閉じ込められてしまったのだ。

「ドウマ・シルド。防御系魔法の中では最高の魔法だ。・・・ただ、守る力が強すぎて中の人間も出れないって言う難点付きの魔法だけだな」

「兄ちゃん！なんで！？」

「悪いな、ハジメ。だが兄ちゃんはお前をこれ以上危ない目に合わせたくないんだよ」

閉じ込められたハジメにシュウが表情を和らげてつぶやく。

その優しい表情はいつもの彼と変わらない物だ。

しかし、二人が話してる間も少し離れた所では、バーカードが必死になってエンゴウを足止めしている。

二人のいる空間と、バーカード達が闘っている空間・・・。

そこは場所は同じ筈なのに別世界の様な正反対の空気が流れていた。

「ごめんな？ハジメ。兄ちゃんがこんなゲームに誘ったばかりに・・・だが、勘違いしないでくれ。

本当の『エデン』の世界は夢に満ちた素晴らしい冒険の世界なんだ！その世界を守るためにシステムが使うキャラ、『監視者』は存在してる！

お前みたいに冒険を夢見たユーザー達の笑顔を失わないためにな？」

「シュウ兄ちゃん・・・」

エンゴウとバーカードがいる所を見ながら、シュウが坦々と語る。ハジメには従兄弟が何故そんな事を話して始めたのか分からなかった。

「だから『エデン』の世界を乱す悪質なハッカーやバクを俺達『監視者』は絶対に許す訳にはいかない。

約束するよ、ハジメ。

ノイズの問題を解決したらまた一緒に『エデン』の世界を冒険しよう

う。

そしてこの世界の本当の楽しさを、お前に教えてやる！」

「兄ちゃん・・・！う、うん！！」

少年の方に振り返らず、シユウが親指をビッ！と立てる。それに応えてハジメも頷きながらビッ！と親指を立てた。

《ラアアア————っ！！》

ボワアア————ッ！！

一方、バーカードの方は覚えてたの火炎放射でエンゴウを攻め立てるが、『見えない壁』の前ではなんのダメージも与えられない。ただ素早い動きで攪乱しながら、やられた焰が復活するまで時間を稼ぐ作戦に切り替えていた。

（くっ、出来る事が時間稼ぎだけとは・・・！）

自分の情けなさに腹を立てながら、しかし心は冷静にバーカードはエンゴウの攻撃を避け続けていく。

小さいククルの体では掠っただけでも戦闘不能になりかねないからだ。

《グルルルル・・・！！》

だが、突然エンゴウが攻撃の手を止め、体制を変えた。

体を後ろに屈め、獣が獲物を狙う時の体制になる。モンスターが何をする気か判断出来ず、バーカードは飛びながら首を傾げた。

（奴め、何を？——まさか！？）

《ルラア————ッ！！》

何かに気付いたバーカードが慌てて後ろに後退した途端、屈んでいたエンゴウが体を前のめりにして口から何かを吐き出した。それは巨大な火の玉。

バーカードなど軽く灰にしそうな火炎弾である。

そしてエンゴウの口の奥には、バーカードを睨みつけるこれまた巨大な眼球があったのだ。

『くっ!!』

迫り来る火炎弾をバーカードがギリギリの所でかわした。もう少し判断が遅ければ 間違い無く、黒焦げである。

だがエンゴウは、容赦無く火炎弾を吐き出して来た。

——ドン! ドン! ドン!!

(数が・多過ぎる!!)

連続で放たれた火炎弾は三つ。どうやらそれ以上は続けて吐き出せ無いらしい。

だが、あの三つの火炎弾を全て回避し、懷に飛び込めば距離が近すぎてエンゴウもあの技は使えない筈だ。

一か八かの危険な賭けだが、バーカードは遭えて飛んでくる火の玉群に突っ込んで行った。

——ギュー——

『おおお——っ!!』

一発目、これは最初から見えていたのでなんなく避けれた。

続いて二発目。一発目との距離が短い火炎弾を急旋回でなんとか避ける。

しかし息を付く暇も無く迫る三発目。

二発目を回避した時点で避けれるスペースが無い程、火炎弾は接近していたが、止まる事無くバーカードもその場で急降下に切り替える。

しかしいくら落ちても、燃え盛る火炎弾の炎と熱さしか感じず、羽根が焦げ付き始める。

もはやこれまでかと思った瞬間、エンゴウや街の景色が見え、炎に体を掠める様にバーカードは三発目の火炎弾を振り切った。

（よし！これで！！）

全ての火炎弾を回避した事に心の中に安堵が広がる。

後はエンゴウに接近するのみだ。

そう思い、さらにスピードを上げ急降下をしようとした時、バーカードの眼前に今までで最大級の火炎弾が飛んで来たのだ

『なに！！？』

四発目の火炎弾の突然の飛来に、さすがのバーカードも対応しきれなかった。

エンゴウはバーカードが火炎弾の連続攻撃に立ち向かっていた時に、予め四発目の火炎弾を撃ち込んでいたのである。

飛んで来る火炎弾は、先程の奴の倍はありそうな物で、とても回避する時間は無い。

火炎には火炎とこちらも炎を吐き出すが、隕石にライターで挑む様な物でまったく意味を成さない

迫り来る火炎弾の炎が、ククルの小さい体を燃やそうとした時だった――

「ミラージュ！！」

突然バーカードの前に透明な鏡が現れた！

鏡は立ち鏡程の大きさで、遥かに大きな火炎弾を吸い込むと、なんとエンゴウの方に撃ち返したのである。

バーカードは、鏡が吸い込んだ火炎弾を反射させて跳ね返したのだと瞬時に見抜いた。

ドカーーーン！！！！

《ラアアアーーーーーッ！！》

跳ね返された火炎弾はエンゴウを守る『見えない壁』に当たって爆発したが、衝突の際に起こった爆煙まで防げ無い。

猛然と立ち上る煙りのおかげで暫くの間時間を稼ぐぐらいは出来そうだ。

『ミラージュ・・・反射防御魔法か』

「ふう、間一髪って所でしたね」

『エデン』の世界の住人ならミラージュと言う魔法は誰でも知っているが、あれ程強力な物はバーカードでも見た事が無い
声のした方向に振り向くとバーカードがいる場所の遥か先、港に停めてある帆船の一つに傷ついた焰に肩を貸しながら、黄金の杓杖をこちらに向けているシュウの姿があった。

『《悠久の監視者》・・・君の魔法だったか』

「すいません、彼を助けていたのでサポートが遅れました」

すぐにバーカードが飛び寄ると、シュウは声を発さぬまま呪文を唱える。

すると、バーカードの回りを青白い光が包み込み所々焦げていたクルの体が、あっと言う間に元に戻ってしてしまった。

「へっ！誰も助けてくれなんて言ってねえ！それに良いのか？俺達が戦おうとしてんのは無敵のモンスターなんだぜ？」

助けてもらった事への照れ隠しか？焰が悪態を突くが、シュウは気にせずまた呪文を唱える。

焰の体が回復したのを確認するとシュウは彼を立たせ、爆煙に包まれているエンゴウに眼をやった

。「仕方無いですよ。ユーザーを守るのがシステムの仕事ですし・・・。

それに、たまにはハジメにカッコイイ所も見せないかね？」

『フツ・・・そうだな。』

相手が無敵であろうと、私達は絶対にここで奴を倒さなければいけないのだから』

ワザと軽口を叩くシュウにバーカードがニヒルな笑みを浮かべる。余裕を見せる二人に焰が何か言おうとした時、爆煙の中から無傷のエンゴウが這い出て来た。

《ラアアア————！！》

『いくぞ二人共。奴の能力が分かった今、ここからが本番だ！』

シュウ、バーカード、焰がそれぞれ構える。

——だが、この戦いの先に悲しい別れが待っている事を、まだ誰も知らなかった・・・。

（続く）

FILE..12『喪失（ロスト）』

『いくぞ!!』

バーカードの掛け声と共に焰とバーカードが同時に動き出した。

空と陸、それぞれの得意とする場所でエンゴウへと立ち向かって行く。

そして二人の背後で一人シュウだけが眼を閉じ、小声で呪文を唱え始めた

《ラアア——ッ!!》

それを迎え撃つ様にエンゴウがまた口から火炎弾を吐き出す。

二つの火球は一直線に焰とバーカードに飛んで行った。

「だからその技は無駄だって!——ミラージュ!!」

と、それまで呪文を唱えていたシュウが持っていた黄金の杓杖を前に突き出した。

すると先程バーカードを守った鏡がそれぞれ二人の前に現れ、飛んで来た火炎弾を吸い込む。

そしてまたエンゴウの方に跳ね返ってしまった。

——ドカーン!ドカーン!!

《ラアアッ!!》

跳ね返された火炎弾はエンゴウの前で爆発し、また街は爆煙に包まれた。その間に焰とバーカードが一気に間合いを詰めるそして、シュウもまた呪文を唱え始めた。

「オラア!!」

一気にエンゴウの前まで近づいた焰は、渾身の力を込めて持っていたアックスギターを振り下ろした。

だが、やはりエンゴウを守る『見えない壁』には傷一つ付ける事が出来ない。それでも尚諦めず、二撃、三撃と焰は連続攻撃を繰り返して行った。

「オラオラオラッ!! クッソ! 駄目だ、ビクともしねえ!」

『深入りするな焰! 来るぞ!!』

アックスギターでは歯が立たない事に舌打ちする焰にバーカードが忠告した途端、爆煙の中からエンゴウの巨体が襲い掛かって来た。最初面食らった焰だったが間一髪ので上空に飛び立ち、攻撃をかわす。

「野郎・・・! 斬撃が利かないなら――」

余裕の態度で見上げる凶犬に頭に来た焰が口を開け、突如深呼吸を始める

すると彼の胸が真っ赤に光り出し、口の中に燃え盛る炎が現れた。

「食らいやがれっ! 焰炎弾(グエン弾)!!」

焰が放った火炎はその名の通り弾丸の様な素早さでエンゴウに向かって行った。

これが直撃すれば、確かに相手は無事には済むまい。

だが、やはりエンゴウに当たる直前、『見えない壁』に寄ってまた掻き消されてしまった。

「くそっ！やっぱり——」

「そこにいたら危ないですよ？焰さん」

とっておきを破られ、ショックを隠せない焰だったが突然呼び止められ、思わず振り返る。

その視線の先に呪文を唱え終わり、杓杖をこちらに向けている金色の魔導士の姿。

向けられた杖には真っ黒い闇のオーラが蛇の様に絡み付いていた。

「無限の空間へと落ちろ——ヘルズ・ホール！！」

シュウが呪文を口にした途端、エンゴウの足元に紫の魔法陣が現れた。

そして魔法陣が怪しく光り出した瞬間——。

——ドン！！

「うおっ！」

魔法陣から巨大な闇の波動が発動し、エンゴウを『見えない壁』ごと取り込んでしまったのだ。

その圧倒的な光景に危うく巻き込まれそうになっていた焰も、ただ口を開けて呆然としている。

『空間吸収魔法ヘルズ・ホール……！しかし、これだけの規模の魔法陣を作り上げるとは……』

バーカードも流石に驚きを隠せない。通常、何体かのモンスターを高確率で吸収し、倒すのがこの魔法だが、エンゴウを吸い込む程の魔法陣を作り上げるのは至難の技である。

それを簡単に作り上げる所がシュウが超一流である証だろう。

ノイズが作った赤いドームの中に現れたその魔法陣は、まさに

「地獄へ繋がる穴」そのものだったのだ。

「武器が通用しないのならその鎧ごと落としてしまえば良い。これならさすがに――」

《ラアアアーーーーッ！！》

杖を構えたまま雄弁と語るシュウに今、最も聞きたくない雄叫びが聞こえて来た。

そう、彼は忘れてたいたのだ。自分が初めてノイズと遭遇した時の事を……。

エビル・ゾンビに襲われた時何があったのかを！

《ラアアアーーーーッ！！》

骨が剥き出しになった巨大な足が発動中の（ヘルズ・ホール）をバリバリと突き破る。

やがて、エンゴウの巨体が闇のオーラから全て現れるとパリーン！という音と共に紫の魔法陣は元に戻り、粉々に砕けてしまった。

《ルララアーーーーッ！》

「……そうは問屋が下ろさない、か。まったく戦うのが嫌になって来るね」

上級魔法の中でもかなりレベルの高い部類に入る（ヘルズ・ホール）を破られて、軽口を叩きながらシュウが肩をすくめる

その近くで防御魔法のピラミッドに閉じ込められているハジメの姿があった。

（みんな、ボクなんかのために戦ってくれてる。それなのにボクは・
・！）

出る事の出来ないピラミッドの中でハジメは唇を噛んでいた。

自分だけが何も出来ず、ただこうして見ているだけ。

しかも、なんとかしようとして勝手な行動をすれば待っていた結末は、いつも代わりに誰かが傷ついている。

レベル1の小剣銃士では誰も助ける事など出来ないのだ。

（もっと強くなりたい！せめて、シュウ兄ちゃん達を助けられるくらいに・・・）

――ドクン！

と、自分の弱さを嘆いた瞬間、心臓の高鳴りと共に変色した左手が脈動した。

驚いたハジメが左手を見るが、黒く染まった手にはなんの変化も見られない。

不思議に思ったハジメが首を傾げていると、爆発音と共にエンゴウの雄叫びが街の方から聞こえて来た。

ドカーン！！！！

「くそ！このままじゃいつかやられちまうぜ！」

肩で息をしながら焰が港の入口まで後退する。

今もエンゴウの火炎弾をシュウがミラージュで跳ね返してくれたのだが、いつまでもミラージュを出し続ける訳にもいかない。

対してエンゴウはどんな攻撃でも、NOダメージなのだから始末が悪い。狂犬は焰達が疲れるのを待っているのだ。

『よし、三人の技を一点に集中させる。焰、ドラゴンフレイム龍焰炎だ！』

「了解!!」

バーカードの言葉に焰とシュウが同時に答える。

そして、バーカードがエンゴウに向かって火炎放射を出すと焰が大きく深呼吸を始め、シュウもまた持っていた杖で何かを空に描き出す。

その形は三角と逆三角を合わせた魔法陣。

全てを描き終わると、魔法陣はシュウの前に現れた。

「食らいやがれ! 極大焰炎弾!!」

——ドォン!!

バーカードに続いて吐き出した焰の焰炎弾は、火炎放射と合体し、巨大なる炎の龍となる。

そしてエンゴウの前に立ち塞がる『見えない壁』に食らいついた。

「大地に眠る古代の神々達よ! 星の裁きにより邪悪な魂を打ち払え! ——シューティング・スター!!」

さらに完成させた魔法陣を杖に宿したシュウが呪文を口にし、杖をエンゴウに向けた。

するとバーカード達の頭上の空が突然ひび割れ、中から小さな宙空間が現れる。

そしてその中から光り輝く巨大な星がエンゴウへと降り注ぎ、流星は龍焰炎が食らいついている『見えない壁』に激突したのだ!

《ラァッ!?!》

——ドッゴオオォ——ン!!

「うわっ!!」

激突した龍焰炎とシューティング・スターは一瞬、まばゆい光りを発すると高いキノコ雲を作り出し大爆発を起こした。

爆発で生じた爆風で飛んでいたバーカードも吹っ飛ばされ、後ろにいた焰が慌ててキャッチする。

グラフィックであるクロスピアの街は恐らく無事だろうが、『エデン』の中でも5本の指に入る実力者達の合体攻撃――。

その威力は恐らくバーカードの『滅器』に勝る物だろう。

あまりの眩しさと爆風に眼を閉じていたハジメがゆっくりと瞼を開くと、街の真ん中にももの凄い土煙が巻き起こっていた。

「へ、へへ・・・どうだ！化け物！！」

「はぁ・・・はぁ・・・はぁ」

『――――』

爆煙と土煙が舞起こっている合体攻撃が炸裂した場所を、焰とシューとバーカードそれぞれの面持ちで凝視する。

焰はもう勝利を確信しているらしく不敵な笑みを、シューは大技の連発でさすがに疲れたのか肩で息をしながら凝視し、焰に受け止められたバーカードは何も語らず、羽根を広げたままの姿で睨みつけている。

三人共、表情は違うが疲労している事だけは共通していた。

『・・・クソッ』

「はぁ？バーカードさん何言って――」

不気味な静寂を破る様にそれまで焰に抱えられたままのバーカードが、ポツリとつぶやく。

その言葉が理解出来ず、焰が怪訝な顔をした瞬間その表情は凍りついていた。

《グルルル・・・》

爆煙の中に巨大な陰が一つ浮かび上がっていた。
その陰はゆっくりと歩を進め、煙の中から出てくる。
出て来たのはもちろん、血の様に赤い体毛を纏う狂犬。
先程とまったく変わらぬ様子に気圧されたか、さすがの焰も後退りした。

「おい、嘘だろ!？」

「はは・・・まいったね」

焰同様、シュウもまた力無く苦笑いする事しか出来ない。
巨大な口をゆっくり開け 三人が疲労した事を確認するとエンゴウの眼がニタリと笑った気がする。
そして全身の毛を逆立て、体中から煙を立ち上ったかと思うとエンゴウの体が炎に包まれた。

《ルラアアアア————ッ!!》

燃え盛る炎と化したエンゴウは、コマの様にそのまま全身を回転させる。とア然としている焰に突進して来た。

ギヤリギヤリギヤリ——ッ!!

「バーカードさんあぶねえ!!」

突っ込んで来るエンゴウからバーカードを守るために焰が背中を向ける。

炎の竜巻と化した狂犬は白き竜を抱えたままの焰を、容赦無く弾き飛ばした。

「があっ!!」

「焰さん! バーカードさん!!」

炎に包まれたまま、エンゴウの後方に飛ばされた焰は街の建物のグラフィックに叩き付けられる。その間にも回転し続け、距離を詰めたエンゴウはなんとハジメの近くまで迫って来ている。

だが、そんな狂犬の前に船の船首から飛び出したシュウが立ち塞がった。

「悪いが俺も負けられないんでね? リフレクト!!」

疲労困憊の魔導士が金色の杖を地面に突き刺すと迫るエンゴウの前に七色に輝く巨大な鏡の翼が現れた。

その翼はエンゴウを取り囲み、逃がさない様に閉じ込めてしまったのである。

これが、閉じ込めた者自身に自分の攻撃が戻って来る魔法リフレクトー

ミラージュの上を行く反射系上級魔法だ。

ーギヤリギヤリギヤリッ!!

《ラアアーーーーッ!!》

「おおおおーーーーっ!!」

鏡の翼の中でエンゴウが暴れ回り、シュウもまた破られない様残った魔力を全てリフレクトへ注ぎ込む。

本来なら鏡に閉じ込めたモンスターを反射した自分の技で倒すのがリフレクトの力だ。

だがどんな攻撃も受け付けない『見えない壁』に護られているエンゴウは自らの攻撃をさらに鏡に跳ね返し、ドンドン威力を上げる事が出来るのだ

暫くすると、鏡の中の音が徐々に大きくなって行く。

そして、シュウの目の前の鏡が突如ひび割れたかと思うと、鏡の翼は粉々に砕けてしまった。

「パーリーーン!!」

「くそ・ぐわっ!!」

リフレクトの消失と同時にエンゴウは回転攻撃でシュウに襲い掛かった。

全てを賭けた起死回生の魔法を破られ、驚く暇すらも与えられずシュウは大型船のマストに弾き飛ばされてしまった。

「シュウ兄ちゃん!!」

悲痛な表情でハジメが叫んだ。だが、聞こえていないのか甲板に落ちた魔導士はピクリともしない。構わずハジメが何度も呼び続けていると、突然巨大な影が現れ、少年の影を覆ってしまった。

（「ーえっ!?!」）

気付いた少年が、恐る恐る後ろを振り返るとそこにいたのはもちろんエンゴウ。

巨大な口を開け、ダラダラとヨダレを垂らしながらハジメを見下ろしていたのである。

食らいつかれたら少年の体など恐らく一瞬でかみ砕かれそうな牙の奥で青緑色の一つ目が、またニタリと笑った気がした。

「うわあ!!」

《ラァァ———ッ!》

恐怖に駆られたハジメが思わず叫んだ瞬間、エンゴウの爪が横に振

り下ろされる。

すると、あれ程強固だったドウマ・シルドのバリアーがあっさりと砕けてしまった。

「あ、ああ・・・」

だが、ハジメは動けない既に自分が絶望的な状況である事が分かっていたからだ。

周りをノイズのバリアーで囲まれ逃げる事も出来ず、頼みの綱だったバーカー達もボロボロで誰も助けてはくれない。

そして目の前には無敵のモンスター。

エンゴウの、否ノイズの恐ろしさをまざまざと思い知った少年は蛇に睨まれた蛙の様にただ震える事しか出来なかった。

『少年・・・！』

エンゴウの背後で倒れてる焰の体からバーカーがモゾモゾと出ようとしているが、焰の体に挟まって中々動けない。

どうやら焰が庇ってくれたおかげで大したダメージは負わなかったらしい

『――――』

だがそれを、今まで高見の見物をしていたクロウが見ていた。

元は眼球があった筈の三つ目の窪みで、必死にハジメを救出しようとはがいている白竜を捉えると、眉間にある三つ目の部分がポウと淡く光る。

するとそれまで、怯えているハジメを見ていたエンゴウの様子が急変し、突然に襲い掛かって来たのだ。

「ラアア——ッ!!」
「う……!」

エンゴウの、先に剥き出しの骨の刃が付いた三本の尻尾が一斉に襲い掛かる。
もはや自分は助からないと分かった瞬間、何も考えず少年の口から叫び声が出ていた。

「うわああ——っ!!」
——ドスドスドスッ!!

・
・
・
・
・

と、恐怖に耐え兼ね思わず眼をつぶってしまったハジメだったが、そこである疑問が浮かんだ。

痛みが襲って来ないのである。

いや、それ所がエンゴウの尻尾が突き刺さる音はしたのだが、ハジメの体に何かが刺さった感触も無い。

これは少年が以前、ノイズ現象に巻き込まれエビル・ゾンビに襲われた時と同じである。

一体何がどうなってしまったのだろうか？

「……大丈夫か？ハジメ」
(シュウ兄ちゃん?)

聞き覚えのある従兄弟の声が聞こえた時、ハジメの心はパツと明るくなった。

シュウがまたもや自分のピンチを救ってくれたのだ！
そう、いつだって頼りになるこの従兄弟は自分の側にいて力になってくれるのである。

しかし先程やられた怪我は大丈夫なのだろうか？
そんな心配が頭を過ぎり、眼を開けた瞬間――

「シュウ！・・・兄・・・ちゃん？」

少年の表情はその場で凍りついた。

眼の前にいたのは自分を庇い、盾になってこちらを向いている金色の魔導士の姿。

背中から巨大なエンゴウの尻尾が三本、体を貫いている。

そして影なって見えにくくなっている表情からは苦しげな笑顔が浮かんでいた。

「良かった・・・ようやく、間に・・・合っ・・・た」

「シュウ兄ちゃん！！」

絶望渦巻くクロスピアにハジメの叫び声がこだまする。

だが、少年が叫んだ途端また黒く染まった左手が鼓動した事に気付く者は一人もいなかった。

（続く）

FILE..13『暗号（サイン）』

「シュウ兄ちゃん!!」

悲痛なハジメの叫びが、港にこだまする

クロウが作り上げたノイズの結界で戦場と化したクロスピア。しかしその惨状を遠くから眺めている者がいた

「――仕上げは上々の様だ。これなら（彼）も喜ぶ」

白いマントを羽織った男だった。頭には魔女が被る罽の長い帽子があったがこちらでも白で、着ている衣服や履いているブーツも真っ白である。

顔は帽子で見えないが、男はなんとマルコロ大聖堂のてっぺんから戦いを見ていた。

「（彼）の夢を阻もうとする愚かな子羊には安らかな眠りを……。それこそが私の願い……」

淡々とした口調で男がつぶやく。だが、その口元は笑っている様に見える

――。

『・・・やっぱり・・・何も変わらない』

そして、悠然と白いマントの男が見ている大聖堂から離れた港地区の入口。

ノイズの結界から少し離れた大型船の船頭に乗리同じく戦いを傍観

している者がいた。

こちらは黒いローブに身を包んだ子供である。

右手には頭に銀色の三日月の装飾が作られた大きな杖を持っており、何故かその三日月の中央には赤い菱形のクリスタルが宙に浮いている。深く被ったフードのせいで男か女かも分からない。

しかしフードからはみ出ている黒い髪や、ハジメ達の戦いを見守るその眼差しは、何故かとても悲しんでいる様だった。

『何をしても・・・無駄なんだ・・・。どんなにあがいても・・・物語の結末は・・・変わらない』

黒いローブの子供の視線はハジメに向けられている。それはまるでハジメの運命が決まっていると言っている様だった――。

「シュウ兄ちゃん、どうして!!」

悲痛な顔をしながらハジメが叫ぶ。

眼の前には自分を庇い傷ついたシュウの姿。

体を貫いたエンゴウの三本の尻尾は、明らかに彼がゲームオーバーだと言う事を物語っていた。

「はは・・・ちよっと、恰好つけ過ぎた・・・かな?」

「兄ちゃん・・・シュウ兄ちゃん!!」

致命傷の筈なのに無理をして笑うシュウに堪え切れなくなったハジメが、抱き着こうとする。だが、その手がシュウへと届こうとした瞬間――。

「!?!? ウワアアーーーーッ!!」

その思いは無残にも打ち砕かれた。

突然エンゴウが尻尾を使い、シュウの体を空中へと連れて行ってしまったのである。

高々と持ち上げられた金色の魔導士はそのまま空中で制止する。

すると何処から羽の羽ばたく音が聞こえ、シュウの眼前に巨大な影が射した。

ーバサアー！！

「う・・・！！」

クロウである。

漆黒の羽根を羽ばたかせた烏モンスターは、いつの間にかハジメ達のいる場所まで接近していたのである。

クロウはシュウの前まで飛んで行くと、眼球の無い三つの窪みで見つめる。いつも軽口を叩いている筈のシュウも、喋る事も視線を外す事もまったく出来ない。

まるで睨まれたら石になると言う怪物、メデューサと対峙している様だ。

そして、クロウの三つ目に不気味な光がぼんやりと灯った瞬間ー！。

「っ！！ああああー！！！！っ！！！！」

「シュウ兄ちゃん！？」

ハジメの眼の前で信じられない出来事が起こっていた。

突然辺りが夜の様に薄暗くなったかと思うと、シュウの両目から不可解な文字の羅列が飛び出し、クロウの三つ目へと吸い込まれて行くのである！

文字の羅列はどれも光り輝いているが時に英語だったり、時に数字だったり、そして時に記号だったりとまるで統一性が無い。

シュウから出る文字の羅列は、暗くなったクロスピアを照らす結一の明かりでもある。

だがそれを吸い出されるのは苦痛を伴うのか、シュウは断末魔の悲鳴を上げもがき苦しんでいた。

『なんなのだ？ あれは・・・！』

倒れた焰から抜け出そうとしていたバーカードもその神々しくも残酷な光景に驚きを隠せない。長年、『エデン』をプレイして来た彼でもあんな物は初めて見るからだ。

「兄ちゃんを離せええっ！！」

ーードキュン！ドキュン！ズキュン！！

シュウを救い出そうとハジメが一心不乱に二丁拳銃でエンゴウに攻撃するが（見えない壁）に弾かれてしまい、逆にうっとおしいとばかりに威嚇され全く相手にされない。

その間にも謎の文字の略奪は続き、それが尽きると、今度はシュウの体から巨大な光の塊が出て来た。

『F』

ーーその光の塊にはたった一文字Fとだけ書いてあった。

それが何を意味するのかは分からない。

だが文字が刻まれた光の塊もクロウに吸い寄せられると徐々に小さくなり、やがて三つ目の中に消えてしまった。

「が・・・あ・・・あ」

文字の羅列や光の塊が無くなると、辺りがまた明るくなり元の景色

に戻る。

そして全てを吸い取られてしまったシュウは、まるで抜け殻の様にぐったりとしてしまっている。

一つにまとめた長い髪を垂らし、肢体を投げ出す姿はまるで吊られた人形の様だ。

『ーーーー』

光の文字を吸収して目的を達したのかクロウはシュウから離れ、またエンゴウの背後へと飛んで行く。

するとシュウを持ち上げていたエンゴウも、まるでゴミをすてるみたいに彼を空中へと投げ捨てた

「兄ちゃん!!」

そのまま落下する魔導士を追いハジメが全速力で走り出す。

だがそれでは間に合わないと知ると、自らを犠牲にし体をスライディングさせた。

ードサッ!!

「ぐっ!!・・・に、兄ちゃん大丈夫!？」

「は、ハジメか・・・? た、助かった・・・よ」

潰されながらもなんとかシュウをキャッチしたハジメが彼の体を抱き抱えるが、従兄弟の体の傷を見た瞬間、少年の顔色が変わる。

両胸と腹を貫いた大きな三つの傷痕はまるで巨大な虫喰いの様にシュウの体を消して行っているのである。

バーカードの言っていた《ウイルスによる侵食》だ。

ハジメも経験したからその時の痛みは十分分かる。恐らく耐え難い苦痛が今、シュウを苦しめているのだろう。

なんとかして従兄弟を助けようと少年が持っていた回復アイテムを出した時、二人の前にヌツと巨大な影が現れた。

《ラアアアー……ッ!!》

エンゴウだった。

弱った獲物に恐怖と絶望を思い知らせる様に、ダラダラと巨大な口からヨダレを垂らしながら、ゆっくりとハジメ達に歩み寄って来たのである。

・もう良いだろう。もうやめてくれ!

シュウを抱きしめながら、ハジメは心の中で必死に叫んでいた。

もうボク達は戦えない。みんなボロボロになるまで傷ついている。

なのにこれ以上何をしようって言うんだ!ーと。

だがその願いも虚しく、エンゴウが二人の前まで歩み寄って来る。

深い悲しみと恐怖を抱きながらハジメがシュウを強く抱き締めた時だった

『少年、伏せろ!!』

(えっ!?)

突然聞こえた声に驚いたハジメだったが、思わずその声に従いシュウを抱きしめたまま体を低くする。

その瞬間、エンゴウの周りに激しい閃光が炸裂した。

ーードカン!ドカン!!

「おおおおオアー……ー……ッ!!」

力強く、そして聞いた事のある雄叫びと共にエンゴウが爆炎に包ま

『・・・駄目だ。一度ウィルスに感染してしまったら助ける手段は・・・』

「そんなぁ!! だってこのままじゃ兄ちゃん・・・は？」
ーポンポン。」

長い首を振るバーカードに掴みかからんばかりの勢いのハジメの頭に誰かが手を置いて来る。

驚いた少年が見ると、ウィルスに犯されていると言うのに、いつもと同じ笑顔を浮かべているシュウが、ハジメの頭を撫でていた。

「ハジメ・・・もう・・・良い・・・だ。それに・・・ごめん」

「シュウ兄ちゃん？何、何言ってるんだよ!? まだ・・・助かる方法はある・・・って」

自分でも声が震えているのが分かる。

ウィルスに侵食された者の末路が分かっているのに何も出来ず、シュウを見ているとゲームで涙が出る筈無いのに眼がとても熱くなってくる。

ひょっとしたら今ゲームをプレイしているハジメ本人は泣いているのかもしれない。

だが、そんなハジメに最後まで心配をかけまいとするシュウの優しさが逆に悲しかった。

「良い・・・だ。これは・・・確かに・・・ただのゲームオーバーじゃ・・・無い。本当に・・・ごめん。こんな・・・危険なゲームに・・・誘ってしまつてえ・・・」

「違う! シュウ兄ちゃんのせいじゃないよ!! ボクが、ボクが興味本位でこんな事件に首を突っ込んだから!! シュウ兄ちゃんが止めるのに聞かなかった・・・から・・・!」

シュウの体の侵食はついに上半身と下半身を分かつまでになっていた。金色の鎧が徐々に無くなって行く。それでも彼は笑顔と少年の頭を撫でるのを止めなかった。
そして――。

「ハジメ・・・逃げろ。お前だけでも・・・無事・・・に・・・」

カラーン。

ハジメの頭を感じていた温かい感触が無くなる。それと同時にシュウが掛けていたあの赤いサングラスが地面へと落ちた。

「シュウ・・・兄・・・ちゃん」

呼び掛けてももはや返事は帰って来ない。あるのはただの静寂。そこにもう金色の魔導士の姿はいなかった。
・・・シュウは・・・・・・ウィルスの侵食により・・・消滅してしまったのだ・・・。

（――いやだ）

ードクン！！

それを認識した時・・・目の前が真っ暗になり、腹の底からどす黒い何かが沸き上がって来るのを少年は感じた。

例えて言うなら黒いマグマ。自分の中にこんな汚い感情があったのかと驚く程、巨大で醜悪な汚泥の奔流。

そのマグマが噴火しようとして体の中で大きくなる度に、自分の左手が鼓動しているのにもハジメは気付かない。

これが爆発したら多分大変な事になる。

そんな危機感が少年の中にあった。しかし――。

(いやだ・・・いやだ・・・いやだ)

「駄目だ！出て来ちゃ駄目だ！！」

『少年、どうした？』

突然叫んだハジメにバーカードが怪訝な顔をするだが、少年に答える余裕は無い。

見えるのは真っ黒な孤独な世界。両手で自分を抱きしめながら、必死に黒い感情を抑え様とする。

額には汗が滲み、歯もカチカチと上手く噛み合わない。少しでも気を抜けば即この力は暴れ出すだろう。

だが、そんな抵抗を試みるハジメに対し、黒い感情は姿を少年そっくりに変え、頭の中で喚き散らす。それはハジメ本人が考えたワガママな気持ちその物だった。

ーいやだ。シュウ兄ちゃんがいなくなったエデンなんていやだ。ボクはただ楽しくゲームが出来れば良かったのにこのまま消されるなんていやだ！！

誰が、誰が悪い？シュウ兄ちゃんを消したのは誰だ？エデンをこんな風にしたのは誰だ？ボクの楽しい一時を邪魔したのは誰？

ーボクを消ソウとしタのハ誰ダ・・・？

誰が悪い？誰が悪い？誰が悪い？誰が？誰が？誰ガ？誰？誰？誰？誰？ダレ？ダレ？ダレ？ダレ？ダレダレダレダレダレダレダレダレダレダレ・・・。

ーイチバン悪いのハ誰なんだ・・・??

《ラアアアーーーーーッ！！》

その時、頭に入って来た雄叫びに気付いてゆっくりとハジメが視線

を上げる。

見えたのは街で暴れているエンゴウの姿。焰はその巨大な牙や爪を回避するのに精一杯で、すでにかなり疲労している。

焰達を見ている少年の焦点は合っていない。言うなればまるで泥の様なドロリとした深く漆黒の視線……。しかし少年の視線は外れない。

彼の視線は、たった一点に向かって向けられていた。

――それは暴れているエンゴウのさらに先、自分達が苦しんでいるのを悠々と見ている漆黒の翼。自分やバーカードにウィルスを植え付け、シュウまでも消し去った張本人。平穏だった『エデン』を乱し、ハジメ達を二度も襲った全ての元凶。そのモンスターの名は――。

――ドクン――！！

「クウウロオオオオオオオオオオ――ッ――！！」

その名を叫んだ途端、ハジメの世界が一変した。

抱く心は悲しみから憎しみへ。求める物は優しさから力へ――。

大切な者を奪われた痛みを全て怒りへと変え、少年は心の中にあつた弱さを叫びと共に吐き出して行く。

すぐ側で喚いていた黒いハジメの姿をした何かがコーティングする様に、ハジメの体へと同化して行った。

だが、侵食が進んでもハジメの意識が支配される事はない。黒い何かとハジメの目的が一致してしているからだ。

やがて、黒い何かが鎧の様に全身を覆い尽くす。そこでようやくハジメは（変身）は遂げたのだ。

『少年！？』

側にいたバーカードが驚愕の声を上げる。ハジメの変貌は内面だけ

で無く外見にも起こっていた。

少年がクロウの名を口にした途端、ウィルスに侵されていた左手が突然光り出したのだ。

否、それは爆発とも言っていない。左手から始まった黒い光は徐々に巨大化し、ハジメの全身を包むとそのまま彼の叫びに同調する様に天に向かってほとばしって行った。

駆け登る黒い光は自分達を閉じ込めるノイズの赤き結界をも軽々と突き破り、遥か高みまで上がって行く。

それはまるでハジメの感情その物。憎しみが形を成した黒いオーラだった。

（これは・・・まさかウィルスが少年の感情に反応しているのか！？）

突如始まったハジメの変化にバーカードだけで無く焰、そしてエンゴウまでもが絶句する。

そしてその光景に驚きを感じているのは彼等だけでは無かった。

「なんだあれは？あんな物、小剣銃士の能力には無い」

マルコロ大聖堂の頂上で見ていた白いマントの男がつぶやく。

（彼）からの使いである男にとってハジメの変貌はあまり歓迎出来る物では無い様だ。

「愚かな子羊の中に、子羊の皮を被った狼がいたとでも言うのか？」

両腕を組んでいた男の手に力が籠る。

顔は長い帽子のせいで分からない。だが、その口調に明らかな不快感が混じっていた。

『物語の結末が・・・変わろうとしている』

一方、マントの男と同じく船の先端からハジメ達の戦いを見守っていた黒いローブの子供の言葉にも驚きが混じっていた。だが、白いマントの男の物とは何かが違う。

例えるならマントの男の驚きを

「怒り」とするならばローブの子供の驚きは

「希望」だろうか？

それは同じ本を何度も読み結末を知って飽きている子供が、ほんの少しだけ内容が変わった事でどんな結末が待っているか分からなくなった様な、そんな些細なときめきを願う物だった。

『この物語の結末が変わっても・・・その先にあるのは苦痛のイバラの道なのに・・・それでも抗おうとするの？・・・それが・・・人の生きようとする力なの？』

分からないと言った口調でローブの子供がハジメを見る。

結末を変えるための戦い・・・『エデン』のルールを破る者達の戦いが始まろうとしていた。

(続く)

FILE..14 『復讐（リベンジ）』 （前書き）

大分更新してませんがこれがこれからも細々と続けていきますので
よろしくお願いしますm（　）m

FILE..14『復讐（リベンジ）』

「おああああーーーーっ!!」

発動する黒いオーラを両手で振り払い、ハジメが腰にぶら下げていた二丁拳銃の標準をクロウに合わせる。

憎悪に満ちたその鋭い視線に先程の弱々しい少年の姿は無い。

眼は血でも流したかの様に真っ赤に染まり、気迫はまるで歴戦の戦士の様に力強い。

そして注目すべきは少年の両手。その部分だけがさっき放たれた黒いオーラの残り火の様に黒く発光する光に包まれていた

「お前ええーーーーっ!!」

『少年！待て!!』

ーーーーズキュン！ズキュン！ズキュン!!

あまりにも変わってしまったハジメの気迫に気圧されながらもバードカードが慌てて止める。

だが、ハジメの放った銃弾は止まらず一直線にクロウに向かうとその前に黒く大きな陰が立ち塞がった。

エンゴウだ。

今まで相手をしていた焰を叩きのめし、主人を狙うハジメに襲い掛かって来たのである。

ーーーーガキュン！ガキュン！

《ラハアアーーーーッ!!》

クロウの前にエンゴウが立ちはだかった事に因りハジメの放った弾丸はエンゴウの（見えない壁）に弾かれてしまう。

エンゴウもそれを予想していたのか巨大な口の中にある眼球がまたニタリと笑う。そして飛び掛かったクロウの前で着地した狂犬がそのままハジメを踏み潰そうと飛び掛かった時だった――。

・・ピシッ。・・・ピシピシピシ！！

《ラアッ??》

突然の出来事にエンゴウが素っ頓狂な声を出す。否、エンゴウだけで無くその場にいたバーカードや焰も驚きで眼を見開いている。

なんと今までどんな攻撃をも通用しなかったエンゴウの《見えない壁》がハジメの弾丸の当たった部分からヒビが入り、それが瞬く間に全体へと広がって行つたのだ！

それまで何も無かった筈のエンゴウの周りに、亀裂で巨大な円が現れる。恐らくそれがバーカード達を散々苦しめた（見えない壁）の形なのだろう

姿を現した（見えない壁）にたった一人まったく動じないハジメがゆっくりと拳銃を構える。そしてなんの感情も無く引き金を引いた。

「――お前。兄ちゃん虐めてたよな？」

ドン！・・・ドンドンドンドンドン！！

《ゴラアアアア――ッ！！》

一発の銃声の後、まるでガラスの様に（見えない壁）が砕け散る。そしてその先に待っていたのは銃弾の嵐だった。

まったく表情を変えず、ハジメが相棒の二丁拳銃でエンゴウに容赦の無い連撃を加えたのである。

エンゴウの口から吐き出されるのは雄叫びでは無く初めての苦痛に寄る叫び。襲い掛かろうとした狂犬の巨体をハジメの猛攻が持ち上

げ、逆に弾き飛ばす。

それは誰もが初めて見る光景。そして有り得ない光景だった。

地面に叩き付けられ、ゴロゴロと転がるエンゴウを見て焰もバーカードも全く言葉が出ない。

だが、エンゴウが倒されるのは当然だと言わんばかりに、悠然とハジメが銃口を向けたまま口を開いた。

「許さないよ。
・ ・ お前」

《グルアアアアー——————————ッ！！》

それはこっちのセリフだと言っている様にエンゴウが直ぐさま立ち上がり、空気が震えそうな雄叫びを上げる。

自分の体に初めて傷を付けられた狂犬は真っ赤な全身の体毛が燃え上がらんばかりの怒りに駆られていた。

だが、ハジメはまったく気圧される事も無く、持っていた二丁拳銃をダガーへと変形させるとゆっくりと構えを変える。

そして体勢を低くすると力強い一歩を踏み出し、弾丸の様に飛び出した。

《ラアアアーアーアーツ！！》

ドカン！ドカン！ドカン！！

少年が飛び出したと同時に今までハジメがいた場所が炎に包まれる。エンゴウの火炎弾が直撃したのだ。

その後も間髪入れずエンゴウの口から巨大な火炎弾が吐き出される。だが当たらない。

ハジメは（ガン・ダガー）特有の素早い動作でジグザグに動き、瞬時に火炎弾をかわして行く。

それは先程まで怯えていた少年の動きでは無い。

一瞬の判断でエンゴウの攻撃を全て回避し、ついにはエンゴウの足

元へと滑り込んだ。

体格や攻撃力ならハジメを遥かに勝るエンゴウだったがこうして足元へ潜り込まれると、その大きさ故にハジメが何処にいるか分からない。

ハジメは踏み潰されない様に周囲を注意しつつ、目の前の巨大な左足を持っていたダガーの双刃で切り裂いた。

「そらあ!!」

ザーザシュッ!!

左足を切り裂いた途端、

真上でエンゴウが悲鳴を上げた。だがハジメはそこで休まず、（ガン&ダガー）の弱点である攻撃力の弱さを連撃と言う手段でカバーする。

エンゴウの左足を切り落とさんばかりの勢いで何度も同じ箇所を攻撃していくと痛みと怒りに我を忘れたエンゴウがハジメを踏み潰そうと両前足を高々と上げた。

だが、両足が地面を踏み締める直前タイミングを合わせてハジメもジャンプする。

一瞬の間に少年はエンゴウの顔前まで到達し、持っていたダブルダガーを十文字に振り落とす。

エンゴウの巨大な顔が切り裂かれるかと思った時突然、口を開いた。その瞬間、少年の表情が変わる。

なんと口の中にあったのはあの気色悪い一つ眼では無く口いっぱい燃え盛る炎だった。

『いかん!!』

《ラアアアアアアア!!》

危険を察知したバーカードが叫ぶ前にエンゴウの口から焰炎の火炎

弾が吐き出される。

エンゴウは、ハジメが足元に転がり込んでからずっとこれを狙っていたのだ。

いくら俊敏な（ガン・ダガー）でも身動きの取れない空中では避けようが無い。

ハジメの体の倍は有りそうな火炎弾が眼の前に迫る。

すると少年は持っていたダブルダガーをまた十字に構え、不機嫌そうに言い放った。

「うっとおしい!!」

ザーザシュー!! ザシュー!!

ハジメの言葉と共に空気を切り裂く様な鋭い音が響き渡る。すると迫っていた火炎弾が十字に切り割られ、方々の場所で爆発したのだ。

『なっ!?!』

これにはさすがのバーカードも驚きの声を上げるだが、驚いたのはエンゴウの方だ。

まさかスピード重視の小拳銃士にそんなパワーがあるとは思わず口を開いたまま絶句する。その一瞬の隙を突いてダガーをまた二丁拳銃に変えたハジメが銃口を大きく見開いているエンゴウの一つ眼に向ける。

それにエンゴウが気付いた時にはもう手遅れだった。

「何、眼突けてんだよ」

ードウンドウンドウンドウンドウン!!

待っていたのは銃弾の嵐悲鳴を上げたエンゴウがまた転がりながら

2・3メートル吹っ飛ばされた。

「おいおい、なんなんだよ？あのガキ！？」

後ろでハジメとエンゴウの戦いを見ていた焰は我が眼を疑った。

圧倒的。あまりにも圧倒的な展開にである。

自分達がどんな攻撃をしても全て跳ね返したあのエンゴウがLV.1のハジメに一方的やられているのだ。

彼で無くても信じられなくて当然だろう

『似ていると思わないか？焰』

「えっ？」

と、それまでハジメの闘いをただジッと見ていたバーカードがおもむろに口を開く。だから焰は最初、彼が何を言っているのか理解出来ず怪訝な顔で聞き返してしまった。

「似てるって何がです？」

『少年の戦闘スタイルだ。似ていないか？・・・黒の勇者だった頃の私に』

改めて言われて焰はハッとする。確かに（戦士）と（小剣銃士）では武器の違いや体格差などで闘い方が違うのだが、確かに似ているのだ。

相手を射抜きそうな鋭い眼光や無駄の無い完璧な動き、そして相手を徹底的に痛め付ける冷徹さがウィルスで体を失う前のバーカードにそっくりなのだ。

「だけど、そりゃ一体どう言う事なんです？」

『今はなんとも言えんが一つだけ確かな事がある』

焰には眼を合わさずバーカードがつぶやく。その視線の先にはハジメの姿があった。

『やはり彼の存在は我々に残されたパンドラの箱の最後の希望なのだ』

《ウルアアアーーーーー!!》

全身を炎へと変えたエンゴウが体を駒の様に回転させハジメに突っ込んで来る。

先程シュウの魔法を破った技だ。

接近戦を得意とするエンゴウにとってこの技は最強の技に違いない。

「ちっ！」

舌打ちをしながらハジメが二丁拳銃を撃ち鳴らすが、強烈な回転と炎のせいで弾丸が弾かれてしまいエンゴウまで届かないその間にも迫り来るエンゴウに、ハジメはもう一度舌打ちしてその巨体を飛び越えた。

「ルララアーーーーー!!」

一度は回避されたエンゴウだが、またすぐにUターンしてハジメに襲い掛かる。何がなんでもまずハジメを始末するつもりらしい。

エンゴウがまたも接近する中、攻撃を回避してから何やら思案していたハジメがもう一度二つの拳銃を連射する。

だが、弾丸はやはり届かない。巻き上がる炎に全て弾かれてしまう

のだ。

「危ねえ！早く逃げろ！！」

エンゴウが少年の間近まで接近して来たのを見て焰が叫ぶ。それとほぼ同時にハジメもまたジャンプする。すると少年は何を思ったか炎の渦を飛び越えながら二つの銃口の標準を真下にいるエンゴウに向けた。

ー！ドゥン！ドゥン！ドゥン！！

《グラァアアーーーーー！！！》

空中でゆっくりと円を描きながらハジメが引き金を引く。すると何故かエンゴウは今日何度目かの悲鳴を上げ、回転を止めてしまった。一瞬、何が起きたか理解出来なかった焰だったがその時になって初めて気がついた。

少年はただ闇雲に攻撃していた訳ではない。探していたのだ。炎の壁が薄い場所をー！。

回転で巻き起こした炎なら自分の周りに厚く作る事が出来るが、回転の中心であるエンゴウの真上には炎を作る事が出来ない。ハジメは先の二回の攻撃でそれに気がついたのだ。

《ル、ルロロロロ……》

回転を止めたエンゴウが苦痛にのたうち廻っていると着地したハジメが振り返り、さらに2撃・3撃と追撃を加える。哀れエンゴウはまた悲鳴を上げながら吹き飛ばされた。

だが、すぐにハジメを襲おうと立ち上がったのだがまた力無く倒れてしまう。ハジメの攻撃が着実にエンゴウを追い詰めている証拠だ。少年はボロボロになった番犬を見て再度、二丁拳銃を構える。そし

て冷酷に言い放った。

「死ね」

キュイーーーーン！キュイーーーーン！！キュイーーーーン！！

独特の音を発しながら二つの銃口にエネルギーが集中する。エネルギーは二つの塊となり起き上がれないエンゴウへと向けられる。そして今まさに拳銃の引き金に少年の指が掛かろうとした時だった――。

《ルウウラアアーーーーー！！！！》

突然エンゴウが立ち上がり、今までで1番の雄叫びを上げる。すると三本あるエンゴウの尻尾が触手の様に伸び始め、ハジメに襲い掛かって来たのである。

「ちっ！」

これにはさすがにハジメも面食らったが、拳銃を構えたままジャンプして尻尾の攻撃をかわした。しかし止まらない。一本が避けられなくてもすぐに二本の尻尾が追撃し、残された一本もまた猛迫する。尻尾のスピードは意外に早く攻撃のバリエーションも豊富で回避するのにも限界がある。

尻尾の追撃を回避する状況の中でこのままチャージを維持するかハジメは決断を迫られていた。

《ラアアーーーーー！！！！》

ドスドスドスッー！

そう考えている内にも尻尾の攻撃は続く。ハジメが気付き、ジャンプした途端に少年がいた場所に二本の尻尾の刃が突き刺さり、残っ

た尻尾が追いかけて来た。

これ以上技を維持したまま逃げるにも、限界がある。このままではどっち道餌食になるだけだ。

飛び移った建物の天井から、目の前に迫り来る尻尾の攻撃をまたジヤンプしてなんとかかわす。するとそこで先程の二本が自分の背後に周り込んでいた事に少年は初めて気が付いた。

（しまっ——！！）

慌てて身を捻り、なんとか二本の攻撃をかわす。だが目の前まで迫っていた残り一本の攻撃は回避出来ず、鞭の様にしなる尻尾にハジメは地面に吹き飛ばされた。

「ぐあっ！！」

石畳の地面にしたたか体を打ち付けながら、それでも上手く体を回転させ拳銃のチャージを維持しながら着地する。ハジメの視線の先にいるのは三本の尻尾を漂わせている地獄の番犬。ちょうど対峙する形だ。

キューーーン・・キューー・・ン！！

二丁拳銃を包む真っ黒な光と独特のチャージ音が徐々に小さくなる。チャージが維持出来なくなって来ているのだ。

（これ以上保つのは難しいか・・・なら仕方が無い！！）

危険な状況に変わりは無いのに極めて冷静な判断を考える頭に疑問も持たず、ハジメは拳銃を構える。

チャージ技で尻尾を出来る限り撃破し、残った尻尾の攻撃を回避してエンゴウを倒す。一か八かの手段だが、それが今出来る最善の方法だった。

《ラアアアーーーーー!!》

先に動いたのはエンゴウだった。三本の尻尾が一斉にハジメに襲い掛かる。一瞬遅く反応し少年が左右の尻尾に狙いをつける。そして引き金に指をかけた途端――。

「オラァ!!」

ゴォオオーーーーッ!!

少年の眼に二つの影が飛び込んで来た。一つは炎の様な真っ赤な髪をなびかせながら尻尾の一つを切り落とし、もう一つの影は白銀の羽を羽ばたかせながら小さな口から地獄の業火を吐き出し、残り二つの尻尾を焼き尽くす。

二つの影が少年の方を向く。焰とバーカードだった。

『少年、何をしている!』

「さっさと決めちまえ!!」

二人の言葉にハッとしたハジメが正面にいるエンゴウに二丁拳銃を構え直す。尻尾を失い悲鳴を上げているエンゴウの一つ眼がカッと見開かれる。

その瞬間、少年は引き金を引いた。

「ツイン・チャージ・ショットオオーーーーッ!!」
キューーン・・・ズギャン!!!!

二つの拳銃から放たれたエネルギー弾は一つの巨大な球体へと合体し、一直線に飛んでいく。そしてエネルギー弾は標的であるエンゴウを包む込んだ。

《ラア・・・ラアアアアア——ッ！！！！》

雄叫びも虚しく『ツイン・チャージ・ショット』を食らったエンゴウは2・3回転がると大爆発を起こし炎に包まれる。

爆発の炎が続く中、中から『※※』と言う赤い文字が現れそれが燃え尽きる様に消えた。エンゴウの最後だった。

「いよっしゃ——！！やったぜ！！」

『はしゃぐな、焰！闘いはまだ終わっていない』

エンゴウを倒した事を知った焰が空中でガッツポーズをするが、バーカードがそれを制する。

確かにエンゴウはいなくなったのにバーカード達を閉じ込めている赤いバリアーが消えていない。

そしてハジメもまた決して構えを崩さず、鋭い視線で一点を睨み付けていた。

——バサッ！バサッ！

その視線の先にいたのは漆黒の烏モンスター。
真っ黒な三つの窪みから淡い光を点しながら、こちらをジッと見つめている。

先程の闘いを見て一体、クロウは今何を考えているのか？それはハジメにも分からなかった。

『・・・』

ピシピシピシューッ！

と、突然だった。ハジメ達を閉じ込めていた赤いバリアーが碎け始め、クロウもまた黒い球体へと姿を変える。逃げる気なのだ。

「待て！！」

――ダウン、ダウン！！

それを見たハジメは瞬時に拳銃の引き金を引くが一瞬遅くクロウは消えてしまう。

赤いバリアーも次々と壊れ、離散していく。そして完全に消滅すると残ったのはいつものクロスピアの風景だけだった。

（あい、ホムラさん生きてますかあ～～？）

そこで焰の通信機から緩い声が聞こえて来た。ラビイだった。ノイズ現象が解除された事で通信が可能になったのだろう。

「おい、ラビイか？安心しろ、生きてるよ！」

（あい安心しました～！所でクロスピアの港エリアだけ入れないと、ユーザー達からの苦情がサポートセンターに殺到してます。速やかに帰って来て下さ～い）

ラビイの報告が驚異は去った事を教えていた。ハジメは無言のまま拳銃をホルスターに納めると、静かに眼を閉じる。

すると、両手で光っていたあの黒い光が消え少年から感じていた殺

伐とした雰囲気も消えてしまった。どうやら元に戻ったらしい。

『少年、君に聞きたい事がある』

焰とラビィに指示を与えたバーカードがハジメの肩に止まる。聞きたいのはもちろんエンゴウを倒したあの力の事だ。その正体さえ掴めればノイズに対抗出来るだけで無く、ウィルスの被害者達も救えるかもしれないのだなんとしても情報を得なければならない。彼はハジメを自分達のホームに戻し、少年のキャラを調べようと説得するつもりでハジメの顔を覗き込んだ。

『少年、君は・・・』

だが、その先の言葉は白銀の竜からは出てこなかった。いや、言えなかったのだ。ハジメの顔は真っ青で自分の両手を見ながら体を震わせていたのである。まるで何かに怯えている様でその態度は明らかに尋常な物では無い。

『少年!!』

「バーカードさん・・・ボクは・・・ボクは!!」

すると突然弾かれた様にハジメは走り出した。

驚いたバーカードは思わず肩から飛び立ってしまう。方向から行くマルコロ大聖堂に向かっているのは明白だが、バーカードは少年を引き止める事が出来なかった。

彼の気持ちいが痛い程理解出来たからである。

こんな時、無性に煙草が吸いたくなるのだがそれが出来ない事にため息をつきつつ、バーカードはラビィに連絡を入れた。

『ラビィ、解析してもらいたい映像がある。すぐ（黒衣の魔女）に

連絡してくれ』

「了解です」。ですが居場所捜し当てるのに少し時間が掛かりますが？」

『構わん。ひょっとしたらクロウの狙いが分かるかもしれん』

『エデン』からログアウトした始はバイザーを放り投げるとすぐに足元にあった携帯を手にした。

携帯の便利機能を使い目当ての電話番号にすぐにかける。視界が涙のせいで見づらいが、そんな事を気にしている場合では無い。今大事なのは始の従兄弟終一の安否だ。

トゥルルル・・・トゥルルル・・・トゥルルル・・・。

（お願い・・・出て！終一兄ちゃん！！）

始の願いも虚しくコール音は延々と鳴り続け、留守番電話に切り替わってしまった。

だが少年はもう一度電話をかけた。

あんなゲームで起こった事が現実に影響する訳無いと安心出来るまで――従兄弟が無事だと確認出来るまで――。

2度目のコール音もまた延々と鳴り続けていた。

（続く）

FILE..15『助言（アドバイス）』

「ただいま」

真っ白な何も無い部屋に白のマントの男が帰って来た。ハジメ達の闘いを見ていた男である。

男が歩む寄ると部屋の中にいた（彼）はいつも通り笑顔で迎えた。

——お帰り。

ここは男と（彼）だけの世界。（彼）と許された者だけが入る事の出来る禁断の領域だ。

「……」

——どうしたの？

白マントの男が黙っている事に気付いた（彼）が声をかける。

（彼）は純粹であり繊細だ。だからこそ言葉を選ばなくてはならない。

「エンゴウがやられたよ」

——！！

（彼）の表情が変わった途端、部屋全体が大きく揺らぎ始める。

それは（彼）がショックを受けている証拠。部屋と同様に男の姿もまた揺らぎ始める。

この部屋は（彼）と一心同体なのだ。だから（彼）が傷付けば部屋も崩壊を迎える。

分子レベルから体をバラバラにされそんな感覚に耐えながら男は（彼）が落ち着くのを待った。

——そう、可哀相に・・

「我々を邪魔する存在にやられてしまったんだ。後で二人でお墓を作ってあげよう」

男の言葉に（彼）が頷くと、今度は白の部屋に青色が染まっていく。これは（彼）が悲しんでいる証拠。それを示す様に（彼）の眼から涙が零れ落ちた。

「しかしエンゴウのおかげでようやく捜し物が見つかったよ。長かった・・・」

これでようやく私達は第一步を踏み締める事が出来る」

——それが・・鍵？

男が手にした物を（彼）がまじまじと見る。男の手にあった物は形は小さくなっていたが、なんとシユウの体から出て来た光の塊だった。

「受け取って欲しい。これで君は新しい世界へと羽ばたくのだ」

——無言のままドアを開けると始はランドセルを放り投げた。

そしてぐったりとベッドに体を預ける。

「始？帰ってたの？帰って来たんだっただいまくらい言いなさい」

一階から聞こえて来る母の声にも始は反応しない『エデン』を辞め

てから三日。少年はずっとこの調子だった。

結局、終一は電話に出なかったのである。

業を煮やした始は『エデン』に書いてあったサポートセンターに電話をして自分が甥である事を説明し、終一を出してもらおう様お願いしたのだが、それも敵わなかった。

サポートセンターの説明に寄ると、どうやら今日は会社を休んでいらっしゃる。だが始はそれも嘘だと思った。

さっきまで『エデン』の世界で一緒にいたのだ。『エデン』の世界を管理する（監視者）の人間である終一が会社以外の場所からアクセスしている訳が無い。

その後も何度か携帯にかけたり、念のため次の日もサポートセンターに問い合わせてみたりしたがやはりサポート側からの解答は「今日も休んでいる」だった。

「兄ちゃん・・・」

終一の名前を呼んでも返事は帰って来ない。

始はようやく理解した。終一はノイズの被害に会い消えてしまったのだ。だから会社側は必死になって隠そうとしている。今までの出来事が全てその答えを導いていた。

（僕はどうしたら良いんだろう・・・）

寝返りを打ちながらぼんやりとテレビに視線を向ける。少年の中でもう既に答えは出ている。

終一を救うには『エデン』の中に入るしかないのだ。

だが、それはバーカード達と共にノイズ現象を調べると言う事になる。三日前の出来事は今だってハッキリと思い出せた。正体不明のモンスターとのゲームでは無く、現実の命を賭けた戦い。今だって考えただけで体が震えて来る。

そして何より始を恐怖させたのは敵では無く、従兄弟を奪われた後の自分だった。

——怖かった。自分では無い自分に体に乗っ取られた感覚——。心は憎しみや怒りに溢れているのに頭だけは機械みたいに冷静で、何よりモンスターをあれだけ痛めつけて喜んでいる自分を始は嫌悪した。

（あれは一体なんだったんだろう？僕はどうなっちゃったんだ？）

その答えも恐らく『エデン』の中にあるだろう。だがゲームをやったらまたあの自分に変身してしまうかもしれない。知りたいと思う心と怖いと思う心。二つの感情が相反して始はどうしたら良いのか分からなかった

（僕はどうしたら良い？教えてよ、終一兄ちゃん！！）

誰かに助けて欲しくてももはや頼る人がいなかった。

終一はもういないし、バーカード達に頼ったら一緒に戦って欲しいと説得されてしまうかもしれない。『エデン』の事を何も知らない親に相談するなんて問題外だ。

なんの偏りも無く冷静に意見を言ってくれる人物始が今欲しいのはそんな人のアドバイスだった。

（彼は——なんだ。だから自分で考え、自分で行動する）

「っ!？」

その時ふと終一の言葉が思い出された。そして始の頭にある人物の名前が思い浮かぶ。

それはある意味馬鹿げた考えかもしれない。いや他の人が聞いたら馬鹿にするだろう。

だが今の始に必要なのは選択をする勇氣。
どちらかも選べずにいる自分の背中を押してくれる存在なのだ。

「——っ！」

意を決した様にベッドから跳び起きると『エデン』用のヘッド・バイザーを装着してゲーム機のスイッチを入れる。

中で『エデン』のディスクが廻る低い音と共にテレビを点けると、既にタイトル画面が出ていたので始はゲームをスタートさせる。

新着メールのマークがあったが多分バーカードだろう。始はひとまずメールをチェックするのは後回しにして『エデン』の世界へと飛び込んだ——

——適性Level 25 アウトガタン城

「オラァ!!」

空気を切り裂く音と共に焰が相棒のアックス・ギターを振り下ろすと、目の前にいた泥人形の様なモンスターが叫び声も上げず真つ二つになる。

焰の周りには同じ種類のモンスター、クレイマンが何体もあり、あちらこちらに彼にやられたモンスターの残骸が残っている。

焰以外のプレイヤーの姿はない。空はどんよりと曇り、辺りも崩れかけた城しかない荒れ地で皆一様に焰の強さに眼を見張っていた。

『バ、バカナ！我が軍ガタッタ一人ノ人間ニイ!!』

泥人形の中で、一際大きく三本角を生やしているカーズ軍幹部クレイ將軍が喚く。

本来ならこのイベントはカーズ軍に攻められ、壊滅寸前な国アウトガタンを救うための物で、攻めて来る敵に罠や砲撃を繰り返し、数が減った所をボスである將軍と戦うのが正しい進め方なのだが今の焰の強さではまったく関係が無かった。

「悪いな！テメーを倒すのはこれで4回目だ！！」 『何ヲ訳ノ分カラン事ヲ死ヌノハ貴様ノ方ダ！！』

將軍が手を翳すと背後にいたクレイマン、三体がジャンプして襲い掛かって来た。

だが、焰は慌てず振り返ると口から炎の弾、焰炎弾を次々と吐き出す。

——ドカン！！ドガ——ン！！

激しい爆発音と共に消し飛ぶ泥人形達を尻目に、焰はそのまま將軍へと突進する。

前にいた2体を変化させた竜の爪で撃破し、立ち塞がるモンスター達もアックス・ギターでまとめて薙ぎ払っていく。

焰は、闘いを楽しんでいた。

その表情はまるで鬼の様でどちらがモンスターなのか分からない。暫くすると、その場にいた泥人形は全て倒され、残されたのはクレイ將軍だけとなっていた。

『オノレ！小癪ナ人間ガア——！！！！』

あちこちで爆煙の立ち上る中、突進を続ける焰にクレイ將軍が持っていた金棒を振り上げ襲い掛かる。

体格差なら勝る將軍だったが焰はその攻撃をあっさりとアックスで受け止め、跳ね返した。

將軍は覚えていないだろうがもう何度も戦った事のある相手なのだ。どんな攻撃をしてくるか全て覚えている。

体制を崩され、隙が出来た將軍に待っていたのは焰の猛攻だった。

「オラオラオラア——！！！」

アックス・ギターを右に左に振り回して泥モンスターの巨体を痛め付けていく。

將軍もさすがボスだけあって、クレイマンの様に一撃ではやられず応戦するが、全て跳ね返され2・3倍の反撃を喰らうのであつという間にフラフラである。

所詮ゲームで作られたキャラに勝てる相手ではないのだ。

『ヒ、ヒイイイ！！モウコウナツタラ逃ゲルシカ・・・！』

「誰が逃がすかあ！！！」

かち上げたアックスのスイングで金棒ごと吹っ飛ばされた將軍がついに背中を向けて逃げ出すと、焰はアックス・ギターを投げ、自身も翼を広げ高々とジャンプする。

すると回転しながら飛ぶアックスが逃げる將軍の両足を切り裂き、ブーメランの様に上昇すると、ジャンプした焰の手元へと戻って来る。

倒れ込んだクレイ將軍が眼にしたのは自分に向かって落ちて来る焰の姿だった。

「オラア——！！！」

——ズガン！！

頭から一刀両断にされたクレイ將軍が爆発し、戦場には焰だけが残された後ろではCPの戦士達が城の勝利に喝采を上げ、あれだけ曇

っていた空に光が射し、綺麗な夕焼けが見える。

だが焰の表情は優れない不機嫌にアックス・ギターを光の中にしま
うと、クレイ將軍のいた場所にペツと唾を吐き捨てた。

「チッ、ザコ野郎が！あっさりやられやがって！！」

『ザコモンスターを痛ぶって鬱憤晴らしか？』

いつの間にか焰の背後にはバーカードがいた。グラフィックの一つ
である地面に突き刺った剣に停まり、翼を休めている。

「別に・・・！ただのレベル稼ぎっスよ。今は待機中なんだから何
やったって俺の勝手でしょうが！」

『荒れてるな。お前が今何を考えているか当てようか？・・・少年の
事だろう』

バーカードがハジメの名を口にする、焰はまた不機嫌そうに舌打
ちをする。どうやら凶星らしい

「へっ、俺はね！あんなガキの事なんかどーでも良いんだ！！ただ・
・ただ自分がやって来た事が馬鹿馬鹿しくなっちゃったんですよ
！」

『ほお、と言うと？』

焰が声を荒らげるが、バーカードは特に気にせず先を促す。

こう言う時、彼は相手の言葉を否定も肯定もせずただ耳を傾けてい
るだけのだ。

「あんただって分かってる筈だ！！俺は今までWB社の命令でノイ
ズの化け物と戦って来た。

『エデン』の世界を密かに守って来た自負が俺にはある！

なのにいざその黒幕と対峙してみたら、その手下に齒も立たずレベル1のガキに助けてもらおう始末だ！

バーカードさん、俺達は一体なんのために戦ってるんスカ！？」

もはや八つ当たりに近い口調で焰が振り返る。だが彼の言い分はバーカードには理解出来る物だった。いや、ノイズを追いつける者しか分からないだろう。

恐らく焰はクロウやエンゴウのゲームを越えた力を痛感し、そしてまだ初心者のはじめに助けられた事にプライドを傷つけたのである。絶対に勝てないかもしれない相手と、闘いつづけなければならない矛盾に彼はぶつかっているのだ

『それで、お前はどうする気だ？』

焰の問いには答えずバーカードが聞き返す。

本当ならここでアドバイスでもしてやるべきなのだが、バーカードのチームは善意でやれる様な仕事はしていない。

下手をすれば命に関わる危険な仕事だ。だからこそメンバーの進退は本人の意思に任せる事になっている。

それに、焰は自分の運命を人に任せるなどしない強い人間である事を白竜は知っていた。

「はっ！心配しなくても【ゴースト・ハッカーズ】を辞めるなんて言いませんよ！これからあんたの下でノイズを追いつけます」

白竜の淡々とした態度に肩を怒らせながら、焰は城の方へと歩み出した。

それを見て何故かバーカードはフツと鼻で笑う。

『焰・・・私もお前と同様ノイズの脅威を知り、こんな姿にされても

尚戦い続ける事を止める事が出来ない。

それはお前も私もこの世界しか居場所が無いからかもしれない』

ポツリとつぶやいた言葉に一瞬、焰の足が止まる

だが、また舌打ちの音が聞こえるとそのまま去って行った。

（あい、バーカードさん聞こえますか〜？）

一人残されたバーカードの頭の中にラビィののんびりした声が聞こえて来る。ククルの姿になり、通信機を持ってない彼にはダイレクトに頭に通信が飛び込んで来る様になっていた。

『聞こえている。何か分かったか？』

（あい、先程映像の解析が終わったと情報屋さんから連絡が入りました。それと『トロイ』にお客さんが来てます。ハジメ君ですよ〜）

ラビィの通信を聞いてバーカードは白銀の翼を広げる。

そして沈み欠けている大きな夕日に向かって飛び去って行った。

ラビィの言う通り、『トロイ』の中でハジメが礼儀正しくソファーに座っていた。

ホームの中に焰の姿は無い。恐らくまた別の場所でモンスター相手に憂さ晴らししているのだろう

『よく来てくれたな、少年。私はてっきり二度とここには来ないと思っていたが？』

ラビィの頭に停まり、バーカードが歓迎の言葉を口にする。するとハジメは不満気に顔を曇らせながら、

「バーカードさんは卑怯です。こんなメール貰ったら来ない訳にいきません」

と口を尖らせた。

少年が『エデン』に繋いだ時に届いていたメールには『《悠久の監視者》がどうなったかラビィに調べさせた。もし興味があるならいつでも（トロイ）に来ると良い』と書いてあったのだ。

『フッ、恐らく君が今1番知りたい事だと思ったのでな。だが、それでも来てくれるかどうかは五分五分だと思っていた』

あまり悪びれた様子もなくバーカードが頭を下げると、ハジメは顔を強張らせたまま俯いてしまった。

少年を『トロイ』に呼ぶ様にと指示をしたのは、WB社だった。バーカードは、指示の通りに行動しただけだったが、やはり消えた身内をダシに使って呼び出したのは良くなかったかもしれない。彼がノイズに対抗出来る結一の手段なのは理解している。だが、元はと言えば少年を巻き込んだのはバーカードのミスのせいである。それにまだエンゴウとの戦いから3日しか経っていないのだ。恐怖が抜けていないかもしれない。

（やはりこんなやり方は私の主義では無いな）

柄にも無く後悔してバーカードが長い首を左右に降る。

気付いていなかったが、焦っていたのは焔だけでは無く自分らしい。

『悪かった。監視者の情報を聞いたらすぐに帰ってもらっても良い。』

「いえ、兄ちゃんの事も知りたいけど・・・今日はバーカードさんにどうしても伝えたい事があって来たんです」

謝罪するバーカードの言葉をハジメが強い口調で遮る。

面食らったバーカードが少年の顔を見ると、ハジメの眼には今までに無い強い光が宿っている。

それは決意の光――。人が何かを決めた時に見える意思の表れだ。

『ほお、私に伝えたい事とは？』

「はい。ボクを――ボクを【ゴースト・ハッカーズ】に入れて下さい」

(続く)

FILE..16 『天使（エンジェル）』

ハジメの言葉にバーカードはもちろんラビィでさえも驚いて言葉が出なかった。一瞬、『トロイ』内が静寂に包まれる。

『ほお、少年が私達の仲間になってくれると？』

言いながら気を取り直したバーカードが、ハジメの眼を真っ直ぐ見つめる普段の気弱な彼なら、白竜の鋭い眼光に眼を逸らしてしまうだろう。

だが、今の少年は緊張した面持ちはあれど決して怯まずバーカードの視線を受け止めていた。

『ふむ、良い眼をしている。どうやら決意は本物らしいな。』

だが、一体どうして我々に協力してくれる気になった？君は闘いを好むタイプでは無いと思っていたが・・・』

「あつ、それはー」

バーカードが聞くとハジメは何故か顔を伏せてしまう。

しかし、何度か言葉を飲み込む様な素ぶりを見せると、また顔を上げて話し始めた。

「ボクも最初はこのままゲームを辞めるつもりだったんです。だけどバーカードさんの話を聞いて、シュウ兄ちゃんが消えた原因は『エデン』の中にしかないって事が分かった。

ならバーカードさん達の仲間になってシュウ兄ちゃんを助けたいって思っただけです。

でも、やっぱり闘うのは怖かった。・・・だから彼に相談したんです」
『彼？』

「はい。この世界の案内人――ウィングに」

ハジメが（トロイ）に行く少し前、少年はゲームを繋ぎマルコロ大聖堂に降り立った。教会には数名のユーザー達がいて、口々にこの前何故かクロスピアの港に入れなかった事を話している。

ノイズの事を隠しておきたいWB社は

「一時的なサーバーダウン」と言っているが、納得出来ないユーザー達もいるのだろう

「ウィング、いるの？」

『お呼びですか？冒険者・ハジメ』

ハジメが呼ぶと、即座に大聖堂の天井に羽根の生えた天使の少年が現れる

中世をイメージした大聖堂の中に、彼がいるとまるで本物の様だ。

「来てくれてありがとう前にシュウ兄ちゃんに聞いたんだけど、君はAIなんだよね？」

『はい。確かに僕は自分で考え、どんなトラブルにでも対応出来る様に、WB社に作られた人工知能ですがそれが何か？』

光り輝く笑顔でウィングが頷くと、ハジメは彼に自信が抱えている悩みを話すべきかどうか、考えた。

本当に馬鹿げた事をしているのかもしれない。人工知能とは言え、ウィングはただの機械だ。分からないと言われてしまったらそれまでである。

だが、それでもハジメは聞きたかった。バーカード側の人間では無い第三者の意見を。

一瞬躊躇したハジメだったが、すぐに顔を上げると天井に浮遊する天使の少年に意を決して話し始めた。

「君に聞きたいんだ。例えば・・・そう、例えば自分の大切な友達がモンスターに連れ去られたとする！

それを助けられるのは自分しかない。でも、そのモンスターはとってもレベルが高くて、ひよっとしたら友達を助けられないかもしれない。そんな状況になったら・・・君は助けに行く？」

『モンスターがユーザーを？それは何かのバグですか？』

ノイズの事がバレない様に精一杯考えて言った例えを、単なるゲームのトラブルと認識してしまったウィングにハジメは思わずズッコケる。

やっぱりAIに相談なんて無理か？と諦めかけたがすぐに立ち上がり、

「違う！例えだよ。例えばそう言う展開になったら君ならどうするかって事！」

笑顔の天使にもう一度説明した。どっち道無茶な相談なのはハジメだって分かっている。だから駄目元でやってきたのだ。

しかし、ハジメの言葉を聞くとウィングはようやく理解出来たのか頷いて

『なるほど、例えですか？それならばハジメへの回答は簡単です。

答えは

「イエス」ですから』

と、笑顔で答えた。

即答である。しかも聞いたハジメの方が驚く程なんの躊躇も無い清々しい答え方だった。

「助けに・・・行くんだひよっとしたら死んじゃうかもしれないの

に？」

『はい、それが僕の存在理由であり、役割ですから』

ウイングが答えると、彼の後ろに、小さな窓が現れ様々な場所の景色が映し出された。立体映像である。

ハジメは行った事が無いが恐らく全て『エデン』の映像なのだろう。中世の教会を模したマルコロ大聖堂に映し出された外の景色は、ウイングの姿も相俟って何とも幻想的な雰囲気醸し出していた。

『ハジメ、僕にとって最も大事な物はこのエデンの世界でありその世界をプレイしているユーザー達です。』

ユーザー1人1人がこの世界で出会った事の無い仲間と出会い、絆を深めながら冒険をする。僕はその時のユーザー達の楽しそうな顔が大好きなんです。

だからそんなエデンの世界を悪用する悪質ユーザーやバグは僕は決して許しません。

この世界とユーザー達を守る。それこそが僕の存在理由であり、生き甲斐だからです。

だから、大切なユーザーがモンスターにさらわれたら僕は闘います。例えそれで存在が消去される事になっても答えは

「イエス」です』

ウイングの言葉にハジメは何もせず聞いていた。

ハジメだけでは無い。

大聖堂の中にいた他のユーザーまで彼の話に耳を傾けていた。それだけウイングの言葉には慈愛と決意の強さが込められていた。自分を省みず、誰かを助けようとする強い気持ち――。それはまるでいつも側にいてくれたシュウに似ている。そう思った瞬間、少年の中にあれ程あった悩みと怯えが一瞬で消えていた。

「そっか……。そうだよね！」

拳を握ったハジメが顔を上げる。少年の瞳には力強い光が宿っていた。今までのハジメには無かった勇気と決意の光である

『どうやら僕の助言はもういらない様ですね』

ハジメの表情を見てウィングも肩を撫で下ろす。彼にも少年が変わった事がすぐに分かったのだろう。

「うん！ありがとうございます、ウィング！君に相談したら何をしたら良いか分かったよ。

ボクにどこまで出来るか分からないけど、やれる事を精一杯やらなくちゃ駄目なんだ！」

静かではあるが強い口調で、ハジメがつぶやく。

シウは自分を助けて犠牲になった。なら今度は自分が助ける番だ！それにせつかく始めた『エデン』の世界を、まだまだ冒険してみたい！

少年の悩みが解決したのを知って、ウィングもまた上空で満足した笑みを浮かべていた。その時――

「ククク・滑稽だねえ」

突然、人を馬鹿にした様な笑い声が大聖堂内にこだまする。見ると聖女サラ像の前に新たなゲートが開き、二人のユーザーが立っていた。

一人は獣人の、一人はピエロの姿をしたユーザーである。どうやら彼らがログインしたのをハジメが気付かなかったらしい。ハジメが驚いていると、笑った方のユーザーが後ろに手を組みなが

らゆつくりとこっちに近づいて来た。

「こんな機械に相談して何をすべきか分かったなんて実に滑稽だ。そう思わないかい？マリオ」

「アハハハ！滑稽だ♪滑稽だ♪ケルビム様の言う通り☆」

ケルビムと呼ばれた男の言葉にハジメがムツとする。

ケルビムは、左右の眼の色が黄色と緑に別れるオッド・アイの猫の獣人だった。

紫と白の体毛とスラリとした体に白銀の胴当てを付け、背には神様が乗せてる大層な黄金の輪っかをしょっている。

これだけでもかなり目立つが、右腕だけに胴当てと同じ白銀の鎧を纏い、強固な鎖で何重にも巻き付けており、肩当てには5本の拷問針まで装着させてある。

それも本人のこだわりなのか？聖と邪が一体になった様ななんともアンバランスな装備をしていた

「ウイングに相談して何が悪いのさ！」

「悪い？別に悪いとは言っていないさ。ただあんな物、世界初のA Iとか言われているが所詮このゲームのために作られた機械じゃないか。そんな物に人生相談するなんて、お笑い草だと思ったんでねえ」

「アハハハ☆面白い♪面白い♪」

ケルビムが指でウイングを指しながらほくそ笑むと、後ろにいたマリオと呼ばれたピエロのユーザーがクルクルと踊りながら笑う。

こちらは王子様みたいな白赤緑の三色を基調にした高貴な服に白タイツ、胸には星のワッペン、頭には王冠の代わりに三日月形の緑の帽子を乗せてある。

綺麗な金髪と幼い感じの顔は普通に見れば美男子の様なのだが、真っ白のメイクと右眼に書いてある真っ赤な星のペイントがそれを見事に隠してしまっている。

ひよっとしたら『エデン』のエディットの中にピエロの姿が無かったのかもしれない。

こちらは無理やりピエロを作った様な面白い姿をしていた。

『冒険者・ケルビム、ハジメも喧嘩は止めて下さい。ユーザー同士が争ってもお互いが傷つくだけです!』

険悪な空気の中、ウイングが止めに入る。自分の事で争いが起きるのが悲しいのか、先程の笑顔は今の天使には無かった。

「別に喧嘩を売っている訳じゃないよ?だが確かに、限りある時間をこんな所で浪費するのは愚の骨頂だ。

私達は人生相談なんかせずゲームを楽しむとしようか?マリオ」

「アハ、アハ、アハハ☆バイバイ♪♪」

ウイングに諭され、一瞬不機嫌な顔をしたケルビムだったがすぐに澄ました表情に戻るとマリオを引き連れて大聖堂から出ていってしまう。

ハジメはただ二人の後ろ姿をア然としながら見送る事しか出来なかった――

『なるほど、そんな事が』

ラビイの頭に止まったままバーカードが長い首を振る。話を終えたハジメもフゥとため息をつき、その場にあった椅子に座り込む。

ラビイのキーボードを叩く音だけがカタカタと『トロイ』にこだましていた。

「はい。最後ウイングに嫌な思いをさせてしまいましたけど、彼の言葉のおかげでボクも決心が着きました!

ボクもシュウ兄ちゃんを助けたいんです。だからボクを《ゴースト・ハッカーズ》に入れて下さい！お願いします！！」

姿勢を正した少年が改めて頭を下げる。今までシュウの後ろに隠れてばかりいたハジメの決意ある姿にバーカードはフツと口元を緩ませた。

『闘いを嫌っていた少年にそこまでの決意をさせるとは、さすがはウィングと言った所か。』

もちろん我々は君のメンバー入りを歓迎しよう』

「えっ！ほ、本当ですか！！！」

バーカードの言葉に眼を見開いたハジメが顔を上げる。だがパーティーのリーダーである白竜はすぐにまた長い首を振った

『だが、君を【ゴースト・ハッカーズ】のメンバーにするにはある人物の許可が必要なのだ。ノイズ事件の依頼者であり、我々のボスでもあるWB社のな』

バーカードはそう言うトラビィの頭を口で軽く小突く。

するとトラビィは小さな体を椅子から下ろし、入口から右側、鷹のマークが施された部屋の扉を開けた。

そこはバーカードしか入る事の許されない秘密の部屋だ。

『だから今から君にも会わせよう。』

だが覚悟した方が良い。この部屋に入ったらもう引き返す事は出来ないのだから』

なんの感情も籠っていないバーカードの言葉に、ハジメは思わず唾を飲み込む。

だがまた拳を力強く握ると、意を決した様に一步を踏み出した。

（続く）

FILE..17 『依頼者（クライアント）』

秘密の部屋に入った途端バーカードが頭の上に乗って来た。どうやらラビイは入らないらしい。

『この部屋に入れるのは私と新たにメンバーに入る人物だけだ。だから焰もラビイもこの部屋には一度しか入った事が無い』

ーガチャ。

ドアが閉められると辺りは静寂に包まれた。一面真っ暗で何処に何があるのかも分からない。

ただ、バーカードの声の響きからそんなに広く無い部屋の中にいる事だけはハジメにも分かった。

『顔合わせをする前に君には告げておかなくてはならない事がいくつかある。』

一つは私はこれから会う人物の事をクライアントと呼んでいる。WB社の人間と言う事以外私もよく知らない謎の多い人物だ。

そしてもう一つは、恐らく君に不快な思いをさせると思うが決して怒らず彼と話すのは私にまかせて欲しい』

「は、はい」

バーカードの言葉にハジメが頷くと、真っ暗だった部屋に青白い明かりが灯る。その明かりはあつという間に小さな部屋を照らし少年とバーカードの姿を写し出した。

「わぁ・・・」

秘密の部屋は、外と中を隔てるドアに狭い通路、そして円筒型に広がる人が二人でいっぱいになりそうな小じんまりとした部屋で、壁が全て青一色に統一された部屋だった

「不思議な部屋ですね？」

『中央にある球体に触れてくれ』

眼を丸くしながら周りをキョロキョロと見回していたハジメだったが、バーカードに促され慌てて前に進む。

部屋の中央には何故か宙に浮いているサッカーボール大の球体があり、これまた真っ青だった。

少し緊張しながらもハジメが青い球体に触れる。すると地面から一本の光の輪が現れ、その中から巨大な人の顔が現れたのだ。

「うわぁ!!」

『驚く事は無い、ただの立体映像だ。――例の少年をお連れしました、クライアント』

驚いた少年を見て苦笑するバーカードだったが、すぐに真面目な顔になり青い球体に飛び移る。

すると、今まで瞼を閉じていた巨大な顔がギョロリと眼を見開き、二人の方を向いたのだ。

【私が指定した日から三日も遅れたな？ バーカード】

変声機でも使った様な低い潜った声だ。その仮面の様な表情の無い顔と相俟って余計不気味である。だが、バーカードは気にする様子も無く、すぐに頭を深々と下げた。

『申し訳ありません。少年が今までログインしていなかったもので』

【私はどんな手を使ってでも呼び出せと言った筈だ。
お前程の技術があれば彼の自宅を特定する事くらい簡単だろうに・
・。まあ良い、事は刻一刻を争う。以後注意したまえ】

何とも不思議な光景だった。あのバーカードが敬語を使い、巨大な顔に謝罪しているのである。

それだけで、このクライアントと言う男が特別な存在であるとハジメにも理解出来た。

【では本題に入る。ユーザー・ハジメ。君がここにいると言う事はゴーストハッカーズの仲間に入る意思があると見て良いのだな?】
「は、はい!」

いきなり話題を向けられて少し驚いたハジメだったが、それでも怯まず力強く答える。
言葉の端々に見える傲慢さが、ハジメの好きになれそうなタイプでは無いがここでヘソを曲げてもしようがない。

【よろしい。WB社は君のメンバー入りを承認する。以後、私の指示に従って行動する様に】
「はい!ありがとうございます!」

あっさりと言って良い程簡単なメンバー入りにハジメはその場で跳び上がって喜びたいのを我慢しながら頭を下げた。
これでようやくシュウを助けられる様になったのである。
だが次のクライアントの言葉は、驚くべき物だった。

【では早速君に最初の指示を伝える。
今すぐそのキャラをWB社に明け渡し、ノイズ事件の事は全て忘れたまえ】

「なっ!!」

冷たく言い放ったクライアントの言葉にさすがのハジメも頭に血が上り、思わず詰め寄ろうとする。だがバーカードがすぐに小さな片翼を広げ、怒り心頭の少年を制した。

『待って下さい。それは一体どう言う事ですか?』

少年の心境を代弁する様にバーカードが冷静な口調で問い質す。その体に似合わない頼もしい姿にさっき彼と交わした約束を思い出し、ハジメはグッと怒りを抑えた。

【さっきも言った筈だ。事は一刻を争う事態だと先のクロスピア閉鎖事件でユーザー達の間にも、疑惑を持つ者が始めている。WB社としては早急にノイズ事件を解決しなければならぬ。

そこで、私もエンゴウと呼ばれるモンスターとの闘いの画像を見せてもらったがパワー、耐久性、スピード、全てに於いてハジメのキヤラはエデンの限界を越えていた。ノイズに対抗出来る素晴らしい力だ。

ならば直ぐにでも彼のキャラを回収し、その力の秘密を究明する事が解決への1番の近道ではないかね?】

クライアントの言葉には有無を言わせない強さがあった。それが当然だと言わんばかりの口ぶりである。

だが、バーカードは直ぐに長い首を降った。彼が呆れた時の癖である

『解析なら私もさせています。それより今大事なのは彼の力を借り、少しでも被害を抑える事ではないでしょうか?』

【君は下手をしたら両刃の剣に成り兼ねない危険なおもちゃを、子供に持たせると言うのかね?】

『彼なら大丈夫です。もし何かあった場合は、私が全責任を負います』

クライアントの命令にバーカードも一步も引かない構えだった。静かながらも二人の意見は真っ向から対立したのである。

どれぐらいの時間が経ったのだろうか？実際には1・2分だったのだろうか二人が押し黙り、互いに睨み合ってから永遠とも思える重苦しい時間がその場に流れた。

そのあまりのプレッシャーに耐え切れず、ハジメが今にも叫び出そうとした瞬間、クライアントが突然

「フン！」と鼻を鳴らした。

【良いだろう。ならばハジメの面倒は全て君に任せる。だがこれ以上被害が拡大した場合、その時は私の指示に従ってもらうから覚悟したまえ。

解析の方も結果が出次第すぐに報告する様に・・・良い結果を期待している】

言いたい事だけ言うと、クライアントは光りの輪と共に消えてしまった。どうやら通信が切れたらしい。

巨大な顔が消えた途端、緊張の糸が切れたのかハジメは大きく息を吐きながら、その場にへたり込んでしまった。

部屋に入ってからまだ大して時間が経っていない筈なのに、そんな事忘れさせる程濃密な出来事だった。

『大丈夫か？少年』

「ああ、はい！なんとか・・・」

自分を氣遣ってくれる白竜に肩に乗られ、ハジメは頭を掻きながら笑う。

本当は今の顔合わせだけでドツと疲れたのだが、何もしていないのにそんな事言える訳もない。

『あまり大丈夫そうには見えないがな。とにかく、君はこれで我々《ゴーストハッカーズ》のメンバーだ。よろしく頼む』

少年の強がりには苦笑しながら、バーカードが手の代わりに小さな翼をサツと差し出す。

その動作に、一瞬意味が分からずボケーンとしてしまったハジメだったがすぐに顔を明るくし、バーカードとがっちり（握手）をした――。

「お帰りなさ～～い！」

部屋から出るとコンピューターに向かっていたラビイが出迎えてくれた。見ると側にはふて腐れた顔をした焰も立っているどうやら憂さ晴らしが済んだらしい。

「・・・その部屋から出て来たって事はクライアントに認められたって事かよ」

壁に寄り掛かりながら焰がハジメをジロジロと見る。文字通り刺す様な視線がとてつもなく痛い。

『そうだ。彼は正式に我々の仲間となった。以後力を合わせノイズ事件に挑んで欲しい』

「チッ！」

少年の肩に乗りながらバーカードが説明すると、あからさまに嫌な

顔をして舌打ちをする焰。だがそれ以上は何も言わずそっぽを向いてしまった。

『ラビィ、私が部屋にいる間に何かあったか？』

「あい、情報屋さんのいるエターナルステージが見つかりました。連絡を取ったら解析はとくに終わってるから取りに來いだそうです。」

「エターナルステージ？？」

ラビィの言葉の中に聞き慣れないフレーズがあったので、ハジメが首を傾げる。

見ると巨大コンピューターの画面には見た事の無い森が映し出され、隅っこに

「帰らずの森」と書いてあった。

『そう言えばまだ少年には説明してなかったな。エターナルステージとは（エデン）に存在する

「目的の無い場所」の事だゲームとはまるで関係の無いのに何故かエデンにはこう言った場所が無数に存在する』

「あい、ですがエターナルステージは日によって現れる場所が違うので見つけるのが大変なんです！それにエターナルステージはたくさんあってWB社でも全てのステージをまだ確認していません」「し、知らないんですか？ゲームを作った会社なのに？」

俄かにハジメは信じられなかった。クリア後のお楽しみのためにミニゲームやイベントを用意してあるゲームならたくさんあるが、目的もなくただ存在するだけの場所があるゲームなんて聞いた事が無い。

だが、少年の質問にバーカードは巨大コンピューターの画面を見ながら頷いた。

『それがこのゲームの不可解な所だ。何故にはこの様な場所が存在するの？』

ユーザーの中にはその謎を解くためにプレイしている者達もいる。そしてわざわざエターナルステージに住み着いている変わり者もな」

「あいゝそれが私達の情報屋さんですゝ」

どうやらその変わり者がいる場所がこの「帰らずの森」らしい。ハジメはまだ自分が知らない色んな物が『エデン』にはあるのだと知った。

『よし、ラビィ。』

「黒き衣の魔女」に連絡を取ってくれ。”例の少年を連れて行くから楽しみにしている”とな」

「あいあゝい！了解しましたゝ！！」

袖から全く出ていない手をブンブン振りラビィがキーボードを叩く中、ハジメはゴクリと唾を飲み込む。

この冒険が、ある運命の出会いになるとは少年はまだ知らない――。

――適性Level?? 帰らずの森――

「はあはあはあ・・・！」

深い森を一人の男が走っていた。タイプは戦士だろうか？着ている鎧はボロボロである。

森は時折深い霧が現れ、走っている男の方向感覚を狂わせる。もはや男は自分が一体何処にいるのかも分からず、無我夢中で走っていた。

――ズギュン――！！

「ぐわあ!!」

と、突然銃声が聞こえたかと思うと、男は足を撃たれて倒れ込んだ。すぐに立ち上がろうとするが、足の怪我のせいで上手く立ち上がる事が出来ない。

「ヒヤッハッ!! 命中っス!!」

苦痛に男がもがいていると、なんと木の上から二つの影が降りて来た。その二人の姿を見て男がビクッと体を震わせる。

「もう終わり? ちょっとつまなくな〜い!」

「他のメンバーは全員殺っちゃったんで、コイツが最後の獲物っス!」

「た、助けてくれ!! 頼む!!」

二つの影が近づくと、恐怖に耐え兼ねた男がその場で土下座するが、二人は思わず笑い出す。

怯えている相手を見て楽しくて仕方が無い様だ。

「キャハハハ!! マジ、コイツ有り得ないでしょ!」

「なあ、頼むよ! だいたい、なんでこんな事するんだ? 俺達が一体何をしたって言うんだよ!」

「ーなんでこんな事するって?? 決まってるだろ・・・」

突然だった。二つの影の間にまた一つ影が落ちて来たのである。

新しい影は土下座している男にゆっくりと近づいて行く。そしておもむろに男の目の前で立ち止まり、持っていた巨大な斧を振り上げた。

「楽しいからだよ・・・」
「ーズガン！！」

振り落とされた斧の下にはゲートと同じ光りの輪が現れ『GAME OVER』と言う文字が浮かんでいる。
それが消えると、男がいた場所には白銀の剣と小さな金貨の袋が置いてあった。

「だから言っただろ？お前ら・・・」

金貨袋を持ちながら新しい影がつぶやく。その傍らで二つの影がニヤニヤと笑っていた。

「初心者狩りはハマるってさ」

FILE..18『帰らずの森（エターナルステージ）』

――適性Level?? 帰らずの森――

エターナルステージ、帰らずの森……。時折現れる深い霧に隠されたこの森の奥に一軒の屋敷がある。キノコを模した不気味なその屋敷こそ『エデン』でも有名な情報屋黒衣の魔女の住家だった

「奴らがいる場所だね？ 分かった。直ぐに見つけ出してやるよ……」

屋敷の中では客との商談が始まっていた。

不気味な外見である屋敷だが中はかなり現実的である。

豪華なシャンデリアが照らす部屋の中央には

「トロイ」の倍はありそうな巨大なコンピューターがあり、その後ろには商談用のレトロなテーブル。さらに後ろには戦艦の指令室にありそうなこれまた大きなキーボードが備え付けてあり、それを一人の少女が黙々と打ち込んでいる。

少女の後ろ、もう一段上にある巨大キーボードには男が座っていたが、こちらは興味が無いのか退屈そうに欠伸を噛み殺していた。

「感謝する。報酬は追って貴殿の口座に振り込んでおく」

黒いローブを被った鷲のクチバシの様な鼻をした老婆が小さなフロップीडィスクをテーブルに置く。それを受け取ると、客の男は足早に入口に向かって歩き出した。

『正義』

それが男の背中に書かれていた文字である。何故そんな文字を背負

っているのか分からない。

だが、純白の羽織りに緑の髪を一つにまとめた長身の男の立ち振る舞いはさながら昔の侍の様だ。

「一つ聞かせな。アンタなんでそんなにあんな連中にこだわるんだい？」

薄気味悪い笑みを浮かべながら黒衣の魔女が質問をする。すると侍は入口の前で立ち止まり、魔女にきっぱりと言い放った

「こだわる理由など決まっている。奴らは私が倒さねばならん悪だからだ！！」

「チツキショー！！なんでこんな事になってんだー！！」

・・・同じ頃。帰らずの森の中では男の絶叫が響き渡っていた。

焰だった。

側には何故かいつも止める役のバーカードがない。いるのは木に隠れてオドオドしているハジメだけだったー

何故ハジメと焰が二人でこの森に来ているのかを語るには少し話を戻さねばならない。

それは先程のクライアントとの対面が終わった直後の事だった。

『黒衣の魔女の元には少年と焰の二人で行ってもらいたい』
「なっ！！」

その瞬間、ほぼ同時にハジメと焰がバーカードの方を見た。ハジメは驚きの顔で、焰は怒りの顔である。それが二人の気持ちを如実に

現していた

「ふっざけんな！！なんで俺がこんなガキのお守りしなきゃなんねーんだよ！？」

噛み付きそうな勢いで焰が詰め寄って来た。言葉に出さなかったが、ハジメも同じ気持ちである。

初対面以来、いつも乱暴な態度を取り続けている彼を少年はどうしても好きになれないのだ。

『今言った筈だ。少年はもはや私達のパーティの一員だと・・・。仲間同士が行動を共にするのは当然だろう？』

それに私は調べねばならない事がある。だからお前に少年を黒衣の魔女の元まで連れて行って欲しいのだ』

ギリギリと言う焰の歯ぎしりがハジメの耳元にまで聞こえて来た。褐色の肌は小刻みに震え、真っ赤な髪は今にも燃え上がりそうである。

だがラビイの頭にいるバーカードはいかにも冷静だ。ひよっとしたら（トロイ）ではこんな事が日常茶飯事なのかもしれない。

『安心しろ。お前も知っての通り、エターナルステージにモンスターなどいない。』

ちょうど良い機会だ。二人で親睦を深めて来ると良い』

愛らしい姿に似合わず、ニヒルに笑いながらバーカードが淡々とつぶやいた――。

そして、二人は渋々この森にやって来たのである

「くっそ〜！こんな辛気臭い所にガキと二人っきりなんて冗談じゃないぜ！」

ぶつくさ文句を言いながら焰が森の中を進んで行く。

その後を、木に隠れながらハジメがついていくと言うなんとも面白い構図が出来ていた。

「おいっ！！」

「は、はい！」

それまで一人でドンドン先へ進んでいた焰だったが、不意に立ち止まり少年の方に振り返った。

いきなり呼ばれてハジメが驚いた事は言うまでも無い。

「何コソコソしてんだ？こっちこいよ。取って食ったりしねーから！」

「あ・・・は、はい」

不機嫌な顔をして呼ぶ焰を見て、仕方無くハジメも隠れていた木から出て来る。

本当は嫌なのだが彼の性格からして従がわねば怒るに違いない。

「ま、ひよっとしたら俺じゃなくて別の奴に食われるかもしれねーけどな」

「はい・・・え！？」

それまで仕方無く受け応えていたハジメの表情が一変した。この森にモンスターはいないとバーカードに聞いて安心していただけである。

「ここ、モンスターいるんですか!？」

「モンスターじゃねーよエターナルステージには時々、初心者狙いのアウトロー達がいんのさ」

(アウトロー)と言う初めての言葉に少年の頭にいくつもの？が浮かび上がる。ハジメが理解していないのが分かったのか、イラついた様に焰が舌打ちをした。

「本当に何も知らねーんだな!？」

良いか!アウトローってのはユーザーを襲うのが目的でゲームやってる連中の事だ!

ユーザー同士で戦うと、勝った奴は負けた奴のレアアイテムや所持金を半分奪う事が出来るから俺達はそんなゲス野郎達をアウトローユーザーって呼んでんだよ」

焰の説明を聞いてハジメの頭にはシュウの言葉が思い出された。

「この世界はユーザー同士の戦いもある」と・・ゲームの説明書にも書いてあったが、まさかそれを目的にしている人達がいるなんてハジメは俄かに信じられない気持ちだった。

焰の説明は続く。

「このエターナルステージは神出鬼没だからな。隠しステージと勘違いしてレアアイテム目当てに入って来る初心者が結構いんだよ。アウトロー達はそんな奴らを狙って待ち伏せしてやがる。

だから良いな!テメーは絶対俺から離れんなよ?Lv1のガキなんて恰好の獲物なんだからな!」

「は、はいっ!!」

口は悪いが、守ってくれる意思があるみたいなのでハジメは一先ず安心した。

焰の強さは、先のエンゴウ戦で見ていたので分かる。

怒鳴られるのは怖いが、彼の側にいれば取り敢えず安全だろう。と、その時だった。

コオオオオー！！！！

「うわっ！！！」

突然ハジメの眼の前が真っ白になった。森が深い霧に包まれてしまったのである。

辺りを見回しても焰の姿所か生い茂っていた木すら見えない。

二人の視界は完全に塞がれてしまったのだ。

「おいクソガキ！クソガキ！！むやみに歩くな！いるんなら返事しろ！」

突然の濃霧だったが、この場所に來た事のある焰は冷静だった。こう言う場合は相手に自分が近くにいる事を伝えるのが最優先である。だが何故かハジメから返事が無い。焰がおかしいと思い始めた時、辺りを包んでいた霧が晴れて來た。

「おい、クソガキ！大丈夫・・・夫か・・・？」

すぐに周りを見回した焰の顔色がサツと変わる。少年の姿が見えないのださっきまでそこにいたのである。

濃霧に包まれた少しの間に忽然と消えてしまったのだ。

焰がまた天を仰ぐ。

「だーかーらぁ・・・離れるなって言っただろおおがあぁー！！！！」

帰らずの森に再度、焰の怒号が響いたのだった。

「焰さん？ 焰さん！！ 何処ですか！？ って・・・あれ？」

一方消えた筈のハジメもまた必死になって焰に呼び掛けていた。

実はハジメは一步もその場から動いていなかったのである。霧が深くなった途端、焰の声が聞こえ無くなり不安になった少年はずっと助けを求めているのだ。

だが、霧が晴れて始めてハジメは愕然とした。さっきまでいた場所と全く景色が違っているのである。

少年は知らない間に別の場所へと移動していたのだ。

「そんな・・・なんで？」

ハジメの目の前にはさっきまでの鬱蒼とした森では無く、綺麗な花畑があった。

夜空に昇る満月の光に照らされ幻想的な景色が広がっている。

そして、花畑の中央には何故か子供が一人うずくまっていた。

「あっ！ ねえ、君！！」

ホッとしたハジメが子供に走り寄るが、子供は全く気付かず微動だにしない。

遠くからでは分からなかったが彼の周りや頭にはリスや蝶々、白い鳩など森の動物達が集まっている。

少年が動物達に気付いた時には既に手遅れだった

ーバサバサバサー！！

「うわっ！！」

無礼な乱入者に驚いて動物達が一斉に逃げ出す。
それにつられてハジメもまた腰を抜かしてしまった。

『動物達がいるから走らないで』

「言うのが遅ーい！って、あつ、ごめん」

最初から気付いていたのか？倒れた後に注意する子供に思わず突っ込んでしまったハジメだったが、慌てて言い直す。

今何処にいるかも分からない状況でせっかく会えた人物なのだ。

下手に警戒される訳にはいかない。

だが子供の方はそんなハジメの態度に興味が無いのか全く顔を上げない。

だが、チラッと少年の顔を見た瞬間、彼の表情が変わった。

『！？君は・・・！』

「え？え！な、何？どうしたの？？」

突然変わった子供の態度にハジメは状況が理解出来ない。

いくら考えてもハジメには理解出来ないだろう。彼とは会った事が無いのだから・・・。

だが、子供の方は違った彼にとってハジメは絶望的な状況を打ち破った奇跡の少年なのである。

まさか、こんな所で会えるとは予想もしなかっただろう。

『・・・ああ、そっか。初めましてだったね』

怪訝な顔をしながら首を傾げる少年を見て、子供は彼と初対面である事をようやく理解する。

よく分からないが何だか不思議な子だ、とハジメは思った。

彼の灰色の眼に見つめられると吸い込まれそうになる。それにエタ
ーナルステージに何故こんな幼い子が一人にいるのだろうか？
怪しい感じが満載なのに何故か彼が敵だとは思えない。

何故そう思うのか？いくら考えてもハジメの頭に子供は浮かんで来
なかった。

ーチャリン！！

頭が三日月の形をしている変わった杖を鳴らして子供が眩く。

『僕の名はエンドレス。ーよろしく、ハジメ』

エンドレスと名乗る子供が笑顔を浮かべ、ハジメを見る。

黒いローブを頭から被ったこの子供こそ、エンゴウ戦でハジメ達を
遠くから見守っていた男の子だった。

（続く）

FILE..19『無法者（アウトロー）』

「な、なんでボクの名を？」

『ボクはこの世界の事なら何でも知ってるからさ』

エンドレスの言葉に納得のいかないハジメは、また頭にいくつもの？を浮かばせる。

意味が分からないのに、何故か彼の灰色の眼を見るとそうなんだと思ってしまうのが不思議である

少年の顔を見て、魔法使いの子供は、クスッと笑った。

『・・・でもハジメがここに来た理由は分からないかな？どうしてここに？』

「あっ、そうなんだ！ボクにも訳が分からないんだけど、実は――」

何故だか分からないが、打ち解けてくれたらしいエンドレスにハジメは事のいきさつを話す。

お互いに相手の事をよく知らない少年二人は、暫く花畑の中で語り合っていた――。

「くそっ！あのガキ通信機くらい持ってろ！」

一方、帰らずの森の空には黒い翼を生やした焰の姿があった。

霧の深い森の中を探しても埒が明かないと判断した彼は、空中からハジメを探索しているのである

しかし、広大な森の中をたった一人見つけ出すのは彼にしても大仕事だった。

プルルル〜！プルルル〜！

と、突然焰の腕に付けていた通信機が鳴った。相手はラビィである。

「このくそ忙しい時に・・・！もしもし、なんの用だ！？」

（あい、ラビィです〜！ホムラさん、ハジメ君は見つかりましたか〜？）

ラビィののんきな声に焰の頭に血管が浮かび上がった。どうやらこの二人はとことん肌が合わないらしい。

「まだ見つかってねーよ！！こんな広い森で簡単に見つかる訳ねーだろうが！！」

（あい、早く見つけた方が良いかもしれませんが？その森で嫌な噂が広まってますから〜！）

「何？」

それまでイライラしていた焰の表情が変わる。彼は短気だが、ただのチンピラでは無い。強いだけでは（ゴースト・ハッカーズ）のメンバーは勤まらないのだ。

「なんだ？悪い噂って」

『その森で何人ものユーザーが襲われていると言う噂だ』

突然、通信機の声がバーカードに変わった。またラビィの頭から話しているのだろう。

『しかも襲われているのは全て好奇心で入った初心者ユーザーのパイティばかりだ。どうやらそこにはモンスター以外に厄介な連中がいるらしい』

「アウトローか・・・！」

通信を聞きながら焰は苦虫を噛み潰した様な表情になる。まさかさつきハジメに忠告していた事が本当になるとは、彼も考えていなかったのだ。

『エターナル・ステージではこちら側からは探索が出来ない。とにかく一刻も早く少年を見つけてくれ』

「了解・・・たくっ、あのガキ見つけたら一発ぶん殴ってやる！」

悪態を突きながらも少年の身を案じる焰は一掃スピードを上げ、帰らずの森の空中を翔けていった

『それは妖精のイタズラだね』

深い森の中を歩きながらエンドレスがつぶやく。ハジメは案内役をやってくれている魔法使いの少年の言葉に、首を傾げる

二人は今ハジメの目的地である黒衣の魔女の屋敷に向かって歩いていた。

「妖精のイタズラ？」

『この森で時々起こる現象の事だよ。深い霧がその中にいたユーザーを別の場所に運んでしまうんだ。まあ、滅多に起こる事じゃないから、あまり人にも知られていないけどね』

先を歩くエンドレスの説明に、ハジメは感心してしまった。自分より多分年下なのに彼は色んな事を知っているのだ。

さつきの

「エデンの事なら何でも知っている」と言うのも、あながち嘘では無いのかもしれない。

「へー随分この森の事を知っているみたいだけどエンドレスはよくここに来るの？」

それは何気ない質問だったのだが、何故か魔法使いの少年の肩がピクツと動いた。だが、鈍いハジメはその事に気付かない
エンドレスは顔を俯かせると、ほんの少しだけ歩みのスピードを上げた。

『・・・ボクは旅の休憩をするためにあの花畑に行くんだ。この主のいなくなった鳥籠の様な虚しい世界をさまよっていると時々疲れてしまうから・・・』

「さまようって、エンドレス仲間はいないの？」

魔法使いの言葉にようやく何かを感じたのか、ハジメが首を傾げる。
前を歩いているエンドレスが今どんな顔をしているのか少年には分からなかった。

『仲間はいない。友達なら昔はいたよ。掛け替えの無い大切な友達が・・・』

「ふうん。じゃあ、ボクもエンドレスの友達にしてくれないかな？」

突然のハジメの言葉に、エンドレスが『えっ?』とつぶやきながら少年の方を振り返る。

その驚きの表情を見て、ハジメはようやく彼の感情が通った顔を見た気がした。

『ハジメとボクが、友達に?』

「そう!ボクは思い出せないんだけど、エンドレスはボクの事知ってるんでしょ?それに今はこうして一緒に冒険もしてるだからボク

達、もう立派な仲間だと思っただけど……どうかな？」

少し照れながらハジメがエンドレスに手を差し延べる。それは普段人と話すのも苦手な彼からすればかなり大胆な行動だった。

一方、エンドレスの方はハジメが差し出した手をジッと見ている。まるでその手が神から差し出された手でもあるかの様に、彼は恐る恐る少年の手を握った。

『ボクなんかで良かったたら喜んで』

「ありがとう！こちらこそよろしく」

握手を交わした少年二人は、互いに笑顔を見せる。なんの壁も無くすぐに友情が芽生える所が子供達の良い所だ。

と、ハジメの眼がエンドレスの杖の先、菱形の赤きクリスタルに注がれる

何処かで、このクリスタルを見た気がしたのだ。

「あのさ、エンドレス。君の杖で浮いているそれは何？」

少年が聞くとエンドレスはまた俯いてしまう。だがすぐに顔を上げ、

『これは、ログイン・コア。いなくなった主から託された友情の証』
「?？」

エンドレスの難解過ぎる言葉にハジメは理解出来ない。少年が呆然としていると魔法使いの少年はまたクスツと笑って、

『ハジメにもいつか理解出来る様になるよ』

とつぶやいた。

ハジメにはエンドレスの言っている意味が分からなかったが、後に彼の言葉が本当になるとはこの時、少年は想像もしていなかった。

じゃれ合う少年二人を、遠くから観察する者がいた。

しかも肉眼では無くライフルのスコープで、である。

二人を観察する人影は、まるで獲物を狙う獣の様にニヤニヤと嫌な笑みを浮かべていた。

「ガキ二人がこっちに向かってるっス！蘭ちゃ・痛っ！！」

笑いながらライフルを持っていた人影が言うと、いきなり後ろにいた小さな人影が蹴り飛ばす。

木の上でハジメ達を観察していた人影は、危うく落ちそうになった。

「うわわわわっ！！ら、蘭ちゃん！危っ、危な！！」

「リーダーって呼べって言ってんだろ、殺すぞ？」

小さな人影が億劫そうに体を起こすと、隣にいたもう一つの影が今度はスコープを覗き込む。

その間に落ちかけていた人影が、何とか木の上にはい上がって来た。

「本当だ☆ちちょっと可愛くてタイプかもお！」

「くだらねー事言っただけで準備しろ。始めるぞ」

二つの人影に命令すると小さな影が木から飛び降りる。そして持っていた斧を肩に背負い、ニヤリと笑った。

「狩りの始まりだ」

暫く森の中を歩くと二人は開けた場所に出た。と言っても霧と周りを木々が覆っている以外何もない寂しい場所である。

『ここまで来れば後は真っ直ぐ行けば、黒衣の魔女の屋敷だよ』

エンドレスが広場の先が続いている道を指差す。この広く入り組んだ森の中を迷わずに案内出来るとはさすがだ。

「本当！？ありがとうエンドレス」

『良いさ。ハジメのためだからね。・・それじゃボクはこれで』

ハジメがお礼を言うとエンドレスはその場を去ろうとする。驚いたハジメが慌てて魔法使いの少年を呼び止めた。

「えっ！？ちょ、ちょっと待ってよ！エンドレス！！」

『ごめんよ、ハジメ。ボクは行かなくちゃいけないんだ。・・最近は見つかる間隔が早くなってきているから』

エンドレスが最後に喋った言葉は小さくてハジメには聞き取れない。だが少年が悲しい顔をしているとエンドレスは微笑して、

『大丈夫、ボク達は友達なんだ。またいつか会えるさ』

エンドレスの笑顔には優しさと一緒に、何か揺るがない決意の様な物も含まれていた。その表情に引き止める事は無理と悟ったハジメは、何も言えなくなってしまった。

「分かった。しょうがないね」

『ありがとう、ハジメ』

君も仲間と会えたら早くこの森を出た方が良いよ』

そう言うとエンドレスは足早に去っていく。だが魔法使いの少年は

深い森に入る前に立ち止まると、振り向かずにハジメに向かってまたつぶやいた

『鳥が来るから・・・』

「え・・・？」

エンドレスの最後の言葉をハジメは理解する事が出来なかった。ただ自分より小さな背中が深い霧の中に消えて行くのを、見送る事しか出来なかったのである。

たった一人残された少年は、急に不安と寂しさが募って来るのを感じた。

「ああ、もう！怖がってる場合じゃない！！しっかりしなきゃ・・・あれ？」

何とか自分を奮い立たせ屋敷に向かって歩き出そうとしたハジメだったがその足は僅か一步で止まる。

さっきまでは霧のせいで気付かなかったが広場の出口、屋敷へと続く方の道に何か倒れているのである。よく見ると、どうやらそれは人の様だ。

「うわっ！た、大変だ！おーい、大丈夫ですか！！」

慌ててハジメが駆け寄るとユーザーは木にもたれ掛かりながら苦しそうに呻いていた。顔は俯いているので見えないが腰まで伸びる白髪と、神主みたいな白装束を着ている少年は、すぐに【アイテム】から薬草を取り出すと傷ついたユーザーに差し出した。

「しっかりして！！これを使えば少しは元気になるよ！」
「う、うう・・・ありがとう・・・」

傷ついたユーザーが弱々しく差し出しされた薬草に手を延ばす。
しかし何故かその手は薬草を通り過ぎ、ハジメの胸元を捕まえた。

「馬鹿なルーキー君！」

「ーグイッ！！」

怪我をしているとは思えない力で、負傷ユーザーが強引にハジメを引き寄せる。見上げた顔には、呪いにでも使いそうな呪詛の仮面が付けられ、結一肌の出ている口がニタリと歪む。

空いているもう片方の手に握られているのは、なんと身の丈程ありそうな巨大な斧だった。

「オラァ！！」

闇色の刃が、かち上げる様に振り上げられる。だが咄嗟に危機を感じたハジメは、相棒のダブル・ダガーを取り出し攻撃を防いだ。

「ーガッン！！」

「うわっ！！あっ、ぐう・・・！！」

しかし、あまりの武器の大きさの違いに、ハジメは広場の中央まで吹き飛ばされてしまう。何が起こったのか理解出来ず、少年が苦痛に顔を歪めていると、肩に斧を背負った仮面ユーザーの隣に二つの影が近寄って来た。

「フィールド魔法『結界』展開！捕獲完了っス！！」

一人は男で肩からライフルを担いでいた。一つにまとめた髪のが風車みたいに四つに分かれ、眼にはサングラス。腕には降り注ぐ雨

に竜が吠えている変わったタトゥーをしている。

何処か軽い感じの男だがファッションにはこだわりがあるのか、着ている忍装束を上半身の部分だけ腰に縛り付けて、代わりに黒いシヤツの様な物を着ていた。

「あれえ？さっきいた魔法使いの子は？阿国、あの子と遊びたかったのに！」

もう一人は女でこちらも忍装束を着ていた。長くて銀髪の髪をツインテールにしながら、前髪で顔半分を隠している変わった髪型の少女である。

焰よりも黒い褐色の肌と億劫そうな口調や態度が彼女の我が儘な性格を表している様だった。

「ど、どう言う事？君達なんなの？」

奇襲を受けてフラフラに成りながらも、何とか立ち上がったハジメが当然の疑問を口にする。

見るといつの間にか、広場の周りには青くて透明な壁が囲んでいた。これでは広場から逃げる事も出来ない。

「ヒヤハハハッ！！こいつまだ俺達に嵌められた事気付いてないみたいっス！」

「うわ、ウザっ！！超空気読めなくない？？」

傷ついたハジメの様子が面白くて仕方がないのかサングラスと、くの少女が馬鹿笑いする。そして中央にいた仮面ユーザーがニヤニヤしながら少年に歩み寄って来た。

「デメエは俺達の縄張りに入ったんだ。だから狩られるのさ・・・」

この蘭丸様にな!!」

蘭丸と名乗った仮面ユーザーが一瞬でハジメの目の前に移動して来た。あんな巨大な斧を持っているのに、とんでもないスピードである。

ハジメの脳裏に焰が言っていたアウトローの存在が浮かぶ。だがそれを思い出した途端、少年は振り上げられた斧に吹っ飛ばされていた。

ーガキイン!!

「ぐっ! うわああーっ!!」

今度はまともに喰らってしまい、ハジメは入口に張られた壁に叩き付けられてしまった。蘭丸の後ろでまたしてもサングラスが爆笑する。

意識が遠退き、地面へと落下すると、受け止める様に少年の首を誰かが締め上げて来た。サングラスと一緒にいたくの一女だ。

「はいはい、まだ寝ないでよ? 阿国がトドメ刺して上げるから!」
ージャキーーン!!

悠々とハジメの体を持ち上げながら阿国の鉄甲から、何と鉄の爪が飛び出す。格好で分かっていたが、どうやら彼女の属性は忍者が得意とする技や武器が使える(アサシン)の様だ。

「な、なんで、こんな事を・・・」

息苦しさに言葉を詰まらせながらハジメが弱々しくつぶやく。目の当たりにしながらも、ノイズのモンスターでは無くゲームをプレイするユーザーがこんな事をするなんて信じられなかったのだ。

「何でって楽しいからやってるに決まってるじゃーん☆『エデン』の世界じゃいくらユーザー殺ったって犯罪にならないしー!」

悪びれた様子も無く阿国が鉄の爪を構える。何とかハジメも逃れようと抵抗するが、女とは思えない力で押さえ付けられているため身動きが取れない。

「阿国!! さっさと決めちまえ!」

「もう、ちよつと待ってよ! それじゃ、バイバイ? ルーキ君☆」

突き出された鉄の爪が少年の喉元目掛けて襲い掛かる。

ゲームオーバーを覚悟したハジメが眼を閉じた瞬間――。

ーヒュンヒュンヒュン!!

「キャッ! ちょ、何!？」

突然閉められていた首が放され、ハジメの体が自由になった。地面に屍餅を突きながら見ると、阿国が少年から距離を取っている。そしてさっきまでくの一がいた所には、刃が付けられた真っ赤なギターが地面に刺さっていた。

「悪いな? そいつをゲームオーバーにする訳にはいかねーんだ」

夜空に浮かぶ満月を背に黒い翼を広げる影があった。いつもは不機嫌そうな顔に今は不敵な笑みを浮かべている。

腕を組み威風堂々のその姿に、ハジメはようやく彼とこの森に来て良かったと思った。

「焰さん!!」

「たくつ、このクソガキが！散々人に迷惑掛けやがって」

少年の前に降り立つと、焰はアウトロー達を睨みつけたまま腰にぶら下げていた袋を投げて遣した
開けて見ると、中には上質なやくそうがたくさん入っている。

「使え！お前のレベルなら一枚で十分だろ」

「あ、ありがとう。でも焰さんどうやってここに？」

やくそうを使い元氣を取り戻したハジメが疑問を口にするのと、焰はフツと鼻で笑う。少年と話しながらも鋭い視線は片時もアウトロー達から外さない。

「空からお前を探してたらいきなり（アサシン）が使うフィールド魔法が現れたんだよ。まさかと思って立ち寄ったら、案の定このクズ共がお前を袋にしていたって訳だ」

「んだと？テメェ！！」

クズ呼ばわりされた事に蘭丸が激怒する。先程から見せるイラついた態度から見ても、あまり理性の多いタイプではない様だ

「俺達の狩りを邪魔しておいてただで済むと思ってるのか！？」

「バァーカ！ただで済まさねーのはこっちのセリフなんだよ！！」

蘭丸の威圧に全く動じず焰が地面に刺さったアックス・ギターを引き抜く

不敵な笑みを浮かべる表情には、戦いを好む獣の闘争心が満ち溢れていた

「こっちは森の中散々飛び回ってイライラしてたんだ……。覚悟

しな？ テメエらに吊いの歌を歌ってやるぜ！ ！
」

（続く）

FILE..20 『追跡者（チェイサー）』

ギヤアギヤアギヤアー！！！！

「む？」

焰とアウトロー達の闘いが今始まろうとしていた頃、帰らずの森の入口では先程黒衣の魔女と会っていた客の姿があった。背中に『正義』と言う大層な文字を背負った侍はクロスピアに繋がっているゲートに入ろうとしていたが、不意に飛び立った鳥達の姿を見てその足を止める。

この静かな森で、鳥達が騒ぎ出すのは珍しい事だった。

「不吉な……。何かの前触れか？」

顔をしかめながら空を見上げる侍。だがすぐに気を取り直すと地面から浮かび上がる青い光に入って行った――。

「いくぞ！オラァ！！」

目の前にいるアウトロー三人に戦闘開始を告げると、焰は大きく息を吸い自らの体内に燃え盛る炎を作り出した。

（魔物使い）だけが使える彼の得意技、焰炎弾だ

「オラァ！！」

ーードガン！！！！

火炎弾が吐き出されたのと同時にアウトロー達が一斉に散る。激しい爆発の後、一人だけ逃げ遅れたサングラスを狙って焰がアックス・

ギターを奮いながら突っ込んで行った。

「ーガギイン！！」

「ウツヒョーイ！！」

持っていたライフルで辛うじてサングラスがアックスの刃を防ぐが、持ち前のパワーで焰が押して行く。広場の中央にいたアウトローはあっという間に出口の近くまで追い詰められてしまった。

「ひえー！！ちよっ、シヤレになんないっスー！！」

「オラオラどうした！！ん？テメエのそのタトゥーは・・・」

と、突然サングラスの肩に彫られたタトゥーを見た焰の顔色が変わる。それと同時に、二人の動きも止まってしまった。

「テメエ・・・！（ドラゴンレイン）のメンバーか？」

「そうだよ！！」

焰の問いに対する答えは眼の前にいたサングラスからでは無く、空中から聞こえて来た。

見ると空中へとジャンプした蘭丸が、巨大な斧を振り上げている。

素早く状況を判断した焰は、その斧が振り下ろされると同時に後ろへと後退した。

「俺は（ドラゴンレイン）1番隊隊長、蘭丸様だあ！！」
「ーブーン！！」

間一髪避けた斧はサングラスの鼻先を掠める。だが直ぐに蘭丸は焰との距離を詰めて来る。

大きさが違う二つの斧の刃が合わさり、激しい火花が散った。

「くっ！おい、一つだけ答えろ！！テメーらのチームリーダーはこの事知ってんのか！？」

刃を重ねたまま焰がまた質問をする。何故かサングラスのタトウーを見てから様子がおかしい。

妙な事を聞かれて一瞬呆気に捕われた蘭丸だったが、直ぐにニヤリと口元を歪めて、

「何が知りたいか知らねーが俺達のボス、天雨様は寛大な方なんだ。ユーザー襲おうが何しようが好きにしろってさ！！」

と吐き捨てた。それを聞いて焰が小さく舌打ちをする。一瞬出来た隙に何を思ったか蘭丸はその場からジャンプして一気に離れた。

「今だ、才蔵！やれえ！！」
「ーバキュン！！」

高くジャンプした蘭丸が手を上げた途端、銃声と共に焰がいた場所が黄色い煙に包まれた。

「うわっ！！」

慌てて口を塞いだ焰だったがその時には手遅れだった。上げようとした手が動かないのである。

気付くと体はまるで石の様に固まってしまっていた。

「チキシヨ・・・痺れ弾・・・か・・・よ！」

「ヒヤッハッ！！その通り、油断大敵雨あられっス！！」

舌まで麻痺してしまい、焰が上手く話せずにいると、何処からか才蔵と呼ばれたサングラスの声が聞こえる。だが声はするのだが姿が見えない。

周りの木の中に隠れてしまった様だ。

「どうだい、気分は？ テメーは骨がありそうだからなあ？ 後で俺達に盾突いた事たっぷりと後悔させてやる。

だがまず、狩りを終わらせるのが先だ！！」

そう言うのと着地した蘭丸は、なんとハジメに向かって走り出した。口元には弱い獲物を狩る残忍な笑みが浮かんでいる

「うわっ！ 来た！！」

驚いたのはハジメ本人だ葉草で回復したとは言え、1対1でも蘭丸に勝てる訳が無い。

振り上げていた大斧の一撃を、少年は間一髪回避した。

「ーズン！！」

「ハッ！ 役立たずのクソルーキーが、一丁前に無駄なあがきしてんじゃねえ！」

回避された事に舌打ちし、蘭丸が汚い言葉で少年を罵る。

一旦彼と距離を取ったハジメは、

「役立たず」と言う言葉に腹が立った。それは悔しくも凶星だったからである。

『エデン』をプレイしてから、ハジメは周りの人々にずっと迷惑をかけている事を気にしていた。

クロス・パウロではバーカードの足を引っ張り、クロスピアでは、焰に怪我をさせてしまった。

そして、自分をずっと守り続けてくれたシュウまでもノイズの被害に――

もうこれ以上、誰かの足を引っ張るのは嫌だった少年の心に、小さな勇気が芽生える。

（そうだよ、ボクだってゴースト・ハツカーズのメンバーになったんだ。勝てないかもしれないけど・・・戦わなくっちゃ！）

持っていたダブル・ダガーを小拳銃に変え、銃口を恐る恐る蘭丸へと向ける。

それを見て、仮面アウトローの口元がまた引き吊った。

「ハハハハッ！ コイツは良い。ザコルーキーが俺に盾突こうってか？ ハハハ！ ハハハハ！ ツー！」

狂った様に蘭丸が笑い続ける。何がそんなに可笑しいのか、ハジメには全く理解出来ない。すると――。

「ふっざけんじゃねえー！ー！ー！」

ードカン！！

いきなり態度を豹変させて蘭丸が持っていた大斧を、思い切り地面に振り下ろした。

あまりの迫力にハジメは声も出せずに、萎縮してしまう。

全身を怒りに震わせた仮面アウトローは殺意の籠った目で動けないでいる少年を睨み付けた。

「狩られる獲物が調子に乗ってんじやねーぞ！？ テメーには『エデ
ン』を二度とやりてえなんて思わねえくらいの恐怖を与えてやる！
」

どうやら、ハジメの行動に完全にキレたらしい蘭丸がまた構える。恐怖に怯えながらも、迎撃するためハジメもまた二丁拳銃を構え直す。

ノイズでもモンスターでも無い、ユーザーとの初めての戦いに少年は挑もうとしていた。

「くっ、ば・・・や、べ、ろ・・・！」

一方麻痺したままの焰もまた少年の戦いを見て、焦りを感じていた。蘭丸とハジメの実力差が分かっていたからである。

「あゝあ蘭丸の奴キレちゃったあ。あの子罾り殺し決定だね☆」

傍で阿国が物騒な事をのんきに言っている。彼女は焰が動けない事を良い事に、完全に気を抜いている。

それを見て、焰は渾身の力で空いていた手を自分の胸に持って行った

「キュ・・・ア・・・」

「はあ、何くく？面倒な事になると阿国が怒られるんだから止めー」

「ーブン！！」

振り返った瞬間、阿国の表情が驚きに変わった。いつの間にか麻痺から回復した焰が不意打ちの一撃を繰り出していたからである。実はさっき彼が口に使っていた言葉は

「キュア」と言う回復系の初歩魔法だったのだ。麻痺くらいなら簡単に治せるのである

「ひゃあ!？」

「チッ！待ちやがれ、仮面野郎！！」

阿国がその場でジャンプしたため、焰の攻撃は残念ながら外れた。だが、すぐにハジメの救出に走り出す。

幸い彼が動ける様になったのを見て、蘭丸の意識がこちらに逸れる。先制攻撃を仕掛けるため体内で、作った焰炎弾を食らわせようと口を開けた瞬間、焰の姿を黒い陰が覆った。

「だからさ？面倒な事すんなってば！！」
「ーガギン！！」

阿国だった。忍装束の暗殺者は付けていた鉤爪で焰に襲い掛かる。だが、焰もすぐに反応してアックスギターで受け止める

「よーし、よくやったぞ阿国！！そいつはお前らにくれてやる。俺はこの生意気なガキをぶっ殺すからよお・・・」

焰が足止めされた事を良い事に、蘭丸がまた標的をハジメに戻してしまいうりーダーの命令に『マジでえ？☆』とか言いながら喜んでいう阿国に苛立ちを感じた焰は、邪魔なくの一を一蹴するため、体内に留めていた火炎弾を吐き出した。

「邪魔なんだよ！！」
「ーードガン！？」

目の前にいたにも拘わらず、阿国はあっさりと焰炎弾を回避する。そしてジャンプしたままギャル暗殺者がサッと手を掲げると、今度は銃弾が四方八方から飛んで来た。

「ーズギユン！ズギユンズギユン！！」

「なっ!?!」

ほぼ同時に、前後左右から襲い掛かって来た銃弾を焰は全てアックスギターの刃で切り落とす。

だが息つく暇も無く前と左側から2発、少し遅れて後ろと右側からまた2発ずつ銃弾が飛んで来る。

切り落とした4つの銃弾を見ると黄色・緑・赤・灰色とそれぞれ色が付いていた。

さっきの麻痺弾と同じ状態変化の銃弾に違いない

(くそっ!あのグラサン野郎、木を飛び移りながら撃ってるってのか!?!)

銃撃を防ぎながらこの同時攻撃の謎を考えていた焰だったが、すぐにその考えは捨てた。

才蔵が持っていたのは、遠距離用のライフルだ。本来あんな大きな銃を移動しながら撃ったって、狙いが定まらないに違いない。

それに銃弾は、全く別の方向からほぼ同時に飛んで来るのだ。

森に隠れ、薄い霧も張っているせいで何処にいるか分からないが、そんな事何か技でも使わない限り出来っ子ない。

「ほらほら!攻撃して来るのは銃弾だけじゃないって言ってんじゃん!」

と、一瞬全方向からの同時攻撃が止んだかと思うと、今度は阿国が懷に飛び込んで来た。

防御が遅れたせいで鳩尾に思いきり蹴りを食らい、軽く吹っ飛ぶ。

「ぐわっ!くっそ!!ふざけやがって・・・!」

怒り心頭の焰が阿国に向かって行くと、また様々な方向から銃弾が飛んで来た。それを防いでいるせいで、くの一少女に全く近付けない。

「チッ!!」

「ヒヤヒヤヒヤ! どうっスか、どうっスか!? 俺っちと阿国ちゃんのパーペキなコンビネーションは?」

打開策の見つからない状況に焰が焦りの色を見せると、また何処からか才蔵のふざけた笑い声が聞こえて来た。

その間も、同時攻撃は止む事無く続けられている

「俺っちの特製ホーミング弾で動けなくなるか? 疲れて阿国ちゃんの鉤爪の餌食になるか? 好きな方を選ぶと良いっス!」

自分は安全な所にいる事を良い事に、才蔵の声は余裕たっぷりだ。側で高見の見物をしている阿国も、自身の勝利を確信しているのか人を馬鹿にした態度で笑っている。

「クスクス・・・! エラソーな事言ってたけど、後悔すんのはアンタみたいじゃない?」

挑発され、怒りに駆られながらも焰は救出すべき少年の方を見る。卑怯な戦法で足止めを食らったせいで、既に二人の戦いは始まっている様だった。

ーバンバンバンバン!!

「うわあああっ!!」

休む事無くハジメが二丁拳銃を連射する。

あの人が変わった様なエンゴウ戦以外、バトルなどともにやった

事の無い少年はとにかくめちゃくちゃ撃つしか方法を知らない。

だが蘭丸は冷静に飛んでくる銃弾を全て防御し、あっという間に距離を詰めて来る。

そして一気にハジメの目の前まで走り寄ると大斧を振り上げ、強烈な一撃を食らわして来た。

「オラァ!!!」

「ーガツン!!!」

「うわっ!!!あ、があ・・・!!」

咄嗟に防御の構えを取ったハジメだったがダメージは防ぎ切れず、また吹っ飛ばされる。

地面に何度も頭や膝をたたき付けられ、少年が苦痛に顔を歪めると、いかにも楽しそうに蘭丸が笑い声を上げた。

「ハハハッ!!!弱え弱え弱えっ!!!こんな役立たずがパーティーにいたらソッコーでぶっ殺してる所だぜ!!!」

「くっ・・・!!」

悔しくて歯を食い縛るハジメだったが、蘭丸との実力の違いを痛感していた。言うだけあって奴ら三人は相当な経験値を詰んでいる様だ。

人間だった頃のバーカードや焰なら問題無いんだろうが、LV1の自分が勝てる相手では無い。

それでも、簡単にゲームオーバーする訳にはいかず、少年が何とか立ち上ろうとした時――。

「全く!こんなクスルーキーを仲間にしてるなんてさぞかしクソなパーティーなんだろうな〜!?!」

不意に聞こえた蘭丸の言葉にハジメの体がピクツと、止まった。立ち上がろうとして膝に置いた手にも力が籠る。

顔は伏せているので表情は分からないが、こちらを見向きもせず一人で笑い続けている仮面アウトローに、ハジメは吐き捨てる様につぶやいた。

「・・・悪く言うな！」

「あ？なんだと??」

いきなり怒鳴り声を上げた少年に、蘭丸が笑いを止める。するとハジメは簡単に立ち上がり、怒りの籠った眼で相手を睨み付けた。

「ボクの仲間を悪く言うな!! 何も知らない君に馬鹿になんてさせない!!」

それは今までのハジメには無い強い意思だった。自分の事を馬鹿にされるのは良い。だが『エデン』に誘ってくれたシュウや、自分を守ってくれているバーカード達まで馬鹿にされるのは我慢が出来なかったのである。

「はっ! 馬鹿にされなくなかったらなんだってんだコラ!!」

ハジメの言葉にまたカチンと来たのか、苛立った態度で蘭丸が襲い掛かって来た。

横薙に払った大斧の一撃で、今度は結界の壁に激しく叩き付けられる。

「うわあっ!!」

「くだらねえ事言ってるじゃねーぞ? クズの仲間は所詮クズなんだよ!!」

勝利を確信した蘭丸が吐き捨てる。だが、その言葉を否定する様にハジメは再度立ち上がるとした。

本当は全身が痛みに悲鳴を上げていた。先程の一撃で回復したHPも残り少ない。恐らく後一撃でも食らったらゲームオーバーだろう。だがここで倒れる訳にはいかなかった。そんな事をすれば、蘭丸の言葉を認める事になる。

負けると分かっているにもハジメは再度立ち上がり二丁拳銃をダブルダガーに変形させて構えた。

「悪くなんて・・・言わせない・・・絶対!!」

「チッ、こんのクソルーキーがあっ!!」

生意気な少年にトドメを指すために、蘭丸が真っ直ぐ突っ込んで来た。今度食らったら一卷の終わりに違いない。

だがハジメには一か八かの作戦があった。それは蘭丸の攻撃にある特徴を見つけたのである。

相手を迎え撃つ様にハジメも走り出す。スピードだけなら僅かに少年の方が分がある。

段々と互いの距離が短くなって行き、ハジメが武器の届く距離に近づいた途端、蘭丸が持っていた大斧を振り下ろした。

「死ねオラァ!!」

ーブン!!

大斧の赤い刃がハジメの頭に触れるかと思った瞬間、少年は間一髪右に避けた。

まさか避けられるとは思っていなかったのか、武器が大きいだけに蘭丸の動きが一瞬遅れる。

避けたハジメは重い体にもう一度力を込め、懐に一気に飛び込む。

そして空いている蘭丸の腹に、ダガーの刃を渾身の力を込めて叩き込んだ

「たぁ!!」

「ーザシュ!

「ぐおっ!! 痛・・・って」

反撃を加えた所でつんのめり、ハジメはその場に転がる様に倒れ込む。

無理をしたせいでもう動けそうになかった。

蘭丸の攻撃が振り下ろすか薙ぎ払うかの、単純なパターンしか無い事に気付いたからこそ出来た作戦である。

「蘭丸!? ウソ!!」

遠くで焰と戦っていた阿国も、思わず驚きの声を上げていた。まさかハジメ攻撃が当たるとは、思っていなかったのである。だがそれと引き換えに、少年は精魂尽き果ててしまった様だ。もう敵が襲って来ても、避ける体力が残っていない。

ハジメは祈る思いで体を起こし、蘭丸を見た。

「俺が・・・この俺が・・・クソルーキーなんか・・・! あああああっ!!」

だが少年の願いが叶う事は無かった。それまで微動だにしなかった蘭丸が怒りの咆哮を上げ、振り返りながら攻撃して来たのである。

「うわっ!!」

「殺す! 殺すっ!! お前だけは絶対にぶっ殺おーす!!」

何とか体を反転させ、避けたハジメは、復活した仮面アウトローの顔を見た。

少年動けない事を見ると蘭丸は、正に血に飢えた狼の様に舌を出しながら笑っていた。
高いプライドを傷つけられた事で、完全に頭に血が上っているらしい。

そのあまりの迫力にハジメは体を震え上がってしまい、ダガーで防御する事も出来ない。

少年の危機を知った焰が何とか救出に行こうとするが、阿国が邪魔をするせいで間に合いそうにない。

動けない獲物にたつぷりと恐怖を与えるために、蘭丸がゆっくりと大斧を振り上げた。

「これでえ・・・終わりだあ!!」

「止めろお!!」

少年の頭に赤い刃が振り下ろされた。ハジメは動く事も出来ず、声すら出て来ない。

耳の奥に焰の叫び声だけが聞こえて来た。

その時――。

――ヒュン!!

「何っ!？」

突然、結界を突き抜け森の中から白刃の光が蘭丸とハジメの間に割り込んで来た。

危機を感じた蘭丸は少年への攻撃を止め、慌てて距離を離す。

飛んで来た光はそのまま阿国と焰の間を通り過ぎ、木々の一本に突き刺さった。

「ヒエッ!？」

それは小型の刀だった。そして、突き刺さった木から素っ頓狂な声が聞こえて来たのである。

見るとさっきまでは薄い霧のせいで見えなかったが、木の上に人が乗っている。

刀に驚いて暴れているのは間違いなく才蔵だった

「そこかあ!!」

ーードオン!!

才蔵の姿を見つけた焰が口から怒りの焰炎弾を吐き出した。発射された火炎弾は逃げる暇すら与えず、才蔵に直撃する。

ーーズガアアン!!

「ギャアアアッ!ら、蘭ちゃ・・」

全身火だるまになった才蔵はのたうち回り、木から落下する。地面に激突したと同時にその姿は光に包まれ、消滅してしまった。ゲームオーバーである。

「才蔵!!ま、マジで?」

「誰だあ、そこにいる奴!出てきやがれ!!」

一撃でやられてしまった仲間を見て、阿国が悲鳴を上げる。

だが、自分の楽しみを邪魔された蘭丸は、そんな事は眼中に無く小刀が飛んで来た方向を睨みつけた。

「虫の知らせを知って戻って来て正解だった様だ」

月明かりの中、真っ白い鎧を輝せて森から出て来たのは黒衣の魔女の屋敷にいた侍だった。

一つにまとめた緑色の長髪を靡かせ、刀の様に鋭い視線をアウトロー達に向けている。

「チッ、頼に寄ってアイツかよ」

窮地を助けられた筈なのだが、何故か焰が舌打ちした。どうやらあの侍の事を知っているらしい。その間にも、堂々とした態度で侍が倒れていたハジメに歩む寄る。

そして彼の手から淡い光が発せられた。焰も使っていた回復魔法である。

「う・・・あ」

「情報収集のために立ち寄ったのだが、まさかこんな所にまで弱き人々を苦しめる卑劣な悪がいたとはな・・・！」

「キュア」のおかげでハジメの怪我はみるみると治ってしまった。

だが侍の表情は変わらない。否、背中にも刻まれた悪を憎む『正義』の心が彼の表情を一掃厳しくさせる。

しかし、怒り心頭だったのは蘭丸も同じだった。

「ああ？人の楽しみを邪魔しといて何勝手な事言ってやがんだ！？何者だテメェ！！」

「ら、ら、蘭丸！ちよつと、ヤバいつて！！」

食って繋かる仮面アウトローを、阿国が慌てて止めようとする。

その顔色は褐色の筈なのに何故か真っ青で、酷く怯えている様だ。

「ああっ！？」

「純白の鎧に緑色の長髪そ、それに背中にあるウザい正義の文字・・・間違いない！コイツ、凄腕チェイサーの龍馬だよ！！」

阿国の言葉に蘭丸も言葉を失う。（チェイサー）と言う言葉が、どんな意味を持つのか分からないハジメだけが、ただボンヤリと龍馬の腕に身を任している。

少年の容態を見て、もう大丈夫と判断した侍はそのままハジメを地面に横たえ、スツと立ち上がった。

「私の事を知っているのなら話が早い。

ユーザー名蘭丸・阿国の両名に対し、WB社の権限に置いて今すぐ愚劣なアウトロー行為を中止する事を要求する。

もしこれを拒否した場合正義の名の元、我が愛刀『桜花』の錆びにしてくれる！」

良く透った声で龍馬がアウトロー二人組に厳然と警告する。

エターナルステージで起こった戦いは、意外な乱入者の存在で予期せぬ方向で決着に向かおうとしていた。

（続く）

FILE..21『正義（ジャスティス）』

「ククク・・・ハハハッ!!」

チェイサーである龍馬に警告を受けて最初、怯んでいた蘭丸だったが突然笑い出した。誰も喋っていない森の中で、その笑い声は良く響く。

「こいつは良いや! ムカつくヤンキー野郎の次は憎きチェイサー様のご登場かよ?

どいつもこいつも人の楽しみ邪魔しやがってえ!!」

ーガギイン!!」

苛立ちをぶつける様にまた蘭丸が地面に大斧を振り下ろした。その姿は思う様にいかず駄々をこねる子供と同じである。

怒りに震える仮面アウトローは、一度深呼吸すると、静かに吐き捨てた。

「・・・潰してやる。テメーら皆まとめてぶっ潰してやる!!」

「ちょっ! 蘭ま・・・キャア!!」

突然だった。阿国の制止を振り切ると蘭丸は龍馬に襲い掛かって行ったのである。

高すぎるプライドと好戦的な性格が、仮面アウトローから

「逃げる」と言う選択肢を奪ったのだ。

しかし、歴戦の戦士である龍馬はハジメを庇う様に立つと、ゆっくりと腰に挿した刀に手を添えた

「オラァ!!」

ーギイン!!

一旦高々とジャンプし、相手の意表を突いたつもりの蘭丸の攻撃は刀を抜く事もせず、鞘だけで龍馬に防がれてしまった。

着地した仮面アウトローは武器の大きさを利用しそのまま力押しに切り替える。

「何故だ？何故お前達アウトローは人の警告を聞こうとしない！」

「教えてやろうか？そりゃテメーがムカつくからだ!!」

ーガギイン!!

斧を跳ね返した龍馬は、後ろにいるハジメを気遣い横へと走り去る。標的を完全に少年から侍に変えた蘭丸もその後続いた。

「テメーの話は聞いてるぜえ？龍馬。強えんだってな？俺の部隊の連中も何人もやられてるからだが、そんなお前を倒せば俺の名もさらに上がるってもんだ!!」

ーブン!!

龍馬の後を追いながらジャンプした蘭丸は、その『正義』の文字が描かれた背中目掛けて大斧を振り下ろす。だがその瞬間 龍馬の姿が一瞬で消えたそして、着地した仮面アウトローの背後に瞬時に現れる。

「なっ!？」

「敵を恐れず向かって来るその意気は良し。

だが心せよ。己の力量も分らず相手に闘いを挑む事を勇氣とは言わない人、それをー」

静かな口調で語りながら龍馬が持っていた刀を抜く。
振り返って反撃しようとした蘭丸と彼の一撃がほぼ同時に森の中で
交差する。

「無謀と言うのだ!!」
「ズバツ!!」

言葉と共に攻撃が炸裂したのは龍馬の方だった。蘭丸の体が後方へ
10メートル近く吹っ飛ばされる迷いの森に登る美しい月の下で、
彼の愛刀『桜花』が身につけている白き鎧と同じ輝きを放っていた。

「ぐ・・テメェ!!」

「来るが良い、悪よ。正義の名の元に貴様の罪を裁いてくれる!」

怒りを増して立ち上がる蘭丸をさらに挑発し、龍馬がスッと刀を構
える。凄腕チェイサーとアウトローユーザーの新たな闘いが火蓋を
切ろうとしていた――。

（蘭丸の馬鹿!! あいつに勝てる訳ないじゃん!!）

一方、一人取り残された阿国は焦っていた。龍馬の実力を知ってい
たからである。

『白銀の侍』と言う異名を聞けばアウトローの中で知らない者はい
ないと言われる正義の使者。

噂では30人もいたアウトローパーティーをたった一人で全滅させ
たと言う

そんな奴に万が一にも蘭丸が勝てる訳が無い。

しかもチェイサーに倒されてゲームオーバーになる事は、アウトロ
ーにとってただの死とは別の意味を持っていた。

近年、ユーザーの増加に寄り『エデン』のルールを利用し、増え続

けるアウトロー対策のためWB社は一般ユーザー達からある募集を行った。

それが、アウトロー駆除を主にする特別ホーム・チェイサーの設立であるチェイサーはアウトローに対してのみシステムと同じ権限を持ち、アウトローを倒した報酬として賞金やレアアイテムが手に入る事になっている。

そしてチェイサーに倒されたアウトローは『エデン』に接続するためのアカウントを停止され、二度と戻って来る事は出来ないのだ。だからチェイサーとアウトローのイタチごっこが日々、『エデン』内で行われている。

ちなみに、まだ人間だった頃のバーカードがWB社にやらされていた仕事も、このチェイサーの一環に違いない。

（どうする？蘭丸に加勢してアカウント停止になるなんて馬鹿な真似は御免だし、ここは結界を解除して私だけでも逃げー）

「おいおい、何考え込んでんだ？くの一姉ちゃん」

と、逃げる方法を必死で考えていた阿国だったが突然呼び掛けられ、顔を上げる。

見るとそこにいたのは焰だった。

相棒のアックスギターを肩に担ぎながら鋭い視線を向けている鬼人は、形勢が逆転してニヤニヤと口元を緩ませている。

「仲間見捨てて、自分だけ逃げる算段か？クズが考えそうな事だぜ」
「ウザっ・・・！あんた死んで欲しいんだけど？」

焰の言葉に阿国の表情が変わった。

くの一もまた、蘭丸に負けず劣らずのプライドの高さの持ち主だったのである。

リアルでも仮面アウトロー達とつるみ、クラスではいじめグループ

のNo.2に納まっている彼女を回りの連中は持て囃し、お嬢様扱いして来た。

だからこそ、自分を馬鹿にする者達は卑怯な手段を使い、全て叩き潰して来たのである。

その遊びが興じて、始めた『エデン』のアウトロー行為が出来なくなるかもしれない瀬戸際なのに口だけのヤンキーに絡まれ、阿国は苛立ちを激しく募らせる。

「それなら悪いけど相手してくんねーか？

グラサン野郎ぶっ飛ばしただけじゃ腹の虫が納まらないんでな!!」

「ハッ、ナメんじやないって？ 龍馬ならともかくあんたなんかに負ける訳ないじゃん!!」

言うやいなや、阿国は猛スピードで焰に突っ込んで来た。

アサシンの持ち味は武器の多さなどもあるが、何と言ってもこの素早さである。

焰が防御体制を取る前に阿国は、持っていた鍵爪で首元を狙った。

これで秒殺を謀ったのである。

だが、事はそう上手くは行かなかった。

何と焰は全く動じずその鍵爪を受け止めたのである。

まさか自分の攻撃が受け止められると思っていたいなかった阿国は、動きを止める事が出来ず急ブレーキを掛けた様に引っ張られる羽目になった。

「ウソっ!?! きゃっ!!」

「へっ、やっぱこの程度・・・かよ!!」

鍵爪を掴んだまま、反動を生かして焰が阿国を投げ捨てる。

強引な投げ方のせいで受け身も取れず、ギャルアサシンは何度も地面に叩き着けられた。

「ギャッ！ちよっ、あんた・・・何で!？」

「さっきは闘う所じゃ無かったからな？テメェら如きに、てこずっちまった。」

覚悟しな？さっきまでの借り100万倍にして返してやるぜ!！」

(す、凄い・・・！)

目の前で始まった二つの闘いに、ハジメは息を飲んだ。

自分を守ってくれる二人の戦士は闘い方こそ正反对だが、その強さはお互い圧倒的である。

蘭丸と戦っている龍馬は優雅で華麗。

怒り狂って繰り出して来る蘭丸の攻撃を、まるで流れる水のようにスイと回避して行く。

対する焰は荒々しく完全な力押しだ。相手に攻撃する暇すら与えず、アックスギターを縦横無尽に振るい続ける。

静と動のファイトスタイルを持つ二人の闘いを見て、少年はゲームでありながら鳥肌が立つのを感じた。

(ボクもいつか、あんな風に・・・)

知らず内に拳にも力が入る。

バーカードの闘いを見た時にも感じた強さへの憧れ。闘おうなんて決心した所で、結局足を引っ張ってしまった不甲斐無さ
ー。

様々な感情が少年の中で交差する。

悔しくて目頭が熱くなるが、それでもハジメは顔を背けたりせず二人の闘いを見守り続けた。

いつかは守られる側から共に戦える側へ。

そんな強い決心を心に秘めながら――。

――ガギン！！

「ぎゃう！！」

突き上げる様なアックスギターの一撃を食らって阿国の体が吹っ飛ばされた。

最初、広場の中央にいたが焰の連撃を食らい続けたため、いつの間にか結界の近くまで追い詰められている。

既に身につけている忍装束もボロボロで、ダメージが蓄積しているのは明らかである。

対する焰は体に傷一つ無く、悠々と阿国に歩み寄って来た。

（ウソでしょ！コイツこんなに強かったの！？）

「どうした？グラサンがいねーと何も出来ねえのか？」

「くっ、この・・調子に乗んな！！」

一度は焰に喧嘩を売った事を後悔した阿国だったが、余裕で近づいて来る彼の態度に再度、闘志を燃え上がらせる。

突然手を後ろに隠したと思うと、アサシンの背後から四つの陰が飛び出して来た。

それは鎖付きの仕込み分銅である。

分銅は焰の両手両足に絡まり、その動きを封じてしまった。

武器を鍵爪から鎖鎌に変えた阿国は、分銅が命中したのを見てニヤリと笑う。

「キャハハハ！！バーカ、油断するからそうなんのよ！」

「さすがアサシン、色々持ってたな？」

だが感謝するぜ。これで動かなくても済むからな！」

――グイッ！

そう言うとなを思ったか焰は自分の右腕に絡まっていた鎖を掴み、思いつきり引っ張った。

すると何と手繰り寄せられた鎖が、阿国の体を持ち上げ、宙に浮かせてしまったのである。

とんでもない力技に、阿国は眼を白黒させるばかりだが、その間にも吊り上げた魚を待つ様にアックスギターを構えた焰が目の前まで迫って来ていた。

「うわっ！ウソ、ちよつ待っ・・・！」

「オラァ！！」

手繰り寄せた所に渾身の一撃を加える焰。そのあまりの威力に四肢に絡まっていた鎖は砕け、悲鳴を上げながら阿国は結界の壁へと激突する。

「そらあ！レクイエムを聞く時間だぜ！」

阿国が弱っているのを見て、頃合いと判断したか焰がアックスギターの先端を向けた。

するとギターの先から小さな火の球が発射され、見る見ると大きさを増したそれは、あつという間巨大な火炎球となりギャルくの一の体を包み込んでしまう。

それは焰炎弾の様な相手を攻撃する炎では無く、相手を捕らえるための魔法弾だったのだ。

「何これ！？う、動けない・・・！」

「行くぜ！オラァ！！」

火炎球の中で阿国が脱出しようと必死にもがいている内に、ジャン

プした焰がアックスギターを火炎球に突き刺す。
そして背中を向けると突然、ギターを弾く体勢になった。

「インフェルノ・レクイエム！！」
「ージャーーン！！・ドゴォン！！」

武器では無く楽器としてアックスギターの音色が初めて奏でられた途端、焰の背後にあった魔法弾が爆発した。

アックスギターの音は火炎球を破裂させる引き金になっていたらしい。

その爆発の威力は絶大で焰の背後にあった物全てを炎と黒煙が飲み込んでしまった。

「うわあああつ！！」

爆発の瞬間、悲鳴を上げながら阿国の体が光のクズとなって消し飛んだ。それと同時に、広場を囲んでいた結界もひび割れを起こし崩れていく。

術者が敗れた事で術が解けたのだ。

まだ煙が立ち上っている内に振り返りもせず、焰が引き返し始める。

「音を炎に変える俺の魂の曲。テメエには少し熱すぎたか？」

憂さを晴らしてすっきりした顔で焰がもういないギャルクの一につぶやいたー。

「阿国っ！！クソッ！」

仲間がやられたのを見て蘭丸が忌ま忌ましげに舌打ちをする。

こちらも焰の闘い同様、一方的な展開となっていた。

「残るはお前一人だぞ。大人しく剣を下げて、仲間のいるクロスピアへ帰れ！」

刀を構えたまま龍馬が説得する。流水の動きで蘭丸の攻撃は全て回避していた彼にはダメージは全く無い。

対する蘭丸は隙を突かれた攻撃を受け続け、かなり疲労している様だ。

「ざけんな！！これだけコケにされて引き下がる訳ねーだろうがぁ！！！」

追い詰められて逆上した蘭丸の大斧が突如点滅し始める。

それが段々と短くなるにつれ、斧の回りに得体の知れない浮遊物が纏わり付き始める。

見ていた龍馬の表情も一層厳しくなった。

「怨念・斬！！！」

——オオオオooooooooooooッ！

チャージの終えた大斧が真っ赤になり蘭丸が振り下ろすと、なんと刃から無数の骸骨達が飛び出して来た。

紫の霧の様な姿をした骸骨達は、声にならない声を上げながら蘭丸の怨みも乗せて一直線に龍馬へと向かって行く。

だが、刀を構えた白銀の侍は全く動じず、小さく深呼吸すると丹田に力を込める。

そしてカッと眼を見開くと、怨霊達に向かって愛刀『桜花』を振り下ろした。

「ハッ!!」
「ザシュ！」

勝負は一撃で着いた。闇を払う白刃の刀は怨霊達を真っ二つに切り裂いたのである。

切られた怨霊は小さな呻き声を出しながら、跡形も無く消えてしまう。

あまりの鮮やかな技に、蘭丸は勿論、遠くで見ていたハジメも思わずア然としてしまった。

「ば、馬鹿な！今のは俺の最強の技だぞ!？」

「正義の刃に悪しき怨霊が敵う筈などない。今度はこちらから行かせてもらおうぞ!!」

言うのと鋭い眼光を携えたまま、龍馬は一足飛びで蘭丸との距離を一気に詰める。

そのスピードについて行けず、蘭丸が驚いて身を縮こまるせるが、何故か侍は何もせず通り過ぎてしまい、仮面アウトローの背後で立ち止まってしまう。

そして何事もなかった様に、また歩き出してしまった。

「・・・あ？ハッ！た、ただのハッターかよ！驚かせやがってー」

攻撃されてなかった事に悪態を突きながら蘭丸が振り向き、がら空きになっている龍馬の背後を狙う。

すると白銀の侍はゆっくりと刀を納まっていた鞘に戻し、静かにこうつぶやいた。

「清廉潔白剣・剣技――断罪剣!!」
「――チャキン」

刀が鞘に納まった途端、有り得ない事が起こった突然、蘭丸の体に無数の刀傷が現れたのである。

体の上から下へ、いくつもの傷が現れたのと少し遅れて、刀で斬られる音が聞こえて来た。

攻撃のあまりの早さに、音が追い付かなかったのである。

そう・蘭丸と龍馬の体が交差した瞬間、侍は攻撃をしなかった訳ではなかったのだ。

早過ぎて周りにいたハジメはもちろん、やられた蘭丸本人すら気付かなかったのである。

自分が切られていたと分かった時には既に遅く、仮面アウトローは悲鳴を上げて、その場に倒れ込むしかなかった。

「ぐああああっ!!」

「その傷は貴様が手に懸けたユーザー達と同じ数自らの罪たつぷりと悔いるが良い」

龍馬が冷たく言い放つが蘭丸は答えられず、ただ体をびくびく動かしている。

勝負が着いた事を確信した龍馬は、厳しい表情のまま虫の息の仮面アウトローに近寄り、襟元を掴んで強引に持ち上げた。

「ぐ・・・お!!」

「死なない程度に手加減しておいた。貴様らアウトローに聞きたい事がある」

苦しげに蘭丸が呻き声を出す、龍馬は全く力を緩めない。その冷徹な態度に悪に対する強い憎しみが込められている様に見えた。

「き、聞きてえ事だ・・・?」

「そうだ、お前達にしか聞けない事。――黒の兄弟の居場所を知っているか？」

黒の兄弟と言う名を聞いた途端、蘭丸の態度が変わった。

表情は仮面を被っているせいで分からないが、龍馬の腕を掴む手がブルブルと震えている。

今まで、どんなに追い詰められていても悪態を突いていた仮面アウトロ―にとって有り得ない態度である。

侍チェイサーは動揺する蘭丸の反応を見逃さなかった。

「く、黒の兄弟だあ！？冗談だろ、誰があんなヤベー連中とツルむかよ！」

「そうか、お前の様な奴が知る筈も無いな。

今回は見逃してやる。早々にこの森から出ていけ！」

用件は済んだのか、龍馬は蘭丸を解放するとさっさとハジメのいる方へ歩き始める。

少年もまた、助けてもらったお礼を言うために侍に歩み寄ろうとした。

だが――。

「・・・ふざけんなよ。俺が、この俺がお前なんかにい――っ！！」

突然、龍馬の姿を黒い影が覆った。蘭丸である。

見ると仮面アウトロ―は口に葉草をくわえたままジャンプし、大斧を振り上げていた。

龍馬は気付いていないのか？全く振り返ろうとしない。

「危ないっ！！」

驚いたハジメが慌てて駆け寄ろうとするが、龍馬はそれをスツと手を出し制する。

来るなと言う意思表示らしい。

だが、その間にも蘭丸は迫りつつある。

立ち止まったハジメが不安な面持ちで見ていると白銀の侍は体勢を少しだけ低くし、また腰に挿してあった刀に手を添えた

「そう言えばお前の罪を一つだけ裁き忘れてたいたよ」

後ろを振り返る事無く、龍馬が蘭丸に話し掛けるそして鞘から刀をほんの少しだけ抜いた。
すると・・・。

ーズバツ!!

「ぐっ・・・があ！」

空中にいた蘭丸の体がグラリと傾いた。

最初、ハジメにも何が起こったか分からなかったが、少年は蘭丸の体を見てすぐに理解した。

切られたのだ！蘭丸はー！。

その証拠に落下して来る仮面アウトローの体には横切った様な刀傷が新たに出来ている。

相手に背中を向け、尚且つまだ刀を抜いても届かない距離にいた筈なのに、龍馬はまた目にも留まらぬ早さで蘭丸を倒したのだ。

一体どうやって？

考えても出る筈の無い答えに、ハジメはまるで手品でも見ている気分になった。

「ギャアアアッ!!」

悲鳴と共にゲームオーバーになった蘭丸の体が光のクズとなって散っていく。

満天下の月の下で流れる光の屑は、何処か幻想的で美しかった。

「それが今日、この少年を襲った罪の裁きだ」

ほんの少しだけ抜いた刀を鞘に戻しながら、龍馬が呟く。

ゲームオーバーになった蘭丸がその言葉を聞いていたかどうかは、定かではなかったー。

（続く）

FILE..22『魔女（ウィッチ）』

コツ・・コツ・・コツ・・・・。

白いマントの男が（彼）の元へ戻って来ると、（彼）は男に背中を向けながら両手を広げ、何か作業をしている所だった。

白一色しかしかないこの世界の空の部分に小さな光が浮かび上がっておりその中から、金色の文字の羅列が次々と（彼）の中へと入って行く。

今までこの世界では自分と語り合うか『エデン』を見守る事しかなかった彼の珍しい行動に、男は歩み寄り聞いてみた。

「何をしているんだい？」

すると男の存在に気付いていたのか（彼）は振り返らず答える。

「ーシュウの端末から彼のいた世界を勉強しているんだ。

ああ、やっぱりあっちの世界は素晴らしいよ！

感動しているのか（彼）が小さく身を震わせる。自身を縛る鎖の一つを解き放ってから（彼）の心に好奇心が芽生えた様だ
変化が起こり初めている証拠である。

「いずれは見るだけで無く現実世界にも行ける様になれるさ。

さて、では私はもう一度出掛けて来るよ。（道標）の反応がまた出たらしいのでね」

「ーあの子、今度は何処に現れたの？」

今度は（彼）が聞いて来た。以前の様に寂しいからと駄々をこねるのも無くなって来ている。

これも変化の一つかもしれない。

マントの男は『エデン』への扉を開きながら答えた。

「エターナルワールド019・・・『迷いの森』さ」

「ありがとうございました」

一方、その『迷いの森』の広場ではハジメが龍馬に小さな頭を下げてお礼を言っていた。

助けてもらっただけで無く治療までしてもらったのである。

少年の側にはあれだけ暴れたのに、何故か不機嫌な顔をしている焰が腕を組んで立っていた。

「いや、私はチェイサーとして当然の事をしたまで。

弱きを助け悪を挫くのがチェイサーの役目なのだから、君が頭を下げる必要は全く無い」

決して奢った態度を見せる事無く龍馬がハジメに頭を上げる様促す。

そんな誠実な態度まで本物のヒーローみたいで憧れてしまう。

少年が顔を上げると、何故か龍馬は焰の方を見て微笑した。

「それに今日は面白い物も見れたしな」

「面白い物?？」

言葉の意味が分からずハジメも焰の方を見る。すると、見るなど言わんばかりのタイミングで彼が舌打ちをする。

「久しぶりだな？《魔音を奏でる鬼人》よ」

鬼人……。

バーカードからも聞いた事の無い異名だった。

良く考えたらハジメは『ゴーストハッカーズ』のメンバーの事を何も知らないのである。

だが、前々から感じていた彼の粗暴な印象にその異名はピッタリと合っていた。

「その名で呼ぶな！テメーこそ相変わらずエゲツねえ狩り方してるみてーだな？」

イラついた口調で焰が吐き捨てた。どうやらその異名にはあまり触れて欲しくないらしい。

知り合いではあるみたいだが焰の方に苦手意識があるのか、二人の態度には明らかに温度差があった。

「フッ、下劣なアウトローに情けを掛ける心は持ち合わせておらんのでなしかし、罪を憎んで人を憎まずがチェイサーの信条。だから私は、今の貴殿を責めたりはしないよ」

赤らさまな焰の態度を全く気にせず龍馬がサッと掌を差し出す。

最初面食らっていた焰だったが仕方ないと言った感じで、渋々握手をしようとした。すると……

「龍馬さま……☆何処にいますのでちゅか？私会えなくて悲しいでちゅわ……！」

突然、龍馬が耳に付けていた銀色の羽飾りのピアスが点灯し、幼い少女の声が聞こえて来た。

どうやらピアスが通信機になっているらしい。

少女の声を聞いて龍馬が慌てて手を通信機に持って行ったせいで、握手が透かされてしまい、焰は危うくズッコケそうになってしまった。

「ロロ殿！？何故あなたが私の通信機の周波数を？」

やはり知り合いからの通信だった様で、龍馬が驚きの声を上げる。一方、拳を震わせてに白銀の武士を殴るのを我慢している焰を見て、ハジメは必死に笑いそうになるのを堪えていた。

「それは愛が成せる業でちゅもの♪それより、すぐ来て下ちやらない？クロス・パウロ教会の近くでアウトローが暴れてるのでちゅわ！」

「何！アウトローが？」

了解した。直ぐにそちらに向かう」

独自で調べたと言う事を

「愛」と言う一文字で済ませたロロの言葉を特に追求せず、龍馬は悪の出現に表情を厳しくさせた

そして振り返るとハジメ達の方を見ず、口を開く

「スマンがこれで失礼する。縁があつたらまた何処かで会おう」

「チッ、・・・おい、ちょっと待てよ！！！」

勝手に話を進めてさっさと帰ろうとする龍馬を見て、さすがに頭にきたのか焰が怒鳴り声を上げ、止める。

その様子に、慌ててハジメが彼を抑えようとするが、焰の口から出たのは意外な言葉だった。

「その・・・なんだ、さっきは助かったぜ。Lv1のガキ守りながら三人相手にすんのはさすがにキツかったからな」

頭を掻きながら慣れない感じで焰が言ったのは感謝の言葉だった。まさか彼から礼を言われるとは思わなかったのか龍馬も思わず驚き、ハジメ達の方を振り返る。

一瞬、不気味な筈の夜の森に和やかな空気が流れた。だが次の瞬間、龍馬の口から出た言葉に今度はハジメ達が驚かされる事になった。

「Lv1？何を言っている。彼のLvは5ではないか」

「・・・ハア!？」

白銀の武士の言葉にほぼ同時に焰とハジメが首を捻った。

見るからにお固そうな彼が冗談を言うとは思えにくい。それに先程も、龍馬は初対面の蘭丸と阿国の名前を一発で当てたのだ。

相手のステータスを見る事が出来るのが、チェイサーの能力の一つかもしれない。

そこまでの考えに至ってハジメは慌てて自分のステータスを開いてみた。

突如緑色のウィンドが現れると、そこにハジメの様々な情報が載っているのである。

見ると1番上にある『Lv』と表示された部分が(1)から(5)に変わっていた。

確かにハジメのLvが上がっていたのだ。

「本当だ！変わってる・・・」

「おいおい、何がどうなってんだ？」

ハジメのステータスを覗き込んだ焰も、訳が分からないと言った様子で頭を掻く。

これまでまともにバトルで勝った事の無い少年のLVが、一気に上がる事など有り得ない事だ。

あの不可解な強さを発揮した炎業戦以外、全てハジメは誰かに守られて安全な所から見ただけである。

それなのに現に、こうしてLVは上がってしまったている。

不可解な現象に焰はもちろん、本人であるハジメまでその場で考え込んでしまった。

「なんだ？ 本当に知らなかったのか」

首を傾げている二人を見て、龍馬もまた呆気に捕われる。

だがすぐに表情を和らげると、二人に気付かれない様微笑した。

「・・・面白い連中だ。でわ、私はこれで失礼しよう。いつかまた出会うまで、貴殿達に正義の加護が在らん事をー」

二人のこれからを案じ、今度は振り返らず龍馬は一人去って行く。混戦を終えた森の広場には、いつまでも考え続けるハジメと焰だけが残されたのだったー。

ーカタカタカター！！

キーボードを叩く音が延々と聞こえて来る。

ここは森の奥にある黒衣の魔女の屋敷。

商談の終えた大広間で、部屋の大半を占める大コンピューターの画面にはなんと広場にいます焰とハジメの姿が映し出されていた。

「面白い坊やだねえ。」

バーカードが救世主なんて呼ぶからどんな聖人が来るのかと思ったが、まあ、可愛いらしい坊やじゃないか。

これは会うのが楽しみだねえ」

「そうですかあ？ あたしには、ただの子供にしか見えませんがねえ・
」

ハジメの顔を見て、鷲鼻の魔女がケタケタと笑うと、大広間の後方にあるキーボードの付いた机の一つで、頬杖をついている太った男が言う。

この男はさつきから特に仕事もせず、暇そうに欠伸ばかりしていた男だった。

「・・・・・・・・」

それでもう一つキーボードがある席。こちらでも大画面を熱心に見つめる人物がいた。

先程からずっとキーボードを叩いている少女である。

赤を基調にしたゴシッククロリータのドレスに身を包み、頭には魔法使いにピッタリのトンガリ帽子 ウェーブの掛かった金髪碧眼の、まるで人形のように無機質な美貌を持つ少女である。

その表情には全くと言って良い程、感情と言う物が無い。

だが何度かキーボードを叩き、『Enter』と書いてあるボタンを押すと、大画面に映し出されていたハジメの映像が少女の所のモニターにも映し出された。

しかも、ハジメの顔だけ拡大された画像となってである。

それを見て今まで無表情だった少女の頬にポツと赤みが挿し、動き続けていた指が止まった。

「・・・・・・・・カワイイ」

「おやおや、クールに見えてもやっぱり年頃の娘さんですかあ。青

春してますな〜!」

と、いきなり頷きながら太った男が覗き込んで来たので、少女は慌ててモニターの画像を変える。

ハジメの画像が消えると少女はまた何事も無かったかの様に澄まし顔に戻り、操作を始めた。

「……別に」

「茶化すんじゃないよ! 次郎。さて、もうすぐ坊や達が屋敷に到着するさね。」

鬼が出るか蛇が出るか、楽しもうじゃないか?」

次郎と呼ばれた男を諭してから、黒衣の魔女がまた大画面へと視線を戻す

画面には屋敷の近くの森を歩く焰とハジメの姿が映し出されていた。まさかこの森に来てからずっと監視されていたとは、二人共知る由も無いー。

「オラ、これ持っとけ」

歩きながら焰が後に続くハジメに何か時計の様な物を放り投げた。いきなりだったので、少年は慌ててその物体をキャッチする。

見るとそれはバーカード達が腕に付けていた通信機だった。

「焰さん、これ……」

「今度から『エデン』にいる時はそれ付けてろ。また迷子になられちゃ堪んねーからな!」

厳しい言葉に明るくなったハジメの顔はすぐにシヨンボリとしてしまう。結局上がったレベルの謎は解けず、魔女の屋敷まで向かう道

中焰から迷子になった事を説教されてばかりだったのだ。

「勝手に行動しちゃってすいません。でも、さっきは本当に助かりました！ 焰さんと龍馬さんて知り合いだったんですね？」

龍馬の名前を出すと焰の背中がピクツと震え、一瞬歩みが止まる。だが、すぐにまた歩き出したのでハジメは彼の反応に気が付かない。

「・・・奴とは知り合いなんて可愛い関係じゃねえ昔、何度かやり合った相手だ」

「えっ・・・？」

焰の口から出た驚くべき発言にハジメは思わず足を止め、彼の背中を見る

だが焰は振り返りもせずただ前を歩き続けた。

「色々あってな。奴には何度も命を狙われたが、結局、勝負は着かなかった。

ノイズなんて厄介事が無けりゃあ、さっき会った時に野郎に決闘を申し込んで・・・って、あゝ！！ 俺の事なんてどうでも良いんだよ！ 問題はお前だ、お前！！」

よっぽど昔の事は話したくないのか半端強引に話を終わると、焰がビツとハジメに指を指した。

昔一体何があったのか色々聞きたかったハジメだったが、迫力ある焰のしかめっ面を見て、その言葉を飲み込む。

「俺はバーカードさんからお前を安全に、魔女の屋敷まで連れてけって言われてんだ！ だからもう余計な行動すんなよ！？」

「・・・もし任務失敗したらあの人の顔向け出来ねえからな」

最後の方はほぼ独り言だの様につぶやき、焰はまた歩き出した。しかし、今の言葉を聞いてハジメは内心ホッとしたのである。なんだかんだ言っても彼はバーカードの事を信頼しているのだ。最後の言葉は焰の本心を現している気がする。

それにさっきは危ない所を助けてもらったのだ。任務とはいえ、本当の悪人ならそんな事はしない筈である。

そう考えると、何だかハジメはこの乱暴者にしか見えなかったメンバーに興味が沸いて来た。

自分よりずっと大きな背中が、頼もしく見えて来たのである。

(この任務が終わったらもっと話し掛けてみようかな・・・?)

貰った通信機をしっかりと腕に装着し、ハジメは笑いながら焰の後を付いていく。

一本道しか無い深い森を暫く歩くと、辺りが開けていき、先程広場で見た綺麗な満月がまた顔を出す。

そしてハジメ達の前に巨大な影を移しながらそれはあった。

「着いたぞ」

歩き疲れて軽く息を切らしている少年とは対照的に、ケロッとしている焰がつぶやく。

二人の前にあるのは巨大なキノコを摸した黒衣の魔女の屋敷。

不気味な森にピッタリなお化け屋敷の様な外観にハジメは思わず唾を飲み込んだ。

「な、なんか凄い屋敷ですね？」

「見かけをそれっぽくしてるだけだ。それより中見てビビんなよ？」

ギギギギーッ！！

少年を怖がらせながら焰が玄関の大扉を開く。

すると、見えたのはもちろん数々の本棚が立ち並ぶ大学の講堂を思わせる巨大なホームと、それに負けなくらいの大きさを持つコンピュータ。

そして待っていたと、言わんばかりに目の前に佇む鷲鼻の老婆だった。

「ヒッヒッヒッ！よく来たねえ。連絡があつたのにいつまでも来ないから心配してたところさ」

魔女が気色の悪い笑い声を出すがハジメは、外とは全く違う屋敷の内容に驚きで声も出ない。

ア然となっている少年を無視して焰は遠慮無く屋敷の中へ入って行った。

「へっ！心配なんかこれっぽちもしてない癖に良く言うぜ。オラ、何ポカーンと口開けてんだ！お前もこい！」

「え？あつ、は、はい！」

呼ばれてそこで初めて少年は自分がまだ屋敷の中に入っていない事に気付く。

大扉を閉めると、扉は中央にあった筈なのに何故か入口はホームの端っこに位置していた。

『トロイ』もそうだがホームとは外観を無視した造りが出来る様だ。

「まずは自己紹介しようかね？私はこの情報収集ホーム『噂屋』の管理をしている者さ。

常連客からは噂屋のオババで通ってるがね」

持っていた杖を使いながら黒衣の魔女――否、噂屋のオババがハジメに歩み寄って来て握手を求めて来た。

「よ、よろしく・・・」

ほら、アンタ達！さっさとこっち来て自己紹介しな！」

もちろんその二人は、先程の太った中年男と熱心にハジメを見ていた魔法使い少女である。

「ハッハッハッ！青春、青春♪いや、実に羨ましい」

「??:?」

「でかい図体の方が次郎で隣にいるのがアカネ。二人共、私の仕事の手伝いをしてくれてるのさ」

「お初にお目に掛かります。あたし、次郎と申します。以後お見知りおきを！」

気さくな態度で次郎がグローブの様な手を差し出して来た。

彼は頭に鉢巻きを巻き、下には黒一色のズボンに下駄。体には黒に赤のラインが入った祭の法被の様な者を着込み、背中には丸印に『犬』の一字が刻まれている。

線の様に細い目で、ニコニコ笑っているのも相手に悪い印象を与えないためだろうが、その巨漢と相俟ってハジメには格闘家かプロレスラーにしか見えなかった。

「一応、社会人なんですが、仕事の方が暇なもんでここでバイトさせて貰ってるんですわ。お手柔らかに」

「あつ、こちらこそ・・・」

何となく迫力に押された感じでハジメが握手に応える。

次郎が下がると、今度はさっきの少女が前に出て来て、少年の顔を真っ直ぐ見つめて来た。

そして無言のまま、次郎同様手を差し出す。

「・・・・・・アカネ」

それは耳を澄まさないで聞こえない程小さな声だったが、一応自己紹介しているのだとハジメは理解した。

普通なら無愛想な態度に頭に来る所だろうが、自分もあまり人と話すのは苦手で少女の気持ちを察した少年は、少し緊張しながらもしっかりと差し出された手を握る。

「ハ、ハジメです！よろしくね！」

「ハジメ・・・？うん、良い名前・・・」

ばそぼそ喋りながら何か納得したのか、アカネが一人で頷いた。手が離れ元の位置に戻る際、少女の顔がほんのり赤かった様に見えたのはハジメの気のせいだったのか？

「おい、もう良いだろ！？俺達やガキの握手会しに来たんじゃねーんだからよ！」

業を煮やしたのか、焰が短気を起こして横から口を出す。そう言えばハジメも何故ここに来たのかバーカードから聞いていなかった。すると、また噂屋のオババが気味の悪い笑い声を出す。

「ヒッヒッヒッ！そう慌てなさんな。なんせ今回の代物は下手をすりゃ莫大な金を生み兼ねない物なんだ。そりゃ出し惜しみもしたくなるさ」

「俺もバーカードさんから話は聞いている。」

「・・・このガキとウィルスの秘密が分かったんだろ？」

顎で自分を指しながら話す焰に、ハジメの顔色が変わった。

少年とウィルスの共通点と言ったら、あの炎業との戦いで見せた不可思議な強さくらいしかない。自分の最も醜い姿を曝したあの戦い――。

その秘密が分かったと言う事実少年は知りたいと思う気持ちと共に、恐怖も感じた。

「見せろよ、そのウィルスの秘密って奴を。俺達はそのために来たんだ」

一瞬、ハジメの顔を見た焰がオババを促し、少年もまた唾を飲み込む。

あのノイズをも凌駕した力の正体――。
それが今、暴かれようとしている。

（続く）

FILE..23『秘密（シークレット）』

「まずはこれを見てもらおうかね」

そう言うと、オババは巨大コンピュータのキーボードを操作し始めた。すると、大画面にある映像が映し出される。

「これは・・・！」

その映像は前に

「トロイ」でも見たクロス・パウロでの戦いだった。しかもバーカードがクロウの赤い杖の光線にやられる直前で止められている。まだ人間の姿の狂戦士の後ろには、大剣を引き抜こうとしているハジメの姿もあった。

「見ての通りこれはバーカードがやられちゃった時の映像だよ。さて、ここで坊やとバーカードをよく見ておきな」

前置きを言ってから噂屋のオババが映像を再生すると、動き出した映像の中でまたもバーカードとハジメがクロウの光線にやられ、ウイルスに侵されて行く。

あの時の壮絶な痛みを思い出し、思わず少年は顔を背けそうになるが、ちょうどバーカードがククルのバックアップデータでハジメを救う直前で映像が止められた。

「さあ、ウイルスに侵された二人の違い誰か分かるかい？」

タネを明かす前の手品師の様にオババが周りにいるメンバーの顔を

見ながら問い掛ける。

突然の質問にその場は一瞬静寂に包まれたが、その静けさも案外早く破られた。ハジメが答えたのだ。

「そう言えば、バーカードさんよりボクの方が怪我が軽い・・・のかな？」

少年の答えに黒衣の魔女はニヤリと笑う。

確かに画面を見てみるとバーカードの体はほぼウィルスの侵食により、消滅しているのに対してハジメはまだ指が消えかけているだけである。これはどういう事なのだろうか？

「正解だよ、坊や。あんたとバーカードはほぼ同時にウィルスの侵食を受けたのに、二人には明らかな差が出ていたのさ。

さて、それを頭の片隅に置いてもらったら、次はこれを見てもらおうかね？」

何が言いたいのか明確にせず、オババはどんどん先に進める。そのせいで焰もハジメも首を傾げるばかりだが、次の映像に切り替わった途端ハジメの顔色が変わった。

大画面に映し出されたのが、クロウに襲われているシュウの姿だったからだ。

（うわあああ――！）

「シュウ兄ちゃん・・・」

エンゴウの三本の尻尾に吊され、クロウからあの黄金の文字を抜き取られて苦しむシュウの姿に、ハジメは表情を歪ませる今、見てもクロウに対する憎しみが燃え上がり、自分の不甲斐無さに情けなくなる光景だ。

「これはシュウと言う監視者がクロウとか言うモンスターにやられている所だよ。この監視者から出ている文字を解析したんだが、何かのデータって以外は何も分からなかった。

だがその代わり面白い事に気付いたのさ。坊やは辛いだろうが、続きを見ておくれ」

映像が進められると黄金の文字を抜き取られ、抜け殻の様になってしまったシュウが開放される。

そこへ駆け寄るハジメの姿も映し出されたが、彼の体は既にウィルスの被害を受けていた。徐々にシュウの体が消滅していく。

と、シュウが完全に消滅した所で映像がまた止められる。

「気付いたかい？この監視者もウィルスの傷を三つも負っているのにその侵食が酷くゆっくりなのさ。暫くお喋りが出来るくらいね？コイツは今までのノイズ被害者には有り得なかった事だ。

そこで、坊やとこの監視者のデータを調べてみたのさ。そうしたら驚いたよ」

そこで一旦言葉を止めたオババは、またコンピューターを操作し始める。すると今度は、青い画面にシュウとハジメの姿が映し出された。どうやら二人のキャラ情報らしい

「坊やと監視者のキャラは『エデン』仕様の物じゃない。同じ様で全く別物なのさ。だからウィルスの進行が遅かったんだろねえ・・。

そこで、坊やに聞きたいんだが、あんたその体どうやって手に入れたんだい？」

ほぼ同時にその場にいた全員が、ハジメの方を見る。

いきなり注目を浴びてしまった少年は妙な事を聞かれ、眼を白黒させるばかりだ。

「ど、何処って言われても普通にキャラエディットの中から・・・あっ！」

と、そこでハジメはようやく大事な事に気が付いた。思い出したのである。

それは少年が初めて『エデン』をプレイした時、シュウが笑いながら言っていた事だった。

「そう言えばボクのキャラは新作のゲームのデータをダウンロードしたって・・・」

「新作？この事かね」

少年の言葉を聞いてオババが操作をすると、画面に『エデン』のオープニング画面が映し出される

しかしよく見ると、背景の古代遺跡が違ったりと『エデン』とは別の物だと言うのが分かった。

「ー『EDEN2』WB社が総力を上げて作ってる新作さ。

だが、まだ開発中の段階だから、発売は数年先になるだろうがね」

「なるほどお。続編のデータなら無理なくダウンロード出来るだろうし、ハジメ君のプレゼントついでに自分のキャラも新しくしたって所ですな」

ハジメの言葉を受けて今度は次郎が口を開く。オババもまた納得した様に頷きながら、

「確かにそれなら辻褄が合うね。つまり坊やが助かったのは『エデ

ン』とは別のデータを使っているからって事さ。
さて、それが分かった所で今度はウィルスの話に行くよ」

と、また手早くコンピューターを操作し出した。すると今度はクロスパウロでバーカードと戦ったクロウの姿と、焰達と戦っているエンゴウの姿が静止画で映し出される。

「正直な話、奴らが使っているウィルスの正体は皆目検討が着かない状況さ。

後で坊やからデータを採らせてもらえば、何か分かるかもしれないがね？一つ分かった事と言えばコイツらもまた、『エデン』とは全く違うデータを使っているモンスターって事さ」

「違うデータ？コイツらは誰かに作られたって事か？」

信じられないと言った口調で焰が驚く。確かにウィルスモンスターの非常識な能力は、間近で見た者しか理解出来ないだろう
するとオババは、彼を小ばかにした様に低い笑い声を上げた。

「何だい？奴らが空想の中から出て来た化け物だと思ってたのかい？
ネットワークの世界にいる者は、必ず誰かに作られたのさ。

・・ただし、コイツを作った奴は相当趣味の悪い奴だろうね」

喋りながらオババが操作すると、今度は焰とエンゴウの戦いが映し出された。

焰の吐いた焰炎弾を、エンゴウのバリアが弾き飛ばしている姿が映っている。

「分かり易く言うと、このモンスター自体がウィルスを守るセキュリティみたいな物なのさ。

バリアはパスワードみたいなもんかね？」

アンタ達の攻撃はデータが違うから正しいキーワードとは判断されず、跳ね返されちまうのさ。

逆にモンスターは正しいキーワードを知っているから攻撃し放題だし、やられたらユーザーはウィルスに感染しちまう。

・全く、このモンスターを作った奴に会ってみたいねえ？

こんなデータなら、恐らくペンタゴンのコンピューターだって破壊する事が可能だろうよ」

オババが感心した様につぶやくが、周りにいる者達は誰も口を開かなかった。

ため息を尽きながら頭を掻く者、苛立ちながら舌打ちする者、関心がないのか無表情の者、黙っていても表情は様々である
だがそんな静寂を破ったのは意外な事に、またしてもハジメだった。

「じゃ、じゃあボクのあの時の力は何なんですか？」

少年として1番知りたいのは、エンゴウを倒した時の豹変した自分だった

ハジメの言葉に焰もオババの方を見る。

『エデン』のキャラではウィルスモンスターに絶対勝てないとオババは言ったが、現に少年はエンゴウを倒したのである。

皆が辿り着く当然の疑問に、オババはしたり顔で微笑んだ。

「問題はそこさ。坊や、アンタはとんでもない偶然から奴らと同等の力を手に入れたんだよ。

それは奇跡と言っても良い。バーカードがアンタの事を救世主だっ
て言っちゃまうくらいの・・・ね？」

勿体振るオババがカタカタとキーボードを叩くと今度は画面に、天
に向かって叫ぶハジメの姿が映し出された。

少年の周りから天に向かって黒い光が一直線に伸び、エンゴウが作り上げた赤き結界を貫いている

当の本人であるハジメには、すぐにいつの場面か理解出来た。シュウを失い、自分が豹変した直後だ。

「これが・・・ボク？」

「そう、これは監視者が消えちまった直後の坊やの姿さ。ここから暫く映像を見ていてくれ」

オババに言われるまでも無く、ハジメは映像から眼が離せなくなっていた

自分が感じるのと、周りから見るとは伝わり方が違う場合がある様に、豹変した自分はハジメが思っていた以上の醜態だった。

獣の咆哮を上げた少年はクロウ目掛けて、銃弾を浴びせる。そして盾になる様に立ち塞がったのがエンゴウだった。

クロウを守る狂犬はバリアで銃弾を防ぎ、少年に襲い掛かる。だが、今までどんな攻撃をも防いで来たエンゴウのバリアはその途端ヒビが入り、ガラスの様に碎けてしまった。

そこで映像が止められる

「ここで見て欲しいのは坊やの両手さ。黒い光が持つてる拳銃事、手を包み込んでるのが分かるかい？」

オババの言う通り、よく見るとそれまで右手だけ黒く染まっていた少年の手が真っ黒な光に包まれている。

しかもエンゴウに放たれている銃弾まで黒い弾に変化していた。

「これを解析してみたら何とバーカードのバックアップデータから漏れ出したウィルスの光だったのさ。」

つまり、坊やはあの時ウィルスを使って戦っていたんだよ」

「何だと!？」

オババの言葉に真っ先に驚いたのは焰だった。ハジメは驚いて声も出ない

それでもオババの説明は尚続いた。

「驚いたかい？坊やがこのエンゴウと呼ばれるモンスターのバリアをぶっ壊したのは、同じデータをぶつけたからさ。

しかも驚くのはそれだけじゃない。この時、坊やのLvは50にまで達していたんだ。恐らく、流れ出したバーカードのデータも使っていたんだろうねえ」

「ボクがバーカードさんの力を・・・？」

それに少年は思い当たる節があった。

あのエンゴウ戦の時、心は憎しみに満ちていたのに頭は驚く程冷静で、しかも別人の様に判断が早かったのである。

それはハジメが、バーカードに成り切っていたからだだったのだ。

少年が思案顔でまた黙ってしまうと、今度は腕を組んだ焰がまた口を開く

「なるほどな、それでバーカードさんがこのガキの戦い方が自分と似てるって言ったのも説明が着くぜ。

待てよ？て事は、このガキのレベルが上がったのもエンゴウを倒したからって事か？」

焰が質問すると、噂屋のオババは無言のままは頷いた。どうやらハジメのLvが上がった事も知っていたらしい。

「根拠は無いがそう言う事なんだろうね。

つまり坊や、アンタはウィルスに耐性を持っているデータと、『エデン』の中でも最強の部類に入るバーカードの力、そしてノイズと

結一対抗出来るウィルスと、三つを兼ね備えたキャラクターを使っているんだよ」

長い説明を終え、オババが一息着くがハジメは咄然とするばかりだ。ただの興味で始めたゲームだったのに、いつの間にかとんでもない力を手に入れていたと聞かされたら驚くのは当然である。

恐る恐る自分の右手を見ると、黒く染まった手が心なしか震えているのが分かる。

それは未知の力への恐怖のせいだろうか？それとも全く別の感情のせいなのか、ハジメ本人にも分からなかった。

「チッ、て事はやっぱりノイズと戦えるのはこのガキだけって事かよ」

何処か不満のある様子で焰がつぶやく。

今までずっとノイズと戦って来た彼にしてみたら当然の反応だろう。

「今の所はね。さっきも言った通り、ウィルスモンスターのバリアを破壊出来るのは坊やだけさ。ただ、バリアを破壊した後はアンタ達の攻撃も通用していたみたいだからバリアさえ壊せば、ウィルスモンスターもただのモンスターと同じになっちまうって所だろうね。まあ、奴ら相手に暴りたいのならバリアを破壊した後にするこつたよ」

「・・・チッ!!」

あからさまに舌打ちした焰だったが、その後は何も言わずそっぽを向いてしまった。

色々思う所はあるが、それを口に出す訳にはいかないのだろう。

一方、いつの間に煎れたのかアカネが持って来た紅茶を啜ると、オババはニツコリと笑いこちらに向き直した。

その笑顔に少年は何故か嫌な予感を感じる。

「さあ〜て！！長い前置きはここまでにしておいてこれからが本題だ！

アンタ達、これからどうやって坊やを守るつもりだい？」

いきなりの質問だった。それにはハジメはもちろん、焰も怪訝な顔をして魔女の方を見る。

「ハア？何言ってた？そんなもん俺とバーカードさんでやるに決まってー」

「そこが問題なのさ。アンタ、分かってるのかい？バーカードはチビっこいドラゴンになっちまってとても戦力とは言えないだろう？それにアンタだって、たかがアウトロー三人にヒィヒィ言ってたじゃないか」

「な！？ババア、テメー見てやがったのか！？」

自分の恥を晒されて焰が詰め寄るが、次郎がオババの前に立って彼を宥める。

口調は穏やかだが、痩せ型の焰の倍は有りそうな彼の巨漢は中々迫力があつた。

「まあまあ、落ち着いてマスターは《ゴースト・ハッカーズ》の皆さんを心配してるんですわ」

「次郎の言う通りだよ。《ゴースト・ハッカーズ》で実質戦えるのは焰、アンタだけなんだよ。

それじゃいくらなんでも戦力不足じゃないか？って私は言ってるのさ」

オババの言い分には確かに一理あつた。ウィルスと戦える可能性を

秘めているとは言え、未だLv5のハジメを戦力とはとても言えない。

それに納得したのか、怒り心頭だった焰も渋々引き下がった。

「ぐ・・・！じゃあどうしろってんだよ！？」

「全くしょうがないねえうちのボディーガードを連れて行きな。アンタ達の側にいればウィルスの情報も得られるし、一石二鳥だろう？」

いきなりとんでもない事を言い出す魔女の提案に焰は思わず眼の前の大男を見上げた。

当の次郎は分かっているのか分からない様子で、ボリボリ頭を書いている

確かに彼なら即戦力となるだろう。

ただ、情報収集が上手い様にはあまり見えないが・・・。

「ハア！？おいおい、バアさん！うちのホームの広さ知らねえのか？こんなデカイ奴がいたら誰も中に入れなくなっちゃうぜ！」

「はぁ？何言ってるんだいアンタ達に付いてくのは次郎じゃないよ？」

まるでズレてしまっている会話に、肩を竦めながらオババが顎でその人物を指す。

新しく仲間になると言う

「噂屋のボディーガード」は、次郎の隣にいるハジメと同じくらいの身長少女だった。

「私の助手兼ボディーガードのアカネさ。ちょっと口数は少ないが仲良くしてやっておくれ」

「え・・・？」

ようやく勘違いに気付いたハジメと焰が、豆鉄砲でも食らった様な顔をする。

この後、二人の驚きの声が噂屋中に響いたのは言う間でもない――。

そして、ほぼ同時刻。

迷いの森の中では、森を突き進む三つの影があった。

一つは肩を怒らせながら歩き、一つはオドオドとそして最後の一人は面倒臭そうに頭に手を置きながら歩いている。

と、その影の一つ、オドオドと歩いていたのが不意に口を開いた。

「マ、マジでやるんスカ？ 蘭ちゃん・・・！」

口を開いたのは才蔵だった。どうやら龍馬達にやられた後すぐに戻って来たらしい。

かなりやる気の無いサン格拉斯男の前後にいるのは、もちろん蘭丸と阿国だった。

「当たり前えだ！！ テメーはあんなに舐められて悔しくねえのか！？」

振り返った仮面アウトローが、ビビリ気味な才蔵の頭を叩く。アウトロー二人を束ねるリーダーはどうやらかなり苛ついている様だ。

「で、でも、またチェイサーの奴がいたら返り打ちっスよ？」

「そうならないためにワザワザこいつ連れて来てんじゃ〜ん♪」

心配そうな才蔵の言葉を遮る様に、後ろにいた阿国が笑う。

そう、ギャルアサシンの浚に後ろ、そこには小山の様な巨大な陰が歩いていた。

ーズン!!

(コオ~~~~ホオ~~~~!!)

独特の呼吸音をしながら巨大な影が、蘭丸達の後を付いて行く。
結一陰から見えるのは、爛々と光る生物では有り得ない一つ眼。
それが世話しなく辺りを見回しながら、蘭丸達の後を追っていた。

「へっ!! 待ってるよ? クソチエイサー共!! 《ドラゴンレイン》
の蘭丸様を怒らせた事を後悔させてやるぜ!!」

復讐に燃える蘭丸がニヤリと笑う。

アウトロー達が向かっている先・・・それはもちろん噂屋のホーム
だった

(続く)

FILE..24『茜（ヒロイン）』

ークロスピア・マルコロ大聖堂。

全てのユーザーが冒険から帰って来たり、ゲームをスタートさせた時に立ち寄る大聖堂のゲート。そこに黒いローブに身を包んだ少年が降り立った

エンドレスである。

ハジメと別れ、迷いの森から帰還した彼は2・3歩を進めると、おもむろに自分が通って来たゲートの方に振り返った。

『破壊の衝動が近づいている』

誰にも聞こえない小さな声でエンドレスが、またポツリと呟く。その声は酷く悲しげだった。

『今度は平らなる者・頑強たる岩の王。死んでも蘇る不死身の存在』

街へ向かうユーザー達が怪訝な顔をしながら通り過ぎて行くが、エンドレスは気にもしない。

まるで少年の灰色の眼には誰も写っていないかの様だった。

『このままでは君の大事な人をまた二人失ってしまう。だから、だから早くそこから逃げて・・・ハジメ』

と、ハジメの名を口にした時、一瞬無表情だったエンドレスの顔に憂いの色が浮かんた。

そしてローブの少年はまた歩き出してしまう。

初めて出来た『エデン』の友に残念ながら、エンドレスの言葉は届かなかった・・・。

「な、な、な・・・！」

いきなりの新メンバー加入を聞いた焰の体がブルブル震える。

次に何が発せられるか想像が着いて、ハジメは自然と耳を塞いでいた。

「何考えてんだ！？婆さん！！」

うちにはこのガキ以外にただでさえ口の減らねえチビが一人いるんだ！これ以上ガキが増えたら、幼稚園になっちまうよ！！」

機関銃の様に炸裂した焰の文句だったが、当の本人であるアカネと噂屋のオババは澄ました顔だった。ただ、眼の前にいた次郎だけはハジメ同様、耳を塞いでいる。

すると、またしても噂屋のオババが気味の悪い笑い声を上げた。

「ヒッヒッヒ！アンタの言いたい事は分かるけどねえ、焰。これはもう決定事項なのさ。アンタがどうこう口を出せる問題じゃないんだよ？」

そう言うオババはコンピューターの方を向き、何か操作を始めた。すると、大画面に巨大な猫ミミローブに乗った白竜の姿が映し出された。バーカードだった。

「ば、バーカードさん！！」

『通信が繋がったと言う事はどうやら新メンバーの説明は済んだ様だな』

ラビィの頭に乗ったバーカードがニヒルに笑う。どうやら焰が文句を言うのを見越していたらしい

『説明が遅くなったが、実は二人に黒衣の魔女の元に行ってもらったのは我がチームの新メンバーアカネ君との顔合わせのためだったのだ』

「な！？映像の解析結果を聴きに行くのが目的だった筈じゃ！？」

当初とは全く違う目的の内容に焰が面食らう。さっきまでの態度からしても、彼がこの話を知らなかったのは明らかだ。

バーカードやオババの話に一喜一憂する焰を見ながら、ハジメもまた説明に耳を傾ける。その場にいた全員が、大画面に視線を向けた。

『映像の解析結果を聞くだけなら通信で可能だ。少年のキャラの秘密やウィルスの事は、既にクライアントにも報告してある。

その解析結果を踏まえた上で、今後の我々の課題として問題になって来たのがやはり戦力の問題だった。

そこで、黒衣の魔女からアカネ君をレンタルする事になったのだ』

「レンタル料金はもちろん戴くがね？ヒッヒッヒ」

いかにも楽しそうにオババが笑う。レンタル料金のくだりを聞いてハジメは、何故魔女が新メンバー加入の話であんな楽しそうにしていたのか理解した。バーカードの説明が続く。

『新しいメンバーを入れる事で我々の意見は合致した。だがそこで一つ問題があった。

それはアカネ君と焰達の相性だ』

バーカードの言っている意味が分からず、ハジメは首を傾げる。す

るとそれをくんだのか今度はオババが説明を始めた。

「アカネはサポートの腕も良いし、戦力としても頼りになる娘なんだが、好き嫌いがハッキリしていてね。アンタ達を気に入るかどうか試させてもらったのさ。」

まあ結局、私達の心配は杞憂だったみたいだけどねえ」

含みのある笑みを浮かべてオババを見ると、魔法少女はほんのり顔を赤くしながら俯いてしまう。しかし、鈍い少年はそんな態度も理解出来ず、首を傾げるばかりだ。

「おいおい、ちょっと待ってくれよ！！じゃあなんで嘘の命令なんかしたんスか？」

『新メンバーとなる少女が、お前達を気に入るかどうかわからないから会いに行けー！』などと言って素直にお前は従ったか？ 焰』

バーカードの言葉にまくし立てていた焰の勢いがピタリと止まる。バーカードでは無くても彼がそんな命令に従うとは思わないだろう。小さな体のチームリーダーは焰より一枚も二枚も上手だった。

『とにかくこれはもはやチーム同士の協議で決まった決定事項だ。焰と少年はアカネ君を連れ（トロイ）に帰還してくれ。待っているぞ』

命令だけ伝えると、バーカードの姿が大画面から消える。反論を一切受け付けない通信の切り方に結局焰は何も言えず、地たんだを踏むしか無かった。

「聞いたね？ アカネ。ノイズ事件が解決するまで坊やを守ってやりな。これは命令だよ」

バーカードの言葉を受けてオババがアカネに命令すると、赤いドレスに身を包んだ魔法少女はコクンと頷いた。そしてそのままハジメへと歩み寄って行く。無表情な碧眼が真っ直ぐ少年を見つめていた。

「な、何？」

人に見つめられた経験など少ない少年はドキマギしてしまう。すると、ハジメの眼の前まで近づいたアカネの手が突如彼のおかつぱ頭に置かれた。

ーナデナデ

「え、う、あう・・・」

「・・・よろしくね」

ハジメの頭を撫でながらアカネが、無表情のまま呟く。

よく自分の頭をポンポン叩いていたシュウとはまた違うが、何だか懐かしい気分を感じて少年は言葉を詰まらせてしまう。二人の間だけに妙に和やかな雰囲気 flowed。

「チッ！命令ならしょうがねえが、こんなチビで本当に約に立つのかよ？」

かなり納得していない様子で、焰がぶつくさ文句を垂れている。どうやら彼の様な人間でも命令には忠実らしい。

だが、焰の言葉を聞いたアカネが突然頭を撫でるのを止め、彼の方に近づいて行った。

「ーあ？何だよ？」

「・・・なら、試して見る？」

アカネの言葉が発せられた途端、その場の空気が一気に下がった様にハジメは感じた。

魔法少女の明らかな挑発行為に、焰の態度が一変する。

ニヤッと笑いながらアカネに歩み寄る姿は、喧嘩前の不良と同じだった。

「誰が何を試すって？おチビちゃん」

「・・・聞いてなかったの？あなたが私の実力を試してみるかと言ったの。でも、そんな事したら怪我するのはあなただけだ」

アカネの言葉を聞いた途端、焰は自分の手を背中に回していた。ハジメには、それがアックスギターを取り出す動作だと直ぐに分かる。少年が慌てて止めようとした途端、相棒の赤い斧が少女に向かって振り下ろされていた。

「吊いの歌を聞きてえみたいだなチビスケえ！！」

手加減無しの一撃を焰が繰り出して来ると、アカネもまた手を勢い良く差し出す。

彼女が何をする気か分からないが、二人の対決は避けようが無い様に思えた。だが――。

ーードガン！！

「うおっ！！な・・・に？」

突然の揺れと爆音に、焰の一撃はアカネの頭に触れる直前に止められた。

その場にいた全員の動きも止まる。
バーカード達が映し出されていた大画面が乱れまくっているのが、

気のせいではない事を証明していた。

ーードカン！！ドガドガン！！

「うわわっ！何なに！？何なの！！」

「どうやら攻撃を受けている様だね？次郎、外の映像を出しな！」

続けざまに来る爆音と揺れのせいでハジメは慌てふためくが、噂屋のオババは至って冷静だった。

命令を受けた太っちょ男はドデドテ走りながら、ホームの奥にある自分のパソコンを操作する。

大画面に噂屋屋敷の前の景色が映し出されると、そこに見覚えのある三人組が映っていた。

ヒュ~~~~！ドカンドカン！！

（オラァ！！撃て撃てえ！！！）

迷いの森へと続く道の前で巨大な砲台を抱えている岩で出来た一本角の一つ眼モンスターの側にいるのは、さっき焰達にやられたアウトロー三人組だった。

どうやらこの爆音と揺れは、モンスターの砲撃のせいらしい。

（コ~~~~ホオ~~~~！！！）

（ヒヤッハア！！ヒヤハハハハッ！！！）

変な呼吸音を発している岩石モンスターとスナイパーの才蔵が、大砲とライフルの波状攻撃を仕掛ける。

グラフィックであるホームが壊れる事は無いが、爆音と振動は中に伝わるため、悪質な嫌がらせになるのは確かだった。

（よおし、撃ち方止めえ！！！）

オラア、聞こえるか？クソルーキーとチェイサー共！！
さっきはよくもやってくれたな？たっぷりお札をしてやるから今すぐ出てこい！

テメーらがその屋敷の中にいるのは、分かってるんだぜ！！）

攻撃を止め、アウトロー達のリーダー蘭丸が脅して来る。仮面に隠れてはいるが、その表情が怒りと憎しみに歪んでいるのが容易に想像着いた。

「おやおや、どうやらアンタ達のお客さんみたいだねえ」

「アイツら・・・！龍馬の奴アカウント停止すんの忘れやがったな！！？」

厄介な客の登場に焰が舌打ちをする。その間にも蘭丸達の攻撃は再開されホームの中は激しく揺れ続ける。

やれやれとため息をついたオババがまた操作すると、砲台を持っている岩石モンスターのデータが画面に映し出された。

「あのデカイのはゴーレム・・・召喚師が操ってるモンスターだね。と言う事は、召喚師さえ倒しちまえば後は楽勝って事さ」

「召喚師って何です？」

緊迫した状況に合わないのんきな質問を初心者少年がする。すると側にいた魔法少女がまたハジメにしか聞こえない小さな声で、ボソボソ説明を始めた。

「召喚師とはその名の通りモンスターを召喚する能力を持ったユーザーの事。魔物使いの様にモンスターの武器の使用や変身は出来ないけど、その分強力なモンスターを操る楽しみが得られる。しかし総合的な能力を比較すると・・・」

「あーもう！長ったらしい説明は良いんだよ！用はモンスターを操ってる奴をぶっ飛ばしや良いって事だ！」

アカネの説明を一方的に打ち切って、焰がズンズンとホームの入口へと近づいて行く。喧嘩っ早い鬼人を見て、大画面を見ていたオババが直ぐ様止めた。

「待ちな。焰、アンタ何処に行く気だい？」

「決まってるだろ？あの馬鹿共ぶっ飛ばしに行くんだよ！」

そこのチビ相手にするより、ちったあ骨になるだろうが！！」

赤らさまにアカネを睨みながら、焰が歩を進めるアウトロー達の狙いが自分である事を悟った少年もまた、彼に続こうとするが、噂屋のリーダーである黒衣の魔女はそれを許さなかった。

「お待ちってば。アンタが出向く事は無いのさ。ここはアカネにまかせようじゃないか」

噂屋のオババの突然の申し出にハジメはもちろん焰ですら驚いた。相手は凶悪なアウトロー三人に、大砲付きの岩石モンスターである。その相手を、ハジメと対して体格の変わらない魔法少女にやらせようと魔女は言っているのだ。

普通なら、誰もが耳を疑う申し出だが、アカネだけで無くオババや次郎でさえも、全く心配と言う表情をしていなかった。

「おいおい婆さん・・・マジか？」

「ヒヒヒっ！！良いじゃないか？アカネの実力を試すには絶好の相手だろ？」

もし仮にアカネがやられたら、今度はアンタが相手すりゃ良いんだからさあ？」

オババの言い分に、焰は黙るしかなかった。
命令を受けたアカネは小さく頷き、無表情のままホームの入口へ向かうとする。

しかしそんな魔法少女の腕を掴み、止める者がいた。ハジメである。少年に止められた魔法少女は一瞬、驚きの表情を見せた。

「行っちゃ駄目だ。アイツらの狙いはボクなんだから！」

それは、自分の無力さを痛感した少年の心からの言葉だった。
大切な兄を失った少年は、もう自分のせいで誰も傷ついて欲しくなかったのである。

だがそれは、美少年好みの澄まし少女の闘志に、さらに火を点ける事になった。

女心の分からないハジメは、それが逆効果になる事を理解してなかったのである。

表情は変えないまま、ほんのり顔を赤くしたアカネは掴まれた腕に手を添え、そっとハジメの手を離れた。

「・・・大丈夫。ハジメは、私が守る」

言葉少なながら自分の明確な意思を伝えると、魔法少女は《噂屋》のホームから出て行く。

アカネの意思の強さを感じた少年は、止める事が出来ず、そのまま後ろ姿を見送る事しか出来なかった。

「・・・あんなチビで本当に大丈夫なのかよ？」

「ヒッヒッヒ！まあ、見てな？《噂屋》のメンバーは伊達じゃないって事が分かるよ」

何気に心配する焰をよそに、噂屋のオババは余裕の表情を見せる。外の様子を映し出されている大画面をハジメは祈る思いで、見つめる事しか出来なかった――。

――脅しの《噂屋》攻撃はとめどなく続けられている。そんな中、《噂屋》から小さな人影が出て来たのを発見したのは、スナイパーの才蔵だった

「お？ 蘭ちゃん、《噂屋》から誰か出て来たっス！！」

才蔵の言葉で一旦、砲撃が止められる。

しかし出て来たのはもちろん焰でもハジメでも無く、見た事も無い魔法少女のアカネだった。

咄嗟に蘭丸が不機嫌になる。

「ああん？ なんだテメーは！？」

「私は《噂屋》の魔導師アカネ。略してUMA・・・」

意味不明なアカネの言葉に才蔵や阿国だけで無くキレ易い蘭丸ですら、呆気に捕われてしまう。

自分のペースに巻き込んだ魔法少女は、さらに言葉が続けた。

「・・・貴方達はさしずめ(MBA)ね」

「MBA?? 何だそりゃ!？」

聞いた事も無い略語に興味を引かれながら仮面アウトローが聞くと、アカネは今までの無表情から想像も着かない冷たい笑みを浮かべる。永遠に明ける事の無い月夜に似合う笑みを浮かべている魔法少女は、ゾクリとする様な美しさを醸し出していた。

「分からないの・・・？（マジ、ぶっ飛ばすぞ？アウトロー）よ」
「！？ふっふっふ・・・！」

どうやら人を怒らせるのが天才的に上手らしい魔法少女の挑発に、蘭丸の体がわなわなと震え、才蔵や阿国も各々の武器を構える。一触即発の空気の中、仮面アウトローが発した言葉が開戦の合図となった

「ふっざけんなあー！ー！ー！！」
「ドドドッ！！ドカンドカンドカン！！」

蘭丸の怒号と同時にゴーレムの大砲と才蔵のライフルが火を噴いた。一瞬でアカネのいた場所が炎に包まれる。しかし、銃と大砲の波状攻撃はとめどなく続いた

「キャハハハ☆綺麗じゃーん」
「撃て！！撃てっ！！ゲームオーバーになるまで手を緩めるな！！」
この俺を舐めた事を後悔させるんだ！！」

爆音と炎がドンドン大きくなり、煙が蘭丸達のいる場所まで迫って来た頃ようやく攻撃が止まる。自身の勝利を確信した仮面アウトローは、ニヤリと嫌な笑みを浮かべた。

「へっ！これだけ食らえばどんな奴だってー」
「それは当たってれば・・・の話でしょ？」

突然別の方向からアカネの声が聞こえて、蘭丸達が驚く。見ると攻撃されていた場所に人の姿は無く、当の本人である魔法少女は《噂屋》の屋根からアウトロー達を見下ろしていた

「デメエ!! いつの間に!?!」

「ゴーレムの攻撃データ入力・・・先の戦いから召喚師はアウトロー達のリーダーである事が判明・・・」

蘭丸の質問を完璧に無視して、ボソボソ呟いていたアカネだったが突然、手を空中へと突き出す。

すると、光の中から真紅の杖が現れ、魔法少女の掌に落ちて来る。先が黄色いハートの形をしたちよつと可愛いらしいロッドを一降りとすると先端をアウトロー達に向けながら、アカネはぽつりとつぶやいた。

「対敵との勝率93%・・・これよりミッションを開始する」

喋り終わったと同時に、颯爽と《噂屋》の屋敷から降り立ち、弾丸の様なスピードでアカネが蘭丸達に向かって行く。

今だ実力未知数な魔法少女とアウトロー達の戦いが今、幕を開けた
――。

(続く)

FILE..25『岩窟王（ゴーレム）』

屋敷の屋根から飛び降りた途端、アカネは脱兎の如く駆け出した。そのスピードは魔導士とは思えない程早くアウトロー達はもちろん、モニターで見えていたハジメ達をも驚かせる。

「な、何してんだ！？撃て撃て！！撃ちまくれ！！」

一瞬、呆気に捕われていたアウトロー達だったが直ぐに迎撃の銃弾の雨を降らせる。

しかし当たらない！

ゴーレムの砲撃も才蔵のライフルも魔法少女は意図もたやすく避けてしまい、アクション映画のヒーローの様に爆音だけが虚しくアカネの背後に響いて行く。

まるで、弾が何処に飛んで来るか分かっているみたいだ。

赤い弾丸と化した少女はあっという間に蘭丸達との距離を縮めて行く。

「バカヤロウ！！何やってんだ！？さっさと撃ち殺せ！！」

「わ、分かってるっスよ蘭ちゃん！

えーい！これならどうっスか！！」

焦り出す仮面アウトローをなだめながら才蔵のライフルが一瞬光りを帯びたかと思うと、銃口から発射された銃弾が何と4つに分離した。

放たれた4つの銃弾はそれぞれ赤・緑・黄色・灰色と別の色に分かれており四方からアカネを取り囲み飛んで行く。さっき森の広場で焰が苦戦したホーミング弾だ。

「・・・銃弾分離を確認カウントダウンを開始する。3・・・2・・・1・・・0！」

だが、ホーミング弾が当たる直前、アカネは上空へ高々とジャンプした。そのせいで弾は少女に当たらず自滅して猛烈な煙を立ち上らせる。

煙の中から姿を現したアカネは何事も無かったかのように、才蔵の目の前に着地した。

「そんな！！防がれる事はあっても避けられた事なんて無い俺たちのホーミング弾がーっ！！？」

「・・・あなたの技は発射からきっかり5秒後、相手に着弾する。それさえ分かれば回避も可能・・・」

ーヒュン！！

ボソボソと聞き取りにくい声で呟きながらアカネが、持っていた赤いロッドをフルスイングする。

先端にある黄色いハートに顔面をクリーンヒットした才蔵は、付いていたサングラスを吹き飛ばしながら森の木に激突した

「ぐええっ！！」

「このっ！！ちょっと早いからって調子に乗んなっつーの！！」

才蔵がやられたと同時に襲い掛かって来たのが（アサシン）の阿国だ。

自慢のスピードで少女の背後から鉤爪を振り下ろす。

だが、アカネは突っ込んで来る阿国に対して体を半回転させ、簡単に奇襲攻撃を回避した。

これは拳法などで用いられる円の動きを使った体捌きだ。

「ええっ!？」

「・・・貴方はスピードに頼り過ぎている。そんな攻撃じゃ私には当たらない」

目標を失ったギャルアサシンはブレーキが効かず転がりながらそのまま才蔵の元へと突っ込む。

最初、マンガみたいに眼を回していた二人だったが直ぐに顔色が変わった稲妻の矢を作り上げたロッドを、アカネが二人に向けていたからだ

「ウソっ!!マジ!？」

「あああーっス!!」

「・・・ライトニング・アロー」

「ービュン!!・・・ドガアーン!!」

無表情のままアカネが呪文の名を口にすると、放たれた稲妻の矢は一直線に飛んで行き、阿国と才蔵を炎に包み込んだ。

残ったのは二つの『GAME OVER』と表示された光の輪だけである。

爆発と煙が立ち上る中、あまりにも鮮やかな戦い方で二人を一気に倒してしまった少女は、澄まし顔のままゆっくりと蘭丸の方を向いた。

「才蔵!阿国!!て、テメエーっ!？」

戦闘開始から僅か数分で仲間を失ってしまった仮面アウトローがブチ切れる。

しかし何を考えているか分からない魔法少女は全く怯んだ様子を見せず、クルクルとロッドを回すと改めて構え直した。

「残るは後2匹・・・」

「黙りやがれ！！俺をコケにしてただで済むと思うな！？ゴーレム、この女をぶっ潰してやー」

頼りの岩石モンスターに命令を降そうと蘭丸が指を指した瞬間、その場からアカネの姿が消える。倒す相手を見失い、ゴーレムが慌てているとその標的は突然隣に現れた。

何といつの間にかゴーレムの肩にアカネが飛び乗っていたのだ。

「ライトニング」

ロッドをゴーレムの首に突き立てたまま、少女が呪文を唱えるとあれだけ綺麗だった夜空が曇り始める。

そして俄かに雷鳴が轟き始めたかと思うと、アカネのロッドに稲妻が降り注いで来た。

ーピシャーッ！ゴロゴロゴローッ！

(コ、コオオオオーッ！！)

ゴツゴツとした肩からアカネが飛び降りたと同時にゴーレムが黒焦げになる。

少女が着地した時には轟音を響かせて岩石モンスターは倒れていた。

「ゴーレム！？うおっ！！」

崩れ落ちるゴーレムを見て驚愕する蘭丸の喉元にロッドの先端が突き付けられる。

目の前にいるのは真紅のドレスの魔法少女。

少しでも動けばやられる状況に、さすがの仮面アウトローも言葉を失う。

「・・・これで後一匹。でも、貴方はハジメを虐めたでしょ？だから簡単に倒してあげない・・・」

淡々とした口調で呟きながらアカネが微笑する。その冷たい微笑みに蘭丸は背筋がゾツとするのを感じた。

「どうやら勝負が着いたみたいだねえ」

同じ頃、噂屋のホームではモニターを見ていたオババが笑う。まるでこの結果になるのが分かっていたかの様だ。

「バトル開始から3分20秒こりやまた、アウトロー撃退記録更新ですな」

オババの近くで見ていた次郎も何処から持って来たのか、のんきにタイムウォッチで時間を計っているし、ハジメは逆に言葉を失っていた。

自分と対して体格の変わらない少女があんな巨大なモンスターを一撃で倒してしまったのだから当然である。

そして、さっき偉そうに少女が出て行くのを止めたのが、何だか無性に恥ずかしくなってしまった

「（魔導士）なのにあの動きかよ。あの女、ジョブチェンジ経験者かなんかか？」

焰だけは冷静に少女のバトルを分析し、オババに質問している。しかし、自分が闘えなかった事には納得いつてないのか何処か不満げである。

そんな彼の態度に意に返さず、オババがまた笑いながら頷いた。

「流石に鋭いね。確かにあの子は魔導士だけじゃなく^{ファイター}拳士^{の能力も}持ち合わせているのさ」

オババの言葉にああっとハジメが呟く。先程、焰が言っていた（ジヨブチェンジ経験者）と言うのを以前シュウに教えてもらった事があったのだ。

（――要するに、ジヨブチェンジ経験者ってのは自分の属性を一度変えた事のあるユーザーだ）

クロスピアで、冒険に必要な道具を買い揃えながら得意げに講釈する従兄弟の姿が思い出される。

ハジメの（ガン&ダガー）やシュウの（魔導士）など、様々な戦闘スタイルがあるのが『エデン』の特徴であり、これをユーザー達は一重に属性と言う。

そしてこの属性は変更が可能で、もし冒険の途中戦士から魔導士に変わったりすると、戦士のパワーを持ちながら魔法が使えると言う夢の様な力を手に入れる事も可能なのだ。

だが、一度属性を変えたとまた一から技を覚えなくてはならないので大変面倒臭く、大抵のユーザーはやりたがらない

しかし極一部にはそんな労力を厭わず挑戦するユーザーもいるのだ。

「へっ、今時そんな事やる奴がいるのかよ？ご苦労な事だぜ」

呆れた口調で焰が肩を竦める。すると何故かオババがまた気味の悪い声を上げた。

「ヒヒッ・・・甘いよ。《噂屋》のメンバーがそんな努力家だと思

うのかい？」

「あ？」

言っている意味が理解出来ず焰とハジメが怪訝な顔を見ると、大画面の半分にだけアカネの姿が映し出される。

どうやら先程のハジメ達と同じキャラクターのステータスの様だ。

『あの子はね、自分のキャラを作った時に（拳士）の能力を（魔導士）に組み込んだのさ。WB社のデータに侵入してね？

しかもその動機が『テレビに出て来る魔法少女みたいに、戦えて魔法も使えるキャラにしたかったから』なんてくだらない物なんだから大したもんじゃないか」

いかにも楽しそうにオババが笑うが、いまいち理解出来てないハジメは首を傾げる。

だがその疑問も、すぐに次の焰の言葉で解消された。

「はあ！？おいおいそれってハッキングじゃねーか！

そんな奴メンバーにするなんて、バアさん良い趣味してんな？」

ハッキンググー。それは『エデン』初心者である少年ですら知っていた。相手のパソコンに無断で侵入し、情報を盗んだり書き換えたりするネット愛用者なら誰もが憎む行為。

それをあの少女はWB社を相手に成功させたと言う。

もちろんバレたらアカネだけで無く、それを知ってメンバーにした噂屋のオババだってただでは済まない。

しかしそんな大それた事を平然と話し、笑っているオババにハジメはア然とするしか無かった。

「優秀な人材なら悪人だって使うのが私のモットーだからね。

まあ、アンタ達もアカネの実力や素性が少しは分かったんだから良かったじゃないか・・」

ビィーッ！！ビィーッ！！ビィーッ！！

と、突然オババの声が掻き消された。見ると、ホームの天井から警報ランプが迫り出し、激しい警告音を発している。

何事かとハジメが動揺していると、次郎が巨体を揺らしながら走って行き自分のパソコンを操作した途端、顔をしかめた。

「あちゃあゝマスター、どうやらそう上手くは行かないみたいですわ。」

画像の乱れを感知しました。それもホームの前です」

あまり危機感を感じさせない口調で次郎が報告するが、画像の乱れと聞いて焰とハジメが顔を見合わせる。

オンラインゲームである『エデン』で起こるバグなど、たった一つしか思い付かなかったからだ。

「画像の乱れて、まさか・・！？」

「はい。どうやらノイズ現象みたいですわ」

次郎の言葉と同時に、ハジメは自身の左手を見る

ウィルスに感染し、黒く染まった左手が小さく脈動したのを少年は見逃さなかったー。

ザザザザーーーーーッ！！

美しい月が浮かぶ迷いの森の景色が一瞬激しく乱れる。まるで来訪者を拒む様にー。恐怖の叫びを上げる様にー。

後に訪れるのは完全なる静寂。

水を打った様な静けさに外にいた蘭丸とアカネもまた異変に気付い

ていた

「これは・・・」

「な、なんだ！？サーバーの故障か？」

何も知らない蘭丸は喚き散らす、アカネはこれがすぐにノイズに因るフリーズ現象だと理解する

そして僅かな時間で頭をフル回転させ、今出来る最善の行動を導き出すと何故か仮面アウトローに突き付けていたロッドを下げてしまった。

「・・・気が変わったわ」

「な、何っ？う・・・おっ？」

ーザシュン！

ため息をついた魔法少女が背中を向けたかと思うと、一瞬の内に蘭丸の体は斜めに切り裂かれていた。

眼にも止まらぬ攻撃が炸裂したのである

最初助かったと思い、安堵した蘭丸だったがその表情はすぐに苦痛の歪みに変わって行った。

「ぐう・・・ああああーっ！！」

「やっぱり一撃で終わらせてあげる」

冷たい口調でアカネがポツリとつぶやくが、既に光の屑となつている蘭丸にその言葉は届かない

傍目から見たらずいぶんと冷徹な行為だが、蘭丸をノイズに巻き込まない様にするには、ゲームオーバーしかないと判断しての行動だった

ーバチバチバチ!!

案の定、倒れているゴーレムの真上に黒い球体が現れた。
クロウの球体である。

破滅を呼ぶ黒い翼は小さな放電を繰り返しながらゆっくりと、その姿を変えて行った。

「(道標)を追って来ればまさか彼らと出会うとはな・・・。
まあ、良い。災いの芽は早い内に摘んでおくに限る」

ホームの近くにある森の中では木々に隠れて、白いマントの男が高みの見物をしていた。

完全に気配を消しているのかアカネは全く男の存在に気付いていない。

と、そんな中長いカウボーイハットに隠された男の眼が、クロウの真下で倒れているゴーレムを見て止まった。

「ゴーレムか。ちょうど良い、私達の手駒となってもらおう」

長い襟に隠れた口が吊り上がったかと思うと、男はそっと倒れているゴーレムを指差す。

すると、鳥の姿になったクロウの三つ眼の窪みがボンヤリと光り、持っていた黄金髑髏が黒い涙を流し始めたのだ。

(コ、コ、ココココココココオー!!)

一滴の水滴となった黒い涙が降り注ぐと、ゴーレムの体に異変が起こったムクリと巨体を起き上がらせると、手足を引っ込め突然回転し出したのである。

猛烈な土煙を上げながら回転するゴーレムの周りにはまた赤いゲ-

トが現れ、エンゴウの時と同じ様に『∴√≡』と言う謎の抽象文字が現れる。

吸い寄せられる岩や土も吸収しながら変身を遂げる岩石モンスターは、やがて回転も止め、異形となったその姿をアカネ達に曝した。

《オオオ・・・オ》

赤いゲートが消えると低いうめき声を上げて（それ）はあった。

まるで石膏で固めた巨大な男性の顔ー。

それがゴーレムの成れの果ての姿である。

石版に埋め込まれ、眼も口も頑なに閉じた顔はクロウと同じ三つ眼の窪みがあり、そこだけ眼球の代わりに光が爛々と輝いている。

クロウもエンゴウも総じてそうだが、この岩石モンスターもまた、生き物とは思えない姿である。これを作った人間はお世辞にも良い趣味とは言えないだろう。

「モンスター出現。先のデータからノイズ時に現れるウィルスモンスターと断定・・・」

不気味なウィルスモンスターを前にしてもクールな魔法少女は全く動じない。

しかし、一般ユーザーがノイズを相手にするのがどれだけ無謀な事かアカネも十分理解していた

「対敵との勝率0，03％・・・退避を優先すべきと判断する」

冷静に相手を分析しながらもアカネはチラッと《噂屋》のホームに視線を向ける。

恐らくノイズの標的は屋敷の中にいるハジメと焰だ。

自分がこの場から逃げるのは簡単だが、そうすればハジメ達に危険

が及ぶだろう。

今日会ったばかりの少年の命と自分の命、アカネは頭の中でその二つを天秤に賭ける。

すると答えは即座に出た否、考えるまでも無い選択だった。

「ハジメ・・・守る！」

それまでの感情の無い口調では無く、少し幼さの残る少女の声でアカネは決意を口にした。

どうせ生き残った所で、待っているのはいつもと同じ退屈な日常生活だけなのだ。

ならば自分の命などと言うくだらない理由で、あんな可愛い男の子を見殺しなど出来る訳が無い。

よく歴戦の戦士などが持っている

「捨て身の精神」とは何処か違う、ズレた覚悟でアカネは戦う決心をした。

「・・・これより新たなミッションを開始する。最優先事項は《ハジメを守る事》」

クルクルとロッドを回しながらまたアカネが構い直す。

愛しい少年を守るため、全く勝ち目の無い少女の決死の戦いが今始まろうとしていた――。

（続く）

FILE..26『無謀（ワンサイド）』

「岩窟王・・・!?」

不気味なウィルスモンスターと対峙し、アカネが戦いを決意するほんの少し前、《噂屋》のホーム内ではハジメが赤いゲートに浮んだ文字を解読していた。やはり少年にだけはあの謎の文字が読める様だ。

「それがあのモンスターの名前か・・・!おい、ばーさん!ホームのドアを開ける事出来るか!?!」

岩窟王の出現と共に焰が入口に向かって駆け出す予想外の敵の来襲にいても立ってもいられないと言った感じた。

「ちよいと待ちな。すぐに開けられるだろうがアンタ一人で何する気だい?」

大型コンピュータを操作しながらオババが忠告する。程なくプシユーンと言う音と共に入口のドアが開いた。

「決まってるんだろ!あのモンスターをぶっ飛ばす!!」

「焰さん!ボクもー」

「ついて来んな!!」

と、外へ出て行こうとする焰に、ハジメが付いて行くと突然一喝された。ホーム内に響き渡る怒鳴り声はハジメはもちろんオババや次郎まで黙らせる。

一瞬《噂屋》内部は水を打った様に静まり返ってしまった。

「ほ、焰さん。どうして・・・？」

「どうしてだって？ テメーが1番分かってるんじゃないのか？」

驚きながらも恐る恐る聞くハジメに対し、焰は振り向かずには答える。
褐色の大きな背中がはっきりと拒否を示している様で、ハジメはゴクリと唾を飲み込んだ。

「たかだかLv1から5になっただけのガキに何が出来る？」

もうお前のお守りにはうんざりなんだ。

足手まといは大人しくここで待ってろ！！」

――足手まとい。

今まで、自覚はしていたが誰にも言われる事の無かった言葉が深く少年の胸に突き刺さる。

ハジメがショックを受け言葉を失ってしまうと、焰はチツと苛立ちの舌打ちをした。

「お待ちよ。アンタ、まだ分からないのかい？ ノイズのモンスターと戦えるのは坊やだけだ。アンタが行ったって手も足も出やしないよ」

「るせえ！！ そんなもんやってみねえと分かんねーだろうが！！」

呆れた態度でオババが止めるが、褐色の鬼人は聞く耳を持たない。
ノイズが現れてから何故か頑なな態度になった焰は、そのまま一度も振り返らず外へと出て行ってしまった。

「・・・やれやれ、血気盛んな事ですなあ。ではバトルは若い人達にまかせて私達はここで嵐が過ぎ去るのを待つとしますか？」

「のんきな事言ってんじゃないよ。アカネ達がやられたら次は私達かもしれないんだ」

「そりゃあ困りますなあ稼ぎ手の私がいなくなったらカミさんが悲しむ」

後ろで喋っている次郎とオババの声に耳を傾けずハジメは両手を強く握り締めた。

悲しかったからでは無い悔しかったからだ。

最初はただ乱暴者で怖い印象しか無かった焰だったが、この森に来て段々とその印象も変わり初めていた。

シュウとはまた違ったタイプの頼れる兄貴の様な存在だと少年は思っているのである。

だが、今の一言でその信頼は脆くも崩れ去った。彼は自分の事をお荷物とは思って無かったのである。

自分がどれだけ無力な存在か分かっているだけに焰の言葉が否定出来ず、ハジメは悔しくって仕方が無かった。

「落ち込むんじゃないよあいつはただ不器用なだけさね」

「え・・・？」

立ち尽くす少年を見て、オババが声を掛ける。だが言葉の意味が分からずハジメはオババの方を見た。

「不器用って・・・？」

「なんだい、坊や。まさか本当に焰が、アンタの事邪魔だと思ってここに残したと思っっているのかい？」

ヒッヒッヒ・・・違うよあればアンタを守るためにワザと突き放したのさ」

オババの言葉にハジメの表情が変わった。少年が興味を示すと、オ

ババは椅子を回してハジメの方を向く。

「あの焰って奴は荒くれ者だが真っ直ぐな男だね？

誰かが虐められてると後先考えずに飛び出しちまうのさ。

それにバーカードにだけは忠実でね。奴の命令だけは絶対守るんだ。そのバーカードが坊やとアカネを連れて帰れと言った。

だから焰はアカネを助けに行ったのさ。

坊やをここに残したのは・・・まだ未知数な力を持つアンタを危険な眼に合わせたくなかったって所かね？」

思案顔で考えるオババの推理には妙な説得力があった。確かにそれならハジメが抱いていた彼の印象とも合致する。

だが、それだけでは分からない事が出て来る。だからハジメは正直に自分の疑問をぶつけて見た。

「で、でもドアが開くんならわざわざ助けに行かなくても良いんじゃない・・・アカネが《噂屋》の中に逃げてくれば良いんだし」

《オオオ・・・オ》

ハジメの質問とほぼ同時に大画面では赤いゲートが消え、中から岩窟王が出て来た。

そして、モンスターと対峙している少女は何を思ったかクルクルと回したロッドを岩窟王の方に向けたのである。

全く勝ち目の無いウィルスモンスターと戦う気なのだ。

「アカネ！！何で！？」

「・・・と言う訳さ。うちのアカネも命令には忠実でね。

逃げるタイプじゃないって事に焰は気がついたんじゃないのかい？」

大画面の中で無謀な戦いに挑もうとしている少女を見て、ハジメは

愕然とした。

アカネもまた《噂屋》を守るため、自分を犠牲にしようとしているのだ。

よく考えるとハジメの周りにはそんな人ばかりだった。

シユウやバーカードや焰――。

自分の信念や大切な物を守るために皆、絶対勝てない相手に挑み傷ついて行く。

だが、今の自分にはそれを止められる力がある筈なのだ。黒く染まった左手を改めて見る。

あのマルコロ大聖堂でウィングと交えた決意を思い出し、ハジメはギュッと掌に力を込めた。

「オババさん、もう一度入口のドアを開ける事は出来ますか？」

真剣な表情になった少年を見て、オババが片手でキーボードを操作すると簡単にドアが開いた。

ひよっとしたら、上手く乗せられたのかもしれない。

だが、もうここで待つつもりはハジメには無かった

「待ちな、そのドアが開くのは恐らくこれが最後さ。回線が切断されちまってるからね」

このドアを出たらもう中に入る事は出来ない。

それは逃げ場が無い事を意味する。

だが、ハジメは力強く一步を踏み出すと、なんの躊躇も無く外へと出て行った。

「いやゝさすがですなあ発破を掛けられるのが実に上手い。ですが、あの坊やで大丈夫ですかね？」

「さあね？まあ、黙ってみてな。ひよっとしたら面白い物が見れる

かもしれないよ」

あまり少年に期待していない様子の次郎とは裏腹にオババはまた気味の悪い笑い声を出す。

深い皺の刻まれた老婆の眼には、何か確信の様な光が含まれていた
ー

岩で出来た巨大な顔のモンスターである岩窟王が叫んだ途端《噂屋》の周りを赤いゲートの様な光が取り囲み、ドーム状になった。エンゴウがクロスピアに現れた時に出した結界ーノイズ・フィールドである。

これが出てしまったら岩窟王を倒す以外脱出する方法は皆無だ。だが、元から逃げるつもりが無いアカネは全く気にせずただ前を見据えていた。

「ーっ！」

軽く息を掃くと少女は岩窟王に向かって突進した相手の能力が分からない今、正攻法で攻めるしかないと判断したのである

（拳士）特有のスピードであっという間に岩窟王との間を詰めるアカネ。

だが、後数歩で攻撃が届く距離まで近づいた時、異変が起きた。

ゴゴゴゴゴーッ！

《オオオ・・・》

低い岩窟王の呻き声と地響きと共に、突然それは現れた。

何と地面が盛り上がったかと思うと、土が宙に浮き巨大な二つの手になったのである。

それは体の無い岩窟王の正に（手）だった。

「――ライトニング・エッジ」

巨大な土くれの手が迫るのを見て、少女が呪文を呟くと赤いロッドの先端に雷の刃が現れた。

それはまるで鎌。敵を切り裂く稲妻の鎌である。

刃を携えたロッドを握り締めると、アカネは何の感情も見せず岩窟王の手に向かって両腕を振りかぶった。

――ズバツ！！バリバリバリ！！！！

ライトニングエッジの斬撃を食らった岩窟王の手は横薙に真っ二つになり残った部分も雷の威力で粉々に弾け飛んでしまう

本体に迫るアカネを止めようと左手も立ち塞がるが、これもまた一撃！！

所詮、巨大と言っても土の塊である。

（障害物排除。これで・・・）

邪魔な土くれを退けたアカネは一気に岩窟王へと迫る。そしてウィルスモンスターの巨大な顔に一撃を加え様としたその時だった。

――ビシュ！ビシュ！ビシュ！！

「・・・っ！？」

突然、背後に気配を感じたアカネが慌てて体を捻り、ロッドを振った。すると飛んで来た何かが雷の鎌に当たり、砕け散ったのである。

よく見ると、それは石が混じった土の塊だった。

体制を立て直し、背後に振り返ったアカネだったが、その青い眼に

嫌な光景が映し出される。

先程ライトニングエッジで撃破した岩窟王の手の破片が、全て宙に浮いて少女を狙っているのだ。

どうやら脆い反面粉々になっても動けるらしい。今もロッドで破壊した破片が一塊に再生し、また宙に浮くのを見てアカネの表情が少しだけ曇った

ーシュン！シュン！シュン！ドガガガッ！！

「・・・っ！」

標的目掛けて雨の様に降り注いで来る岩窟王の破片を、ロッドを回転させて必死に防御するアカネ
防御魔法を唱えたい所だが、破片のあまりの数に精神を集中させる時間が全く無い。

何とかこの場所を切り抜けようと、ロッドを振るい続ける魔法少女。
彼女の意識が完全に破片に向いていた時だった。

《オオ・・・オ・・・オ！》

不気味な岩窟王の呻き声が聞こえて来た。

振り向くとアカネの碧眼が大きく見開かれる。

何と今まで眼も口も閉じていた岩窟王が、口を開け、口内が真っ白に輝いていたのである。

それは一目で、何か攻撃をしようとしているのは明らかだった。

「・・・回避率10%。絶対・・・絶命」

《オオオオ・・・ッ！》

こんな時でも冷静に状況を分析してしまう自分に呆れてしまう。

岩窟王の口の中の輝きがあふれ出すと、それは破壊光線と名を変え、

少女目掛けて発射された。

ードオオオン！！

「待ちやがれ！！」

眼が眩みそうな破壊光線が眼の前まで迫って来た瞬間、少女の前に巨大な黒いの翼を広げたまま一つの影が割り込んで来た。焰である。

空を飛び、岩窟王の破片群をかい潜って来た鬼人は向かって来る破壊光線に対し、渾身の力を込めて相棒であるアックスギターを振り下ろす。

「ぬうううーっ！！！！おりゃああああっ！！」

獣の咆哮と共に繰り出した一撃は光線をそのまま真っ二つにぶった切った二つに分かれた光線はアカネを避け、自身の破片達を消滅させて行った。

ドドドドド！！ズガガガアーーン！

「へっ！間一髪ってか？」

「貴方・・・なんで」

予想外の焰の助太刀にアカネも驚く。

エンゴウ戦で手酷くやられ、オババにも勝てないと説明を受けた彼が再びウィルスモンスターに戦いを挑むのが理解出来なかったからである。

「はっ！バーカードさんにテメーを連れて帰れって言われてるからな？」

それに、このブサイクな岩野郎に弔いの歌を聞かせたくなったんで

決めセリフを掃くと、焰は岩窟王に突進した。破壊光線で破片が無くなってしまったため岩窟王は無防備である。

走りながらアックスの先端をモンスターに向け、小さな火球を発射する。迷いの森の広場で阿国を倒した時の技だ。

火炎弾が命中し、炎が岩窟王を包み込むと焰はギターの先端を火炎に突き刺し、後ろを向いてギターを弾く体制に入った。

ジャーーン！！・・・ドガアアアーン！！

ギターの弦を引いた途端炎は弾け飛び、岩窟王は爆炎の中に消えて行った煙の中からもあちこちに岩の破片が飛び散り、焰の技が命中した事を告げている。

絶対の自信を持つ必殺技の直撃に、焰も倒せないまでもダメージを与えた事を確信する。

だが、徐々に煙が晴れて行く中で彼の表情が変わった。

焰が素っ頓狂な声を出したのも無理はなかった。煙の中から出て来たのは岩窟王の顔では無く、岩で出来た巨大な眼球である。

先程までの顔に比べたら一回り程小さいだろうか

眼球の腹には、赤いゲートが現れた時に浮かんだ『∴√≡』の三文
字が彫られている。

岩の眼球はゆっくりと回転しながら、ただ宙に浮いていた。

286

アカネがぽつりとつぶやくと、岩の眼球である《コア》がポツと淡い光を放つ。すると焰とアカネ二人がいた場所から突然地響きが起こる。

またしても地面から二本の腕が生えて来たのだ。

今度は二人を挟み込む様な形である。

岩窟王の腕が動き出したのと同時に焰は少女に目配せし、高々とジャンプした。

「・・・ライトニング・アロー」

「オラァ!!」

攻撃を回避しながら焰は焰炎弾、アカネはライトニング・アローをそれぞれ《コア》に放つ。

だが、その攻撃は岩の眼球に当たる直前、またしても見えない何かに弾かれてしまった。

《見えない壁》だ。

「チッ! やっぱコイツもバリアに守られてやがんのか!!」

舌打ちをしながら《噂屋》の入口近くまで距離を取った焰達だったが、その間に《コア》の周りにまた赤いゲートが現れ、石や岩を巻き込んで巨大な顔へと戻る。

どうやらあの顔は本体を守る鎧の役目を持っているらしい

(クソ! どうする・・・?)

元に戻った岩窟王を見て焰は内心焦っていた。

アカネに恰好良い事を言ってみたものの《見えない壁》に守られている以上、岩窟王本体にダメージを与えられるのは不可能に等しい。最善の方法はこのままアカネを抱え《噂屋》に逃げ込む事だが、相

手がわざわざ逃がしてくれるとは思えない。

《噂屋》に逃げ込んでも助かる保証は何処にも無いのだ。それでは解決にはならない。

（後残ってる作戦つつたら・・・）

一つ、勝てる可能性のある案が浮かんだが焰はすぐにそれを捨てた。その作戦には必要不可欠な人物がいたからである。

最悪、自分を盾にしてアカネだけでも避難させるかと危険な考えが頭に過ぎった途端、彼の耳に有り得ない声が聞こえて来た。

「アカネ！ 焰さん！！」

ハッとした鬼人が振り返ると、後ろにいた少女まで驚いて振り返っている

《噂屋》の入口にいた人物。

それは、焰の起死回生の作戦には必要不可欠な少年だった。

「ハジメ・・・」

「おまつ！！ 何で！？」

「ボクも闘います。守られてばかりじゃ強くなれない。それに・・・」

「

驚きの表情の二人が注目する中、決意を秘めた表情でハジメがつぶやく。そしてフツと表情を緩めるとどうしても焰に伝えたかった言葉の口にした

「足手まといには足手まとい為に、出来る事がある筈だから・・・」

（続く）

FILE..27 『作戦（ミッション）』

遅れながらハジメも焰達と合流する。それをノイズ・フィールドの外から白いマントの男も見ていた。

「ようやく主役の登場かこれで余計な手間を掛けなくて済む」

口調は穏やかだが、男の言葉には明らかな敵意が含まれていた。焰達がハジメをノイズの抵抗手段と考えて守ろうとしている様に、男もまた先のエンゴウ戦で少年を危険視しているのである。カウボーイハットに隠された男の眼が鋭く光った。

「今度こそ倒す。そのために岩窟王を召喚したのだ」

マントの男が勢い良く手を前に出すと、岩窟王の顔がまた淡い光に包まれる。

だが少年の方を向いている焰達はその変化に気がつかなかった。

「アカネ、大丈夫？」

ハジメが声を掛けると少女は頬を赤くしながらコクンと頷く。アカネにとってハジメの気遣い程元気になる回復呪文は無いだろう。

「このバカ野郎！俺が何のために・・・！

あゝもう良い！出て来ちゃったもんはしょうがねえ！三人であの岩野郎をぶっ飛ばすぞ！！」

勝手な行動をした少年を怒鳴りつけようとした焰だったが、前を見て

構え直す。

それもその筈、再生した岩窟王は土の腕をさらに二本増やし、迎撃体制を取っていたのだ。

言いたい事は山程あるが今はハジメがいる事で出来た勝機を掴むしかない

昔から考えるより先に行動が出るタイプだった鬼人は、そう結論付けて自分を納得させた。

「相手も待つ気はねーみてえだから手短に言う。いいか？俺が邪魔な岩野郎の腕や顔をぶっ壊したらガキ、お前は本体にありったけの銃弾ぶつけて奴のバリアーを壊せ！」

「は、はい!!」

少年の方を見ず、焰が一度捨てた作戦を告げる。自分が作戦に折り込まれている事を知って、ハジメも表情を引き締めた。

「バリアーさえ壊しちまえばあんなもん、ただの石コロだからな。アカネはガキの護衛だ。そいつがやられちまったら俺達に勝ち目は無い」

「・・・了解」

いきなりの呼び捨てを気にする様子も無くアカネが無表情で頷く。相変わらず、少女の判断の早さに焰もニヤリと笑った。

《オ・・・オオ・・・オ》

「よし。ーー行くぞ!!」

号砲一発、焰の掛け声と共に三人は弾かれた様に駆け出した。先頭を焰、ハジメと続いて最後にアカネのフォーメーションである。

突っ込んで来る三人を邪魔するかの様に空中から岩の破片が降り注いで来た。

岩窟王の顔の破片だ。

だが、焰がアックスギターを左右に降り、後ろに続く二人の道を作りながら、止まる事無く破片群を撃破して行く。

「オラオラァ！邪魔すんじゃねえ！！」

難無く破片群を突破すると、目の前に土の腕が迫って来たが、これもまた思いつきりジャンプして空中に留まると、焰炎弾で一気に4本とも撃破する

「オラァ！！」

「ドカン！ドカン！ドカ！ドガアアアーン！！」

「凄い！凄いです！！焰さん」

派手な焰の戦いっぷりに興奮した面持ちのハジメだったが、視線を前に戻すと自分の頭よりずっと大きな岩窟王の腕の破片が転がって来る。

少年が驚いて叫ぼうとした途端、アカネが割り込んで来てロッドで破片を真っ二つにしてしまった

「ズバッ！！」

「大丈夫？・・よそ見してちゃダメ」

「ゴ、ゴメン」

アカネに注意されハジメが謝ると、その背後で着地した焰がまた先頭に飛び出して来る。

残るは岩窟王本体だけだが、静かなる岩石モンスターは碎けた土の腕をすぐに再生させ、二つの手とし向かって来る三人に襲い掛かって来た。

「この・・・うぜえーんだよおお!!」

巨大な拳を作って向かって来る二つの手を見て突然焰は深呼吸をした。すると胸が真っ赤になる程熱く輝き始める。

極限までエネルギーを溜めているのだ。

胸に留まり切れなくなったエネルギーは口へと溢れ出し、焰はそれを岩窟王目掛けて一気に吐き出した。

「はあああっ!! 焰炎熱波あ!! (ぐえんねっば)」
チュドーーーン!・・・ドガガガアーーーン!!

吐き出された炎は熱線へと姿を変え、二つの手を一瞬で破壊する。貫通した焰炎熱波はそれだけでは留まらず、何とそのまま岩窟王の顔を碎いてしまった。

「俺が使えるのは炎だけじゃねーんだよ!

今だ!クソガキ!! やっちまえー!!」

「はいっ!!」

岩の顔を破壊され、剥き出しになった《コア》を確認して焰がGOサインを出す。あらゆる障害を廃除し、万全の状態へと持ち込んでもらった少年は高々とジャンプし銃口を岩の眼球へと向けた。

「くらえええー!!」

ーードキュン!ドキュン!ドキュン!!

《コア》の再生が始まる前にハジメが持っていた二丁拳銃からありったけの銃弾を発射する。

三人の想いを込め、結一ノイズを倒せる鉛の弾は一直線に《コア》

へと飛んで行った。

「ガキ！！ガキーン！！」

「なっ！！」

「・・・え？」

しかし聞こえて来たのは無情なる金属音。

攻撃をしたハジメはもちろん、その場にいた焰やアカネも硬直する。少年の攻撃は空しく《コア》を守る《見えない壁》に弾かれてしまったのだ。

「そんな・・・なんで？」

「ど、どう言う事だ！？ガキの攻撃も効かねえじゃねーか！！」

折角のチャンスが無駄に終わった所か、あると信じていた勝機まで失いショックを受けるハジメ。だが敵は待ってくれなかった。

《コア》の腹にあった名前を記す文字が光ったかと思うと、突然少年の背後が巨大な影に覆われる

見ると、土では無く岩で出来た手がハジメを捕らえようと大きく掌を広げていたのだ。

「うわぁ！！ーあ・・・ぐう！」

「クソガキい！！うおっ！？」

空中にいるため逃げる間も無く、少年は捕らえられてしまった。

右手だけは何とか自由だが、肺から空気を絞り出されそうな力の強さに、ハジメの表情が苦悶に変わる。

すぐに救出に向かおうとする焰だったが突然の地響きにその足が止まる。何と、地面から二人を取り囲む様に岩の腕が4本生えて来たのだ。

「クソッ！邪魔する気か！！」

「ハジメ・・・守る」

苛立ちを見せる焰の背後でアカネが走り出したかと思うと、彼の肩を踏み台にして軽々とジャンプした。

無表情ながらハジメを捕縛した岩の手に怒りの籠った視線を向け、ロッドを握る手にも力を込める

だが、そんな彼女の前を無数の影が立ち塞がった岩窟王の顔の破片である

少女とハジメの間をビッシリと埋めた破片群は、今までに無い数でアカネの方に飛んで来た。

「MUY・・・マジ、ウザい奴」

一瞬、眉間に皺を寄せたアカネだったが、持っていたロッドをフルスイングさせ破片群を一気に砕く。

だがそこから予想外な事が起こった

一度粉々になった破片が一点に集中し、岩の手になって再生したのである

これにはさすがのアカネも面食らい、強靱さを増した岩窟王の手に叩き落とされてしまった。

「ーくっ！！」

「アカネ！！」

強烈なカウンターパンチを辛うじてロッドで防御した魔法少女は、何とか体制を立て直し地面に着地する。

しかし、初めて見せるアカネの苦悶の表情が、岩窟王の手のパワーを物語っていた。

「おい、大丈夫か？」

「――土から岩になった事でパワー、硬度共に50%アップ・・・。一撃で破壊するのは困難な模様」

返事の変わりに敵の情報を報告されて安堵する焰だったが、その間も状況は悪化して行った。

ハジメの攻撃を防いだ《コア》は再度再生を果たし、空中に散らばっていた破片群も次々と岩の手に変化して行く。

何が何でもハジメの救出をさせないつもりなのだ

「ちっ！面倒くせー展開になってきやがったぜ！！」

悪態を突き、構えたままどうするか智恵を絞っていた焰だったが、そこでふと疑問が浮かぶ。

それは、何故岩窟王は今まで岩の手や腕を使わなかったのだろうかと言う事だ。

ここまで強靱な守りの力があるなら、さっきの作戦は失敗に終わっていた筈である。

まるでワザと自分の懷に飛び込ませた様な・・・

と、そこまで考えた時彼の脳裏に嫌な考えが浮かんだ。

「まさか、コイツ！！」

「最初からハジメが狙いだった・・・」

同じ考えに到達したのか背中合わせになったアカネも口を開く。

そう、全てはハジメをおびき寄せたための罠。

岩窟王は最初から全力など出して無かったのである。

アカネとの戦いで適度に付け入る隙がある様に見せれば、ノイズの脅威を知る焰は必ずハジメの力を当てにした作戦を展開する。

相手はそこまで考えて最初から戦っていたのだ。文字通り、掌で躍

らされていた事に気がついた焔は自身のあまりの不甲斐無さに、ブルブルと体を震わせた。

「くっ・・・！このっ！！このっ！！」

一方、捕らえられたハジメもただ無抵抗と言う訳では無かった。自由な右手でダガーを振り下ろし、何とかこの状況を打開しようとする。

だが頑強たる岩の手は少年の攻撃などではビクともしない。ならばと必死にもがいて拘束から脱しようとするのだが、岩窟王の力は強力で全く動けそうに無かった。

《オオ・・・オオオ》

と、その時うるさい少年を黙らせる様に岩窟王が小さく呻くとハジメを握っていた手に変化が起こった。

形を変え始めたのであるぐにやぐにやとスライムのように軟体化したかと思うと自由だったハジメの右手まで拘束してしまう岩窟王の手。柔らかくなっても変わらない力の強さにハジメは苦しげに呻く事しか出来なかった。

「う・・・こ、これは！？」

一瞬で終わった苦痛の後少年は驚きの声を上げていた。

自身を拘束する物、それが手から十字架に変わっていたからである。ご大層に手足を岩で出来た枷で捕まえてある。

空中で張り付けにされたハジメは、正にゴルゴタの丘で処刑されたキリストと一緒だった。

「かつて、キリストは反逆の徒としてローマ帝国に処刑された。そ

れは当時の神を否定したからだと言う」

張り付けになったハジメを見て白いマントの男が口元を歪めた。それはまんまと罠に嵌まった少年達を嘲笑っている様である。だがすぐに笑みを消すとまた手を前に差し出す。そしてハジメに向かって冷たく言い放った。

「この世界の神に仇成す反逆者よ。その罪、命で償うが良い」

《オオ・・・オ・・・》

男が指をパチンと鳴らすと岩窟王の周りにあった破片がまた集まり、いくつもの岩の杭に姿を変えた。

それを見てさすがのハジメも何をする気が察する

無駄な抵抗だと分かっている体を動かしてみるが両手、両足を封じられてしまつてはやはり逃げようが無い。

下にいた焰達も、岩窟王の腕の攻撃をかい潜りながら少年の危機に気がついた

「やべえ・・・クソガキい!!」

居ても立ってもいられずついに焰が翼を広げ、飛び立つがその前にいくつもの岩窟王の手が立ち塞がる。

「どけえー！ー！！」

焰炎弾を吐き出し、撃破しようとするが、爆煙が晴れると破壊されていた破片がすぐに再生して元に戻ってしまう。そして逆に岩窟王の手が焰に覆い被さって来た。

「チク・・・シヨオー！ー！！」

アックスギターで攻撃を防ぐがパワーで圧倒されそのまま地面に叩き潰されてしまう。

焰の叫び声にハジメが下を向いた瞬間、岩の杭が少年に向かって発射された。

「うわぁ！！」

ーードクン！ドクン！

うるさい程大きい心臓の鼓動を聞きながら、ゆっくりと迫る岩の杭をハジメは見ていた。

何度同じ光景を見ただろう・・・

何度同じ目に遭っただろう・・・

そして何度後悔し、反省しただろう・・・？

また自分は皆の足を引っ張り、命の危機に晒されている。

そして次にどうなるか？ハジメには予想出来た。何故なら自分はノイズと戦える結一の手段だったから・・・。

だから少年はそうはさせたくなくて、腹の底から思いっきり叫んでいた

「来ないで焰さぁー！ー！ーん！！」

「うおおおおー！ー！ーっ！！」

ドカアアアアン！！

地面に押し付けていた岩の手が粉々に砕け、中から黒い翼が飛び出した。それは真っ赤な炎を全身に纏った鬼ー！。

鬼は空中に群がる岩窟王の手を次々と破壊すると少年と杭の間に立ち塞がる。

そして体を反転させ杭に向かって背中を向けると少年を見てニヤリと笑った。

「ーな？だから出て来んって言っただろ？」
ードカドカツ！！

嫌な音の共に焰の表情が苦痛に歪んだ。それと同時に彼の体がぐらつく。

焰の背中や翼には岩の杭がいくつも刺さっていた
自分の身を亭してハジメを守ったのである。

見たく無かった最悪の光景に少年の表情は凍り付いた。

「焰さん！！」

「ぐ・・・おおおおーっ！！」

一瞬、地面に墜落するかと思われた焰だったが気合いで何とか持ち直し、アックスギターでハジメの手枷、足枷を破壊する
そして少年を抱き留めたかと思うと、何と体当たりで岩の十字架を破壊してしまった。

「アカネえ！！今だあ！！」

「・・・了解」

焰の掛け声と共に、下にいた少女はロッドの先端を天空へと掲げた。
ハート型の先端にあるのは放電した雷。

それが一直線に空に放たれると、綺麗だった月夜はまた真っ黒な曇天に包まれる。

「ーライトニングレイン」

ピシャーーン！ゴロゴロゴロ~~~~！！

アカネが魔法の名を口にした途端、空から無数の雷が降り注ぎ、岩

窟王の顔や腕に直撃した。

雷に当たった物は全て破壊され、一時期アカネの周りは爆煙に包まれてしまう。

そんな中、背中に怪我を負い、フラフラになりながらも焰が、そして後を追う様にアカネが煙の中から猛スピードで飛び出して来た。

ーズササササー！！！！

「ぐっ！痛ってえ！！！」

力尽き、顔や体を激しく擦りむきながら墜落する焰。

それでもハジメを無傷で守った所はさすがである

「焰さん、大丈夫ですか！？アカネすぐに回復魔法を・・・」

「バカ、俺の事はどうだって良い！それより早く今の内に《噂屋》に逃げろ！！！」

自分の羽や背中に刺さった岩の破片を抜きながら焰が言う。

さっきの攻撃で岩窟王が倒れたとは思えない。確かに逃げるなら今しかチャンスは無さそうに見えた。

だが、その言葉を聞いてハジメの顔が暗くなる。

「それが・・・駄目なんです！ボクが外へ出た時、回線が切断されるからもうドアは開かないって噂屋のお婆さんが！」

「んだと！？・・・やれやれ、まいったぜ」

勝算も無く逃げる事も出来ず、正に八方塞がりの状態に追い込まれてしまったハジメ達をさらに追い詰める様に、突然爆煙が晴れた。

見ると、既に再生を終えた岩窟王が岩の手や腕を無数に従え、佇んでいるのである。

空中に浮く破片群も、先程破壊された物を取り込んで倍以上に増え

ていた

《オオオオ・・・！》

「ああ・・・そ、そんなあ」

「ちっ、しょうがねーな」

絶体絶命な状況に顔を青くするハジメだったが、その横でスクッと焰が立ち上がったのを見て思わず驚いた。

笑っているのである。

絶望した時の、力の無い諦めの笑みでは無い。

彼がよく見せる自信満々の笑みである。

それは言うならば強者と戦える事を喜んでいる者の笑いだろうか？

こんな絶望的な状況で何故彼がそんな笑みを浮かべられるのか？

ハジメには理解出来なかった。

「アカネ、防御魔法だ。死んでもガキを守れ」

「・・・了解」

焰の笑みを見て何かを感じ取ったのかアカネはただ頷くと、地面にロッドを刺し、ドーム型のバリアを作り上げる。

無表情を装ってはいるが魔法の多用のせいか軽く呼吸が乱れていて、少女が疲労しているのがハジメにも分かった。

「よし、後は俺が奴の注意を引き付けて時間を稼ぐ。ババアもこの状況を見て何か対策を練っている筈だ。

《噂屋》の入口が開いたらお前ら二人は直ぐに逃げろ！」

「そんなあ！？ 焰さんを置いて逃げるなんて出来ませんよ！」

「るせえ！！最後の最後ぐらい人の言う事聞きやがれ！」

焰の口から出た

「最後」と言う言葉にハジメはショックを受けた。

やはり彼は自分を犠牲にする気なのである。

少年の表情を見て、気まずそうに頭を掻いた焰はゆっくりと前に歩き出す

背中に残された岩窟王の攻撃の痕が、何とも痛々しかった。

「怪我してようが足折れてようがそんなもん関係ねえんだよ。

俺はただ目の前の敵ぶっ飛ばすだけだ。その楽しみを取るんじゃないやねえ！」

言いながらアックスギターを空中の光から取り出し、焰が肩に乗せる。

こうしてる間も岩窟王はどんどんパワーアップしていた。破片群を次々と岩の手に変化させ守りを強化させているのである誰かが立ち向かわなければ、パーティは全滅だろう。

だが、だからこそハジメは納得いかなかった。

焰は分かっている！彼の言い分は犠牲になる者の意見だ。

残された者がどんな気持ちか・・・目の前で大切な人が消えていく悲しみや無力感を彼は知らないのである。

遠ざかる焰の背中を見てハジメは消えて行ったシュウや自分の体を失ったバーカードと重なった。

だからこそ彼を止めるために叫ぶ。

「どうして！！どうして嫌われ者のフリしてまで守ろうとするんですか！？」

ボクは足手まといなんですよ！？なのになんで！！」

少年の悲痛な叫びに焰が足を止める。

眼が熱くてしょうがなかった。恐らくリアルではまた自分は泣いているに違いない。

『エデン』では出ていない涙や鼻を手で拭い、ハジメがしゃくり上げると振り返らず焰がぼつりとつぶやいた。

「・・・バーカードさんがお前らを連れて帰れと言ったからだ」

「命令？任務のためなら命を捨てても良いって言うんですか！？」

ゲームオーバーになったら消えちゃうんですよ！！そんなに任務が大事なんですか！？」

「うるせえな。お前に何が分かる？あの人は・・・バーカードさんはな・・・」

不思議な光景だった。気の弱いハジメが大声を出し、いつもは怒鳴り散らしている焰が静かな口調で話しているのである。だが、だからこそ彼が本心で話しているのが伝わって来る。そして――。

「バーカードさんはな？俺を救ってくれた人なんだよ」

「・・・えっ？」

焰の言葉を聞いてハジメの勢いが止める。だがそれと同時に焰が片膝をついてしまった。

見ると彼の背中にある傷痕が黒く変色し、蠢いている。

HPが0に近づいたためウィルスの侵食が始まりつつあるのだ。

このまま攻撃を受け続けゲームオーバーになれば・・・待っているのはシュウと同じ消滅である。

「くっ、どうやら俺もここまでの様だな。ちょうど良いから話してやる。俺が《ゴーストハッカーズ》に入るきっかけになった話を・・・」

それでも笑みを浮かべながら焰が静かに語り始める。

今まで決して過去を語る事の無かった焰が話すバーカードとの出会いの話だった。

（続く）

FILE..28『鬼（オーガ）』

――その昔、『エデン』には《魔音を奏でる鬼人》と呼ばれるアウトローがいた。

誰彼関係無くバトルを申し込み、全く引くと言う事を知らぬ猪突猛進の戦い方は正に鬼神か血に飢えた狼――。

彼と遭遇した者は、そのあまりの恐ろしさに彼が相手のために弾く弔いの歌を二度と忘れないと言う。

事態を重く見たWB社は彼をブラックリストのアウトローに指定し、高額を賞金を賭けたが腕利きのチェイサー達は全て返り討ちに合っ
てしまい、実力NO.1と言われた龍馬でさえ彼を捕らえるまでには至らなかった。

皆が彼の真紅の髪と相棒のギターに恐怖し、そしてその強さに憧れを抱いていた――。

その当時の彼――焰は自信に満ち溢れていた。誰も自分を止める事など出来ないと思っていたのである。

偽善者野郎のチェイサーも、群れて戦う事しか出来ないアウトローも自分の憂さ晴らしの獲物でしか無かった。

『エデン』最強は自分なのだと思っていたあの時までは……。

――ドガッ！――！

「ぐあっ！！」

強烈な一撃を食らい、焰が吹っ飛ぶ。地面に幾度も叩きつけられながら吹っ飛ばされたせいで持っていたアックスギターまで手放してしまい、遙か前方で地面に突き刺さっていた。

「ぐ・・・野郎お！」

悪態を突きながら何とか体を起こそうとするが仰向けになった体は、
 どうやっても動きそうに無い今まで感じた事の無い圧倒的な実力・
 ・！

バトルではどんな相手だろうと恐怖を与えて来た焰が今、初めて恐怖を感じていた。

「どうやらここまでの様だな？」

ゆつくりとした歩みで自分を叩きのめした相手――《黒の勇者》が近付いて来る。

『エデン』では密かに英雄と呼ばれている伝説のユーザー。
噂が噂を呼び、その存在すら定かではないと言われた男が眼の前にいる。

突然の出来事だった。

いつもの様に獲物を探していた焰の前に、風の如く現れた男は一目見て、ただ者で無い事は分かった。

普通の人間なら倒れてしまいそうな覇気を放ち、ビリビリとした緊張感の中焰は最高の獲物が現れた事にほくそ笑む。

だがその余裕は長く続く事は無かった。

結果は惨敗。今こうして自分は、地べたに這いつている。

「くっ！ テメエ……その強さ反則――があ！？」

せめて憎まれ口だけでも叩こうとした焰の体を無慈悲にも踏み付ける《黒の勇者》

その何の感情も感じられない眼に見下され、焰は唾を飲み込まずに

いられなかった。

「悪いが、アウトローと話す口は持ち合わせていないのでな。しかしそこまでやられて、まだそんな口が叩けるのは大した物だと言っておこう」

淡々とした口調はそのまま焰の頭を踏み潰しても顔色一つ変えない意志の強さを伺わせる。

百獣の王者、ライオンに睨まれたウサギはこんな気分なのかもしれない。

初めて心の底から勝てないと思う相手を前にして激しく燃えていた闘争心と憎悪は消え、焰は観念した。そして――。

「へっ・・あー負けだ負けだ！俺の負け！！ゲームオーバーだろうがアカウント停止だろうが好きにしやがれ！！」

踏み付けられたまま焰は笑っていた。

卑屈めいた笑いでは無く見てるのが気持ち良くなる程の豪快な笑いであるまさか自分が負ける日が来る事になるうとは思ひもしなかったが、それでも焰は満足していた。

1対1で完膚無きまでぶっ潰されたのだ。

こんな男だったらやられても悔いは無い。

今まで自分に正直に生きて来た焰は『エデン』での幕引きをもすんなりと受け入れていた。

「この状況で笑っていられるとはな？・・実に面白い」

焰を踏み付けたまま《黒の勇者》は驚いている様だった。

だがすぐに手を空中に翳すと、光の中から自慢の愛剣『魔光』を取り出すそしてクワガタの様に中央が二つに割れた剣先を焰の首元に

突き付けるとまた抑揚の無い声で呟いた。

「一つだけ質問に答えろ何故アウトローなどに堕ちた？」

雷を放つ魔剣を突き付けながら自分を見下ろす《黒の勇者》の表情には、下手な嘘を突けばその場で殺すと言う非情さが垣間見えた。しかし、今さらこんな状況で嘘を突いても仕方ないので、焰は正直に答える事にする。

「別に・・・好きでアウトローになった訳じゃねーよ！眼の前にいた奴ら片っ端からぶっ飛して行ったらそう呼ばれる様になってただけだ。

・・・俺には戦う事しかねえーんだよ」

本心からの言葉だった。自分はただゲームの機能の一つである「ユーザー同士のバトル」を楽しんでただけ。『エデン』を始めた頃から誰とも群れず、リアルの経験を生かした戦い方でモンスターやユーザーと戦っていたらいつの間にか《魔音を奏でる鬼人》なんて呼ばれてた。

まあ、敵味方関係無く喧嘩を吹っ掛けていたのだからお尋ね者になっても仕方ないと言われればそれまでなのだがー。

「何も顧みずただひたすらに戦いだけを望んだと言う事か？面白い！」

死刑囚の最後の言葉を聞いた神父の様に微笑を浮かべた《黒の勇者》が『魔光』を持ち上げ、トドメを刺そうとする。

いよいよ最後の時が来た
焰はゆっくりと眼を閉じる。

やられたら多分アカウントを停止させられて二度と『エデン』は出

来ないだろう。だがこー言う終わり方も悪くない。

焰が覚悟を決めたのと同時に『魔光』の一刃が振り下ろされた。

ーガツン!!

「っ!!・・・あ？」

首を切られた筈なのにゲームオーバーにならず焰が眼を開けた瞬間、その眼が驚きで見開かれる。

『魔光』の刃は鬼人を捕らえていなかった。隣の地面を突き刺していたのである。

焰が混乱していると仕事は終わったとばかりに愛剣をしまい、立ち去ろうとする《黒の勇者》

何の警戒も無く向けられた背中に、焰の怒りが爆発した。

「待てよっ!!」

その場に響き渡った怒声に《黒の勇者》が立ち止まる。見ると動けない筈の焰が片膝を付きながらこちらを睨んでいた。

どうやら怒りを力に変えて立ち上がったらしい。全身から発せられる殺気は先程の比ではない。

むしろ心地良い程の敵意を向けられ《黒の勇者》は怒れる獣の方を向いた

「デメエ・・・俺を舐めてんのか？なんでトドメを刺さねえ!!下手な同情なんていらねえんだよ!？」

全身を逆立たせ、今にも飛び掛かって来そうな勢いで焰が身構える。恐らく武器など無くてもコイツなら喉元に噛み付いて来るだろう。そー言う命を省みない所が先の闘いから奴にはあった。

『エデン』と言うゲーム内でリアルとは別人を装うユーザーはたく

さんいるが、鬼人のは生来の物に違いない。

(全く・・・コイツは実に面白い)

無表情を装ってはいるが内心《黒の勇者》は苦笑していた。

もし自分が同じ事をされていたら、迷わず相手に立ち向かうと思っただけである。

ゲームの中とは言え、戦士同士の闘いは己の存在を賭けた崇高な物だ。

そこに妙な情けを入れればそれは相手を侮辱した事になる。

しかしそのタブーを犯しても《黒の勇者》は焰を倒したくなかった。彼にはその価値があると判断したからだ。

しかし、このままだと間違い無く彼をゲームオーバーにしなくてはならなくなる。

仕方なく《黒の勇者》は焰を助けた理由を話してやる事にした。

「・・・私がWB社から依頼されたのはアウトローの始末だ。だが、お前の眼はアウトローの様に腐ってはいない。

自分の力の使い道が分からず、戦いを求める戦士の眼だ」

「あ！？何訳分んねー事言ってたんだ！！」

《黒の勇者》が紳士的に話しても鬼人は態度を崩さない。どうやら理解する頭が足りない様だ。

なら戦いを欲する奴に、もっと分かり易く言ってやる必要がある。

「お前は昔の私に似ている。

己の力に溺れ、ただ暴れ回ってた頃の私にな。

だがその『力』を別の目的に使い、真の強さを手に入ればお前は私を越える戦士になれるかもしれんぞ？」

「何！？真の・・・強さ」

強くなれると聞いてようやく焰の表情が変わる。今、眼の前にいる『エデン』最強の存在――。

それを倒せる力が手に入ると聞いて興味を示さない訳が無い。

暫く怒りと興味の間で揺れていた焰だったが、やがてゆっくりと口を開いた。

「別の使い方って・・・何をどうすりゃ良いんだよ？」

少し態度を軟化させた焰に《黒の勇者》が微笑を浮かべる。まだ警戒は解いてないが、ひとまず話は聞く気になった様だ。

「簡単な事だ。お前のその力を弱者を守るために使えば良い。

誰かを傷付けるために使うのでは無く守るために使うのだ」

「はぁ！？ おいおい、俺は仮にもアウトローなんだぜ！？」

予想外の《黒の勇者》の言葉に焰は思わず素っ頓狂な声を上げた。

弱者を守る。今までたった一人で生きて来た彼には理解出来ない事だった

「俺は『エデン』の嫌われ者だぜ？ その俺にんなダセエ事やれってのか！」

「・・・見方が変われば世界も変わるものだ。

戦いを求めるのなら自分が悪だと思ふ者と戦え。

なりふり構わずでは無く自分で考え、何が正しいかを見定め拳を奮え。

そうすればお前にも守りたい者が出来る。

守りたい者が出来た時、お前はもっと強くなるだろう。

いや、敗北を前にしても笑っていられる度胸があるお前なら、真の強さを得られると・・・私は信じてみたいのだ」

信じる――《黒の勇者》の言っている事はいまいち理解出来なかったが、その言葉だけは重く焰の胸に響いた。

今まで親にさえ言われた事のない言葉である。
まさかそれを『エデン』最強の戦士に言われるとは思わず、焰は初めて戸惑いの表情を見せた。

「へ、へっ！良いのか？俺がもしその真の強さって奴を手に入れたら、テメーを狙うかもしれないぜ」

どうすれば良いのか分からず、つい捻くれた事を言うと《黒の勇者》がまた口の端を吊り上げる。

その笑みは自分への自信の表れ。

今の焰には無い強さを持った者の証だ。

「もしお前がまた挑んで来たら返り討ちにしてやるさ。
だから何度でも掛かって来るが良い」

言いながら《黒の勇者》が歩き始める。だが、焰はその背中を追う事は出来なかった。

勝てないと思ったからだ実力云々だけでは無く、一人の人間として勝てる要素が全く無い。

彼は全てに置いて自分より上の人間に初めて会ったのだ。

と、突然《黒の勇者》がまた歩みを止める。

「そうだ。最後にもう一つだけ聞かせろ。お前の名は？」

「・・・焰」

「焰か。お前に相応しい名前だな」

褒められたのかそれともけなされたのか分からないが、焰は言葉を失っていた。

怒りとも敗北感とも、まして喜ぶとも違う不思議な感覚が彼を支配していたからである。

だから、口を開こうにも何を言えば良いのか分からない。

今は《黒の勇者》と話す資格すら自分には無い。そんな気さえしていた。

「焰、強くなれ。己のために・・・私を越えるために」

絶句している鬼人に送る様に言葉を掛けたまま、《黒の勇者》は去って行く。

誰もいない荒野に残されたのは、もうアウトローの《魔音を奏でる鬼人》ではなく、胸に新たな炎を植え付けられた一人の戦士だけだった――

・・・これが焰と《黒の勇者》Ⅱバーカードとの初めての出会いである。

この後、大分時を経て焰はバーカードが人知れずノイズを追うためのパーティを作った事を知り、メンバーの一人となりその戦いに身を投じて行くのである。

（続く）

FILE..29 『声（ボイス）』

「分かったか？」

長い昔話を聞き終えてハジメは絶句した。焰が昔アウトローだったと言うのも驚きだったし、バーカードとの間にそんな事があったとは思わなかったからである。

少年が言葉を失っている間も、焰は絶えず岩窟王に睨みを効かせていた。それはモンスターがいつ襲って来ても戦える様である。

「あの時、バーカードさんが俺を倒さなかったのは単なる気まぐれかもしれねえ……。俺と昔戦ってた事なんてもう覚えてねえかもしれねーよ。けどな……」

疲労した様子で尚戦おうとする焰を見て、少年は彼がもう限界な事に気づいていた。

だが、そんな状態でも彼はハジメを守ろうとしている。

そんな鬼人に自分が出来る事と言ったら、ただ黙って話を聞く事くらいだ

「信じてくれたんだよ。あの人は……」

ミュージシャンになるって夢を諦めて、ただ暴れる事しか出来なかった俺を信じてくれたんだよ！・・その時、俺は決めたんだ。

いつかバーカードさんの役に立てる男になろうとそして、いつかあの人を越える戦士になってやろうってな！」

また昔の事を思い出したのか、焰の顔が一瞬優しくなる。

だが、岩窟王のパーツ達がにじり寄るとその表情は戦う戦士の顔に戻った

「だからーこんな所で死ぬ訳にはいかねんだ!」
ーゴォッ!」

焰が叫んだ途端、彼の体が炎に包まれた。そして現れたのは背中から翼を生やし、手足をドラゴン化させた鬼人の姿……。ダメージのせいで完全なる変身は出来ないが、スピードと攻撃力を特化させた今出来る焰の最強形態である。

「行くぞ! コラァー!」

周りにいる者を震わせる程の焰の雄叫びと共に岩窟王のパーツが一齐に襲い掛かって来た。

だが低空飛行をした焰の翼が次々とパーツ達を切り刻んで行く。真つ二つにされた岩窟王の手はバラバラになりながら、そのまま後を追いついて来る。

追跡する破片群と向かって来るパーツ達に挟み撃ちにされると、焰は一気に上昇し、追って来る敵達に必殺の炎を浴びせて行った。

「オオオー!」 焰炎熱波あ!」
ズドドドー!」

体を回転させ、口から熱線を吐き出し、周りにいた破片群を破壊して行く焰。

破片群も次々と巻き込めその数を減らして行く。気付くと、巨大な満月が登る夜空には鬼人の姿だけが残っていた。だがー。

「はぁ……はぁ……く、クッソ!」

恨めしげに舌打ちをする焰。彼の周りはすぐに新たな岩窟王のパーツ達に囲まれる事となった。

いくら壊しても本体である岩窟王には何のダメージも無いのだから当然である。

しかも、完全に消滅させない限り破片は増えて行くのだ。

岩石モンスターはただ焰が疲労するのを待っていれば良い。

「く・・・おおおーっ！！」

絶望的な状況で、自分を奮い立たせる様にもう一度雄叫びを上げた焰が突進した。

そして、ドラゴン化した爪とアックスギターで身近にいた者を次々と切り刻んで行く。

これ以上炎で攻撃したらあつという間に消耗して終わりだ。ならば接近戦に持ち込むしかない。

暴れ回る鬼人を止めようと岩窟王の両手が迫るが焰はアックスギターで右手を真っ二つにし、そのまま左手にも刃を突き刺す。

そして素早く背中を向けるとギターを弾く体制に入った。

「インフェルノ・レイクエムう！！」

「ージャーン！！」

最後の力を振り絞った必殺技は、岩窟王の手を炎に包み込み大爆発を起こす。

だが次の瞬間、焰の表情が凍り付いた。なんと爆発した手の後ろにもう一体隠れていたのだ。

「しまっ・・・ぐあっ！！」

「ーガツン！！」

気付いた時には既に遅く岩窟王の強烈なストレートを喰らい、焰が落下する。

落ちて行く彼にトドメを刺すために、周りにいたパーツ達や破片群が次々と攻撃を加えて行った。

「ぬあああーっ！！！」

「焰さん！！！」

追撃を食らいボロボロになった焰がハジメの側に弾き飛ばされて来る。

辛うじて生きてはいる様だが、背中のウィルスが本格的に蠢き始めていた

恐らく、後一撃でも食らえばウィルスは焰を蝕うだろう。

「アカネ、焰さんが！！！」

「・・・大丈夫。彼もハジメも死なせない・・・」

気絶している鬼人に襲い掛かる破片群を見てアカネが小さく呪文を口にする。すると、焰の周りにハジメ達と同じバリアーが現れ、破片群や岩窟王の手を弾き返した。

「やった！！さすがアカネ！」

焰の救出に成功しハジメが喜ぶと無口な魔法少女はまた頬を赤く染める。

しかしその様子を森の中から見ていた白いマントの男は、余裕の笑みを浮かべていた。

「ふむ、監視者の代わりらしく中々優秀な子守だな」

善戦するハジメ達を一笑する男には、人を馬鹿にした様な冷たさが感じられた。

それは、普段真っ白な装束で隠している男の本性かもしれない。

「だが、所詮人は人。ガラスの盾でいくら守ろうと神の雷には敵わない」

そう言う男は指をパチンと鳴らす。すると、何とそれまで佇んでいただけの岩窟王がゆっくりと口を開けたのだ。

「ああ・・・マズイ！」

それが何を意味するのかハジメはすぐ理解した。さっき岩窟王がアカネに放った破壊光線である。魔法少女もその威力を知っているためか、眉を潜めている。

その間にもチャージは進み、岩窟王の口の中は徐々に白く染まって行った。

キュイーン！キュイーン！キュイーン！

「ハジメ・・・下がって」

少年を後ろに下がらせ、アカネがもう一度集中しロッドを地面に突き刺すとバリアが一回り大きくなった。魔力を注いで強化したのだ。守りを固めるとアカネは小さく深呼吸し、岩窟王を睨みつける。

その瞳には何があってもハジメを守ると言う強い決意が感じられた。

キュイーン・・・ドォーン！！

それとほぼ同時に、岩窟王の口から白い閃光が発射された。

破壊光線がバリアーと衝突した途端、少年の目の前が真っ白になる。

だが二人に攻撃が当たる事は無かった。強固なバリアーが二人を守ってくれているからである。

バリアー破壊されない事にホッと安堵するハジメだったが、魔力を注いでいたアカネの表情が徐々に変わり始めた。

「MP70%消失。バリアー維持率50%低下・・・このままだと、敵の攻撃の直撃は避けられないものと判断される」

「ああっ！そ、そんなぁ！！」

冷静に自分達の状況を判断するアカネの言葉を聞いてハジメの顔が真っ青になった。

見ると、少女の言う通りバリアーのヒビが入り少しずつ全体に拡がり始める。

やはり敵の攻撃力の方が圧倒的に高いのだ。

そして――。

「30・・・20・・・10・・・MP0・・・バリアー消失」パリーン！！

アカネのカウントダウンと共にバリアーはガラスの様に粉々に砕けてしまった。

と同時に焰を守っていたバリアーまで消えてしまう。少女の魔力が尽きたせいだ。

驚きの表情を見せるハジメだったが、守る物が無くなった二人に岩窟王の破壊光線を防ぐ手段は無く、直ぐに白い閃光が襲い掛かって来た。

ーードゴオオオンー！！

「うわああー！！！！」

少年の悲痛な叫び声は姿と共に光線の中に消えて行った――。

――パチパチパチッ！

ハジメの姿が破壊光線の中に消えると白いマントの男は静かに拍手をした。

「素晴らしい調べだ・・愚者の最後に相応しい」

まるでショーでも見た様な口ぶりだった。

男は結一ノイズに対抗出来るハジメを始末出来た事に、非常に満足している様だった。

残るは地面に転がっている死に損ないと屋敷の中にいるおばば達だけ。赤子の手を捻るよりたやすい。

勝利を確信した男が最後の仕上げを岩窟王に指示しようと手を上げたその時、突然男の動きが止まった。

「何・・・？」

帽子に隠された男の口元が歪む。その視線はある一点に注がれていた――。

「・・ハジメ、大丈夫？」

破壊光線が撒き散らした煙が治まると、何と地面にへたり込んだハジメの姿があった。

だがブルブルと全身を震わせ、絶句している少年の姿はどう見ても普通ではない。

その理由は前にいる少女にあった。

「あ、アカ・・・ネ」

搾り出した声でハジメが何とか口を開く。

少年の目の前には両手を広げ、立っているアカネの姿があった。だが着ているドレスはボロボロで、顔や手なども所々黒く汚れてしまっている。

愛しい少年を守るため、少女は自らを盾にして光線の直撃を受けたのだ。

「・・・大丈夫・・・みたいだね」

「ボ、ボクは平気だけど・・・けどアカネ・・・アカネが！」

少年の無事を確認してアカネがニコツと笑う。それは少女が初めて見せる笑顔だった。

だがハジメにはその笑顔に見覚えがあった。

そう・・・シュウがウィルスに犯され、消える時自分を心配させない様に見せてくれた笑顔だ。

「良いの・・・私は・・・ハジメが無事ならそれ・・・で・・・」

「アカネえ！！！」

優しい笑顔を浮かべたまま、倒れ込むアカネをハジメは慌てて抱き留めたまだウィルスに犯されていないのを見ると、辛うじてゲームオーバーにはなっていないらしい。

だが少女が自分のせいで瀕死の重傷を負ったのは明らかだ。

「アカネ！アカネーっ！！！」

たった一人生き残った少年は、気絶した少女を起こそうと何度も小さな体を振る。

無性に両目が熱かった。そして胸が痛かった。

バラバラになりそうなくらい心が痛かった。

（まただ・・・！）

ハジメは心の中で叫んだ何度この無力感を味わっただろう？ 何度後悔し反省しただろう？。

そして何度同じ過ちを繰り返しているのだろうか？

自分はまた何も出来ず大切な人達を失おうとしている。

あの悲しみを二度と味わいたくないから戦おうって決意したのに――

どう足掻こうと全く変わらない現実には、ハジメの心は引き裂かれそうになっていた。

「逃げ・・・ろ。クソ・・・ガ・・・キ」

と、消え入りそうな声が聞こえて少年はハッと我に返った。焰である。

見るとアカネを抱き寄せているハジメに向かって岩窟王がまた口を開き、チャージしている。

破壊光線で今度こそ少年達にトドメを刺し、決着を着けるつもりなのだ。

「止せよ・・・。もうこっちは闘えないんだぞお！！」

無駄と分かっているながら悲痛な思いで叫ぶハジメー悔しかった。何も出来ない足手まといな自分が。

そして自分の大切な人達を、こんなにも傷付けるノイズが許せなかった。

少年はその時心底から願ったのである。

（力が欲しい！！）

ーードクン！

その瞬間、ウィルスに犯された左手が一瞬だけ脈動したかと思うと周りの景色が一変した。

抱いていたアカネの姿が消え、何もない暗黒の世界に変わったのである。

（ここは・・・）

だが少年は差して驚かず静かに立ち上がった。

この世界には来た事がある。

自分が怒りに支配されたあの時……。ウィルスの力を使った瞬間に来了闇の世界だ。

ーー力が欲しいのかい？

と、闇一色だった世界の地面が突然盛り上がりハジメと同じ姿になる。

眼も鼻もないそいつは少年を見ると、ニタリと笑った。

ーー力が欲しいのかい？

（・・・うん）

ーーなら手に入れる方法は簡単さ。敵を憎めば良い。

目の前まで近付いて来たハジメそっくりの闇はケタケタ笑いながら少年に語りかける。

以前エンゴウと戦った時に感じた心の奥にある邪悪な感情ーー。それが自分そっくりの姿になったのだとハジメは理解した

（駄目だよ。そんな事出来ない！）

ー！良いの？このままだと消えちゃうよ？アカネも焰さんも・・・
シュウ兄ちゃんみたいにさ！！

自分とうり二つな闇の言葉にハジメはハッと顔を上げた。

自分のせいで消えてしまった従兄弟。あの時の怒りと悲しみがまた
込み上げて来る。

（駄目だ・・・そんなの駄目だ！！）

ー！なら憎むのさ！敵を！モンスターを！！

そうすればボクが君に力を貸してあげる。

君の大切な物を奪う奴らを、君を傷付ける奴らをやっつけてあげる
よ！！

闇の少年の言葉が心に染まって行くのをハジメは感じた。

そして向き合っていた闇が、少しずつ同化して行く。

だがハジメに抵抗する意志は無かった。

自分が弱いせいで誰かが傷付くのはもう嫌だったから・・・。

例え、それが危険な力であろうと少年は今、戦う力を欲していた。

（・・・憎い）

心の中でほんの一言呟いた時、既に闇との同化は終わっていた。

だがその言葉を聞いて一つになった闇がまたニタリと笑う。

（憎い・・・憎い！）

一度吐き出してしまうと後は洪水の様に感情が溢れ出した。今まで
見ていた焰やアカネ、そしてバーカードやシュウとノイズに傷付け
られた人々の様々な姿が脳裏に浮かんで行く。

(憎い！憎い！！・憎い憎い憎い憎い憎い憎い憎い憎いニク
いニクいニクいニクいニクいニクいニクニク・・っ！)
ーハハハっ・アーハッハッハッハッ！

少年の恨みの言葉を聞いて闇は大声で笑い出したが、言葉を吐き
出す度に体の奥から力が溢れて来る。

それはやがて自分でも抑え切れない程に巨大になって行った。そし
てー

(あいつら・殺してやるうーうーうーっ！！)
ードクン！！

怒りが、憎しみが、体の中から爆発した時ハジメの左手から光が発
せられた。

そして暗黒の世界が崩壊して行く。

現実世界へと戻って行く間、少年は自分と同じ闇が笑い続けている
のを延々と聞き続けていたー

「うううわああーうーうーうーっ！！」
ーードン！！

チャージの終わった岩窟王の破壊光線が発射された瞬間、焰は眼を
見開いた。

それまでいくら呼び掛けても微動だにしなかったハジメが大声で叫
んだかと思うと、黒く染まった左手が突然脈動し、黒い光を発した
のである。

そしてその光が少年とアカネを包み、天まで上がって行ったかと思
うと何と岩窟王の破壊光線を弾き返してしまったのだ。

ーードカン！ドガガガァーーン！！
「うわっ！」

四方に飛び散った破壊光線は岩窟王の破片群やパーツ達にも当たり、破壊する。

焰も何とか体を反転させ飛んで来る破壊光線をかわした。

「クッ、間違いねえ！ありやエンゴウの時に見せた・・・」
「うわああー！ー！ーっ！！」

少年が叫んでいる間も岩窟王は破壊光線を放出し続けているのだが、黒い光には全く効果が無い。やがて徐々に光線の威力が落ち始め、ついにはエネルギー切れとなって消えてしまった。

「何だと・・・！？」

これには見ていた白いマントの男も驚きを隠せない。

ハジメを包んでいた黒い光は少年が叫ぶのを止めると小さくなり、左手だけを照らす様になった。

「お前達は何者で、ウィルスが一体何なのかなんてもうどうでも良い・・・」

抱いていたアカネをゆっくりと運びながらハジメがつぶやく。

やがて少女を焰の側に下ろすと、少年は岩窟王に冷たい視線を突き付けながら言い放った。

「ボクはこの力で戦う。そしてお前達ノイズを倒す！！」

血を塗ったかの様に赤く染まった眼で睨み付けたハジメが、決意を

胸に宣戦布告する。

ウィルスの力を得て、戦う強さを手に入れた少年と、ノイズモンスターの第2ラウンドが始まろうとしていたー。

（続く）

FILE..30『業火（バーニング）』

「ほお・・・これはこれは」

閉鎖された《噂屋》の中豹変したハジメを見て次郎は驚きの声を上げた。

救世主と呼ばれた少年と実際に会った時、正直本当か？と疑ったが今その信じられない光景が目の前で起きている。

次郎と同じく大画面で外の映像を見ていたオババは、覚醒したハジメを見てニヤリと笑った。

「いやあ、驚きましたわあの大人しそうな坊やがねえ」

「だから言っただろ？面白い物が見れるってね」

笑いながらオババがキーボードを操作すると岩窟王を睨むハジメの姿が拡大される。

実際に現れたノイズとウィルスを使う少年の戦い分析するにはこれ程有利な状況は無い。

「マスターの言う通りになりましたなあ。まさか坊やがこうなる事を予想して外に？」

「勝算の少ない賭けではあったがね。」

さて、鬼が出るか蛇が出るかじっくり見せてもらおうじゃないか」

自分達の命運をも賭けた戦いを二人は見守る。外では今正に新たな戦いの火蓋が切られようとしていた――。

「お前、焰さんとアカネ虐めただろ？」

腰から相棒の二丁拳銃を取り出しながらハジメがゆっくりと歩み寄る。

まるで隙だらけなのに周りを威圧する様なそんな歩き方だ。

《オ・・オオ・・》

近付いて来るハジメに対し岩窟王が小さく叫んだ途端、岩窟王の手が襲い掛かって来た。

少年の四方を囲んだ4つの手は逃げる隙を与えず一気に押し潰そうとする。

しかし・・・。

ーザシユ！ザシユ！！

少年の歩みが止まる事は無かった。引き抜いた拳銃を素早く振り回したかと思うと、4つの手が一瞬で粉々になる。

両手に握られているのは2刀の刃。障害物をダガーで粉碎したハジメは鋭い視線を向けたまま呟いた

「許さないよ・・・お前」

静かな怒りを胸に秘めハジメが構えると、岩窟王のパーツ達が一斉に動き出した。

それに応じて少年もダガーを拳銃に変えて迎え撃つ。

ーードキュン！ドキュンドキュンドキュン！！

銃声と共に次々と破片や岩窟王の手が粉々になって行くが、やはり全てを破壊する事は出来ず回避するハジメ。

二丁拳銃は一発の威力が低いので大勢で攻められると分が悪い。

小さな体を生かしたスピードで敵の攻撃をかわすと少年はそのまま弾かれた様に本体に突進した。

「オオオオーっ！！」

そうはさせじとパーツ達が立ち塞がるが、走りながら銃を乱射し、一掃する。

だが、パーツ達がいた所に差し掛かると突然その場の景色が一変した。

なんと地面が盛り上がり巨大な高台へと姿を変えてしまったのだ。

「これは・・・」

いきなり空に取り残されてしまい、ハジメが驚いているとすぐに破片群が矢の如く飛んで来る。

さっき少年を捕らえた十字架と良い、どうやら土や岩から作れるのは自分のパーツだけではないらしい。

ハジメが素早く回避すると高台があつという間に崩れ、新たな破片群として攻撃して来る。

銃で迎撃しながら地面に落下し着地すると、すぐにパーツ達に周りを包囲され、襲い掛かって来た

「野郎、本体に近づかせない気か！？」

力を使い果たし、ただ見ている事しか出来ない焰が忌ま忌ましげに吐き捨てる。

ハジメがウィルスの力に目覚めた今、岩窟王のバリアーはもう何の意味も為さない。ならば数に物を言わせて力で押し切るつもりなのだ。

「ちっ・・・！」

少し表情を曇らせたハジメだったが、迫り来る敵の攻撃をジャンプで回避し空中から岩窟王に向けて銃口を合わせる。

そして僅かな時間でエネルギーを充電したかと思うと岩石モンスターに対してあの技を放って行った

「ツインチャージ・・・ショット！」

キュイン！キュイン・・・チュドーン！！

二つの銃口から発射されたエネルギー弾が一つとなり、巨大な球体となって岩窟王に飛んで行く。クロスピアのノイズ襲撃の際、エンゴウを一撃で倒した技ツイン・チャージショット。これが当たれば岩窟王もただでは済まない。

《オオオオ・・・》

だが岩窟王がまた小さく叫んだ途端、無数の岩の手がツインチャージ・ショットの前に立ち塞がった。

それらがいくつも連なって行き、エネルギー弾をキャッチすると何と本体の前で勢いを止めてしまった。

「何・・・？」

ドガァーローン！！

行き場を失ったエネルギー弾は岩窟王に当たる事無く大爆発を起こしてしまう。

自分の必殺技を防がれ、一瞬ハジメの動きが空中で止まると、その隙を白いマントの男が見逃さなかった。

「ほらほら、油断なんかしてて良いのかな？」

マントの男がパチン！と指を弾くと、突然少年の背後に岩窟王の手が現れる。
気付いた時には既に遅くあつという間にハジメの体は捕らえられてしまった。

ーガシィ！！

「うわぁ！」

捕まった掌の中で少年がいくら抵抗しても岩窟王の手はビクともしない。

例えばバーカードの強さをコピーしていても基本は（ガン&ダガー）力では勝負にならないのである。

ようやくハジメを捕らえた岩石モンスターはそのまま落下したかと思うと何と自分事地面に激突させ、埋まってしまう。これにはさすがのハジメも苦痛に顔を歪めた。

「ぐっ！」

地面に上半身だけを出し少年が動けない事を良い事に、周りにいた破片群が次々と集まり合体して行く。
そして段々と、何か巨大な物体を作り上げて行った。

ーガチャン！ガチャン！ガチャン！！

「や、やべえ・・・あいつは！？」

完成した物体を見て焰が叫ぶ。少年の前に現れたのは岩窟王の元となったモンスター、ゴーレム。

小さな山程ある巨漢のモンスターは真っ赤な一つ目でハジメを睨み据えるとゆっくりと近づいて行った。

(コ~~~~ホオ~~~~!)

独特な呼吸音を響かせながら、ゴーレムが歩き出すとその後ろにさらに2体のゴーレムが現れる。

計3体となった岩石モンスターは少年を取り囲むと三匹とも巨大な拳を振り上げた。そしてー。

「や、止めろおーーー!!」
ーズン!!

無慈悲にも岩窟王の手もろともハジメの頭上にゴーレムの拳が振り落とされた。

しかも一度だけで無く三匹が交互に攻撃を続ける念の入用である焰の叫び声が響く中、土煙を上げて続けられるゴーレム達の連続攻撃。それを見て白いマントの男がまた口元を緩めた。

「ふっ、やはりウィルスに対抗出来る力を持っていても所詮は（ガ
ン&ダガー）

（彼）のモンスターの中でも最強のパワーと防御力を持つ岩窟王の敵では無かったな」

何度も何度も巨人によってハジメが潰されていく光景を冷酷に見つめるマントの男。

彼は前回の戦いでハジメの弱点を見抜いていた。

それは属性による絶対的な攻撃力の低さ。連撃とスピードに頼るしかないパワーの弱さである。

その相性を考え、再生と怪力を持つ岩窟王を召喚したのだ。

ハジメがウィルスの力に目覚める事など最初から計算の内である。

「例え（黒の勇者）バーカードの力を手に入れようと属性が（ガン&ダガー）である以上、君が岩窟王に勝てる事は絶対に無い。相性で勝った時点でこの勝負、私達の勝ち・・・」

ードガアン！！

モンスターの勝利を確信し、男が悠々と勝利宣言をしていると、途中で有り得ない事が起きた。

ハジメのいた場所から突然巨大な火柱が上がり、攻撃していたゴレム3体が空高く放り出されたのである。

（こ、コォーホォー！！！）

その内の一体は完全に火柱に飲み込まれ、粉々に砕け散る。

他の2体も地面に激しく叩き着けられ、倒れ込んだ

「なっ！？」

「・・・バカな」

焰とマントの男が同時に驚きの声を上げる。

火柱が立ち上る中、立っていたのは天に向かい拳銃を撃った、たった一人の小さな姿。

『※』と言う驚くべきサインを漆黒の左手に浮かべたハジメだけだった

「流石にうっとおしいな・・・焼き尽くすか」

また拳銃をダガーに戻しハジメが浮かび上がった文字に刃を通すと、右手のダガーも真っ赤な炎を点す。

そして倒れているゴレムに向かって構えると両手から炎の刃が発射された。

「ぬううううっ!! らあっ!!」
「ーゴオッ!!」

炎の刃はゴーレム達を飲み込み全身を燃え上がらせる。
山の様な巨体を持つ岩石モンスターは瞬く間に焦げて行き、脆く崩れ去って行った。

(コココココオーホオー!!)

断末魔の叫び声を残し跡形も無くなるゴーレム達それを見て、今まで余裕で木に寄り掛かっていたマントの男がハッと体を起こした。

「いかん・・・それ以上奴を近づかせるな」

男がまた手を前に差し出した瞬間、ハジメが岩窟王に向かって突進する。

それを邪魔するため、またパーツや破片群が立ち塞がるが、もはや少年の敵では無かった。

「邪魔だぁーっ!」

走りながらハジメがダガーを振り、炎を発射する炎の刃はパーツ達を切り裂き、破壊して行く。

パーツ達が炎に包まれると、全て焼き尽くされ破片として再生する事も出来ない。

焰やアカネをあれだけ苦しめた岩窟王のパーツ達が、ハジメを止める事すら出来ないのだ。

「凄え・・・これがクソガキの本当の力か」

焰が絶句する中ハジメは確実に岩窟王本体に接近して行く。
無尽蔵に作られるパーツ達も炎の力で一蹴され、本体が間近に迫る
頃にはほぼ全滅に近い状態にされていた。

《オオ・オオ・オオオオ・》

と、突然ハジメがその足を止めた。

それもその筈、守る物がなくなった岩窟王が大きく口を開け、その口内が真っ白に光り輝いていたからである。

岩窟王本体が使う結一にして最強の技『静かなる咆哮』――。

アカネの防御魔法もたやすく破った技をチャージするため、岩窟王は時間を稼いでいたのである。

「・・・・・・！」

岩石モンスターが最強の技を使う事を察知し、ハジメもまた両手を体の前と後ろに置き、構えを変えた。

まるで競争のスタートダッシュの様な奇妙な構えである。

静寂に包まれた森の中ビリビリとした緊張感だけがその場を支配する。

そして、岩窟王の口内で破滅の光が極限まで膨れ上がった瞬間だった。

《オオ・オオ――ン！》

チュド――ン！！

岩窟王の口から『静かなる咆哮』が発射された。全てを終わらせる破壊光線は一直線にハジメに向かって行く。だが怯む事無く少年は体を高速回転させ、炎を体に纏う。そして小さな竜巻を作ってみせ

た。

「回転・炎舞う!!」

「何っ!?! まさかありゃあ、エンゴウの・・!」

焰が驚くのも無理は無いハジメが使ったのは正にエンゴウの技。

シウの魔法を事如く打ち破った必殺技である。

地獄の炎を纏い、猛スピードで突進する少年は飛んで来た破壊光線と真っ向から衝突する。

そして次の瞬間、焰の眼にまた信じられない光景が飛び込んで来た。

「うおおおーっ!」

勝負に勝ったのはハジメだった。

何と少年の回転炎舞が『静かなる咆哮』を切り裂いたのである。

何とか押し返そうと、岩窟王も決死の抵抗を見せるが、ハジメの舞は止まらない。

ついには破壊光線を打ち破り、瞬く間に距離を詰めると岩窟王本体に怒りの一撃を加えたのだ。

「ーギャリギャリギャリ!! パリーン!!」

本体ごと（見えない壁）を粉碎し、破壊すると岩窟王の《コア》である岩の眼球が露になる。

すると砂煙りを上げながらも回転を止め、素早くダガーから二丁拳銃に変えたハジメが銃口を向けボソリとつぶやいた。

「トドメ刺すよ。ゴメンね」

「ーキュイーン! キュイーン! キュイーン
!!」

銃口に向けた途端、左手に浮かんでいたエンゴウの文字が消え、二丁拳銃がチャージを始める。

溜められているのは炎では無くエネルギー弾。

もはやその場に浮く事しか出来なくなつた岩窟王に放たれたのは、やはりあの技だった。

「ツインチャージ・ショットオーーーーー！！！」

キューーーン・・・ドゥーン！！

ハジメの二丁拳銃から一つの巨大な光弾が発射された。

エネルギー弾が岩窟王の《コア》に直撃すると岩の眼球からモンスターが誕生した時に現れた抽象文字が浮かび上がる

そしてその文字と共に、岩窟王の《コア》は跡形も無く消し飛んで行った

ーードガァーーン！！

爆発と共に今まで（噂屋）を取り囲んでいたノイズ・フィールドにヒビが入る。

岩窟王が倒された証だ。

赤い結界が砕けて行くとあれだけ静かだった辺りから虫や鳥達の声が聞こえて来た。

「やりやがった・・・あのクソガキ！」

悪夢の様な戦いに勝った喜びで焰がヨロヨロとしながらもハジメに駆け寄ろうとするが、少年の左手を見て、その足が止まる。

少年の左手は、今だ黒い輝きを失っていなかったそう、ハジメの戦いはまだ終わっていなかったのである。

「次はお前の番だ！クロウ！！」

岩窟王を倒した事を確認し、ハジメが素早く身を翻して二つの拳銃を背後の影に向ける。

そこにいたのは空中に佇む一匹のカラスの姿――

絶望と言う名の翼を広げるモンスター、クロウは眼球の無い三つの窪みで静かにハジメを見ていた

『――――』

闘志満々で睨み付けるハジメだったが、どうやら烏モンスターにその気は無かった様だ。

ノイズ・フィールドが無くなると、巨大な翼で自分の体を包む。

また球体になり逃げる気なのだ。

「――っ！？待てえ！！」

ドキュン！ドキュンドキュン！！

ハジメが追撃の銃弾を発射するが、クロウは球体のまま空中を急上昇し攻撃を回避する。

やがて小さな放電を繰り返しながら、漆黒の烏モンスターは消えて行った

「！？・・・ふざけるなよ。逃げるだど？」

あれだけ酷い事をしておいて逃げるだど！？」

クロウが消えた後、立ち尽くしたハジメが全身を震わせる。

いつの間にか白いマントの男もいなくなっていた脅威は去ったのだが、少年の胸中ではそれでは治まらない。

それは怒り。周りにいる焰達ですら、襲い兼ねない激しい憎悪の怒りだ。

「くそお！！逃げずに戦え！クロオーーーーーッ！！」

平穏を取り戻した迷いの森で、ハジメの慟哭が響き渡る。

喉が張り裂けんばかりの少年の魂の叫びに、焰はただ複雑な表情で見守る事しか出来なかった。

『平なる王の力が消えた・・・？』

始まりの街、クロスピアの大通り。王宮へと続く道でたくさんのユーザーが行き来をしている中黒いローブを被った少年が歩みを止める。

エンドレスだった。

魔導師の少年は何かを感じ取り、マルコロ大聖堂の方を向く。見えているのか分からない灰色の眼の中で、傷つき倒れているアカネと焰の姿が波の様に揺らめきやがて消えて行った。

『また運命が変わった。ああ！ハジメ、やっぱり君は・・・』

やや興奮した面持ちで、エンドレスが初めて笑顔を浮かべる。やがて少年はまた歩き出し、ユーザーの中に紛れて行った――。

（続く）

FILE..31『鍛練（トレーニング）』

ーカタカタカタ！

大画面を見ながら噂屋のオババが引つ切りなしにキーボードを叩く。
《噂屋》の大画面にはキャラのステータスや何かのグラフなど様々なデータが映し出されている。

そして画面の左端には岩窟王とハジメの戦いが小さく映っていた。

「ふう・・・！」

全てのデータの解析を終え、オババが椅子にもたれ掛かる。

すると今度は大画面に白い竜の顔がどアップで映し出された。

バーカードだった。

『どうだ、黒衣の魔女？ 解析の方は』

「やれやれ、今終わったよ。全く年は取りたくないねえ」

相当疲れたのか、首をゴキゴキ鳴らしながらオババがぼやく。

それを見てバーカードは今の姿に似合わないニヒルな笑みを浮かべた。

『それはご苦労だった。で、どうなのだ？ 先の戦いで少年が使ったあの炎はやはり・・・』

バーカードが全てを言う前にオババが頷く。それを見て白竜の表情が曇った。

「間違いなくエンゴウの力だね。あの岩石モンスターと戦った時に

坊やの左手に浮かび上がったあの文字……。ありゃクロウって言う烏モンスターがエンゴウを召喚した時に出て来たのと同じもんだ。坊やは倒したウィルスモンスターの力を使えるんだよ」

『そうか……。』

オババの説明に渋い顔をするバーカード。それはハジメの力の謎が一つ解明された事を喜ぶ顔では無い。

「ヒッヒッヒ！どうしたんだい？良かったじゃないか。これで坊やはさらに強くなったんだよ。」

岩窟王の力も得てLevelも上がったみたいだしね」

言いながらオババがまたコンピューターを操作し大画面の端にハジメのステータスを出す。

見ると確かに、少年のレベルが上がっていた。

岩窟王と戦うまでLevel5と書かれていた部分が今はLevel120と大きく表示されている。

『己が正義を貫くには強さが必要だ。だが少年はあまりにも幼な過ぎる』

「心配なんだね？あの子がウィルスに吞まれちゃうんじゃないかって」

オババが指摘するとバーカードは長い首を縦に振る。

それは彼がエンゴウとの戦いでハジメを見た時に感じた物であり、先日帰って来た焰からも聞かされた事だった。

――岩窟王との戦闘後、ハジメ達はアカネを連れすぐに（トロイ）に戻って来た。

だが、何があったのかも話さず少年はすぐにログアウトしてしまい、代わりに今まであった出来事を報告した焰が最後にこう言った

（あの力はヤバイです。ウィルスがガキの憎しみを増大させてる様に見えました）

頭は単純だが戦闘では天才的なセンスを持った焰の言葉である。恐らく少年の戦い方や行動を見て敏感に何かを感じたのだろう。ならば一刻も早く何とかせねばならない。

「ヒヒヒ・・・まだウィルスがユーザーにどんな影響を与えるか分かってないんだ。その可能性は十分あるだろうね。」

だけど、バーカード。この先何があってもアンタは坊やを守ってやらなきゃいけないよ？

こんな戦いにあの子を巻き込んだのはアンタなんだからねえ」

まるで試すかの様にオババがバーカードを見る。すると・・・。

『そんな事は百も承知している。体を失った時点で一度は捨てた命だ。』

少年は必ず守ってみせる』

当たり前の様に言い切ったバーカードの言葉にオババはニヤリと笑った。姿は可愛くなってしまうたが、決して揺るがない強さと信念は健在らしい魔女は彼のそう言う部分が気に入っていた。

『所で助っ人として呼んだあの魔導師の少女の事なのだが・・・』

と、突然話が変わったと思うと、画面がバーカードから（トロイ）の中に切り替わる。

するとホームの片隅にうずくまりながら何やらぶつぶつ口走っている少女がいた。

アカネである。

背中にどんよりとした陰を差し、床に文字を書いている姿はいつものクールな彼女とは違い、明らかに落ち込んでいるのが分かった。

『岩窟王との戦いで何かあったのか？こちらに来てからずっとこの調子なのだが・・・』

どよーんと言う文字が見えそうな程落ち込んでいる魔法少女を見て、黒い衣の魔女は大声で笑い出した。

普段一緒にいる彼女も中々お目にかかれる姿ではない。

暫く笑っていたオババだったが、やがて落ち着くとバーカードに訳を話し始めた。

「なーに、自分が坊やを守り切れ無かったのと気絶したせいで格好良い姿を見れなかったってイジケてるだけさね。

坊やが帰って来たらすぐに元気になるだろうよ」

オババはそう言うが、とてもそんな風には見えない。これでは役に立つ所か助っ人として呼んだ意味がないのではないか？

『そうなのか？ならば良いが』

「心配しなくても貰ったレンタル料の分はきっちり働くよ。

それじゃ私は例の件を調べてみるからね。分かったらまた連絡する」

と言うと噂屋のオババはさっさと通信を切ってしまった。

一瞬間にアカネの呟きだけが響き渡る

自分勝手なオババの態度に、バーカードはやれやれと長い首を振った。

『ラビィ、少年は今何処にいる？』

「あいあゝい、少々お待ち下さゝい」

白竜の指示でラビィがコンピューターを操作する（トロイ）内には
焰とハジメの姿が無かった。

焰は

「用がある」と出掛けてしまい、ハジメはログインしているがここ
には来ていない。

岩窟王との戦いが終わってから、一人で『エデン』の世界を回って
いる様なのだ。

「ハジメ・・・守れなかった・・・私、役立たず・・・世間のゴミ・・・」

アカネのうわごとを聞きながら待っていると、すぐに画面がある場
所の地図を写し出す。

そこに少年の名前が書かれた赤いポイントが表示された。

「あいゝ見つかりました魔蟲の沼・・・ここにいるみたいですわね」

手が出ない長いロープで画面を差しながらラビィが言う。

オペレーターのウサミミ少女が指差した場所、そこは狂暴なモンス
ター達が住む一人では危険過ぎる場所だった

――適応Level 23 魔蟲の沼――

ブーンー！！

「はっ!?!」

耳に響く羽音にハジメは後ろを向いた。だが、音が聞こえたのは一
瞬で、背後には誰もいない。

と言うより、深い霧のせいで何も見えないと言うのが正解だった。
ここは魔蟲の沼。四六時中深い霧に包まれている不気味な沼である。
辺りはシーンと静まり返っており、生き物がいる様には感じられない。

だが確実にこの濃霧の中に自分を狙っている敵がいる事を少年は知っていた。

それは足元に転がっているいくつもの大きな死骸が物語っている。

ブーンー！

「っ！？やあ！！」

と、さっきよりもさらに大きく羽音が聞こえ、ハジメは慌ててダブルダガーを振るった。

背後でザシュ！と言う音と共に大きな陰が地面に落ちる。

見るとそれは、少年の頭程ある緑の巨大な蜂だった。

ーブーン！ーブーン！

巨大な蜂モンスターを倒した途端、ハジメの周りに更に大きな陰が4つ現れる。

この沼に出現するモンスター、ポイズンビーだ。濃霧の中に隠れ群れでユーザーを襲い、毒のある針まで持っている狂暴なモンスターである。

「……！」

周りを囲まれ、ハジメは改めて身構えた。

本来なら多勢に無勢なので逃げるべきなのだが、少年は引こうとはしない体は薄汚れていてボロボロなのだが、その目には強い勇気の光が輝いていた。

(1・2・3倒したのが3匹で残りは4匹！)

頭で倒したモンスターの数を確認しながら、周りにも細心の注意を払う。

一瞬でも気を抜けば、それは即ゲームオーバーに繋がる。

ポイズンビーの毒針を喰らい動けなくなれば、万に一つも少年に勝ち目は無いのだ。

ブブブー！！

暫く続いた膠着状態を打ち破る様に一気に2匹、ハジメの前後からポイズンビーが襲い掛かって来たそれに合わせた様に少年はジャンプし、体を回転させると持っていたダブルダガーで蜂モンスターを真っ二つにする。

だが、着地したと同時に残る2匹が襲い掛かって来ると、一瞬で身を翻しモンスター同士を正面衝突させる。

体のあちこちを擦りむきながら転がり、ダガーを拳銃に変形させると、脚が絡まって動けないでいるポイズンビー達に向かって銃口を向けた。

「わあああーっ！」

ドンドンドンドン！！

叫びながら二丁拳銃を乱射すると、弾は全て命中し蜂モンスター達は大爆発を起こす。

爆発が修まり辺りがシーンと静まると、ハジメの体を緑の光が優しく包み込む。

レベルアップだ。

それはバトルが終わり少年が勝った事を証明していた。

「や、やった・・・！」

レベルアップした事で体力も回復したハジメが立ち上がり、ガッツポーズを取る。

バトルを終えて少年は完全に警戒を取っていた。

ブブブブー！！

するとその隙を待っていたかの様に、突然背後からさつきより大きな羽音が聞こえて来た。

振り向くと目の前に、ハジメが倒したのより一回りも大きい赤いポイズンビーがいて、少年に向かって針を突き刺そうと突進して来た。

「うわぁ！！」

ーゴォッ！！

少年が思わず叫んだ途端真横から割り込む様に炎が飛んで来て、赤いポイズンビーを包み込む。

ドラゴンなどが使う火炎放射だ。

憐れ、炎に飲み込まれた蜂モンスターは奇声を発しながら地面を転がり、やがて光の屑となって消えてしまった。

『油断大敵だぞ？少年。このフィールドで気を抜けばそれは死に繋がる』

「バーカードさん・・・」

ハジメが驚いて呆然としていると、濃霧の中から白い小さな翼が現れた。

バーカードである。

空中を飛んでいた白竜はスィーっと回る様に降下を始めると、少年の肩に上手く着地した。

『今のはクイーンビーと言って蜂達の親だ。奴は兵隊達に先に襲わせ、獲物を弱らせてから襲い掛かって来る

この沼では度々出て来るので気をつけた方が良いでしょう』

バーカードの説明を聞きながらハジメは顔を俯かせる。

彼の助けがなかったら今頃完全にやられていた。これが以前の少年ならバーカードに助けられた事を喜び、お礼の一つでも言う所なのだが、今のハジメには嬉しさより悔しさの方が込み上げて来た情けなかったのだ。

戦いを終え、油断した自分が・・・。

自分の不甲斐無さに体を震わせると、それに気づいたのか肩に乗っていたバーカードがフツと表情を和らげた。

『ほんの少し見ない間にずいぶんと精悍な顔になったな？もう立派な戦士だ』

「え？あ、いえ、そんな・・・」

ニヒルな笑みを浮かべた白竜に突然誉められ、ハジメは顔を赤くする。

凛々しくはなったが、こう言う所はまだまだ年頃の少年だ。だが、その表情はすぐに曇る。

「Level 21なんてまだまだ全然です。

ノイズと戦うためにはもっともっと強くならなくっちゃ」

自分の想いを確認する様にハジメが強く握った手の平を見る。

それを見てバーカードはオババや焰の危惧が取り越し苦労では無い事を実感した。

『気にしているのか？ 焰達が傷付いた事や《悠久の監視者》が犠牲になった事を』

バーカードが聞くと、ゆつくりとハジメが頷く。根が優しい筈の少年がここまで強くなろうとする理由と言ったらそれ意外無いだろう。

「ボクは『エデン』が楽しい夢の様なゲームだと思ってました。でも違った。本当の『エデン』はノイズやそれ以外の悪意が蔓延っている世界だとうようやく分かったんです」

顔を伏せたまま、少年が話し始める。ノイズ以外の悪意とはアウトローユーザーの事だろう。

バーカードは肩に乗ったまま、ハジメの話に耳を傾けた。

「でもそれは『エデン』が悪いんじゃない。『エデン』の中で悪さをしている人達が悪いんだ。

『エデン』はシュウ兄ちゃんがたくさんの人に楽しんでもらおうと思って作った大切なゲームなのに・・・ボクは、ボクは『エデン』を荒らす奴らが憎い！」

純粹な心の少年に今、失望と怒りが芽生え始めていた。

ハジメはただゲームを楽しみたかったただだ。なのに自分と出会い、ノイズと言う驚異を知ってしまった事で大切な者を失ってしまい、命の危険にまで晒してしまったのである。

少年の心が荒んでしまうのも無理は無い。

そう思うと、罪の無い者を巻き込んでしまった事にバーカードの心は酷く痛んだ。

「でも今のボクには何も出来ない……だから決めたんです。力さえあれば何でも許されるのなら……それがゲームの世界だつて言うのならもつと強くなろう！」

弱いせいで二度と悔しい思いをしない様に！！

幸い、ボクのキャラにはバーカードさんの力やウィルスって言う無限の可能性が眠ってる！

それをコントロール出来る様になれば、ノイズ所かどんな奴にだって負けはしな——」

『待て、待つんだ少年！』

段々と語気が熱っぽくなって行くハジメを見てバーカードは慌てて制止する。

ハッと我に返りこちらを見たハジメの眼の中にバーカードは危険な光を見た。

それはかつての焰や蘭丸達と同じ、力だけを求め戦いに身を宿す狂気の光アウトローの光だ。

『君の左手は確かにノイズと戦える希望だ。だがそれをユーザーに使えばとてつもなく危険な物に変わる両刃の刃でもある』

「……分かってます。ごめんなさい、ボクは今どうしてあんな事を？」

自分でも分からないのかハジメが怪訝な顔をする

「ウィルスは憎しみを増大させる」と焰は言っていたが、あながち間違っていないのかもしれない。

もし、左手に浸蝕したウィルスが少年に何らかの影響を与えているのだとしたら、それは由々しき事態だ。何とかせねばならない。

『ちょっと付き合ってくれないか？少年』

驚いているハジメの肩から飛び立ち、バーカードが突然ゲートの方へと向かう。

白竜のいきなりの行動に面食らった少年だったが取り合えずついて行く事にした――。

「やっぱりあの程度か」

ハジメ達がいた沼から遠く離れた山の山頂。そこから二人がゲートに消えるのを見ている者がいた

紫猫の獣人、ケルビムである。

以前マルコロ大聖堂でウィングとハジメを馬鹿にしたユーザーが何故かハジメの戦いを観察していたのだ。

「正直、拍子抜けだな。まあ、でも救世主なんて呼ばれた者は存外あんな物か」

辺りを包む深い霧でもちゃんと見えているのか？しっぽをピコピコ振りながらケルビムが微笑む。その笑顔には彼の底意地の悪さが滲み出ている様だった。

「わあ☆☆ケルビム様あ助けて♪」

と、笑いながらケルビムの方へ逃げて来る人影があった。

ピエロのマリオである。見ると彼の後ろには、先程バーカードが倒したクイーンビーが毒針を出して追い掛けて来ていた。

「私を煩わせるなよ。マリオ」

深いため息をついたケルビムが振り返り、後ろに組んでいた手を離す。すると……。

シャキーン！！

鋭い光が煌めいた瞬間、クイーンビーが真っ二つになっていた。いつの間にかケルビムが長い白銀の剣を抜いていたのである。

胴と頭を切り離された蜂モンスターは地面に落ちると光の屑になってしまった。

「この右腕が疼いてしまうだろう？」

長剣を振り、クイーンビーの血を掃いながらケルビムが言う。白銀の鎧と鎖に縛られた右腕が呼応する様にカタカタと震えていたが、やがてそれも修まった。

「わあ~~~~！ 凄い、凄~~~~い☆ケルビム様、日本一~~~~♪」

猫剣士が長剣を鞘に納めると、マリオがやんやんやと拍手する。だがケルビムは、さも当然だと言わんばかりに澄ました態度を取った。

「アハハ☆で、これからどうします？ 彼らの後を追いますか？」

笑いながらマリオが聞くとケルビムは顎に手を置き、少し考える素振りを見せる。

が、やがてそのままニヤリと笑った。

「いや、あの程度の連中なら気にする必要も無いただし、念には念を入れておくがね？」

そう言うとき紫猫の剣士は悠然と歩きながら、深い霧の中へと消えて行く。その後が続いて、マリオも踊りながら消えて行った――。

――適応Level 8 名も無き丘――

心地良い風が流れて来るハジメがバーカードに連れて来られたのは、鬱蒼とした草が生い茂る野原と崖しか無い場所だった。クロスピアの近く、シルパと言う村の側にあるモンスターすら出ない丘である。

見ると、崖の先端に一本の綺麗な剣が刺さっている。

バーカードはその剣に近付くと、柄の部分に小さな体を着地させた。

『懐かしいな。まさかこの体でここに来るとは思っていなかった』

崖から先の海の景色を見ながら感慨深げに語るバーカード。どうやらここは思い出の地らしい。

朝日の登る中、その光に照らされる白い翼は何やら神秘的な物に見えた。

「バーカードさん。ここは？」

『ああ、すまない。少年にはまだ説明していなかったな』

振り向いたバーカードの顔が急に難しくなる。ハジメには何故彼がここに連れて来たのか分からなかった。

「ここは私にとって特別な場所だ。私が初めてノイズと遭遇した場所であり、大切な友を……失った場所だ」

バーカードの言葉にハジメの表情が強張る。白竜の口から語られる物語。それはノイズの驚異と友との別れを描いた悲しい戦士の話だった。

（続く）

FILE::32『英雄（ヒーロー）』

『少年は私と焰の出会いを聞いたかな？』

剣に乗ったままバーカードが聞く。出会いとは焰が話したアウトロー時代の事だろう。

ハジメは正直に頷いた。

「はい、自分を救ってくれたって・・・焰さん、本当に感謝してました」

『フツ・・・そうか』

少年の言葉にバーカードはまたニヒルな笑みを浮かべる。あの笑みが出る時は、何か思う所があるのだとハジメは最近になって気づいた。

『あの時はずいぶんとえらそうな事を焰に言った。奴の戦士としての素質を腐らせるのはあまりにも惜しかったのだな。』

だが、正直な事を言えば何て事は無い。私も、昔同じ事をしていたから焰の気持ちが分かったのだ』

「えっ！！バーカードさんが？」

白竜の告白に思わずハジメが叫ぶ。《黒の勇者》と呼ばれ『エデン』では最強の呼び声も高い伝説のユーザーの彼がアウトローをやっていたなどにわかに信じられなかったからだ。

『人には隠しておきたい過去が一つや二つはあるものだよ。まだ「エデン」が発売されて間も無い頃、私は自らの実力を計るため様

々なイベントに参加した。そして目の前に立ちはだかる敵は、例えばユーザーであろうと撃破した。

痕跡は完璧に消していたので、WB社から眼を着けられる事も無かった。私は自惚れていた。

「エデン」は私にとって腕試しの場所でしか無かったのだ」

バーカードの告白にハジメは彼と出会った時の事を思い出した。

あのクロス・パウロの教会でクロウを倒すために使った最終兵器『滅器』

あれは明らかに『エデン』の規格を越えた物であり、違法な改造武器だった。

だが、あんな物を簡単に作れると言う時点で、バーカードのプログラマーとしての実力が伺い知れる。

『そんな時、私はある一人の男と出会った。その男は初めて会った時、こう言った。

「君はなんのためにゲームをやっているのか？」と……。その男との出会いが私を根本から変えたのだ。

男の名はカイン。当時チェイサーの隊長を勤めていたユーザーで、このククルの本当の飼い主だ』

バーカードが翼で自分の小さな体を指す。彼のカラーである黒とは正反対のペットはやはり別の飼い主がいたのだ。

『カインは当時《黒の勇者》と呼ばれていた私と肩を並べる実力者で《白の勇者》と呼ばれていた。その名が示す通りどこまでも真っ直ぐな男で、皆からも信頼される勇者と呼ばれるに相応しい男だった。

実際に奴と組んで冒険はした事はないが、WB社に腕を買われ掃除屋を始めた私は、時に共に戦い、時にぶつかり合ったこの男の事を

いつしか友と思う様になっていた』

過去の話語り続けるバーカードの口調は昔を懐かしむ様な、そんな優しい響きが含まれていた。普段クールな彼からは中々見られない表情である

ハジメはそれだけで、バーカードにとってカインと言う人物が大切な人だったと言う事が伝わって来た。

『それは誰も信じず、たった一人で生きて来た私にとって初めての感覚だった。

「エデン」はいつしか私にとって大切な居場所となっていたのだ。あの最悪のバグ・・・ノイズを確認するまでは』

そこでバーカードの口調が変わり、ハジメはハッと顔を上げる。

白竜の脳裏にはあの日、大切な友を救えなかった最悪の瞬間が思い出されていた

「ここか」

WB社に開かせたシステム用のゲートで、バーカードは名も無き丘に降り立った

特に強いモンスターも出ないただの崖なのだが、WB社から正体不明のバグが確認され調査する様に依頼されたのだ。

『エデン』の中では影の存在とされている自分が駆り出されたと言う事は、それなりに信憑性のある情報らしい。

「さっさと済ませるか」

愛用の薬草煙草を取り出し、火を点けた凶戦士はゆっくりと歩き出

す。だがその足はすぐに止まる事になった。

「バーカード・・・バーカードか？」

聞き覚えのある声が背後から聞こえた途端、バーカードの頭上を小さな影が通り過ぎた。

それは白銀の竜。ある人物が限定イベントで手に入れた世界でたった一つのアニマルペットである

空中を翔ける竜ーークルは気持ち良さそうにくるりと一回転すると、ある人物の肩に戻って来て着地した

「まさか・・・君とこんな所で会えるとは思っていなかったな？友よ」
「相変わらず恥ずかしい事を平気で言える様だな？カイン」

バーカードが振り向くと、そこに三人のユーザーが立っていた。

二人はチェイサーの中でも名が売れている凄腕の（剣士）と（魔導士）

しかしそんな二人を引き連れている中央の男は、正に別格である。

男は教会の神父を思わせる全身真っ白なサイバー衣装にマント、そしてロングブーツを履き、腰には白銀の長剣を差している。

服装とは逆の褐色の肌に赤の丸型サングラスを掛け、短めの銀髪をオールバックにしている。

バーカードにも負けない細身の長身は何処か清潔感を醸し出し、誰にも紳士と思わせる風格と気品がある。

何万というユーザーの中で結一自分と肩を並べる伝説の勇者カインー。

彼は普通の者なら睨まれただけで逃げ出すバーカードの視線にも動じず、爽やかな笑顔を浮かべていた。

「ハハハッ、これが私の性格なのさ。しかし何故君がこんな所に？」

まさかピクニックとか言う訳ではあるまい」

「・・・貴様達に話す必要は無い」

ーージャキーーン！

そっけない返事をして崖の方へ歩き出そうとした途端、首元に刃を突き立てられる。いつの間にか、カインの隣にいたチェイサーの一人が真横に移動していたのだ。

「隊長に向かって失礼だぞ？質問に答えてもらおうか？」

バーカードの事を知らないのか？それとも実力に相当な自信があるのか、凶戦士に剣を突き立てる剣士の顔には傲慢な笑みが張り付いていた。

一度も敗北と言う物を知らず、山よりプライドが高いそんなタイプである。

「良い度胸だな？」

若さ故の過ちか時々こう言うタイプが喧嘩を吹っ掛けて来る。

煙草を投げ捨てたバーカードが身の程を教えてやろうと剣に触れた瞬間、その手を白い手袋が止めた。

「止めたまえ、二人共。私達が争う必要など全く無い」

一触即発の雰囲気破ったのはやはりカインだった。

ニコニコと笑いながら、彼もまた一瞬で二人の間に割って入ったのである。

剣を構えた剣士は驚きの表情を浮かべ、バーカードは当然の様に無表情を崩さない。

カイン程の実力ならば例え１キロ離れていても、止める事が可能だ

ろう。

「し、失礼しました！隊長」

「良いんだ、ケイル。無駄に命を捨てさえしなければそれで」

慌てて剣を収めたチェイサー戦士の肩をポンポン叩くカイン。せつかくの雰囲気をおち壊され、興ざめしてしまったバーカードがその場を立ち去ろうとしたその瞬間――。

ザザザザー――ッ！！

「！？なんだ？」

突然の画像の乱れがメンバーの目の前で起こった見ると、いつの間にか崖の先に広がっていた雄大な景色が深い霧に包まれており、何も見えなくなっている。

その後、残されたのは不気味な程の静寂……。

様々なバグを見て来たバーカードだったが、こんな事象は初めてだった。

「あ、ああああ――っ！！」

と、突然悲痛な叫びが辺りに響き渡った。

振り向くと丘の側に小さな森があり、その入り口でユーザーが一人座り込んでしまっている。

古ぼけたローブに身を包んだちよびヒゲの中年らしきユーザーは恐怖に顔を歪め、ガタガタと体を震わす姿はまるで幽霊でも見たかの様だ。

「か、鳥が！鳥が来る！！私を捕まえに地獄の鳥が……！！」

「何だ、あのユーザーは？何を言って・・・」

「バーカード！！」

明らかに普通では無い魔導士ユーザーにバーカードが怪訝な顔をすると、突然メンバーの真上に巨大な影が射す。

それは霧に包まれた崖の先から現れた手。とてつも無く巨大なモンスターの手だった。

『オアアアーーーーッ！！』

地響きにも似た咆哮と共に現れたのは上半身だけでも崖を覆い尽くす程の巨大なモンスター。折れた二本角の一本が補修され、骸骨の様に窪んだ左眼の部分から爛々と光る眼がバーカード達を見ている。腐敗した様なひどい臭いの息を吐き、ゾンビ化した真っ黒な悪魔のモンスターは『エデン』をプレイする者なら誰もが知っているモンスターだった。

「カースリベンジャー！？」

「エデン最強のモンスターが何故ここに！！」

バーカードとカインが声を揃えて叫ぶが無理もない。

目の前にいるのは『エデン』をクリアしたユーザーだけが参加出来る限定イベント『魔神の復活』に出て来るボスモンスター。

魔神カースを復活させようとする闇の勢力が古代の秘術を使い、作り上げたカースの超強力番、カースRである。

そのあまりの強さに倒した者が数える程しかいないと言われている伝説のモンスターだ。

『我ハ・・・魔神カース・・・』

現れた場所がイレギュラーなのにプログラムされたセリフをちゃんと吐きながら魔神が巨大な手を振り上げる。

危険を察知したメンバーが全員その場を回避した途端、地響きと共にカースの手が振り下ろされた。

ズズウウウーーン！

「くそっ！モンスターの分際で・・・！いくぞマホマホ！！」

突然の出来事とカースの巨体に一瞬面食らっていた剣士チェイサーだったが、すぐに仲間の魔導士チェイサーを引き連れ攻撃を仕掛ける。

それはいかなる状況でも冷静な判断を求められるチェイサーとしては、あまりにも無謀な行動だった。

「待て！ケイル！！勝手な行動はするな！！」

「大丈夫ですよ、隊長！！カースRなら倒した事があります！！」

慌ててカインが止めようとするが、若い剣士チェイサーは聞く耳を持たない。

縦横無尽にカースの目の前まで突っ込むと華麗にジャンプし剣を振り上げる。それに合わせる様に後ろを走っていた魔導士チェイサーも杖を振り上げ攻撃呪文を口にした。

「ギガ・ライトニング！！」

ゴロゴロゴローー！！ピシャーーン！！

魔導士チェイサーが唱えた呪文は雷系の呪文でも最上級の技、ギガ・ライトニング！

空が暗雲に包まれたかと思うと巨大な稲妻が降り注ぎ、ジャンプしていた剣士チェイサーの剣へと直撃する

だが彼にダメージを負った様子は無く、そのまま剣が真っ白に輝き出すのを確認すると、真下にいるカース目掛けて斬撃を繰り出した

「おおおっ！！ライジングストラアーーーーッシュ！！」

ビシャアアーーーーン！！ドドooooooooー！！

剣士チェイサーの剣から放たれたのは雷の刃。斬撃に魔法を合わせ、さらに攻撃力を上げる合体技魔法剣である。

それは二人の息がぴったり合っていないなくてはならず、尚且つ実力者同士で無くては技の威力も上がらない難易度の高い技である。

故に成功した場合それを受けた者は一撃で倒されるか、瀕死の重傷を負うと言う

現に直撃を食らったカースRは体を真っ二つにされ、今正にその巨体を倒そうとしている。

以前もこの技で倒したのか勝利を確信した剣士チェイサーは落下しながらもカインの方を向き、自信たっぷりの笑いとグッドサインをビシッと出した。

「どうですか？隊長！少しは俺の事も見直して・・・」

「よそ見をするなケイル！！後ろだ！！」

余裕たっぷりで剣士チェイサー・ケイルが話している途中、有り得ない事が起こった。

落下中の彼と近くにいた魔導士チェイサー・マホマホの所まで突然晴れた筈の巨大な影がまた戻って来て、二人を覆い尽くしたのである。

それまで傲慢な笑みを浮かべていたケイルの表情が凍り付き、恐る恐る振り返る

すると、真っ二つにされたカースRが何事も無かったかの様に上半身を起こし、二人目掛けて巨大な手を振り上げていたのだ。

部下を失い、顔をしかめる白の勇者だったがバーカードに言われ、顔を上げる。

見ると真っ二つにされた筈のカースRの体が修復され、元に戻って行く。切られた手も元通りになり、何事も無かったかの様に魔神はまた雄叫びを上げた。

「これは!？」

「ダメージを受けてもすぐ回復する様に改造されている様だな」

簡単に復活を果たしたカースRを見て冷静に分析するバーカード。WB社が言っていた原因不明のバグとはどうやらコイツの事らしいならば、する事は一つだ

「退いている、カイン。どうやらコイツは私のターゲットの様だ」

指を折り曲げ、コキコキと鳴らしバーカードが背中の大剣に手を伸ばす。するとその漆黒の肩に正反対の白い手袋に包まれた手が力強く添えられた。

「待て、バーカード。私は奴に部下を奪われた。二人の無念を晴らしてやらねばならない。

それに、奴にはまだ何かありそうな気がする。やるなら二人でやろう」

「勝手にしろ。私は自分の仕事をやるまでだ」

ギャリリリリーーーッ!!

カインの申し出に素っ気なく答えるとバーカードは背中から愛刀を抜いた。手にしたのは『魔光』の前の愛刀『蛮器』

剣の頭がクワガタの様に二つに割れ、刀身の刃がのこぎりの様に回転している恐ろしい剣である。

「ふっ、ならば遠慮無く！」

凶戦士の同意を得てカインもまた一度鞘に納めた白銀の長剣を抜く。それはククルを手に入れた限定イベントにて同じく手にした聖剣、ハルバリオンー。

女神サラが勇者のために作ったと言われている神々しくも美しい剣である

「久しぶりだな？ 君と共に戦うのは！ 腕は落ちて無いだろうね？」

「黙れ。奴の前にお前を消すぞ」

『ウオオオー！ー！ー！』

軽口を叩きながら自身の愛刀を手にも構える《黒の勇者》と《白の勇者》

今、ノイズに改造された魔神の前に『エデン』最強コンビの戦いが始まろうとしていたー。

(続く)

FILE::33『相棒（パートナー）』

張り詰めた空気の中、

「エデン」最強の二人が身構える。敵は同じく

「エデン」最強の魔神。

一触即発の沈黙の中ただ一人、二人の側で腰を抜かしているちよび髭ユーザーがぶつぶつと何かを口走っていた。

「か、勝てない・・・勝てないんだ。あのモンスターには・・・あの亡霊には・・・!!」

ちよび髭ユーザーはまるで何かに取り憑かれた様に同じ言葉を繰り返す。

そんなユーザーを無視し、先に動いたのはバーカード達だった。

「行くぞ！バーカード!!」

「私に・・・命令するな!!」

弾かれた様にカインとバーカードが飛び出す。

一瞬で魔神の懷まで飛び込んだ二人は自慢の愛刀を手にし、振り上げた。

『我ハ・・・魔神カース・・・!』

二人の勇者を前に逆襲の魔神も黙っていない。巨大な腕を振り上げ、チェイサーを瞬殺した一撃を繰り出すだがー。

「甘い!!」

振り下ろされた手を自慢のスピードで回避し、カインが魔神の顔目掛けてジャンプする。

巨大とは言えた単純に繰り返された攻撃に当たる程馬鹿な二人ではない。

カーズが腕を地面に叩き付ける頃にはカインが技を繰り返していた。

「セイント・ハーレー!!」

ズバンー!!

光の剣と化した聖剣から発せられた青い三つの彗星がカーズの体を切り刻む。体を三つ切りにされた魔神は苦痛に悲鳴を上げた。

『オオオオー!!』

「よそ見している暇があるのか？」

苦しみ悶えるカーズの前に今度は黒い影が飛び込んで来る。

『蛮器』を手にしたバーカードだ。巨大なチェンソーのような刀を手にした凶戦士は力任せにカーズの角を粉碎した。

ーギャリリリリ!!

「フ・・・!むっ？」

ニヒルに笑うバーカードだったがその表情が一瞬で曇る。

何と体をバラバラにされたにも拘わらずカーズが反撃に転じ、バーカードを捕まえてしまったのである。

空中ではさすがに逃げられず、捕らえられてしまった凶戦士はそのあまりの力に顔を歪めた。

『我ハエデンヲ支配スル者ナリ・・・』

設定通りの言葉を繰り返しながら、カーズの口が真っ赤に燃え盛る。自分の腕ごとバーカードに攻撃するつもりなのだ。魔神の意図を察しカインの顔色が変わった。

「あれは・・・いかん！バーカード！！」

「ー黙っている、カイン」

仲間の危機に飛び出した勇者だったが、その動きはすぐに止まる。捕らえられていたバーカードが掴んでいたカーズの手を無理矢理こじ開け、脱出したのだ。

超巨大モンスターが相手なのにとんでもない腕力である。

魔神の腕に飛び移り、ホルダーからショットガンを抜くとバーカードは驚いているカーズ目掛けて銃口を向けた。

「捕まえる相手を間違えたな」

ードン！！

ショットガンが火を噴いた途端、魔神の顔が吹き飛んだ。

だが攻撃はそれで終わらず、バーカードは何発もカーズの顔に弾丸を叩き込んで行く。

ードンドンドン！！

（これで少しは・・・むっ？）

爆炎と煙が自分の近くまで舞い上がり、ようやくバーカードが引き金を離す。少しはダメージを負わせたかと期待した凶戦士だったが、煙が晴れて来るとその表情がまた険しい物になる。

カーズの頭は下顎を残して吹き飛んでいたのだが、口のあった部分

に何とまだ真っ赤な火の玉が宙に浮いていたのだ。

「ちっ!!」

『デモ・・ンズ・・ボルケー・・ノ』

ズドォーローン!!

バーカードがカーズの体を離れた途端、火の玉が天に向かって発射された。そして雲を突き抜けると火の玉が拡散し、凶戦士達に降り注いで来た。

「危ない!!」

火の雨と化した魔神の攻撃がいくつも降り注ぎ、二人に襲い掛かる。カインはスピードで回避し、バーカードは大剣やショットガンで何とか攻撃を防ぐ。

そんな二人だったがある事に気づき、ハッと視線を向ける。

案の定、凶戦士の近くにいたちよび髭ユーザーが悲鳴を上げていた。

「うわああー!!!!」

「ちっ!!」

腰が抜けてしまっている一般ユーザーに火の雨を防ぐ術は無い。

舌打ちしたバーカードが慌てて彼の盾になり攻撃を防いだ。

「ああああ!!ぎゃあー!!!!」

「叫ぶ暇があるならさっさと逃げろ!!ーむっ!!」

凶戦士が怯えるユーザーを避難させようとするが、人の話を聞いていないのかちよび髭は全く動こうとしない。

と、二人の姿を突然巨大な影が覆う。

頭を吹っ飛ばされた魔神がまた攻撃を仕掛けて来たのだ。

「しまっー」

ズンー！！

避ける暇も無くちよび髭ユーザー事、バーカードにカーズの一撃が振り下ろされる。

地響きを立てて潰されてしまった二人にカインが慌てて駆け寄った。

「ば、バーカードー！！」

ーズドン！！

魔神の掌目掛けてジャンプし、聖剣で切り裂こうとしたカインだったがその前にカーズの手が粉々に吹っ飛ぶ。

危うく爆風に巻き込まれそうになり、着地した勇者が眼にしたのは空中に向かいショットガンを向ける凶戦士の姿。

いつもと違い明らかに不機嫌な顔をしているバーカードだった。

「バーカード！無事だったのか！？」

「気を抜くなカイン。・・・見ろ」

喜んだのもつかの間、凶戦士が顎で指す方向を見てカインの表情も変わる。

体を切られ、頭や手を吹き飛ばされた魔神がまた再生し出したのだ。手を加えられているとは言え、恐ろしい回復力である

「まいったな！もう復活したぞ？」

「あの回復力に生半可な攻撃は無意味だ。・・・カイン、少しだけ時間を稼げるか？」

カーズが体を修復している間、バーカードが腰のホルダーから黒い拳銃を取り出す。

ズシリと重みを感じさせるマグナムガンだ。

カインもそれを見てすぐにバーカードが何をする気か分かった。

「私の『魔王』を撃つには少し時間が繋かる。しかし奴を倒すにはこれしか手段があるまい」

いいながらバーカードが黒い拳銃の安全装置を外す。

凶戦士最強の武器『魔王』

カインと同じく限定イベントで手に入れたレアアイテムで『滅器』以前の彼の切り札である。

カーズに銃口を向けると『魔王』が小さな音を鳴らしエネルギーのチャージが始まる。

バーカードが『魔王』を撃つよりもカーズの復活の方が早いと考えたカインは、無言のまま頷いた。

「分かった。かけがえの無い友の頼みだ。ここは私にまかせろ！」

いつもの様に勇者が笑顔で親指を突き出すが特にバーカードは反応しない。

「友」と呼ばれて突っ込みを入れないのは単に声が聞こえなかっただけか、それとも認めてくれたからか？

「チャージは3分で終わるその間奴を止められるか？」

「愚問だな。私も一応勇者と呼ばれた身・・・お前がチャージしている間に奴を倒してみせるさ！！」

言いながらカインが飛び出す。友との約束を守るため復活を果たした魔神に真っ正面から突っ込んで行く。

『我が名ハ・・・カース・・・!』

そんな白の勇者を迎え撃つためにカースもストリートパンチを繰り出す。先程とは違い格段にスピードが上がった攻撃を間一髪躲しジャンプするが、動けない空中ですぐに追撃の一撃がカインの目の前まで迫って来た。

「しまっー!!」

ーズン!!

避ける暇も無く魔神の拳と共に地面に潰されてしまうカイン。だがバーカードはそれでも表情を変えずチャージを止めない。

ニタリと笑ったカースがゆっくりと手を上げるがそこに白の勇者の姿は無く、あるのは砕かれた地面だけだった。

「勝ったと思ったか? 魔神よ」

と、声が在らぬ方向から聞こえて魔神が顔を上げる。

何と彼はカースの頭の上にいたのだ。

驚いたカースがすぐに叩き落とそうと手を振るが、その動きがピタリと止まる。

何とかカースの掌にもう一人カインが立っていたのだ

「これが」

「私の技」

「ムーン・マジックだ」

ーードガガッ!!

肩から現れたもう一人カインを入れ、三人となった白の勇者が同時

に攻撃を繰り返す。

分身の術と言う訳では無く三人共実体があるらしい。

苦痛の雄叫びを上げたカーズが暴れ出し、振り払おうとするが三人になったカインは持ち前のスピードと身の軽さを活かし、確実にダメージを与えて行った。

（よし！これなら・・・はっ！！）

『我ハエデンノオーラー！！』

先程の言葉通り、これならチャージが終わるまでに片が着きそうだとカインが思った途端、カーズの怒りが爆発した。

怒りの魔神は力任せに巨大な両腕を地面に叩き付ける
そのせいで地響きが起こり、カイン達の動きが止まってしまう。
隙を突かれた白の勇者はそのまま魔神に捕らえられてしまった。

「カイン！！」

「来るな！バーカード！！」

思わずチャージを解除しようとするバーカードを見てカインが制する。

魔神の力は物凄く、技は解けてしまったがそれでも白の勇者は気丈に笑ってみせる。

その表情はただの強がりでは無く、勝利の光を見ている者の顔だった。

「安心しろ。この勝負・・・私達の勝ちだ！」

カインが言い放った途端、カーズの体が光り出す。見るといつの間にか魔神の体に青白い光を放つ魔法陣が浮かび上がっていた。

「先程の攻撃の際、光の結界を作らせてもらった。敵にバレずに作るのは苦労したがどうやら上手く行った様だな」

光の魔法陣が浮かんだ途端、カーズが苦しみ出した。どうやらカインの言う通り効果があるらしい。

魔法陣の光は徐々に強くなって行っった。

『ワワワワレはエデンのおーーーーーっ!!』

苦しむ魔神の口や眼の窪みなどからも光が漏れ出す。いつの間にかカーズの全身が光り出していた。

そしてその光が眼をつぶらんばかりに輝き出した時、カインが叫んだ。

「聖なる戒めを受けろ！シャイニング・フォースー!!」

魔法陣の名を言い放つ白の勇者。それと同時に魔神の体から光が爆発する。

『グオオオオーーーーー!!』

聖なる力の戒めを受け、黒焦げになったカーズが思わずカインを手放す。自由になった勇者だったが、捕らえられた時のダメージが大きいのか？動く事が出来ず、そのまま地面に落下した

ーードタン!!

「ぐっ!・・・バーカード、後は任せたぞ？」

「よくやった。カイン」

倒れたまま動けないでいるカインの方を見ず、バーカードが応える。

チャージはすでに終わっていた。

黒いマグナムガンの銃口には漆黒のエネルギー弾が完成している。見た者が凍り付きそうな鋭い視線を向け、凶戦士が引き金に指を掛ける。

そして黒焦げになり、言葉を失っている魔神に冷たく言い放った。

「消え去れ」

キューーーン……ドォン！！

発射された『魔王』の一撃がカーズに直撃する。最初、ボール程の大きさだったエネルギー弾は魔神の体に当たった途端、その体を包む程巨大になり、一瞬でカーズを粉碎する。

『ガアアアーーーーーッ！！』

粉々になりながら魔神の断末魔の悲鳴が響き渡った。

漆黒の凶弾は主であるバーカードに敵対する者を全て破壊し、消滅させる。

エネルギー弾が消えた後、凶戦士の前に残ったのは焦げ臭い匂いと降り注ぐ塵だけだった。

「……任務完了だな」

敵を倒した事を確認し、『魔王』をホルダーに挿しながらバーカードが踵を返す

自分の背後でまだちょび髭ユーザーが震えていたが、彼には何の興味も無い。

任務を果たした凶戦士がその場を離れようとした時だった。

『……我ガ名ハカーズ』

「っ!？」

ーギャリリリリ!!

背後から聞こえて来た有り得ない声に素早くバーカードが振り返る。

手に持つのは『蛮器』。振り返った途端、防御の体勢を取った凶戦士だったが、そんな彼に有り得ない物が飛んで来る。

それは間違いなくカーズの手だった。

「これは・・・!？」

奇襲を咄嗟に防いだバーカードだったが、さすがに驚きを隠せない。粉碎した筈の魔神の手が宙に浮いているのだ。驚いて当然である。背後にいるちよび髭ユーザーを守るため、力比べを続けるバーカードだったが、そんな彼の前でさらに驚くべき事が起こった。

『我ハエデンヲ支配スル者ナリ・・・』

粉々になった塵が徐々に元に戻って行く。そしてカーズの顔が宙に浮かんだまま再生したのだ。

そして口の中には先程と同じ火炎弾がある。

また自分の手を犠牲に、バーカードを倒す気なのだ。

「なるほど・・・少しでもデータが残っていたら再生できるらしいな」

言いながらバーカードが苦笑するが、その体は徐々に押されつつある。態度には出さないがやはり彼もダメージを負っているのだ。その間にもデータの断片は集まり、今度は魔神の左手が復活する。正に絶体絶命の状況だが、何故か凶戦士は笑みを崩さなかった。

「・・・やはり念には念を押しにおいて正解だったな？ カイン」

バーカードの言葉を聞いてその時初めてカーズはカインの姿が無い事に気付く。

さっきまで倒れていた場所には姿も形も無い。

首と手だけとなった魔神が必死になって捜すが、見つける事が出来ない。

それもその筈、白の勇者は意外な所にいたのだ。

「ああ……そうだな!! バーカーカード!!」

バーカードの問いに空中にいたカインが答える。何とカインは魔神の真上にいたのだ。

いつの間にか形成した巨大な魔法陣に刺した白銀の剣は、これ以上無い程まばゆい光を放っている。

それは彼が使おうとしている技が自身最強の技である事を意味していた。

「不死の力を持つ太古の魔神よ！！その強さに敬意を表して君に神の王冠を与えよう！！」

言いながらカインが空中の魔法陣から剣を引き抜く。そして――。

「クラウウンゼロオオオー！！！！」
「ードオン！！」

カインが剣を振り下ろした瞬間、魔法陣から強烈な光線が発射された。

それは正に波動砲！

光の王冠はカーズだけを包み込み、バーカードはちよび髭ユーザーを抱え込みながらその場を脱出する。

二人は魔神が復活した時のため既に準備していたのだ。先手を打っていた勇者達の正に作戦勝ちである。

そんな事も露知らず、騙されていたカーズに助かる手段はもう残っていないかった。

『我ハ・・・エデンヲ・・・』

最後の言葉を残し、魔神が消えて行く。

全てのデータの消滅。今度こそ二人の勝利である。

だが、その代償はあまりにも大きく、光の王冠が無くなった後カインはまた地面へと落下し、バーカードは肩で息をしている。

激戦の後、平穏を取り戻した名も無き丘で二人は暫く動けないのだったー。

「ありがとう、バーカード」

回復魔法を使い、復活したカインがそっと手を差し出す。表情に浮かんでいるのはいつもの爽やかな笑顔。輝きそうな白い歯が妙に眩しかった。

「君のおかげで仲間の敵を討つ事が出来た。

これでケイルやまほまほも戻って来る筈だ」

いつも以上に爽やかなカインだったが、それは不安の裏返しだとバーカードは知っていた。

彼もまた本当に部下が戻って来るのか半信半疑なのだろう。

「・・・あのモンスターは一体何だったのだ？」

カインの差し出した手を無視し、煙草に火を点けたバーカードが誰に聞く訳でも無く呟く。

それは二人の気持ちを代弁している物だった。

片やチェイサーをまとめる伝説の勇者として、片やその実力を買われ、WB社から掃除屋として雇われた凄腕ハッカーとして数多くのバクや悪質ユーザーと対峙して来た二人だったがあんなバグに遭遇するのは始めてだった。

「何者かに改造されたモンスターである事は間違いない筈だ。それも我々が全力で戦わねばならない程の・・・」

一転してその場の雰囲気为重苦しい物になった。何故だか、二人は胸騒ぎを感じていたのである。

先程確実にバグの原因である魔神は倒した。だが何か違和感を感じる。

まるでまだ戦いが終わっていない様な・・・

その不安が一体何処から来ているのか二人にも分からなかった。

「・・・今考えるには情報が少な過ぎる。とにかく私はこの事をクライアントに報告するつもりだ。それが私の仕事だからな」

煙草を踏み消し、バーカードがそう結論付ける。自分は託された仕事をきっちりやるだけの事だ。その過程でどんな敵が現れようが、この手で排除するのみ。

それだけの自信と実力を彼は持っていた。

「やれやれ、君らしいな？」

「後の事はまかせる。・・・また会おう。カイン」

肩を疎める白の勇者を残し、バーカードが立ち去ろうとする。

と、そんな凶戦士の眼に未だに腰を抜かしながら震えているちよび髭ユーザーの姿が止まった。

もはやモンスターもいないのに怯える様は明らかに異質に見える。

「まだいたのか？ いい加減帰れ。お前のせいで無駄なダメージまで負ってー」

「うわああああっ！！」

軽蔑の眼差しを向け近付いたバーカードだったが、その言葉はちよび髭ユーザーの叫び声で掻き消された。

突然の絶叫に凶戦士はもちろん、側にいたカインもギョツとする。だが次の瞬間、二人は別の意味で驚く事となった。

「か、勝てない！ 勝てないんだ！！ 皆殺される！！ あの亡霊に・・・あのカラスに！！」

「・・・何？」

ちよび髭ユーザーが見つめる先、海が広がる景色に小さな影があった。

そこでようやく二人は胸に抱えていた違和感が何だったのか気がつく。

静かすぎるのだ。

フリーズの原因であるモンスターは倒したのに波の音も、森に住む鳥達の声も、風の音すら聞こえて来ない

それは未だにフリーズ状態が終わっていないと言う事
脅威はまだ過ぎ去っていないのだ！

『・・・』

バーカード達がいる名も無き丘からかなり離れた場所に、そのモンスターはいた

漆黒の羽根を広げながら羽ばたき続け、見えているのかも分からな
い三つ目の窪みをこちらに向けている地獄の烏モンスター・クロウ
その左手にはまばゆい光を放つ黄金髑髏。そして右手には巨大な眼
を模った赤い杖を握っている。

その赤い杖の目玉部分が爛々と光り出した途端――。

「・・・まずい！」

・・・ピーーーーーーーーー！！

バーカードが呟いた瞬間、杖から光線が発射されていた。

ビームは一瞬で崖まで到達し、バーカードとちよび髭ユーザーに迫
り来る。

激闘を終え、ちよび髭ユーザーに気を向けていた事もあり、バーカ
ードはすぐに反応する事が出来なかった

やられる――そう、凶戦士が覚悟した時だった。

「バーカードお！！」

――ギョーン！！

気付くと体を押され倒れ込んでいた。

そして目の前には真っ赤な光と白い影・・・。

それが自分を庇い、光線に打ち抜かれたカインだと言う事にバーカ
ードは少しの間理解出来なかった。

「ぐ・・・あ！」

「――カイン！！」

カインが倒れ込むのと同時に彼の聖なる剣ハルバリオンが空中で回転し、崖の先端に突き刺さる。どうやら剣で防御しようとしたらしい。

しかしクロウの光線は剣を弾き飛ばし、哀れカインが餌食となってしまったのだ

「カインしっかりしろ!! カイン!!」

「ふ・・・颯爽と君を助けるつもりだったのだが・・・? やはり私も、まだまだ甘い・・・」

バーカードが抱き起こすと弱々しくカインが笑ってみせるが、彼の末路は既に決まっていた。

案の定、打ち抜かれた白の勇者の右胸から凄いスピードでウィルスの侵食が始まる。

それを見て、今までぶつぶつと呟いていたちよび髭ユーザーが我に返り、顔色を真っ青に変えた。

「わ、悪くない! 私・・・私は悪くないんだあーーーー!!」

「おい! 待て!!」

恐怖に駆られたちよび髭ユーザーは脱兎の如く、その場から逃げ出してしまふ。

いつの間にかクロウの姿も消えていた。

名も無き丘には今にも消滅しそうなカインとそれを抱き抱えるバーカードの二人だけが残される。

「行くなカイン! 私は・・・私はこんな事で貴様に借りを作るつもりは無い!!」

「は・・・君らしいな。だが、バーカード・・・どうやら私は・・・ここまでの様だ・・・」

カインの体はもう、上半身と足は完全に消えていた。後は腰と手と頭のみ・・・

と、カインがゆっくりとバーカードの顔に手を差し延べる。

凶戦士自身、気付いてはいなかったが彼は悲痛な表情を浮かべていた。それは普段、滅多に感情を出さない彼が見せる始めての悲しみの表情である。

そんな友を慰めるかの様に白の勇者はバーカードの頬に触れた。そして――。

「さらば・・・だ。我が・・・と・・・も・・・」

言い終わる前に手に感じていたカインの重みが無くなる。

飼い主がいなくなった事を悟ったのか？近くの森で戦いの様子を見ていたククルがキューンと悲しげに鳴く

ただ一人残されたバーカードは今まで友を抱いていた手を力強く握った。

「カイン・・・うおおおおおー！！！！！！」

突然の咆哮に木々に止まっていた鳥達がギャーギャー騒ぎながら飛び立って行く。

だがククルは聞いていた。凶戦士の叫びを、悔恨の咆哮を・・・。

その日、

「エデン」から三人のユーザーが行方不明となる。

そしてそれまで敗北を知らなかった男がたった一人の友を失い、

「エデン」を震撼させる脅威の存在を知った忌まわしき日となったのだ――。

『・・・こうして私はノイズの存在を知り、（ゴースト・ハッカード）を結成した。結果は・・・まあ、見ての通りだがね』

未だに地面へと突き刺さっているカインの聖剣ハルバリオンに翼を休めながら、ククルの姿をしたバーカードは長い長い昔話を終えた友の剣は今では墓標代わりとなっている。

バーカードの話を聞いて、ハジメは震えが止まらなかった。彼もまた自分と同じだったのである。

少年が絶句していると、それまで海の方を向いていたバーカードが小さく羽ばたき、ハジメの方へ向き直した。

『私はその時まで自分の力を驕っていた。自分より優れた人間などいないと・・・。だが強大な力は更なる強大な力に依って完膚なきまでに叩き潰された。』

当然だ。例えば、どんなに強くなろうとも個人の力など高が知れている。』

ハジメはバーカードが自分に何を伝えたいのかがよく分からなかった。彼が何故ノイズを追い続けているのかは分かったが、それを自分に話す理由が分からない。

少年の表情を見て察したのか、バーカードは一度間を取ると真剣な顔つきで話し始めた。

『少年、力を望むのは良いが力に吞まれてしまつては駄目だ。強くなりたいと思うのならその力に見合った意思の強さを手に入れねばならない』

小さな白竜の言葉にハジメはハツとした。彼は過去の話をして自分と同じ運命を辿るなど言っているのである。

強さを求め我を忘れていた少年に、バーカードの言葉は深く突き刺

さったが、彼の話はさらに続いた。

『人の強い意思――心は時にとんでもない奇跡を起こす物だ。あのクロス・パウロで再度クロウと対峙した時、少年が私を助けようとしてしなければ私はこうしてククルの姿で生き残っていなかった筈……』

強さとはその意思や願いに依って手に入れられる物なのだ。

少年よ、君は何のために強くなりたいと思う？』

バーカードの鋭い視線にハジメは言葉を窮した。

ノイズ事件に関わってからつねに強くなりたいと思っていたが、その理由を考えた事が無かったからである
だから白竜に何故と聞かれた時、少年は明確な答えを出す事が出来なかった。

「ボクが強くなりたい理由……。それは……。それは……」

ハジメが答えを探していると、それまで厳しい顔つきだったバーカードが表情を緩め、少年の肩に乗る。

それはまるでハジメを励ますかの様に優しい乗り方だった。

『答えが見つからないのならゆっくり探せば良い。だが、これだけは覚えておいてくれ。力に吞まればその先には破滅しかない。そんな事を《悠久の監視者》は望まないだろう。

君がゲームを楽しみ、笑顔になってくれる事を彼は望んでいた筈だからな』

そう言うと、バーカードは空中からコマンドの【アイテム】を使い、空中から何かを取り出す。そして口に咥るとハジメに渡した。

「これは・・・」

『彼の落とし物だ。本当はもっと早く少年に渡すつもりだったのだが、中々機会が無かった物でね』

バーカードから渡された物を見てハジメの手が震えた

シュウの落とし物・・・それは赤いサングラスだったのである。

それは彼がウィルスに侵され消える際に残った結一の遺品だった。シュウが消える時に最後に見せてくれた優しい笑顔を思い出して、ハジメの表情が歪んだ。

「シュウ兄ちゃん・・・うつ、うつっ!!」

サングラスを両手で握り絞めハジメは声を上げて泣いた。ゲームなので涙は出ないがそれでも思いっきり泣いた。

今まで、戦い続きで追い詰められていた少年の心が悲しみと共に洗い流されて行く。

再度剣に飛び移ったバーカードは優しい顔で泣き崩れるハジメを見守っていたー

(続く)

FILE..34『目標（ターゲット）』

ー適性LV??? 天使と悪魔が潜む洞窟ー

ハジメがバーカードと名も無き丘にいる頃、焰はとある洞窟にいた。辺りには誰もいず聞こえるのは獲物を狙うモンスターの息遣いだけ。それがこの洞窟のLVの高さを表している様である。

ージャーーン!!

焰はその洞窟の最奥の地、謎の遺跡がある場所で一人相棒のアックスギターを演奏していた。

魂を吐き出す様な激しい曲である。

彼の周りにはアックスギターの効果か炎が舞い、洞窟はさながら昼間の様な明るさとなっている。

赤い髪を振り乱し一心不乱に激しい曲を奏でる焰は、まるで観客に曲を捧げるアーティストの様に見えた。

ージャジャジャジャーーン!!

「・・・ふう」

曲を弾き終わり、焰がそのまま静止する。ギターの効果も終わり、その場には元の静寂だけが残された。

「今の相棒の曲はどうだ? 兄弟」

アックスギターを肩に担ぎながら、焰が遺跡のある場所に話しかける。

そこには松明の明かりでぼんやりと浮かび上がる悪魔の石像があり、隣には剣を構える体勢の天使の象がある。

そして悪魔の象は天使に切り掛からんばかりの体勢で、一本のギターが持っていた。

「良い曲だろ？コイツも長く使ってるんでもうジジイだが、お前に負けないくらいの音色を出してくれる」

焰が自慢げに二度三度ギターを振って見せるが、何故かその表情は優れない。

悪魔の石像が持つギターに眼を向けるとはあ、と大きくため息をついた。

「ノイズの片が着くまで来ないって決めてたのに結局また来ちまったよ」

わしゃわしゃと頭を書きながら鬼人が苦笑する。彼には今気掛かりな事があった

それはノイズの事で無く（噂屋）に行った時襲って来たアウトロー達の事である

彼らのリーダー蘭丸が言った言葉に焰はずっと引っ掛かりを感じていた。

（奴らはドラゴンレインに所属していると言っていた……。そりゃつまり奴らのヘッドがアウトロー行為を認めているって事だ）

そこまで考えて焰はもう一度深くため息をついた。

『エデン』最大のチームの一つ《ドラゴンレイン》

そのメンバーは300人を越え、一番隊から十番隊まで構成されている大パーティーである。

それだけの大所帯になったのは単にパーティーリーダーのカリスマ性に寄る物だが、今焰の頭にはそのボスの姿が浮かび上がっているそれはかつて一度捨てた夢を再び目指そうとした時の仲間であり、この悪魔が持つギターにも深く関係している人物でもあった。

「なあ、兄弟。俺のせいであいつは変わっちゃまったのか？ だとしたら俺はどうすれば良い・・・？」

もの言わぬ石像に聞いても答えは返って来なかった。否、例え喋れたとしても悪魔のギターは自分に教えてくれないかもしれない。なんせ自分は一度このギターを捨ててしまったのだから・・・。やるせない気持ちでいっぱいになり、焰がもう一度アックスギターで演奏しようとした時だった。

ープルプルプルー！

『あい、もしもし！ 焰さん聞こえますか？』

通信機から何とも気の抜ける声が聞こえて来た。ラビィである。

思わず頭を抱えた焰は苛立ちながら通信に出た。

「聞きたくねーけど聞こえてるよ！！ なんの用だ！！」

「あい、バーカードさんから集合命令です。今すぐ（トロイ）に集まる様にだそうです」

用件だけ伝えると、ラビィはさっさと通信を切ってしまう。

その一方的な切り方に焰は全身をわなわなと震わせた

「この！！・・・はあ。どうやら俺に考え事をする暇なんてない様だぜ？ 兄弟」

もう一度大きくため息をついてからふっ切れた様に焰が笑顔を浮かべる。

そしてかつての相棒に背中を向け、自らの戦いの場へと引き返して行った――

『皆、集まっている様だな』

「ハジメ・・・！」

バーカードとハジメがホームに帰還すると、既にメンバーは全員揃っていた。

それまで（トロイ）の隅でぶつぶつ何かを言っていたアカネもハジメを見た途端立ち上がる。まるで主人を待っていた犬の様な豹変ぶりだ。

「緊急召集って何かあったんスか？それに・・・」

壁に寄り掛かっていた焰がハジメの方を見る。以前よりも少年のレベルが上がっているのを知ってフツと薄笑いを浮かべた。

「このガキもちったあ使える様になってるみたいだし」

「焰さん・・・！」

焰の言葉にハジメの表情がパツと明るくなる。口は悪いが、それでも彼が自分を認めてくれたのが分かった

それに少年の頭に乗っている赤いサングラスを見て、バーカードが何を話したのか大まかに理解したらしい

先程から落ち込んでいたハジメが元氣を取り戻したのを感じて、バーカードはラビィの頭に移動した。

『うむ。実はノイズの件で（噂屋）からある報告が入った。ラビィ、繋いでくれ』

「あいあい」

バーカードの指示でラビィが巨大コンピュータのキーボードを叩くと、大画面に噂屋のオババが映し出される。

相変わらず不気味な魔女の顔がどアップで映し出されると中々迫力があつた。

「ヒッヒッヒッ・・・！坊や達元気だったかい？」

「マスター」

オババが気味の悪い笑い声を上げると、アカネが無表情のままつぶやく。さっきまでは落ち込んでいて通信にも気づかなかったのだろう。

『先程調べると言っていたが、さすがに仕事が早いな』

「当然だよ。私を誰だと思っているんだい？まあ、取り敢えずコイツを見ておくれ」

オババが言う画面に奇妙なマークが表情される。菱形の形に『F』と言う文字が入っているそのマークにハジメは見覚えがあつた。

「それってクロウがシュウ兄ちゃんから奪った・・・」

「そうさ、正体不明のマークさ。コイツの正体は未だに分かっていないんだが、私は考えたのさ。」

ひょっとしてクロウの狙いはこのデータだったんじゃないかってね」

得意げにオババが説明するが少年には理解出来ない。？マークがた

くさん浮かんでいるハジメを見て側にいたアカネがまたボソリとつぶやいた。

「つまり・・・ノイズが今まで人を襲っていたのは・・・あのデータを持つユーザーを探していたと言う事・・・」

「その通りさね。あのデータはただのユーザーが持っていない特別な物と言う事さ。」

『エデン』の中でユーザーで無くゲームをプレイしてる奴らなんてたった一つしかないだろう」

「・・・そうか。システム！」

ついていけないハジメの代わりに、ハツとした焰が答える。そう、ユーザー以外で『エデン』の中に存在し、貴重なデータを持っている人間などWB社側の人間しか有り得ない。

『そうだ。ユーザーを管理するシステム・・・いわゆる監視者と呼ばれている彼らは普段はユーザーに紛れ込み、その正体を知る事は出来ない。

ノイズの目的がシステムだとすると、今までの無差別な襲撃も納得が行く。

少年、君のお兄さんは他の監視者について何か言っていなかったか？』

突然バーカードに話を振られ、ハジメはまた困惑するノイズの狙いがシステムである事は分かったが、シュウの仕事がこんな重大事に関わって来るとは思わなかったのだ。

「シュウ兄ちゃんはまだあまり仕事の話は・・・あっ！でも、確か職場には4人しか人がいないって言ってました。新しく入ったばかりで名前を覚えるのが楽だったって笑ってましたから」

必死に従兄弟との会話を思い出し、紡ぎ出した少年の情報はオババ達を満足させる内容だった様だ。オババは一度頷くとニヤリと笑う

「なるほど。開発チームがそのままゲームを管理してるって事は確かに有り得るね。つまり少なくとも『エデン』には後3人監視者がいるって事さ」

『我々はその三人を何としてもクロウより先に見つけ守らねばならない。』

もっとも、その内の一人はもう見つかっている様だが・・・』

ニヒルな笑みを浮かべたバーカードがオババを見ると、魔女はヒツヒツヒツと声を上げて笑う。焰とハジメは驚いて画面を見るが、そう言えばさつき白竜が「仕事が早い」と魔女を褒めていた事を思い出した。

「さっきも言ったが私を誰だと思ってるんだい？確かにユーザーの中から監視者の連中を見つけるのは至難の業さ。だが『エデン』のイベントの中にはCPじゃ捌き切れない物だってあるそれはさすがにWB社の人間がやってるんじゃないかと思って、いくつかピックアップして見たらドンピシャだったよ」

言いながらオババが何か操作をすると大画面が別の映像に切り替わる。それは高い岩山に囲まれた金色に輝く黄金の神殿だった。

「おいおい、こいつはまさか・・・」

「聖女サラが住む光の神殿バルハラ・ルミナ。

魔神との決戦の前に必ず訪れるここはただの神殿じゃない。ユーザーを管理するシステムの本拠地なんだよ」

オババの言葉にハジメは思わず唾を飲み込む。

『エデン』をプレイする時説明書に聖女サラの名前は乗っていた。魔神カースを封印した伝説の巫女。今は神となり『エデン』の世界にある神殿や教会では殆どが彼女を崇めている。

ゲームのキャラクターとばかり思っていたが、まさかシユウと同じシステムだったとは驚きである。

『・・・次の目的地が決まったな。

我々はこれからバルハラ・ルミナに向かい聖女サラを保護する！ノイズの目的がシステムなら彼らから逆にノイズの正体を聞き出せるかもしれないからな！』

白い翼を広げ、ホームのリーダーの名の元にバーカードが言い放つ。白竜の指令を聞き、焰とアカネが同時に頷いた。

「聖女様を守るために本物の化け物と戦おうか。普通のゲームじゃ体験出来ねえよな」

指を鳴らしながら焰が凶悪な笑みを浮かべる。根っからの戦士である彼は相手が無敵のモンスターであろうと心躍る様だ。

「・・・私はハジメを守る。ただ・・・それだけ・・・」

逆に表情を変えず淡々と喋るのはアカネだ。しかしその態度とは裏腹に頑なまでに任務を守ろうとする所に少年への想いが感じられる。

（兄ちゃん・・・兄ちゃんの仲間がボクが必ず守ってみせるよ！）

頭に掛けていたサングラスを手に取り、強い決意でハジメもまた頷く。

一行は『エデン』の聖地バルハラ・ルミナへと向かったー。

トロイ
一方のあるクロスピアではハジメ達を探している者がいた。
アウトローユーザーの蘭丸・阿国・才蔵である。仲間二人にハジメ達を探索させていた蘭丸は一人クロスピアの裏路地で苛立ちながら報告を待っていた。

「駄目っス！蘭ちゃん。ゲートの前張っててもあいつら来ないっス」
最初情けない顔をしながらやって来たのは才蔵だった。続いて阿国が忍者らしく建物の上から降って来る。

「街ん中も探して見たけどいないみたい〜？」
「クソっ！！」

二人の報告を受けて怒りを露にする仮面ユーザー。
趣味のユーザー狩りを邪魔されたあげく二度もの敗北を喫った蘭丸は直ぐに迷いの森に戻ろうとしたのだが、何故かエターナルステージ専用の特殊ゲートが開かず、行った頃にはもうハジメ達の姿は無かった。

それから三日間、こうして街の中を探索しているのだが少年達を見つけられずにいるのである。

「あのクソルキー野郎！！一体何処にいやがるんだ！？」
「これだけ探してもいないんじゃないもうログインしてないんじゃない？」

苛立つリーダーとは裏腹につまらなそうに阿国がつぶやく。蘭丸の性格は知っている彼女でも探索でろくに遊べなかったこの数日間は苦痛だった様だ。

「ゲーム始めたばかりの初心者がそんな簡単に辞める訳ねーだろ！
！良いからもう一回探して来い！」

「あ、あの蘭ちゃん。この際奴らに関わるのもう止めた方が良く
じゃ・・・」

「ーバキッ！！」

恐る恐る提案する才蔵の顔面に蘭丸が思いっきりパンチを叩き込む。
予想していたとは言え、その遠慮無しの攻撃に才蔵は地面に叩き付
けられた。

「イダァ！！」

「ふざけた事抜かしてんじゃねえぞ！？この俺があんな奴らに舐め
られっぱなしの訳にはいかねーんだよ！！」

肩で息をしながら吐き捨てる仮面ユーザー。プライドが高く他人の
事などゴミとしか思っていない彼にとってハジメ達に復讐する事が
今最も重要な事なのだ。

「ーおやおや、ドラゴンレインの一番隊隊長ともあろうお方がず
いぶんとお冠だね？」

と、突然路地の入口から現れた人影に三人がギョツとする。

そこにいたのは左肩に白銀の鎖を纏った兎の獣人とピエロー。
ケルビムとマリオのコンビだった。

「何だ！？テメェ！！」

「まあまあ、落ち着いて・・・私の名はケルビム。君のボス、天雨
さんの知り合いと言った所さ」

後ろに手を組み、紳士然とした佇まいでケルビムの口からボスの

名が出ると、蘭丸がハッと息を飲み込む

それまでの勢いが何処へやら、あっという間に大人しくなってしまう。仮面ユーザーを見て紫の獣人は満足げな笑みを浮かべた。

「て、天雨様の・・・？」

「そう、だがこの際私達の素性などどうでも良い。それより、君にはどうしても恨みを晴らしたい相手がいるんだろう？」

なら早く始末した方が良いな。

何故なら彼らは今チェイサーのホーム、バルハラ・ルミナに向かっているからね」

チェイサーのホームと聞いて蘭丸だけで無く阿国と才蔵の顔色も変わる。

人を襲うアウトローにとってチェイサーは警察であり、そのホームとは警察署と同じなのだ。

そんな所へ少年達に向かってるとすれば、目的は一つしかない。

「それってもしかして私達の事チクろうとしてるって事？」

「バババルハラ・ルミナがチェイサーのホームってどう言う事っスか！？だ、第一アンタ何でそんな事知ってー」

自分達の事を通報するつもりだと聞いて阿国と才蔵がケルビムに詰め寄る。この前は運良く助かったが、今度通報されたら確実にアカウントを停止されるだろう

そうなれば二度と『エデン』はプレイ出来ない。

「言っただろう？私達の素性などどうでも良い事だと・・・。

だが、彼らがバルハラ・ルミナに着いたら確実に君達はゲームオーバーだろう。

それだけなら良いが下手をすれば責任問題を追求されてドラゴンレ

インは解散。そうすると君達のボスも困った事になるんじゃないかな？」

「アハハハ☆解散だ☆！解散だ☆！」

ケルビムの後ろで踊りながら回るマリオの声だけが響き渡る。アウトローの三人は黙り込み、下っ端二人組は顔を青くしている。

ただ一人俯いている蘭丸にケルビムが探る様な視線を送っていた。すると――。

ガツン――！！

「！？」

突如、仮面ユーザーが武器である巨大な斧を取り出し、その刃を地面に振り下ろした。リーダーの突然の行動に才蔵と阿国は驚き、マリオも笑ったまま動きを止める。

ただ一人ケルビムだけがニヤニヤと笑っていた。

「ふざけんなよ・・・チェイサーのホームに駆け込むだあ？上等じゃねーか！！システムの犬共にドラゴンレインの恐ろしさたっぷりと教えてやるよ！！」

顔を上げた蘭丸が狂気じみた笑みを浮かべる。

それは追い詰められた者の笑み。

怒りを憎しみに変え、自らのプライドを守るためだけに蛮行を重ねる外道の笑みだ。

「阿国い！！一番隊のメンバーを全員集めろ！！」

「え、ちょ、蘭丸まさか・・・」

仮面ユーザーの命令に阿国が怪訝な顔をする。蘭丸が何をする気な

のか分かってしまった様だ。

「決まってるんだろ？ 久しぶりのALLメンバーでの狩りだ！ 場所はバルハラ・ルミナ！！」

いや、こいつはもう狩りじゃねえ・・・チェイサー対ドラゴンレインの全面戦争だ！！」

肩に血の様に赤い大斧を担ぎ、蘭丸が高らかに宣言する。

今、謎のユーザーの陰謀によってハジメ達にかつてない危機が迫ろうとしていた――。

（続く）

FILE::35『女神（サラ）』

ーコツ・・コツ・・コツ・・。

「今戻ったよ」

（彼）のいる白の世界にマントの男が入って来た。（彼）は相変わらずシュウの端末から現実世界の情報を得ている。今一番のお気に入りはどうやら現実世界の事を知る事の様だ。

ーおかえり。（道標）は捕まえた？

「・・いや、残念ながら逃げられた。また余計な邪魔が入ってね？しかし、それを補う収穫もあった。ケルビムが監視者の居所を発見したらしい」

白いマントの男が説明するが（彼）は喜びも振り返りもしない。男は違和感を感じながら尚も説明を続けた

「どうやらバルハラ・ルミナの様だ。女神サラが我々のターゲットだったのだよあの男の情報だけに眉唾だが、今から行ってすぐに確認を・・」

ーもう良いよ。

と、突然（彼）の声と共に白の世界が歪んだ。

白一色だった世界が赤く染まり、灼熱の熱さに包まれる。

ここは（彼）が支配する世界。その意思によりどんな事でも可能だ。男は体がバラバラになりそうな苦痛と熱さに耐えながら驚きの表情を浮かべた。

「どうしたんだ？私が何か気に障る事をしてしまったか？」

「ボクが何も知らないと思っているの？岩窟王がやられたんでしょ？僕はまた大事なペットを失ってしまった！」

「またもや世界が大きく歪む今度は赤では無く青だ。」

それは（彼）の感情が怒りから悲しみに変わった事を意味する。男は灼熱の熱さから全身が凍てつく寒さに変わるのを感じた。

「・・・すまなかった。君のペットを無断で借りてしまつて。だが次こそは必ず君の邪魔をする者を始末して・・・」

「もう良いよ！！」

弁解する男の言葉を遮り、（彼）がもう一度叫ぶ。その衝撃で男は白の世界の入口まで吹っ飛ばされてしまった。

「次の監視者は君じゃなくクロウにやらせる。・・・それで良いね？」

男が倒れ込むと（彼）は決して振り返らずにそう告げる。

すると青一色だった世界が白へと戻って行き、凍てつきそうな寒さがやがて消えて行く。

口調は厳しいがどうやら機嫌を直してくれた様だ。

「・・・ああ。私は君の道具だ。君のやりたい様にやれば良い」

フラフラになりながらも男が立ち上がり、忠誠の証として跪く。それを見て（彼）がほんの少し笑った様な気がした――。

「――適応Lv38 封印されし聖地――」

「わぁ・・・！」

（トロイ）にあるゲートを潜り、目的地に着いたハジメは思わず歓声を上げた。降り立った場所が険しい岩山であり、辺り一面同じ様な山が聳え立っていたからである。

山の中央には金色に輝く大聖堂がある。

あれこそが少年達の目的地、バルハラ・ルミナだ。

「す、凄い所にあるんですね？」

「普通はユーザーが決戦前に来る所だからな。そう簡単に来れる場所じゃないのさ」

言いながら焰が翼を出し少年を抱えて山を下り始めるアカネは持っていたロッドを空中に浮かせまるでスノーボードの様に乗り、バークードはそのまま飛んで行く。

それぞれが別の方法で地上に降り立ち、大聖堂の前に立つとその豪華絢爛さが改めて分かった。

「はぁ〜！」

黄金の神殿を目の当たりにして少年はため息をついた
細かいグラフィックで作られた外見はまるで中世の城の様だ。

クロスピアにあるマルコロ大聖堂も綺麗だったが、さすが女神様が住む神殿である。

（ようこそいらっしやいました。勇者達）
「えっ!？」

と、ハジメが神殿の扉に手を掛けようとした時、何処からともなく女性の声が聞こえて来た。

しかし辺りにその姿は無く、少年は一人うろたえてまう。

「落ち着け！始めて来る奴のためにイベントが発生してるだけだ」

慌てるハジメを見て焰が冷静に説明する。

良く聞くと確かに女性の声は事務的で、ハジメ達に話しかけている訳では無い様だ。

（貴方達が来るのをずっと待っていました。

貴方達に魔神カースと戦う力を与えましょう。さあ、その扉を開け、私の前に姿を見せなさい）

ゴゴゴゴ・・・！

女神の言葉が終わると、神殿の扉が勝手に開いて行く

扉の奥は目眩いばかりの光で何も見えない。

思わず唾を飲み込み、ハジメが一步踏み出すと、そこには壮大な光景が広がっていた。

「うわぁ・・・！」

神殿に入った途端、ハジメがまたしても驚きの声を上げた。

それもその筈、そこには黄金の世界が待っていたからである。

広い神殿の中央にはそこだけ赤いカーペットが引かれ、入口から王座まで続いていた。

天井まで続きそうな長い背もたれの王座の傍らには、金の兜を被り三つ又の槍を持った天使達が立っている

そして巨大な王座には美しい女性が一人、座っていた

「ようこそいらっしやいました。魔神を倒す者よ」

王座から立ち上がり、その女性――女神サラがハジメ達を歓迎して

来た。始めて見る女神様は正に絶世の美女である。

綺麗に揃えた短めの茶髪に民族衣装の様な青いロングスカート。

白の巫女装束に頭に太陽を摸した金色の杖。そして少しあどけなさを感じる優しい笑顔。

全てマルコロ大聖堂にあった石像とうり二つだ。

『エデン』を管理する監視者とは分かっているけど伝説の女神との対面にハジメは興奮してしまった。

「我が名はサラ。千年前、魔神カースを地底に封印した者・・・。

さあ、貴方達に伝説の武器を残しておきました。

これを使い、世界に再び光を与えて下さい」

そう言うサラは持っていた杖で地面を叩く。するとカーペットから光が溢れ、地面から二つの武器が出て来た。

「あ、あれ？」

幻想的な光景に思わず感動するハジメだったが、神からの贈り物に我が眼を疑った。

何故なら武器は二つだけで自分の武器が無かったからである。

しかもその二つの武器も、見た事のある赤い杖と斧の形を思わせるギター・・・つまりアカネのロッドと焰のアックスギターだったのだ。

「悪いな、女神様。俺達はもうあんたからその武器を貰ってんだ」

言いながら焰がアックスギターを取り出して女神に見せる。アカネもそれに習うが、しかし女神は大して驚いた素振りもせず笑みを浮かべていた。

「それでは何の御用でしょう？失礼ですがこちらの坊やはまだ魔神と戦えるとは思えませんか？」

『我々はゲームを攻略しに来たのでは無いのだよ。女神サラ』

と、それまで少年の肩に乗っていたバーカードが女神に話し掛ける。これにはさすがにサラも驚いた様でほんの少し表情が変わった。

『私達は貴女を保護しに来たのだ。女神では無く監視者としての貴女を』

（監視者）と言う言葉を聞き、天使達の表情が変わるどうやら彼らもWB社の人間らしい。

思わず詰め寄ろうとする天使達だったが、それを制し冷静に女神が応えた。

「そうですか。貴方達が……。

噂には聞いた事がありますあるパーティが有りもしない事件を人々に吹き込んでいます……。そのパーティは元ハッカーやアウトローばかりの野蛮な一団らしいですね」

「なっ！俺達が野蛮だと！！」

サラの言葉を聞き焰が思わず突っ掛かる。

だが女神の前に天使達が立ち塞がり、飛び掛かろうとする鬼人を抑えた。

「そうです、野蛮です。所詮アウトローやハッカーなど私達PCを使う者からすれば憎むべき存在。

そんな方達に保護される理由はありません」

バーカードの方を見ながら女神が冷たく言い放つ。

天使達が守ってくれていると言う余裕か、それともこれが地なのかサラの口調は先程の穏やかな物から一変し、冷徹そのものだった。ひよっとすると実際はキャラクターより年上なのかもしれない。

「お帰り下さい。用件がゲームを進める事で無いのなら貴方達に付き合っている暇はありません」

と、取り繕う暇も無くハジメ達を追い返そうする女神サラ。

だが彼女が監視者ならどうしても聞きたい事があった少年は慌てて口を開いた。

「ま、待って下さい！あなたは監視者なんですよ？それならシュウは・・・シュウ兄ちゃんはどうなったんですか！？」

シュウの名前が出た途端、一瞬天使達の動きが止まる

やはり彼の事を知っているのだ。女神サラも澄ましてはいるが、ハジメに向ける視線が厳しくなった気がした。

「シュウですって？どうしてただのユーザーである貴方がその名を知っているのです？」

女神が疑問を口にすると天使達が姿勢を正し、直立する。

どうやら少しはハジメ達に興味を持った様だ。

「ボクはシュウ兄ちゃん・・・監視者シュウの従兄弟です。このキヤラも誕生日のプレゼントでもらいました」

ハジメの言葉を聞くと、サラは少年に向かって手を突き出し、静かに眼を閉じる

暫くその体制をとっていた女神だったがやがて手を下げると、やれ

やれと大きいため息をついた。

「なるほど。見た事の無いデザインだとは思っていましたがそれで納得が行きました。

で、その彼がどうしたのです？ 確か病で欠勤していると聞いていますが？」

『彼は病に臥しているのでは無い。『エデン』をプレイしている最中失踪したのだ』

少年の代わりにバーカードが応えるとサラは始めて怪訝な表情を浮かべる。

それは何かを隠している訳では無く本当に驚いている様だった。

「どう言う意味です？」

『《悠久の監視者》は私達の目の前で消えたのだ。正体不明のモンスターに襲われてな。

彼だけではない。もう何人ものユーザーが謎のウィルス・ノイズによって失踪している』

今まで自らが手に入れた情報を真剣にバーカードが話すと、何故か周りにいた天使達が笑い出した。

見るとそれを制する女神サラも肩をすくめ、クスクスと笑っている。そのいかにも人を馬鹿にした笑い方に思わずハジメも腹が立った。

「な、何がおかしいんです！？ バーカードさんが言っている事は本当なんですよ！！」

「これは失礼……。では貴方達はコンピュータウィルスがゲームをプレイしているユーザー達を消しているത്？ そんな証拠が一体何処にあると言うのです？」

笑いながら問い返して来るサラにハジメは思わず言葉を詰まらせた。証拠を見せろと言われるとそんな物ある訳が無い。

自分の左手を見て、この分からず屋の監視者が信じてくれるかどうか分からなかった。

『証拠ならある。そのモンスターに襲われた際に記録した映像のデータがな。それに今こうして私が貴女と話している事自体が既に異常な事ではないかね?』

だがそこはバーカード。監視者がして来る質問など既には想定済みである。

まさか本当に証拠があるとは思っていなかったのか、今度は監視者側が全員黙ってしまう。

暫く無然とした表情でバーカードを睨んでいたサラだったが、やがてまた大きくため息をついた。

「分かりました……。扉を開きます。私について来て下さい」

それだけ言うとな何を思ったか女神は少年達に背中を向け、王座の方へ歩き出した

そして持っていた杖の先を向けると、何と王座が光り出し光の扉に変わったのである。

一般ユーザーには知られない様カムフラージュされていたらしい。

「サラ様!ま、まさか彼らをホームへ?それは規定違反です!!」
「構いません。会社への口実など後でいくらでも作れます。」

それにどうやら彼らには言葉より事実をハッキリ見せた方が良さそうです」

慌てて止める天使を無視し女神は光の扉に入っていくそれに続いて

ハジメ達も扉の中に入って行った。

ーパアアア・・・。

光の扉を潜るとそこは何も無い小さな部屋だった。ただ青一色の壁と床に黄金のリングに絡み付いた双頭の蛇が描かれている。

ハジメ達が部屋に入ると扉が閉まり、小さな部屋はほぼ一杯となっていた。

『運命の輪ウロボロスか・・・良い趣味をしているな』

「コードアクセス。ー世界の全てが見える場所へ」

皮肉を込めたバーカードの言葉を聞き流し、サラが天井に向かって喋ると周りの壁が光り出す。

景色が変わったかと思うとそれまで青一色だった小さな部屋が神殿より開けた場所に一変したのだ。

「んだあ！ここは？」

「ここは私達、監視者のホーム『世界の全てが見える場所』です」

周りを見回しながら焰が怒鳴ると、女神が歩きながら説明する。

サラの前には巨大な黄金の輪が回転しながら宙に浮いていた。

床にあった紋章と同じ、運命の輪ウロボロスである。

神殿と違い、薄暗くただ広いだけの部屋ではその黄金の蛇が嫌でも目立ち、不気味さを醸し出している。

ウロボロスの前には小さな階段があり、その上に端末機らしい黄金の球体が浮いていた。

「と言ってもこの部屋にちゃんと来るのは私ぐらいなものです」
『それはどう言う意味だ？』

女神の言葉に疑問を感じたバーカードが質問をすると、サラが端末に触れながら鼻で笑う。

さっきから気になっていたが、いちいち人を馬鹿にした態度を取る人だ。

「言葉の通りです。私は他の監視者がどんな姿をしているのか？どうやって『エデン』の監視を行っているのか？全く知らないし会った事ありません。

仕事中は互いに干渉しないのが私達のルールですから」

「何故・・・そんな事を？」

ここへ来てアカネが始めて口を開く。しかしそれは話を聞いている者からすれば当然の疑問だった。

「万が一の事を考えた安全策です。例えば誰か一人がアウトローなどに捕まり、大切な情報を開くパスワードを奪われても、他の監視者の居所が分からなければパスワードは決して完成しませんから」

端末を操作しながら女神が自慢げに話す。確かにそれなら情報の漏洩を塞げるだろう。だがそれはハジメ達を守ろうとしていた他の監視者やシュウの情報がここには全く無いと言う事を意味していた。

「さてと・・・見て下さい」

落胆する少年の気持ちなど知らず、女神が端末機を操作するとウロボロスがいくつもの画面に切り替わり、外のような景色を映し出す。規模は違いがハジメはそれに見覚えがあった。

以前、ウィングが見せてくれた『エデン』の風景だ。

『これは？』

「『エデン』の全てのステージです。ここが（世界の全てが見える場所）と言われる由縁です」

女神の言う通り切り替わった画面には、ウイングに見せてもらった時とは比べ物にならない程の数の風景が映し出されていた。

ある画面には街を歩くユーザー達が、ある画面には洞窟でモンスターと戦うパーティ達が映し出れている。

しかも画面一つ一つが引っ切りなしに切り替わり絶えず他の風景を映し出して行く。

こんな物にずっと監視されていたのかと思うと、ハジメは何だか悪寒を感じずにはいられなかった。

「ここでは『エデン』の80%を絶えず24時間監視しています。

残り20%はAIであるウイングが監視していますが、何かあれば直ぐに私達監視者に報告する様になっています」

言いながら女神サラが少年達の方を向く。その表情にはどうだと言わんばかりの自信が浮かび上がっていた

「これで分かりましたか？私達はつねに『エデン』を監視し、状況を把握しているのです。ですから、もしそんなバグやウィルスが存在するなら即刻発見し、対処している筈です」

『だが万が一と言う事は無いのか？ウイングが報告を怠る可能性は？』

自信満々の女神に間髪入れずバーカードが質問をする

彼女は有り得ないと言うがハジメ達は実際にノイズと戦って来たのだ。引き下がる訳にはいかない

「それは有り得ません。人工知能とは言えウイングは私達がプログラムした物です。
会社の命令を忠実に熟す様作られていますから監視者には逆らえないのです」

サラの言葉には有無を言わせない強さと冷たさがあった。

確かに、かつてハジメがウイングに相談した時彼は『エデン』やユザーを守る事が最大の喜びだと言っていた。

あれに嘘があったとは到底思えない。だからこそハジメは勇気を貰ったのである

「・・・どうやらようやく分かって頂けた様ですね？『エデン』は完璧なゲームです。貴方達の言う妙なバグなど存在しません」

少年達が皆黙ってしまい、勝ち誇った様に女神サラが微笑を浮かべる。

その笑顔に先程感じた慈愛は一片も残っていなかった

「ご理解頂いた所でお帰りを。それとこの場所や私の正体については他言無用でお願いします。」

もっとも、言っても誰も信じないと思いますが・・・」

笑いながらサラがまた入口の方へと歩き出す。その背中からはや話す事は無いと言わんばかりだ。

少年が慌てて肩に乗るバーカードを見ると、彼は瞳を閉じてジッと思索している

焰やアカネも歩き出し、仕方なくハジメも入口に向かって歩き始めた時だった。

ードガン！！

「うわぁ!!」

突然『世界の全てが見える場所』が大きく揺れた。次の瞬間、部屋全体に警告音が鳴り始める。それまで薄暗いだけだった部屋も一転して警告ランプの赤色に包まれてしまった。

ビーンッ!! ビーンッ!! ビーンッ!!

『何事だ!』

「これは・・・敵襲?」

一人ワタワタするハジメを横目にバーカード達は素早く身構える。サラもすぐに端末機の方へ引き返し、操作するとたくさんあった画面が一つの大画面に切り替わり神殿にいた天使達を映し出した。

「何事ですか?」

「周りの山々から攻撃を受けています! 数はおよそ50!! 恐らくアウトローユーザーかと・・・ぐわぁ!!」

「ーズズーーン!!」

天使が状況を報告していると爆音と共にまた部屋が大きく揺れた。それと同時に天使の姿も大画面から消える。

この揺れの正体が敵からの攻撃である事は間違いない様だ。

「くっ・・・しっかりしなさい!! アウトローチームの正体は!?!」

「も、申し訳ありません! チームの名は《ドラゴンレイン》!! 『エデン』最大のパーティを持つ連中です!!」

アウトローと聞いた瞬間、ハジメとアカネの頭にあの三人組の顔が浮かび上がる

そして焰も《ドラゴンレイン》と言う名前を聞き、表情が変わる。

アックスギターを持つ手が人知れず怒りに震えていた――。

「撃て！撃てえ！！もつと撃てえー！！！」
ドンドンドン！！

蘭丸の号令と共に武器を持ったたくさんのユーザーが神殿目掛けて攻撃する。

それは銃弾だったり砲丸だったり、或いは魔法だったりするのだが、どれも攻撃をしているユーザー達は凶悪な目つきをしている。

彼らは皆、蘭丸が所属するチーム、《ドラゴンレイン》一番隊のメンバーだった

「よーし！！撃ち方止めえ！！！」

蘭丸がまた叫ぶと神殿への攻撃がピタッと止まった。しかしたった一人攻撃を止めるのが遅れたユーザーがいる。

蘭丸はそのユーザーを睨むと、持っていた大斧で容赦無く叩き伏せた。

「ぐぎゃあ！！！」

「止めろっつただろーが！！・・・まあ、良い」

相手をぶっ飛ばしておいてから機嫌を直す仮面アウトロー。その姿に凶悪な面構えのアウトロー達もゴクリと唾を飲み込む。

一番隊の中では隊長である蘭丸に逆らった者は即ゲームオーバーにされてしまうのだ。

「良いか！！標的はクソ生意気なガキとルーキー、それにただのチンピラだ！」

だが、あの神殿の中には俺達の宿敵であるチェイサー達がわんさか
といる。

まともに戦おうなんて思うな？ 外から攻撃して出て来た所を一人ず
つ潰すんだ!!」

(オオooooooooooooッ!!)

蘭丸の言葉と共にアウトロー達が各々の武器を振り上げ、雄叫びを
上げる。

神殿を挟み、向かい側の山にも阿国と才蔵と共にたくさんのアウト
ローユーザー達がいるがあちらでも同様の雄叫びが起こっていた。

「へへへ・・・覚悟しやがれ。俺をナメた事を後悔させてやる!!」

利用されている事にも気づかず、己のプライドのためだけに暴走す
る蘭丸が邪悪な笑みを浮かべる。

仮面に隠された瞳には既に血に飢えた獣の様な光しか秘めていなか
った。

もはや彼には復讐しか頭に無い。

「最高のハンターゲーム・・・チェイサー狩りの始まりだあ!!」

開戦の合図を告げる様に蘭丸が狂気の叫び声を上げる

様々な思惑を孕み、聖地バルハラ・ルミナが今、戦場へと変わりつ
つあったー

(続く)

FILE..36『戦争（ウォーズ）』

ードン！！

「うわぁ！！！」

アウトローの攻撃でバルハラ・ルミナがまた大きく揺れる。そのせいで、バランスを崩したハジメが倒れそうになるが、その前にアカネが素早く駆け付け、少年を支えた。

「ハジメ・・・大丈夫？」

「あ、ありがとう！アカネ」

ハジメの感謝の言葉でアカネの顔が赤くなるが、今はそれ所ではない。

外では蘭丸率いるアウトロー軍団がバルハラ・ルミナに集中放火を浴びせているのだ。

「サラ様！神殿自体はグラフィックなのでダメージはありませんが、このままではイベント運営が出来ません！

いかがいたしましたしょう！？」

「何を呑気な事を！！早く防衛機能を作動させるのです！」

慌てふためく天使達に、サラが怒鳴り声を上げる。

しかしWB社の社員である天使は、上司である彼女の指示に驚きの表情を浮かべた。

「て、天の雷ですか！？しかし相手はアウトローとは言え、一般ユーザーなのですが・・・」

何故か神殿を守る事に天使が躊躇いを見せる。

その「防衛機能」と言う奴は、恐らくユーザーに使うにはマズイ物なのだろう。

だが躊躇する部下に対し、サラはゾツとする程冷たい笑みを浮かべた。

「フツ、構いません。愚かなアウトローにシステムの力を見せてやるのです！」

「りよ、了解しました」

女神が再度、指示すると通信が途絶え、モニターがまた『エデン』の様々な場所に切り替わる。

と、それまでシステムのやり取りを見ていた焰がおもむろに神殿に繋がる転送装置の方へ歩き出した。

『焰、何処へ行く？』

勝手に外へ出て行こうとする鬼人を、バーカードが静かに止める。すると焰は振り返らず、落ち着いた口調でこう答えた。

「すみません、バーカードさん。俺も外の連中片付けて来ます。

奴らだけは、どうしても俺の手でケリを着けたいんです」

口許に笑みを浮かべる鬼人だったが、バーカードはすぐに気づく。その手が怒りに震え、力強く握られている事を・・・そして彼が冷静な態度を取る時、その胸には静かな決意が燃えている事を・・・こうなった時、彼を止めるのはまず無理だ。

長年の付き合いでその事を知っているバーカードは長い首を振り、小さくため息をついた。

『分かった。だが外では何が起こるか分からん。十分に注意して行くんだ』

「・・・はい！」

全てを悟った上で自分を送り出してくれる白竜の言葉に焰が力強く答え、転送装置へ乗り込む。

その姿を何故か冷ややかな眼でサラが見ていた。

「彼を止めた方が良いですよ。今、外に出たら間違いなく防衛機能の巻き添えを食いますから」

あまり興味がない様子でサラがバーカードに忠告する彼女にとって焰も蘭丸も、どうでも良い存在なのだろう。

『ご忠告感謝する。だが、焰も今まで死線をくぐり抜けて来た猛者。自分の身は自分で守れる』

「そうですね？なら、構いませんが」

大して心配した様子も無くバーカードがニヒルに笑う
すると、つまらなそうに表情を歪めたサラがまた端末を操作し始めた。

「ではそこで見ていなさいシステムの力を・・・ここでアウトロー達がまるでゴミの様に駆逐されて行く姿を」

そう言うともた画面が一つの映像を映し出し、サラが端末のボタンを押す。

画面に映し出された光景――それは外でバルハラ・ルミナを攻撃しているアウトロー達の姿だった――。

ーードカンドカン！ボカン！！

「撃て撃てえ！！ドンドン撃つつスよ！！！」

才蔵の号令で周囲から耳をつんざく様な爆音が響き渡る。

アウトロー達がリーダーの指示によってバルハラルミナに一斉射撃しているのだ

こちらは蘭丸がいる山の向かい側。

バルハラ・ルミナを挟む様に配置されたこちら側では、阿国と才蔵が部下達を取り仕切っていた。

（たくっ、蘭ちゃんも無茶苦茶なんスよねー！チェイサーの本部に殴り込み掛けるなんて！！）

傍らで退屈そうに岩に寄り掛かりながら、髪の毛を弄ってる阿国を見つつ、才蔵が大きくため息をつく。

蘭丸の命令で、メンバーを集めたのは自分だ。荒くれ者であるアウトロー達の中でもチェイサーと戦うと聞き、渋る者もいる。

それらを何とか説得し、時には脅しも使ってようやく集めたのだ。一番隊ではN O 3に収まっているが、様は隊の面倒事を全て任される役に過ぎないのだ。

（いつもいっつも面倒な事は俺っちにやらせるんスよねー。あのクソチビ！！）

ブチブチ文句を言いながら攻撃を続けるハンターアウトロー。

リアルでも顎で使われているだけに、腹の中では蘭丸への不満が燃え盛っている

しかし反抗する勇気も無く、弱いルーキーユーザー達を狩って、せめてものストレス発散をするぐらいしか出来ない。

才蔵とはそう言うユーザーだった。

「ねえ、あれ何？」

と、それまで興味なさ気にしていた阿国が神殿の方を指差す。見ると黄金に輝くバルハラ・ルミナが、今まで以上に光り輝き始めたのだ。

そのあまりの光に、才蔵はもちろん周りにいたアウトロー達まで手で顔を覆い始めた。

キューー・・ン！キューー・・ン！

「うわっ！なんスカ、これ！？何事っスカ！？」

「ちよつとお・・これ、ヤバイんじゃない！？」

神々しい光景と、それに似合わない妙な金属音を鳴らす神殿に、阿国と才蔵の顔色が変わる。

最近やられ癖の付いて来た二人は、敏感に身の危険を察知したのだ。確かに彼らの言う通り、それはただ光っている訳ではない。

バルハラ・ルミナの防衛機能が作動したのだ。

「天の雷、チャージ90%！いつでも撃てます！！」

「目標捕捉！敵、アウトロー集団^{ドラゴンレイン}！！」

神殿内部では天使達が特別なメニューを開き、発射に向けて着々と準備を進めている。

そして神殿地下では、大画面を見ながらサラが天使達の報告を聞いている。

大画面に写るアウトロー達の姿には次々とロックオンのマークがついて行く。

そして傍らでハジメ達が見守る中、準備完了と言う報告を聞いて女

神が笑みを浮かべた。

「天罰執行！！天の雷、発動しなさい！！」
「ポーチッ！」

高らかにサラが言い放った途端、天使達がメニューのENTERキーを押す。

そして、次の瞬間――。

「キューーン！キューーン！キューーン！……ドオオオーーン！！」

「うひゃあ！！」

「ぎゃあ！！」

眼が開けられない程の光が、神殿から巨大な光線となり天空に向かって発射される。

するとフィールド上を厚い雲が覆い、何と雷の雨がとなってアウトロー達に振り注いで来た。

「ーピシャーーン！！ゴロゴロゴロ――！！」

「うわあ！！何だ！？」

「ぎゃあ！！た、助けてくれえ！！」

それまでバルハラ・ルミナ攻撃に夢中になっていたアウトロー達も突然の事態に驚く。

ある者は雷の雨に打たれゲームオーバーになり、ある者は悲鳴を上げながら逃げ惑う。

しかし無数に降り注ぐ雷を避け切れる訳も無く、次々と爆音と悲鳴と共に数を減らしていく。

神殿を守る岩山は一点、阿鼻叫喚の地獄絵図と化して行った。

「ひええー！！何んスカこれ！？どうなってるんスカ！！」

「ちよつと蘭丸うー！！どうすんのよお！！」

アウトロー達の悲鳴が響き渡る中、才蔵と阿国も何とか雷を避け、時には味方を盾にして逃げ回っている。

しかし、向こう側の山を見るといつの間にか蘭丸の姿がない。

彼らはパーティーを組んでいるため、やられればすぐ分かるのだが、まさか自分達を置いて逃げたのか？と最悪の考えが二人の頭に浮かんだ時、背後で足音がした。

「ここにいたのか」

突然呼びかけられ蘭丸か？と思い、振り返った二人だったがその顔が一瞬で凍り付く。

そこにいたのは仮面ユーザーではなく赤髪の鬼人。

不敵な笑みを浮かべ、肩にアックスギターを乗せた焰だった。

「よう！探したぜ？お前ら」

「嘘お！？な、なんでお前がここにいるんスカ！？」

ある意味、蘭丸より質の悪い相手に思わず才蔵が叫ぶハジメ達が神殿の中にいるのは分かっていた。

だが、この雷の中をくぐり抜けて来たのが信じられない。

周りにいたアウトロー達も焰の悪名は知っているのか？逃げるのを止め、ただ呆然と立ち尽くしていた。

「あの蘭丸とか言う仮面野郎を探してたんだがな？見つからねーんで、隣の山見たら逃げ回ってるお前らを見つけたって訳だ。それにしても・・・」

喋りながら焰が辺りの惨状を見回す。時折、彼の頭上にも雷の雨が降って来るのだが、まるでハエでも掃うかの様にアックスギターで切り払ってしまっている。

その光景に、阿国も才蔵もア然とするばかりだ。

「システム相手にこれだけの大敗・・・。

ゲームオーバーになった連中は間違いなくアカウント停止だろう。

《ドラゴンレイン》だってタダじゃ済まねえ。

・・・どっち道テメーらはもう終わりだな」

何故かそうつぶやく焰の表情には、憂いのような物があつた。それはまるで、故郷が失われたかの様な淋しげな表情である。

彼の胸中を一体、今どんな感情が支配しているのだろうか？

それは誰にも分からないが、アウトロー達が次々とやられていく光景を前にして、鬼人の表情が突然変わった。

「テメーらのアウトローとして道は終わった。

もう二度と会う事もねーだろ？なら最後までいきっちり片着けてやる。

それが俺の・・・先輩としての落とし前だ！！」

「ななな何、訳の分からない事言ってるんすか！！」

「そうそう！調子に乗るんじゃないっつーの！！」

言い放った焰を前に阿国も才蔵も身構える。

周りにいたアウトロー達も我に返り、いつの間にか鬼人は十数人の敵に囲まれる形となっていた。

「ヒヤハア！！数は減ってもまだまだこんだけいるっすよ！！」

「私らは終わらない。アンタを狩って、まだまだこの世界を楽しむ

んだから!!」

多勢になった途端、態度がデカくなった阿国と才蔵が凶悪な笑みを浮かべる。

今だから分かる。

あれがバーカードが言っていた濁った眼の連中だ。

自分の事しか考えず、相手を傷付け、喜ぶ外道の眼である。

自分も以前あんな眼をしていたのかと思うと、虫ずが走る。

そしてそんな連中が《ドラゴンレイン》を語っている事に、心底腹が立った。

「覚悟しな? テメーらに……《ドラゴンレイン》に弔いの歌を聞かせてやるぜ!!」

相棒のアックスギターを前に突き出し、焰が叫ぶ。

赤髪の鬼人とアウトロー軍団の戦いが今、始まろうとしていた――。

「どうですか? システムの力は?」

一方、神殿の中ではアウトロー達がやられて行く姿を見てサラが、優越感たっぷりで聞いて来た。

圧倒的な力を見せたのでその背中には、どうだと言わんばかりの自信が満ち溢れている。

「これがユーザーと監視者の差。野蛮なアウトローがいくら集まっても、決して私達に勝つ事など出来ないのです」

惨状を見ながら笑うサラの表情には、アウトロー達を憐れむ様子は一切無かった

確かに相手は人を傷付けるアウトローだが、こんな恐ろしい力をユーザーに平気で使う女神に対して、ハジメは恐怖を感じずにはいられなかった。

（これが監視者？ シュウ兄ちゃんはこの仕事をしていたって言うの？）

「・・・これは人に使って良い力じゃない」

と、それまでハジメの背後にいたアカネが急に前に出て来てつぶやく。

その非難的な言葉に、女神の肩がピクツと動いた。

「何ですか？ 言いたい事があるんならハッキリとおっしゃって下さい」

「・・・貴女の判断は間違ってる。システムとしてアウトローを規制するのなら、あんな乱暴な方法を使わなくても済んだ筈。

貴女はただ自分の力を見せびらかしたいだけ」

珍しく雄弁に答える少女の言葉に一瞬、振り返ったサラの顔が真っ赤になる。

だが、すぐに落ち着きを取り戻し、平静を装う。

そして、今の醜態を取り繕う様に無表情で応え始めた。

「・・・なんと言われようとこれが私のやり方です。

部外者である一般ユーザーが余計な口出しをー」

ービュ！！ビュ！！ビュ！！ビュ！！ビュ！！

せっかく澄まし顔で語っていた女神の反論は、突如鳴った警告音によって掻き消される。

これにはさすがのサラも不快感を露にし振り返ると、大画面にまた

天使達の姿が映し出されていた。

「サ、サラ様！！緊急事態です！」

「いい加減にしない！！今度は何ですか！？」

「そ、それが神殿内に侵入者が・・・ぐわあ！！！」

慌てた様子で報告をしようとした天使だったが突然、苦痛の表情を浮かべて倒れ込む。

その背中に突き刺さっていたのは赤い大きな刃・・・！

そして、その背後で狂笑を浮かべていたのは、白装束に身を包んだ仮面ユーザーだった。

「ヒヤハハハッ！！ご苦労さん！！」

「ぎゃあ！！！」

大斧を引き抜き、振り上げた蘭丸はもう一人いた天使にも切り掛かる。

天使も応戦しようとするが、あっという間に間合いを詰められ、敢え無く切られてしまった。

「ぐわあ！！！」

「ハハハッ！おい、クソルーキー見てるか！？早く出て来ねーと、テメエのせいでチェイサー二人がゲームオーバーになっちまうぜ？」

「ーガン！！ザーーッ！！！」

天使が使っていた通信機を奪い取り、蘭丸が捨て台詞を言い放つ。その後通信機を破壊されたのだろう。天使達との交信はそこで途絶えてしまった

「何と言う事！アウトローユーザーがこのバルハラ・ルミナに！？」

予想外の緊急事態にサラが唇を噛む。

部下がやられた事より、蘭丸が侵入した事にショックを受けている様だ。

「・・・害虫を駆除して来るハジメとバーカードはそこにいて・・・」

「駄目だ！！そんなの許さないよ！！」

と、そんなサラに軽蔑の眼差しを向けながらアカネが上の神殿へ戻ろうとすると、屋中にハジメの絶叫が響き渡る。

驚いたアカネが振り向くと、少年は血が出そうな程拳を握り、小刻みに体を震わせている。

「ハジメ？」

「アカネ、ボクを守ってくれるのは嬉しい。だけど、もう一人で戦おうとはしないで！ボクはもう自分のせいで君が傷つくのを見たくない！！」

少女の身を案じ、ハジメが振り返りもせず言い放つ。

少年は怒っていた。以前岩窟王との戦いで何も出来なかった自分に・・・。

そのせいで焰だけでは無く、アカネにまで危ない眼に合わせてしまった。もうこれ以上、誰かが傷付いて何も出来ないのはたくさんだったのだ。

「ボクも行くよ。蘭丸の目当てはボクみたいだからね」

「ハジメ・・・」

キッと顔を上げた少年の顔には、強い決意が秘められていた。それは、守られている者が出来る表情ではない。

この三日間の特訓で得た戦士としての面構えである。

自分を心配し、前より格好良くなったハジメの姿を見て、またアカネの頬が赤くなった。

『よし、ならば私も行こう女神サラは念のためここで待機してて戴きたい』

そんな二人を見てバーカードも苦笑を浮かべる。白竜に命令された女神は不満げな態度を見せたが、やがて肩を竦めた。

「・・・分かりました。どうやらアウトロー達が襲って来たのも貴方達が原因の様ですし、敢えて止めません。
ですが、何があっても一切私は責任を負いませんので、そのつもりで」

『了解した。でわ少年、アカネ。パーティ会場へ出向くでしょう』

端末を捜査するサラに見送られながら、ハジメ達が転送装置である床の紋章に足を踏み入れると、広大だった部屋が、あっという間に金色の大神殿へと変わる。

そこで少年達が眼にした者――それは天使達にトドメを刺す蘭丸の姿だった。

(続く)

FILE::37『悪（エビル）』

「やめろ!!」

ーザシュ!!

少年の声が響く中、無情にも蘭丸の大斧が天使の胸に振り下ろされる。

悲鳴すら上げられずゲームオーバーとなった天使を見下ろしながら、仮面ユーザーがゆっくりとこちらを向いた。

「来たか？ テメーが来るのがあんまり遅えから天使達、二人共やつちまったぜ」

振り返りながらニタニタと凶悪な笑みを浮かべる蘭丸

よく見ると既に天使達の姿は無く、代わりに彼らが持っていた三つ又の槍だけが床に突き刺さっていた。

「くっ・・・君の狙いはボクだろ！？ 関係ない人を傷付けるな!!」

「あん？ 何言ってるんだ？ テメーがモタモタしてんのが悪いんだろうが!!」

天使達を救えなかった事を悔やみ、ハジメが噛み付くと蘭丸が逆ギレする。

彼にとって自分がした悪行は全て他人のせいの様だ。

「なっ!？」

『待て、少年・・・蘭丸とか言ったな？ 君はどうやって神殿内に侵入したのだ？』

反論しようとしたハジメを制し、今度はバーカードが口を開く。
竜の姿で喋る凶戦士にさすがの蘭丸も驚いた様だ。

「へえ、コイツは驚いたぜ喋るモンスターなんているとはよ？
良いぜ、どうせテメーら全員始末するんだ。冥土の土産に教えてやる」

さしずめバーカードをハジメのペットとでも思ったのだろう。仮面
ユーザーが得意げに語り出す。

それを元伝説の勇者である白竜は、冷やかな眼で見っていた。

「外にいた連中、あいつらは最初っから囷だったのさ

あれだけ派手に暴れりゃチェイサーの連中が飛び出して来ると思っ
たからな。

まあ、予想と少し違ったが、奴らがやられてる間に俺はすんなり神
殿に入れたって訳だ！」

何がそんなに楽しいのか？狂笑を浮かべながら語る仮面ユーザーに、
ハジメは吐き気にも似た嫌悪感を感じた。

それは気弱な少年が初めて露にする軽蔑の感情である

今まで自分の周りにも嫌いな人間は何人かいたが、これ程許せない
と思った人間は初めてだ。

それは彼の左手を侵すウィルスが、少年の精神に少しずつ影響を与
えている事を意味していた。

「君は・・・君は仲間を囷に使って何も思わないの!？」

やり切れない怒りの中、ハジメが仮面ユーザーに質問をする。
すると、訳が分からないと行った様子で蘭丸が肩を竦めた。

「何言ってやがる。兵隊の代わりなんざいくらでもいんだよ」
「なっ!？」

当然と言わんばかりの蘭丸の態度にハジメは衝撃を受けた。
しかしそんな少年の様子に気づかず仮面ユーザーの自慢話は続く。

「テメーらと一緒に、チェイサーのホームも潰したとなれば、俺の名は『エデン』中のアウトロー達に響き渡る!! そうすれば天雨様も認めてくれる筈だ!」
もうベルギオスや牙王にもデカイ顔はさせねえ!!」

もはや、ハジメ達に話していると言うより自分に言い聞かせている様に蘭丸が自らの拳を強く握る。
少年達に連敗し、追い詰められた仮面ユーザーの顔には鬼気迫るものすらあった

「蘭丸・・・君って奴は!!」
『止せ、少年。あのユーザーには何を言っても無駄だ』

自分の事しか考えず、人を道具の様に扱う蘭丸に怒りを露にするハジメ。

だがそれをバーカードが再度止める。
態度は冷静その物の白竜だったがその口調には、いつもにはない冷たさがあった

「ハジメ・・・バーカードの言う通り・・・生ゴミは処分するしかない」

アカネも、バーカードと同様に辛辣な言葉を投げつける。

少年よりも『エデン』のプレイ歴が長い二人は堕ちたユーザーに説得など無理だと言う事を知っていたのだ

「ナメんなよ？クソガキ共が！！なんで俺がアウトローしかない一番隊で隊長やってると思う！？」

魔法少女と少年のペット？に馬鹿にされ、逆上しながら仮面ユーザーが左指に嵌めていた指輪を外す。

よく見るとそれは黄金に輝き、中央には『雷』と言う文字が書いてあった。

「それはな・・・俺が一番強えからだよ！！」
ピシャーッ！！ゴロゴロゴロゴロ！！！！

蘭丸が指輪を外し、天に掲げた途端、天井に黒い雲と魔法陣が現れた。

それは（召喚師）だけが使える技、召喚術である。

『あれは召喚術？モンスターを呼び寄せるつもりか』
「ハジメ・・・下がって」

バーカードやアカネもいち早くそれに気づき、ハジメを庇いつつ身構える。

無数の稲光が轟く中、魔法陣の中から現れたのは黒く巨大な影だった。

「いでよ！俺の切り札！！サンダー！！ジャイアントオー！！！！」

ーゴロゴロゴロ！！！！ーズン！！

蘭丸が叫んだ途端、魔法陣から金色に輝くモンスターが降って来た。それは魔神・・・ロボットにも見える巨大なゴーレムである。胸には『雷』の文字があり、両肩には避雷針の様な長い針が生えている。

足は6本あり、その姿はまるで蜘蛛と機械が合体した様な奇妙な姿をしていた。

『アカネ、こいつは・・・』

「機動魔神サンダージャイアント。モンスターLv40。ゴーレム系では最強クラスの雷の谷にしか現れないレアモンスター」

ゴーレムより一回りも大きなモンスターが出現しても、バーカード達は慌てる事無く対応していた。

しかしハジメはウィルス発動時以外は初となる巨大モンスター戦に内心ヒヤヒヤ物だった。

「ハッハー！！驚いたか！？俺はコイツを使って《ドラゴンレイン》の一番隊隊長にまでのし上がったんだ！！」
「ーウィーン！！ガチャン！！」

笑いながら蘭丸がサンダージャイアントの手に飛び乗ると、魔神の胸の部分が開き中から操縦席が現れる。

それに乗り込むと、コックピッドが閉まり魔神の三つある赤い眼に邪悪な光が宿った。

「行くぞオラァー！！！」

『来るぞ！！』

バーカードが叫んだ途端、魔神の左腕が光り強烈な光線が発射される。

アカネが素早く身を翻し、ハジメも抱えながら躲すと間一髪、レーザ―光線の様な雷が神殿の入口まで駆け抜けて行った。

ーバチバチバチッ！！

「うわぁ！！」

そのあまりの迫力に思わずハジメが叫び声を上げる。

すると少年の情けない姿に魔神の中にいる蘭丸が笑い転げた。

「ヒヤハハハ！どうだ？怖いか！？もう土下座して謝っても許してやらねーぞ！！」

「ペラペラとよく喋る・・・！」

狂喜する仮面ユーザーを尻目に着地したアカネが一気にサンダージヤイアントとの間合いを詰める。

（拳士）特有のスピードを活かした魔法少女は高々とジャンプすると、魔神の顔目掛けて手にしていたロッドを向けた。

「ライトニング・アロー」

ービュン！！ドカーン！！

サンダージヤイアントの顔にアカネ必殺の雷魔法が炸裂する。

しかし魔法少女が着地する前に煙を押し退けて現れた巨大な手がアカネに襲い掛かって来た。

「馬鹿が！！雷のモンスターに雷魔法が効く訳ねえだろう！！」

『ならば火炎攻撃ならどうだ？』

アカネを握り潰そうとしたサンダージヤイアントだったが、その前に再度強烈な炎を浴びせられる。

バーカードの火炎攻撃だ。

そのせいで魔神の腕が止まり、アカネは間一髪着地した。

「ちっ！クソルーキーのペットが！！しゃしゃり出て来るんじゃない！！」

苛ついた蘭丸が、ジャイアントの手で掃おうとするがバーカードがひらりひらりと攻撃を躲し、相手を攪乱する。

その間、完全に注意を白竜に向けていた魔神だったが、その体を全力疾走する小さな影があった。

「うわああああっ！！」

ハジメだった。バーカードが効果の薄い火炎攻撃をしたのはこのためだったのである。

タン！タン！と（ガン&ダガー）の身のこなしを利用し、体から肩まで飛び移ると、少年はそこからは一気にサンダージャイアントの顔まで突進して行った。

「ああっ？て、テメェ！！」

そこへ来て、ようやく蘭丸もハジメの存在に気づくが、もう遅い。

首まで走った少年はそのままジャンプし、魔神の頭目掛けて渾身の一撃を振り下ろした。

「たあ！！」

ーガキーン！！

だが、奇妙な音と共に体を震わせたのは魔神の方では無くハジメの方だった。

少年の一撃は魔神に傷一つ付ける事すら出来なかったのである。
スピード重視な分、攻撃力の低い（ガン&ダガー）ではサンダー
ジャイアントにダメージを与える事が出来ないのだ。

「か、固い・・・！」

逆にダメージを負い、ブルブルと体を震わせたハジメがそのまま落
下する

慌ててアカネがキャッチするが、間髪入れず仮面ユーザーの馬鹿笑
いが木霊した

「ハッハーハー！！馬鹿が！！死ねえ！！」

少年達にトドメを刺すため、再度サンダージャイアントがアカネ達
に左腕を向ける。

少年を担いだまま避けきれないと判断したアカネは、すぐにロッド
を魔神に向けた。

「・・・フリズド」

キューーーン！！・・・チュドーーン！！

魔法少女が攻撃魔法を口にした途端、魔神の左腕が凍りつく。
だが強引に蘭丸が攻撃をしようとしたせいで左腕が爆発し、アカネ
はその爆風に紛れて脱出した。

「ハジメ、大丈夫？」

神殿の入口近くまで引いたアカネが少年の安否を気遣う。
幸い、驚いてはいるがハジメに怪我は無い様だ。

「う、うん。ありがとうアカネ・・・」

『二人共、無事か?』

ハジメが魔法少女から離れると、バーカードも二人の元へと飛んで来る。

彼もまた爆発に巻き込まれ無かった様だ。

「バーカード・・・大丈夫問題ない」

『それなら良いが・・・見ろ』

アカネの言葉に聞き、前を向いた白竜が爆発のあった方を指す。
そこには無傷で仁王立ちするサンダージャイアントの姿があった。

「ハーツハツハー!! どうした!? デカイ口叩いといて大した事ねーなあ!？」

『問題はどうやって奴を倒すかだ』

羽ばたきながら忌ま忌ましそうにバーカードが呟く。
確かにあの電撃と防御力の高さは驚異的だ。
と、その時・・・。

(ん?)

ハジメの眼がある一点に止まった。それはサンダージャイアントの足である。

まるで蜘蛛の様に六本ある足の一つに氷の欠けらが突き刺さっていた。

それを見て、少年の中にある考えが思いつく。

「・・・方法があるかもしれません」

『何！本当か？』

バーカードの方を見ながらハジメが頷く。その眼には強い「戦士」の光が宿っていた。

「耳を貸して下さい。皆でやれば上手く行く筈です」

ハジメを中心に三人が輪となり少年の作戦を聞く。

バーカードを交えての作戦会議は何だか間抜けだが、二人は真剣に耳を傾けた。

『なるほどな。分の悪い賭けではあるが、面白い』

「作戦成功した場合の勝率87%・・・やってみる価値はあると思う」

ハジメの作戦を聞いた後、バーカードはニヒルな笑みを浮かべ、アカネは無表情のまま頷く。

可能性は低いが勝機を見出した三人に蘭丸の馬鹿笑いが聞こえて来た。

「な〜に話してんだあ！？どんな作戦練ろうが、このサンダージャイアントには勝てねえよ！！」

「ドドドドド！！ブン！！」

言いながら仮面ユーザーが一気に間合いを詰め、ハジメ達にパンチを振り下ろす

巨体に似合わないスピードに面食らった少年だったが間一髪躲し、王座の近くでゴロゴロと転がった。

『フッ、大した自信だな』

「・・・弱い奴程よく吠える」

体勢を立て直したバーカードが苦笑し、アカネは鬱憤を晴らすかの様にもう一度、ロッドをブン！と振り回す。

立ち上がったハジメもまた、高笑いする仮面ユーザーを見て掌に力を込めた。

「バーカードさん、アカネ！ボクに力を貸して下さい！ボクはあいつに証明したい！仲間とのチームワークを・・・絆の強さを！」

言いながらハジメが再度ダブルダガーを構える。

因縁の相手との決着を着けるための闘いー。

その第2ラウンドが今、始まるうとしていた。

（続く）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3398b/>

THE・ログインvol

2010年10月10日04時26分発行